新科學的解 互先定石 高目目外大斜正法

121

特 258
65

始

特258
65

七段野澤竹朝著

野澤竹朝全集
第四

科學的新解

互先定石高目目外大斜正法

東京斯文館
大阪屋號發行

科學的新解　互先定石

高目・目外・大斜正法

目次

高目の部

第一圖……一
秀甫の評言に曰く、白「五」の突張りは現今の流行也
第二圖……五
田村秀哉の説に據る「二二」の飛
第三圖……八
第四圖……一〇
第五圖……一一
「十九」と打つのが著者が打出した手
第六圖……一三
第七圖……一五
第八圖……一六
第九圖……一七
圖の如く「二三」と二段刎ねに打のが妙著
第十圖……一九
第十一圖……二〇
第十二圖……二一
黑「十八」の截りは白「十七」の無理を咎めた手
第十三圖……二三
第十四圖……二三
第十五圖……二四
第十六圖……二五
第十七圖……二六
第十八圖……二七
第十九圖……二九
第二十圖……三〇
第二十一圖……三一
第二十二圖……三二
第二十三圖……三三
質問第一圖……三四

目外の部

第一圖……三六
第二圖……三七
第三圖……三八
第四圖……三九
黑に「四」と割込まれて「一、三」の石を裂かれた事は

白の痛手
第五圖……四〇
著者の研究になれる黑「十」
第六圖……四一
第七圖……四一
第八圖……四二
第九圖……四二
第十圖……四三
征の味を保留して一轉「八」と下側に備へたのは輕妙
第十一圖……四四
第十二圖……四五
第十三圖……四六
質問圖……四八
第十四圖……五〇
第十五圖……五二
黑「十二、十四」は敵に迫るの傍ら自家に勢力を加へた手
第十六圖……五四
第十七圖……五四
第十八圖……五六
第十九圖……五七
白「十一」と突出して「十三」に截る手段は有名なる幻庵因碩先生の案出
第二十圖……五八
第二十一圖……五九

大斜の部

第一圖……六〇
黑「四」と頂けた手は俗に云ふ大斜ヨケの型
黑「六」は有名なる水谷縫治が村瀬秀甫と對局の際始めて試みた新手
第二圖……六一
黑「四」に就いて先師秀榮曰く
第三圖……六三
第四圖……六四
第五圖……六五
第六圖……六七
第七圖……六八
大斜定石の變遷
第八圖……六九
先代中川に依つて黑「二九」の著に就て、之を「三一」に刎ねるを是とする議論が稱へられ。次で之に對して秀榮の反駁説があつた一少波瀾の後、秀榮に依つて白に「三六」の手で恐るべき手段が發見された
先代中川曰く、白「二八」の時黑「三一」に飛ぶ秀甫の型は緩るい、
第九圖……七二
第十圖……七三
第十一圖……七四
第十二圖……七六
白「十九」の掛けは著者が發見した手段
第十三圖……七七
白「二二」著者發見になる手段
黑「八」の尖みは隅を固めると同時に白の疵を狙つた著
第十四圖……八〇
黑「四九」の伸切は所謂本手
黑「四三」の一著は、敵の大模樣を消す場合毎に用ひらるゝ手法
第十五圖……八二
第十六圖……八四
黑「七」と提るに先んじて「一、三」と直ちに劫に據る手段は秀哉の發見
第十七圖……八六
第十八圖……八八
第十九圖……八九
白「十五」は正着
第二十圖……九二
更に其意を解する事が能きなる秀哉氏主張の丁圖
第二十一圖……九四
秀策が幻庵因碩と對局した時に生じた、黑の失敗圖
第二十二圖……九六
第二十三圖……九八
白「十三」はハメ手
第二十四圖……九九
第二十五圖……一〇〇
第二十六圖……一〇一
秀甫、秀榮の打碁に出來た圖
第二十七圖……一〇二
第二十八圖……一〇三
第二十九圖……一〇四
村瀬秀甫の所論が秀榮の説に依て破れ
第三十圖……一〇六
秀策の慣用手段

第三十一圖……一〇八
第三十二圖……一〇九
白「十三」は往年發見された手
第三十三圖……一一〇
第三十四圖……一一三
第三十五圖……一一四

附錄打碁講評

第一局　中押勝先　工藤禮武　水野翠山……一一六
第二局　中押勝　互先先番　城田精元　水野翠山……一一八
第三局　勝　先　佐藤芝山(二段)　吉村石流(初段)……一二〇
第四局　五目勝先　中押勝　工藤禮武　水野翠山……一二二
第五局　先　城田精元　水野翠山……一二四
第六局　四目勝先　森清泉(三段)　上郎新二(初段)……一二六
第七局　勝　二子　上郎新二(初段)　古西良三……一二八
第八局　勝先　工藤禮武　城田精元……一三〇
第九局　中押勝先番　互先　北條礫川　西田英二……一三二
第十局　中押勝先々先番先　阪井宏　篠田勇夫……一三四

互先定石

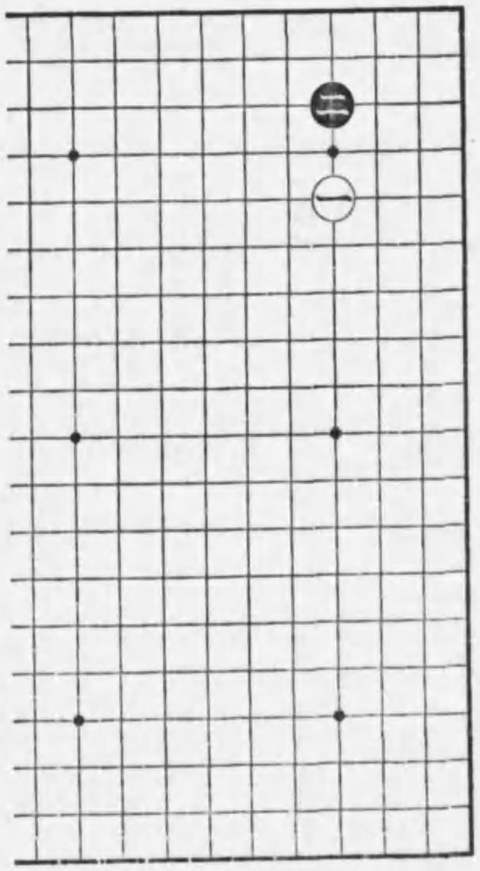
高目・目外・大斜正法

七段　野澤竹朝　著

高目の部

▲第一圖高目　甲

白一元來高目は、勢力を主として打つ手なるを以て、實質から論ずれば不利である、故に互先布石正法に於て述べある如く、隅の位等から云へば下目か第一で目外しか第二、高目か第三と云ふ順序になるからして、高目の着手は白としては面白いのであるが、黑を持つては好んで打べき手段でない、ところが初心の内は高目に打れると、外とから塗れて壓迫さるゝと云ふので、二と懸つて打のを酷く嫌うか、之は謂れのない話で、高目に對しては圖のやうに二と懸つて行くのが、黑として一番好い手であり、且白が尤も痛痒を感ずる着手なのである。



第一圖　高目の部

白三此手で**い**又は**ろ**に附けるなどの定石があるが、説明の順序上先づ桂馬掛から掲載することにした。

黒四、六の頂引きは良手段で、斯くして先手に活を得るのである、茲で從來は黒此隅を手拔せず**は**に頂け、白に黒**ほ**白**へ**黒**い**と打つたものである、斯く打のも惡い筈はないが、之では手の運びに後れが來るから、『卽ち白茲を手拔し、黒**る**に截れば**を**と輕ろく處置して又手拔きされる手段あり』現今では多くの場合四、六と頂引き、白七に粘いだ時手を拔て他に轉ずるのが流行する。

本隅の利害を概言すれば、白七迄の結果は黒が甚だ壓迫を受けたやうであり、更に手拔するとなれば、白より**と**に攻擊さるれば**ち**に應じなければならないから、初心者が此型を嫌ふのも一應無理ならぬ次第ではあるが、併し碁には手の違ひと云ふ重大なるものが在るを忘れては不可ない、本隅は白が先着で據つた處で、黒は後手を以て懸りながら若干なりと雖も地域を得、而して尙且他に先手を打つを得るのであるから、之丈の利益を得た以上、多少の壓迫を受ける位は我慢をしなければなるまい。

而も一方白に取つては、外勢を得たと云ふ迄で、實質は却て黒に得られた譯であり、又最後に白**と**黒**ち**と交換した曉には兎も角も、**り**に尖截らるゝと云ふ手段も殘つて居り（原より不味い恰好であるから、之は黒としては容易に打てん手であるが）又**ぬ**に攻擊を受ける弱點も殘て居るのであるから、本圖の如くなりて白有利であると云ふことは聊もないのである。

乙

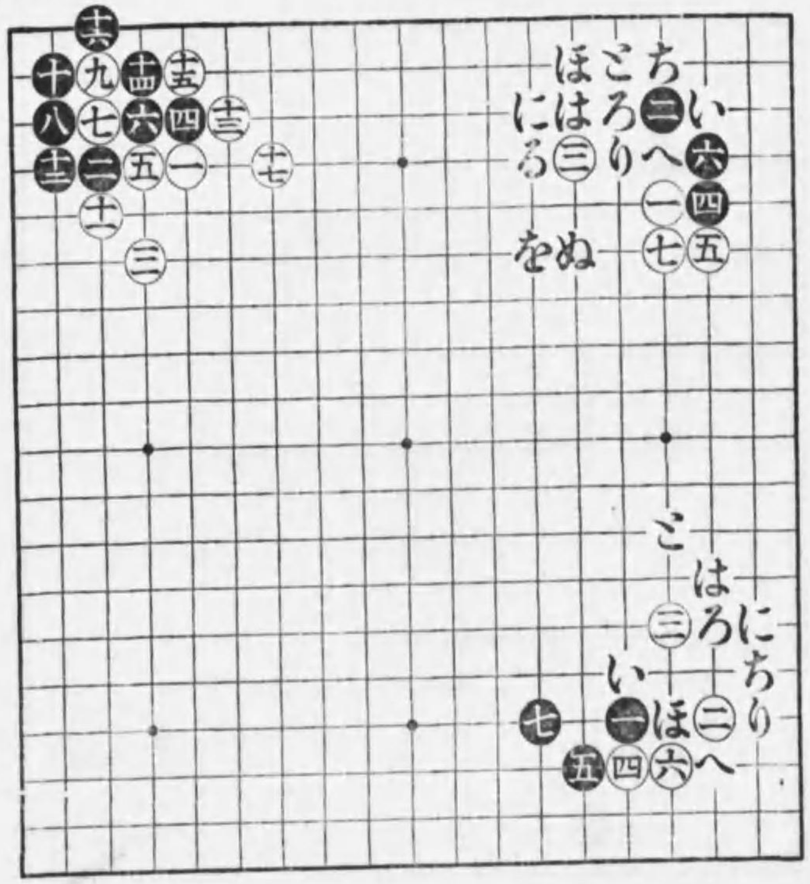
黒七斯樣懸粘ぐ手段は、互先布石正法にも一寸述て有と思ふが、此看によつて左方に一路發展力を增大させる手段なので、左邊に對する勢力は、當に甲隅白七の粘に比して優つて居るのであるが之は白より**い**に頂けて、兩斷して來らるゝと云ふ嫌な疵が殘ることになるから、一利一害で、甲隅の七の粘より本圖の七の懸粘が優つて居るとは云へないのである。

但し黒の時茲で白若し**ろ**ならば、黒**は**白**に**黒**ほ**白**へ**黒**と**となるのである、又白手拔すれば黒**ち**に打ち白**を**に應せしめて置くべきである。

丙

白五、白が外勢を張る手段として、前圖のやうに直接抑へず、圖の如く五に突張りて、七、九と捨石を用ゐ、さうして十一以下十七迄の手によつて、外勢を占める手段がある。

斯くするは二目の白を打拔かるゝのであるから、初心者の眼から見れば、或は白が不利のやうにも考られやうが、黒は白の二子を打拔くが爲に、本隅に八と十六の無駄手が出て居るから、手割上二目打拔れたことは、白にさしたる痛痒がなく、寧ろ依りて甲乙隅に比し完全に外勢を占め得ただけ、却て白が働ひて居るとも云へるのである。近代の大家秀甫の評言に曰く、白五の突張りは現今の流行也、蓋し所以ありと、之は手割から來て居る話で、概言すれば、斯すれば上部に何等の疵瑕が殘らないと云ふ譯である。

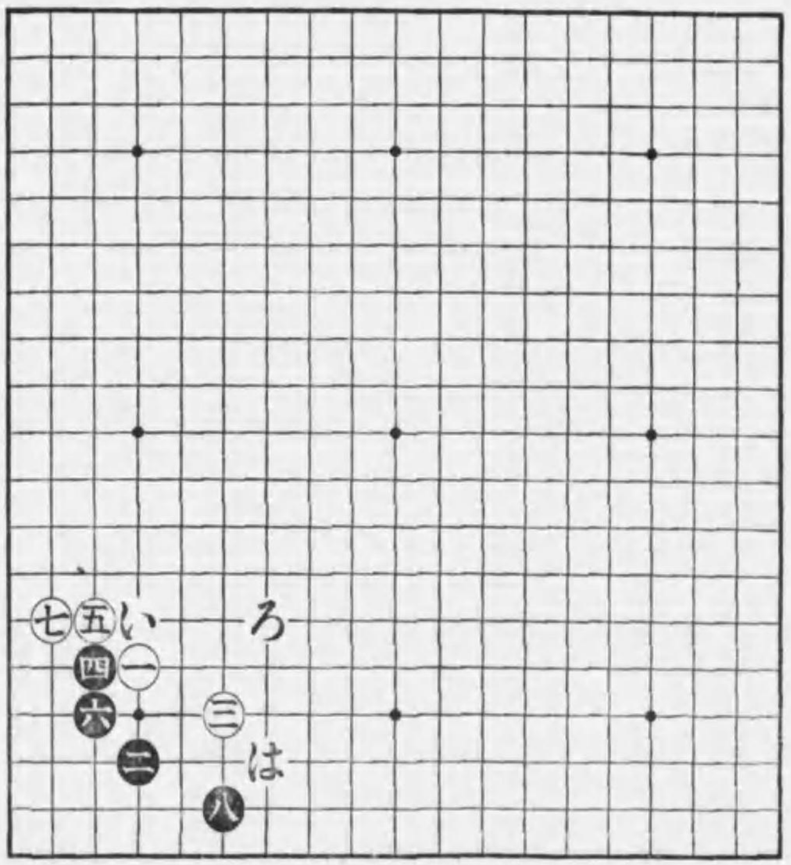


第一圖　甲　乙　丙

丁

白七、本型は是非とも此隅に先手を取つて此側面に發展しようと云ふとき、卽ち本圖で云へば、左上隅に勢力を張つて、且敵を攻んとする場合に用ひる手段であるから、單なる一隅の定石として遣るのは不可ない。

黑八白に七と斯う下られては、隅の攻が嚴しくなつて居るから、手を拔く譯には行ない、八に備えて**い**の截りを覘つて打つべきである、其時白が**ろ**に打つて**い**の截りを拒げば手を拔くこともあれども、普通の場合は**は**に尖むべく、又白**ろ**の手を他點に走せなば、**い**に截つて戰ふのである。

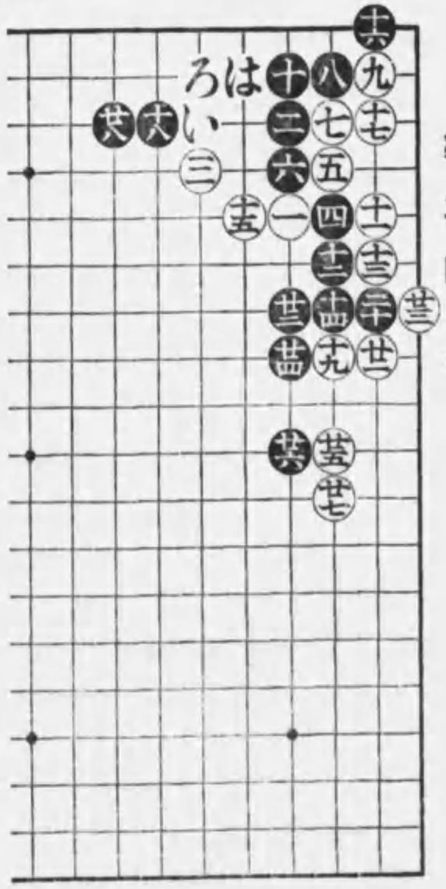


丁

▲第二圖甲

前圖は、白五の手を十二のところに押へた、普通定石を示したが、場合によりては、本圖のやうに、逆に內側から刎ね出して、黑六、白七と戰つて打つのもある。是はカナリ六間敷い定石で、初心者が此の手に引つ羅つて當惑してをるのを、目擊することは屢々ある。が、併し、本定石には、至極簡便な、どんな初心者にも、容易に切り拔けらるゝ良法があるそれは後に揭げることにして、順序上先づ六間敷い方の本型から揭載することゝする。

黑八此處の戰ひは目下のところ、三の白が遊軍となつて居るから、此の遊軍が、戰鬪面に立たない內に、既に接戰して居る部面では、黑一着優勢であるのを利用して、極力攻擊を加へ、其の餘勢を以て凌いていくといふ着想によつて之に處すれば、よし初心者であつても、滅多に間違は起らぬのである。黑八以下十四まで、此方針で進み、而して十六と先手に刎ね、尋で十八と外方に逸出したのであるが、初學者は、ともすると、此の十六の刎を忘れ



第二圖甲

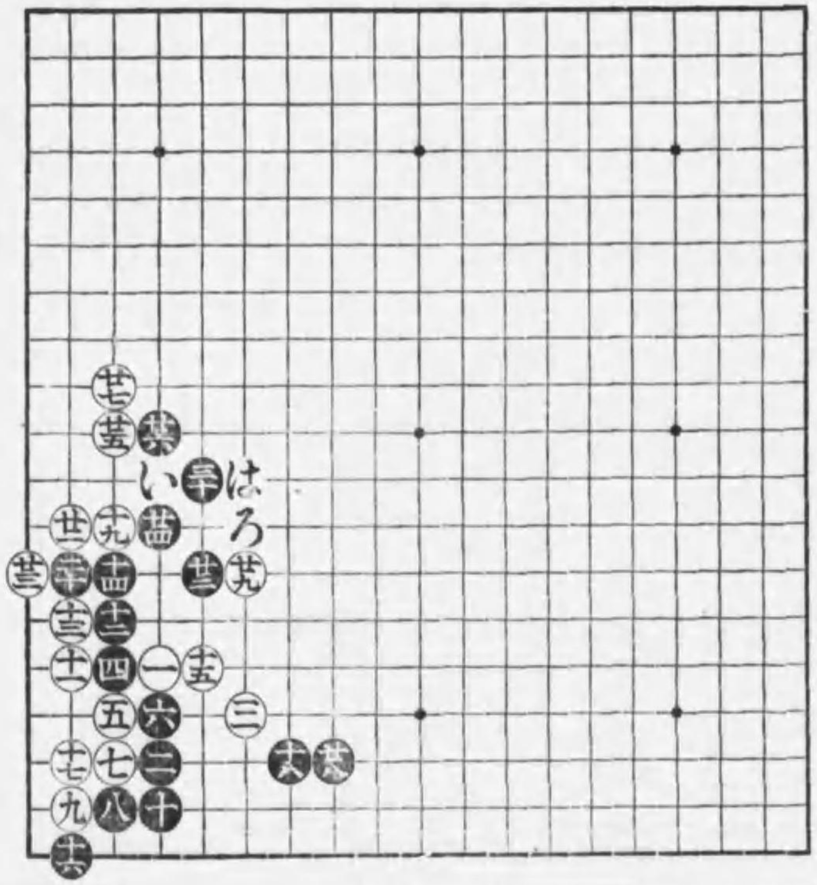
勝ちのやうであるが、是は大事の一着で、若し之を怠つて、イキナリ十八のところに飛び出せば、白に十六と下られ、二四の掛と**い**に突き出し、黑**ろ**、白**は**と割込む手との兩睨で打たるれば、黑は全く襲ぎやうがなくなる。からして、實戰に當つて、若し本型が出來たならば、十六の刎は、注意を怠つてはならぬ。

黑二二、此の手で乙圖の如く、一間に飛ぶのもあれど、普通は圖のやうに、二二と愚集んでいくのが可い。一見妙ならぬ形の如くであるが、此の場合にあつては、是が却つて良形なのである。黑二四、二六と運んで、先づ此の黑を堅固にし、而して二八と雙ん

だのは、甘い運びである。**二八**の手は、白に更に徹へぬやうで、一寸見れば、如何にも緩いやうであるが、實は非常に嚴しい手で、此の着によりて、以下ドシ〳〵白軍を追擊することが出來るのである。總て自家に缺點、弱點を持つて居たのでは、到底敵を擊つていくことが出來ぬものである。黒**二八**の手は、先づ自家の陣脚を整へ而して形勢上より白を攻めたものであつて斯うした遣方は、大に他に應用すべき手法である。

▲第二圖乙

黒**二二**、斯う飛ぶのは、古くからある型ではあるが、追ひ落しの形があつて、甲圖のやうに味が好くない。但し、田村秀哉の說に據れば、**二二**の飛は、そうでもない。唯だ**二六**と頂けてある此の手が、筋違を意味してマヅいのだ。直ちに**二八**に備へ、白**二九**ならば、**い**に行べぶく、白**い**ならば**二九**に行びる。斯くすれば、委であるから、別に黒の不利を認めない。然るを、**二六**と頂けて後**二八**とやるので、其處で白に**二九**と頂けられ、**三十**と苦



第二圖乙

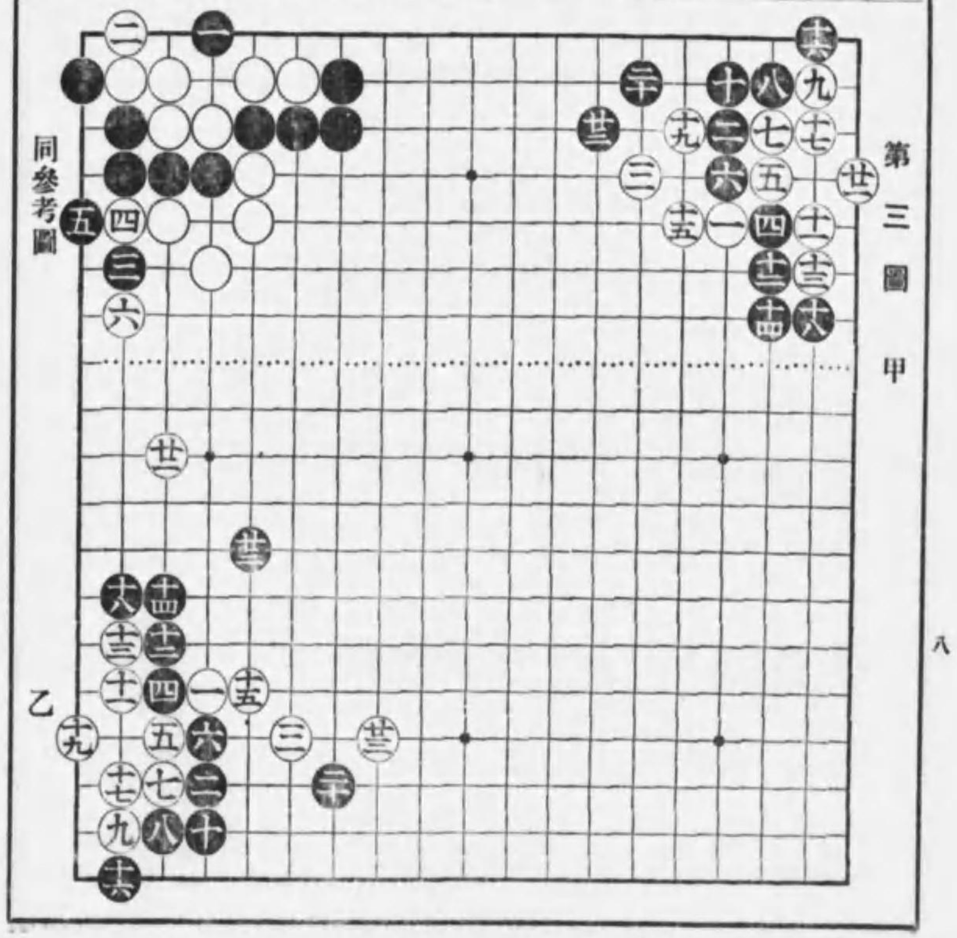
しい意味の手を打たねばならぬのであると尤も至極の議論ではあるが、併し、必ずしも秀哉の說が是なりとはいはれない。何故ならば、**二六**を打たずに、單に**二八**に打ち、白**二九**、黒**い**となる時、假に白**ろ**に行びたるものとせんか、黒**二六**、白**二七**となりし際、中央の白を攻擊するの手嚴しい手段がない。然るに圖の如くであれば、今白が**ろ**に行びるも、黒は**は**と直接に當つていくことが出來るといふ利益がある。からして、議論としては、秀哉の說は尤もであるが、實際からいふと、どうであるか、更に研究を要する問題である。之を要するに、**二二**と飛ぶからして、事が八釜敷なる。甲圖の如くやつて居れば、毫も文句はないのである。而して甲隅の利害に就いていへば、白三の一子が、妙な風に三と尖んで、黒に**十八**と飛び出されて居るといふ、筋違の石になつて居る上に、惡い地點である二の筋に數着を運び、且つ**二三**の手が、一の筋で辛く繫がつて居るといふ狀態で、全體の委が、上下共に惡いのに反して、黒には一着のマヅい手も出て居ないのである。からして、到底白に有利である筈がなく、昔から**五**と刎ね出すは、無理といはれて居るのは、如何さま所以ありである。

▲第三圖甲

黑十八は、舊式な定石であつて惡い。矢張、前圖に示した二二の處に逸出せねば不可のである。其の理由は、次圖に讓る。

白十九は、よく見掛る手ではあるが、是はベテンを意味するやうな筋合の手であつて、餘り良くない。單に二一に打つて活きるが宜い。圖の如くなると、白十九、黑二十と交換したる結果、二二と尖み出した石が、二十の後援を生じたゝめ、強くなつて、白から攻擊しにくゝなるから、一利一害はあるが、白十九、黑二十の交換あることは、白餘り感心せぬのである。

〔參考〕黑一、是は甲圖の如く、三の處に飛び出さねば不可ぬ。然るに、一見白が生擒されさうなのに釣り込まれて、一の處に置くと、白に二と曲がる妙著あつて、此の攻合、黑が、一手の負となるのである。さりとて、今更三の處に飛び出したのでは、白に四、六と運ばれ、如何とも禦ぎやうがない。



第三圖甲

▲第三圖乙

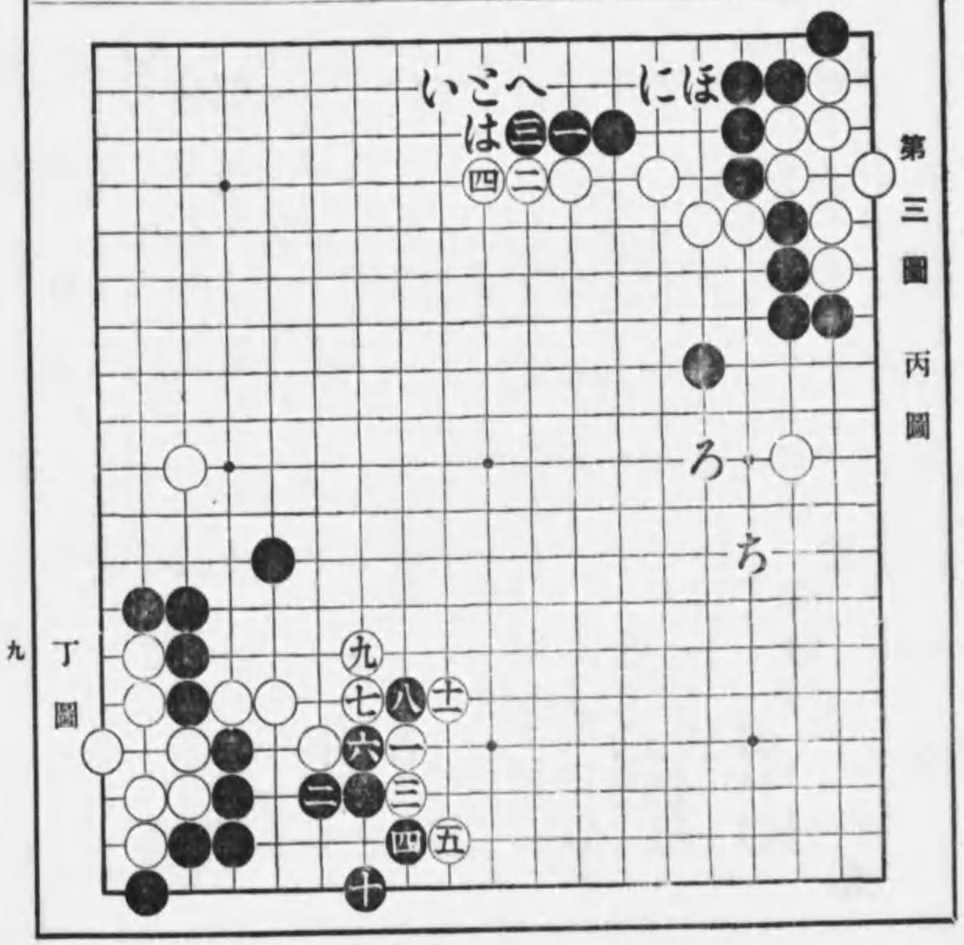
黑十八の約へが惡いことは、甲圖に述べた如くであるが、斯う來られた場合は、一旦十九に眼を持ち、而して一ッ二一と左側に攻擊を加へ、一轉して二三と掛けて行くのである。尙は此の變化を丙、丁二圖に見よ。

▲第三圖丙

黑一と下を張つて來たならば、白は、尋常に四まで運び、此處で黑が、いに桂馬すれば、ろに飛んで、五子の黑を上方の堅き方面に壓迫すべく、又た黑ろにせば、はに約へ込むのである。然らば、黑は、白よりに、ほと打つて後に、へに刎ねらるれば、此の黑は、活を失ふから、黑は、已むなくとに刎ね、白い、黑へとなるの外ない。そこで、白は、一轉してちに備へるので、是は大變白が良い。

▲第三圖丁

又た丁圖の如く、二を內側に引く定石に來たならば、三に約へ、以下十一までとなつて、是れ又た白が良い。但し、黑六を打たずに、直ちに十の處に懸け粘いで活きたならば、白は、代つて六の處に堅く粘ぐのである。



第三圖丙圖

丁圖

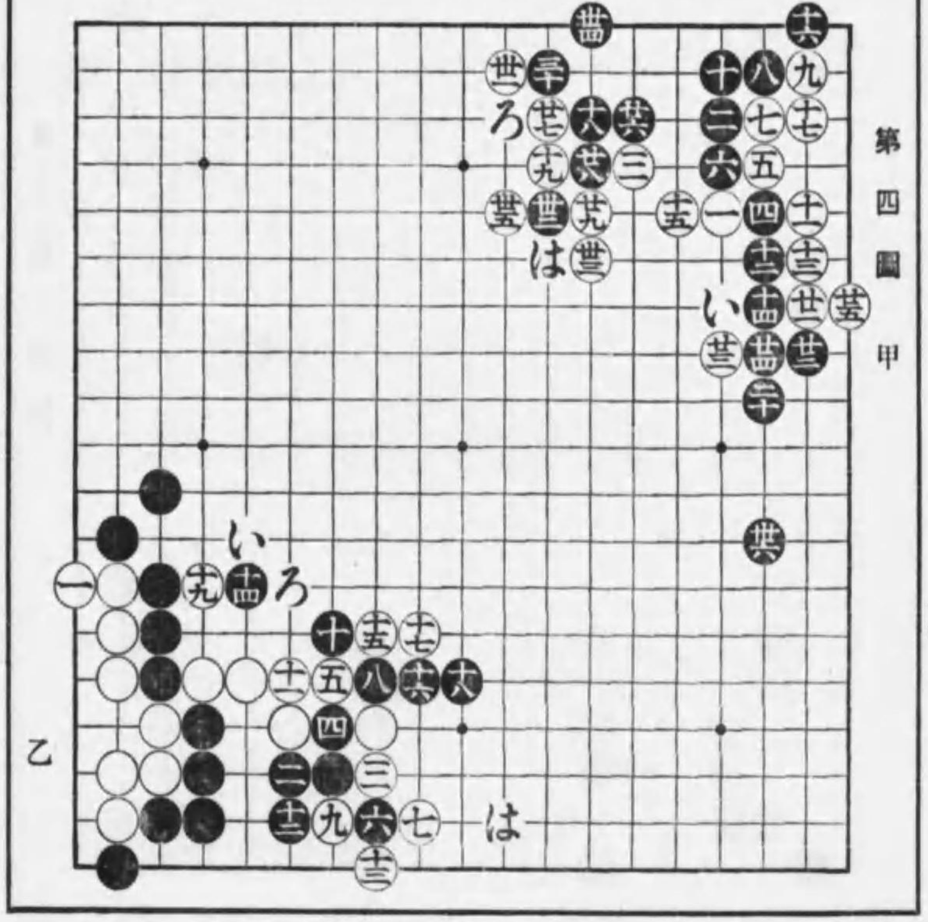
▲第四圖甲

白十九、第二圖に示した、二四へ附る手で圖の如く打つ型もある、否、斯う打つ方が、手廣く手段する事が出來るだけ、敵に取つて煩しいのである。

黒二十は良い手である、前圖三圖に比べて中側に進展し乍ら白を不利益な、二の筋へ一ッ餘計に這はせたのは、二十の一著の働きである、依りて此の黒が大きに樂になつた。

白二三、從來いづれの著書にも爰で圖の如く覗きを利かせて、二五を活きて居るが、此の覗きはいに附ける味を消す者で、今直に覗くのはその機で無い。

黒二六は良い手で、以下白に痛みを與へながら、三四と先手に活きて、更に三六と中側の味方を整へる事が出來たのである、本隅の利害を申すに、白は征當り及びろに截らるゝ手が殘つて居るから、爰ではと打ち拔いて居るより無い、斯う一子を打拔かれる事は、黒の苦痛には相違ないが、四ッ目に取られるのとは事變り、白に二三の無駄手が生ずるから、



第四圖甲

此の打拔かれはさしたる事は無い、而して他の手割はと云ふと、白は不利益な二の筋に數著運むで居るのと、白三と黒二六と交換した形は、黒に先手に活きさせて居る、惡い結果に成つて居るから、斯く成りても決して白に利益は無いのである。

乙圖

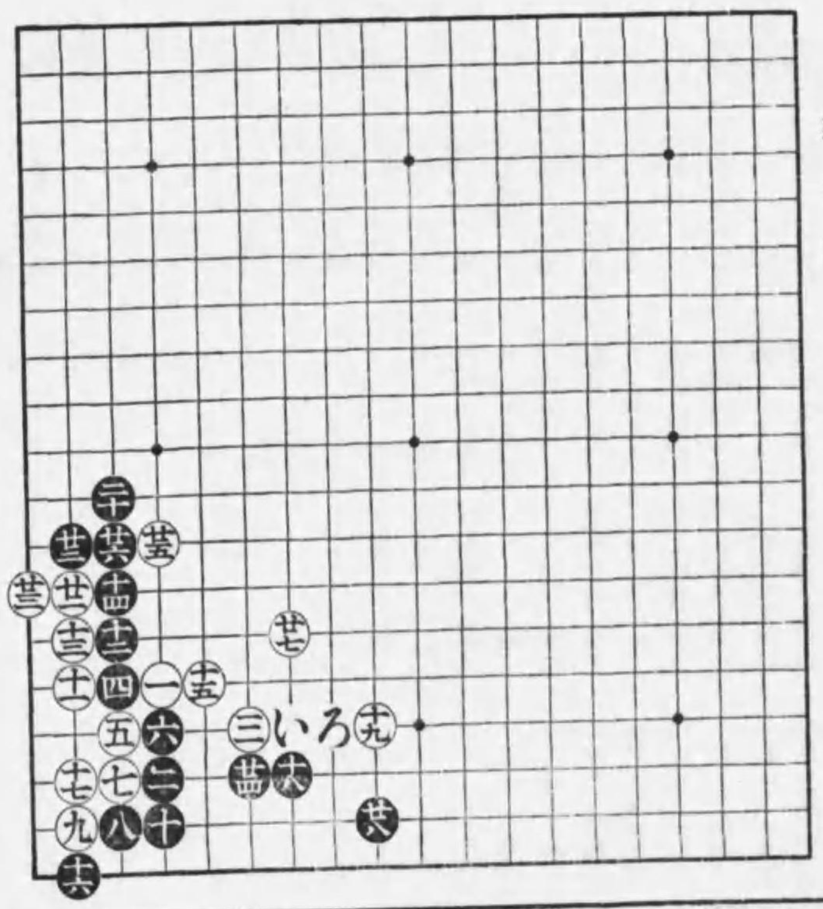
前圖に於ける、二三の覗きが打つて無ければ黒八の時九と截り、圖の如く十九迄と成る、恐ろしい手段がある、斯くても黒はいに引き、白ろの時、上の味を見てはに迫るなど、色々方法があるから、強ち悲觀すべきでは無いが、兎に角前述の覗きが無い場合には、白に斯うした恐るべき手段がある事は、承知して居ねば不可ぬ。

▲第五圖

白十九、二六に懸ける定石に打たないで、斯う十九と打つのもある、是は著者が打出した手で度々成功したのである、黒二四是れをいに押すか、又は二九に尖附たき所なれど、共に成功を期し難い。

黒二四の引は稍緩き嫌ひあれども、斯く控へて、二八に治まれば無難である。

尙ほ二四にていに押す手とろに尖み附ける手段は次圖にかゝげよう。



第五圖

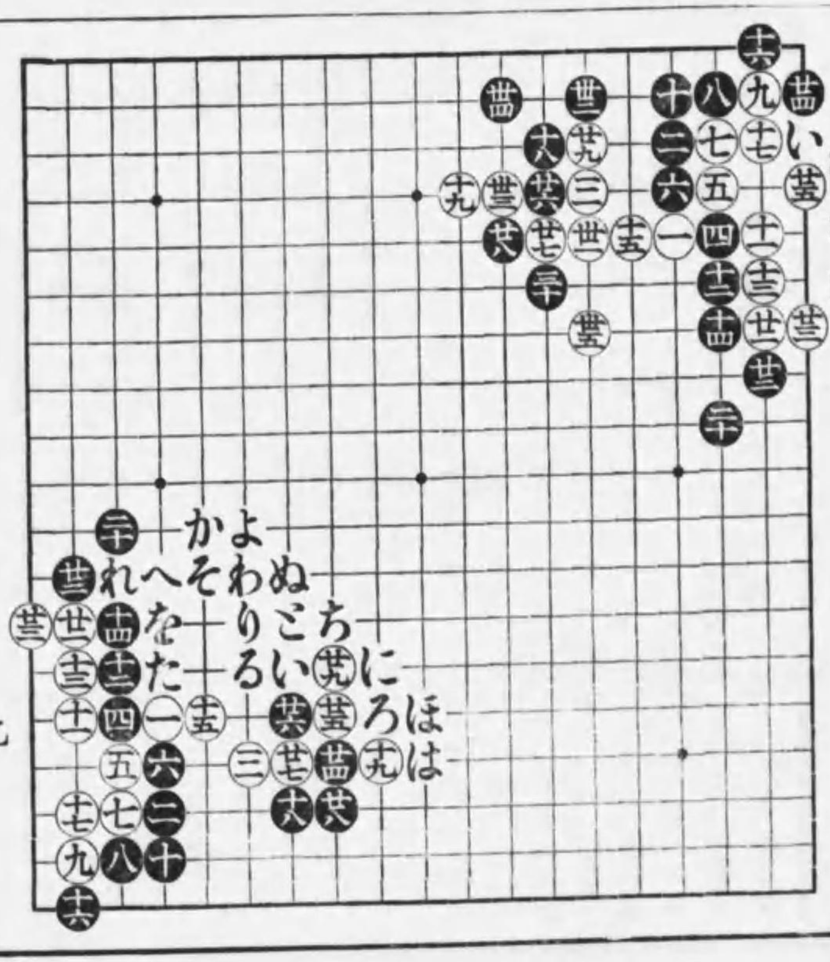
▲第六圖甲

白十九の手に對戰するには、二十、二二と運んだ後、前圖に述べた型を除いては本圖の如く遣るか、乙圖の如く打つかの二手段よりない。

黑二四と一つ刎ね捨てゝ、二六、二八と打つたのは三十の叩きが利けば、白が形崩れとなるから、黑が有利になるのであり、又白が三一の手で三二などに下つたならば、黑は三一の處に二七の白を四ッ目に打拔けば、いに豫め劫材も出來し置きたることゝして、上部六目の黑を捨てゝ充分の形勢が得られると云ふ譯で、二四以下二八迄の運びを採つたのであるが、黑三十の時白に三一と平氣に詫つて居られると、三五迄の結果となりて、黑は上部の石は活に就かねばならぬのであり、中側四以下二二迄の黑も凌がねばならず、また中の二八、三十の石も處置せねばならぬことになる。處で白の方にも三ケ處に難石が出來るなれば互角の譯であるが、白は十九、三三の方面の石と一以下の石との二方を凌げば足るのであり、黑は前述の三方を處置して行かねば收まらぬとあつては、理屈から云つても既に黑が面白くない譯である。

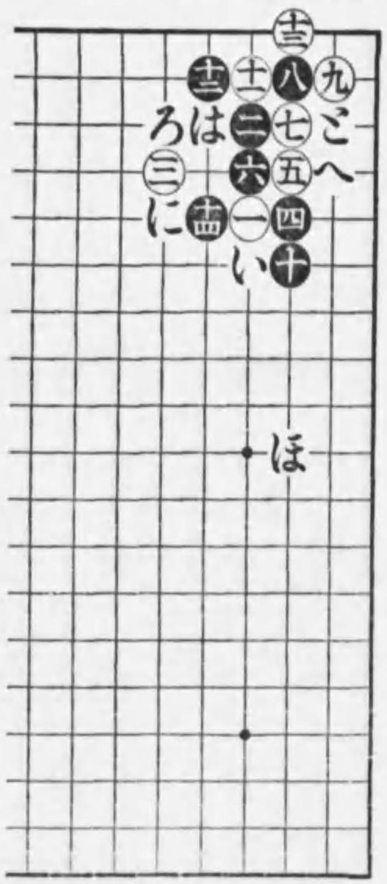
▲第六圖乙

黑二四は巧い策戰で、斯くして二八迄運びなば、白はいに抱へる外なかるべく、依て黑ろ、白二九、黑は、白に、黑ほと云ふ委に振り換りて捌かうと云ふのであるから、二四と尖み附けた手段は頗る洒落た筋合のやうに考へられるが、偖白に圖の如く二九と捻れて遣つて來られると、前圖に述べた白がへの覗きを使つて居ないだけに、黑は更に遣り惡くい。假りに此處で黑がろに截つて前述の振り換へる委に戻らうとするも、白に强情にほと刎られ、黑其時いに押さんか、更に手强くとに刎ねまくつて來られると、黑ち、白に、黑り、白ぬ、黑るとなる時、をに頂け黑わ、白か、黑よ、白た、黑れ、白そとなつて所謂黑剩りとなるのであり、サリ迚黑はコレ以外の普通手段を講せんか、二六の石を生擒せられたる代償を得るに由なければ、結局二六に犧牲を出したるだけ、不利を免れぬ次第となり、是れ亦黑の不利たること言を俟たぬ。尙又黑二四の一着を前圖の如くに打つは、白に働かれたる氣味合となりて、假令不利ならざる迄も、黑の有利とは云へぬ樣な形勢となる。之を要するに黑が正面の定石に依つたから、種々六かしい事柄が湧いて來るので、若し黑が前々圖に一寸一言して置いた別な型を採つたならば、斯樣に六ケ敷ならずに、極めて簡單に運べるのである。



▲第六圖 丙

本圖は定石ではあるが、云はゞ定石除けの定石である。黒十、今迄はこれを十一に粘いで打つたのであるが、斯う粘ぐと例の白に種々と難題を持ち掛けられて來る。然しソレトテ相手に應へるだけの覺悟があるなれば、固より古來から各達人が用ひて居た型であるだけに、黒に不利は見ないのであるが、初學者であるとか、又は戰に不得手の士になると、兎角誤魔化され勝になる。依て戰鬪に不得手の人は本型に依るが宜いソコデ黒が十一と粘ぐのを、十と圖の如く引いたならば、白は十二に截るの外はない。其時黒は、一旦十二に當て、次に十四と一の白を四張に掛て擒るのである。此處で若し白が、四張アテを打つて來たならば、いに打拔き、而して白急場の應答を求めて來ぬ限りは、大抵の要點は措いて、ろに懸粘で居るのである。又白が、黒十四の時はに截つて來たならば、いに打拔き、白にに押せばほに開いて宜いのである。ソコデ黒十四、白は、黒い、白に、黒ほと結末を着けた



本隅の利害を云ふに、黒八の石を打拔れて居ることは、甚だ痛切ではあるが、白がこの勢力を活用して來ることの不可能な、二の筋の場處であるだけに助かるのであり、黒が白の一の石を提て居るのは、五手かゝつて居るのではあるが、中腹で打拔て居るから、大變な勢力を得た譯である。且つ十二の一子あることは、白の患となつて居るから、一見すれば第一位である隅を、白に讓りて第二位である中側に地歩を占めた黒が惡い樣だが、實は前述の關係があるので、黒が不利益であるとは云へぬのである。尙黒十二と押へる手でへに跳を利かせ、白との時十二と打つ方幾分の働きである。

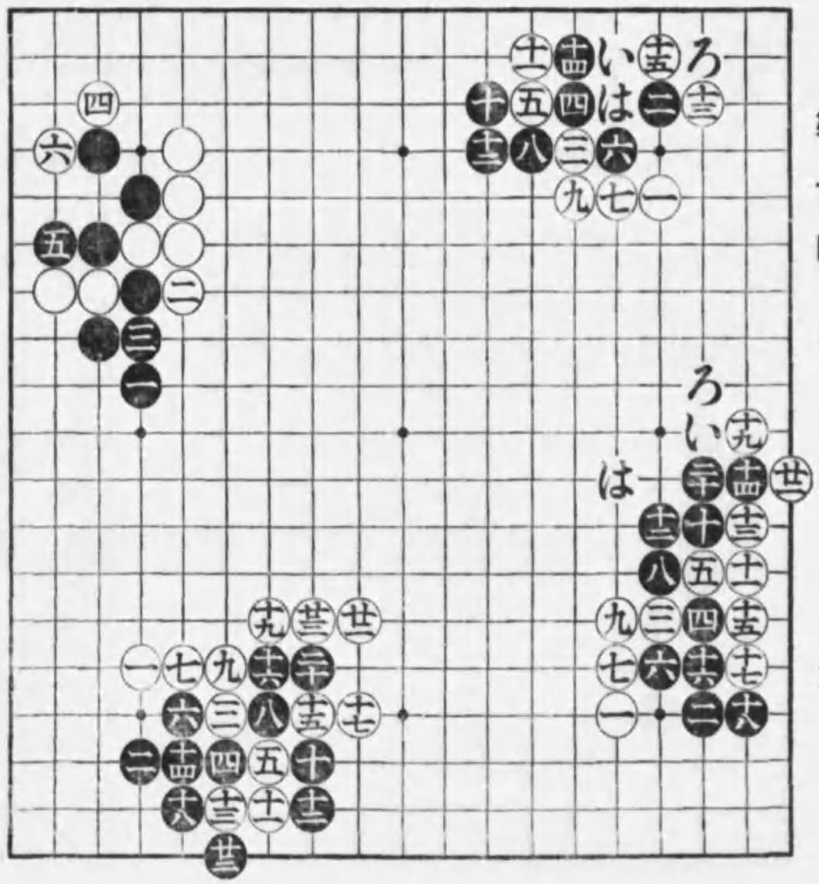
丙

▲第七圖 甲

黒四、六の手段は碁會所などで、見掛ける姿であるが、是れは甚だ宜しくない。何故かと申せば、白十五迄となつては、隅と中側との交換になつて居る事が第一不利であり、第二には黒が擒にして居る五、十一の二子は、白に種々と外側で利用されるのであり、其れが終ると此度は、いに突張られて先手に黒の二子を擒られる、缺點があるから、黒甚だ面白くないのである。尙ほ黒十四の手を、ろに刎ねなば、白いに置き、黒はにせば、十五に截つて黒全滅となるのである。

乙圖　尙ほ黒四、六、八と運ぶ手には、白に圖の如く打たれる恐ろしい手段がある上に、若し黒に征の工合が惡ければ、十九と頂ける手で二十に截られる。さすれば黒十九、白い、黒ろ、白はとなつて黒が潰れてしまふ。

丙圖　乙圖に述べた樣に白に逃げ出されるのを否がつて圖の樣に、一と懸粘いで打つ人もあるが是れは、二と利かされた上に、四、六と運ばれるから、甲圖に較べて更に黒が惡い



第七圖 甲

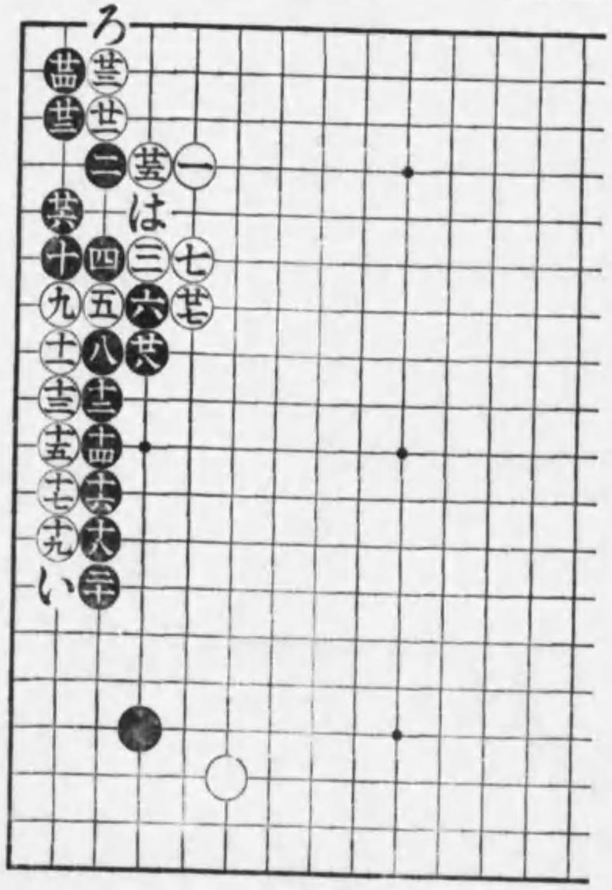
丙　丁　乙

姿になるのである。

丁圖　黑四、六と打つ手は元來變則定石であるに係らず天狗連の中には征の宜い場合ならば、十二と押え込んで打てるから、此の型を採てもよいなぞと言ふ人もあるが、是れは大なる誤りで、黑が十二と押え込めば、白十三以下、二三迄の手段に出るから、よしや黑が征によい場合であつても、斯うやられると矢張り黑は、形勢上の大損害を蒙むる。以上述べた如く何れにしても黑が四、六、八と打つのは惡いのである。

▲第八圖

前圖に於いて四、六、八と打つのは不可ぬ手だと述べたが黑の征のよい場合であれば、四と頂け白五の時、いきなり六と截る型はある、是れはいふ迄もなく前圖から工夫して生み出した型で、却て黑が成功する事もある、圖は秀哉、廣瀬兩氏の打碁に出來た姿であるが、此の形勢と成りては、ハタの關係一ッで白が面白くない、何故なれば此の時白いに伸びなば、黑はろに刎ねて白がはに粘いで眼を取りに來る手を防ぐから、結局白は惡い二ノ筋を、七ッも這つて居るのに反して、黑は僅に四手より、二ノ筋に打つて居ない姿であるから、右下隅の配置が若し圖の樣になつて居る場合でもあると白が惡いのである。本型には白に他に巧い手段がある。次圖に掲載する。

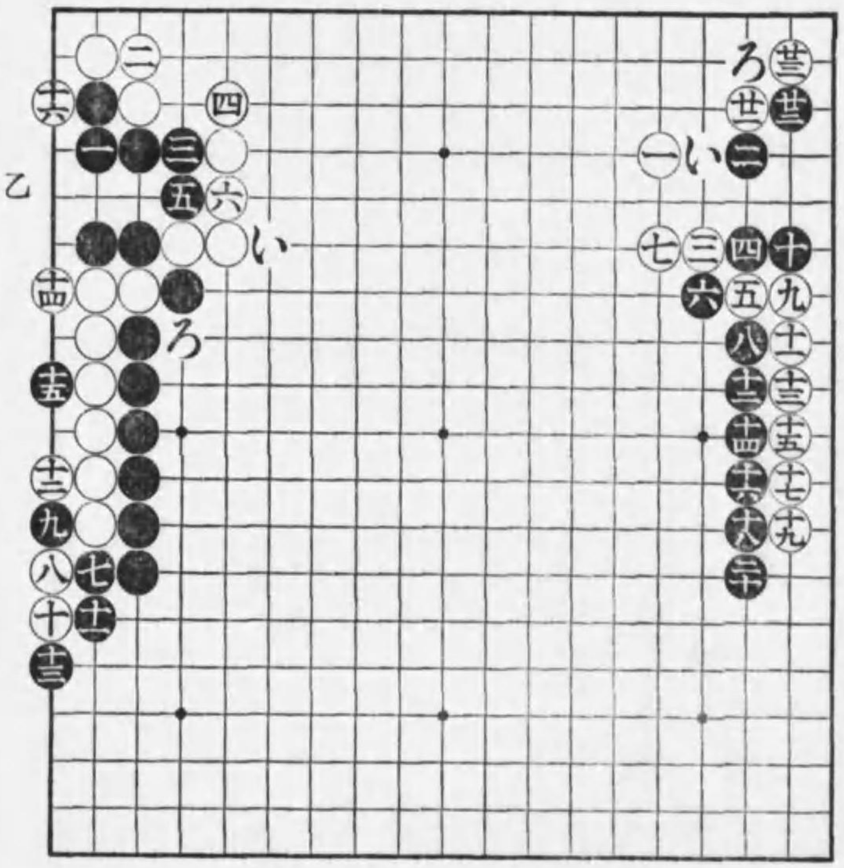


第八圖

▲第九圖　甲

白二三、今迄の打碁には爰で白がい、又はろに下つたのを見掛ける許りであるが、斯うやつては、前圖に述べた秀哉氏が廣瀬六段に失敗した例もある如く、何時も白が甘く行かぬがちである、元來黑四、六と頂け截る手は、征にならぬといふを楯に取つての强行手段で、而もよくよく場合を見計らはねばならぬ、斯う數へ立てると、四、六の頂截りは、無理な手と云はねばならぬ、然るに事實は、反對の結果を呈する、此原因は全く白二三の打方に在る事を發見した。卽ちい又はろに打たないで、圖の如く二三と二段刎ねに打のが妙著で、乙丙丁圖の如く如何に手段するも黑の失敗に終るのである。

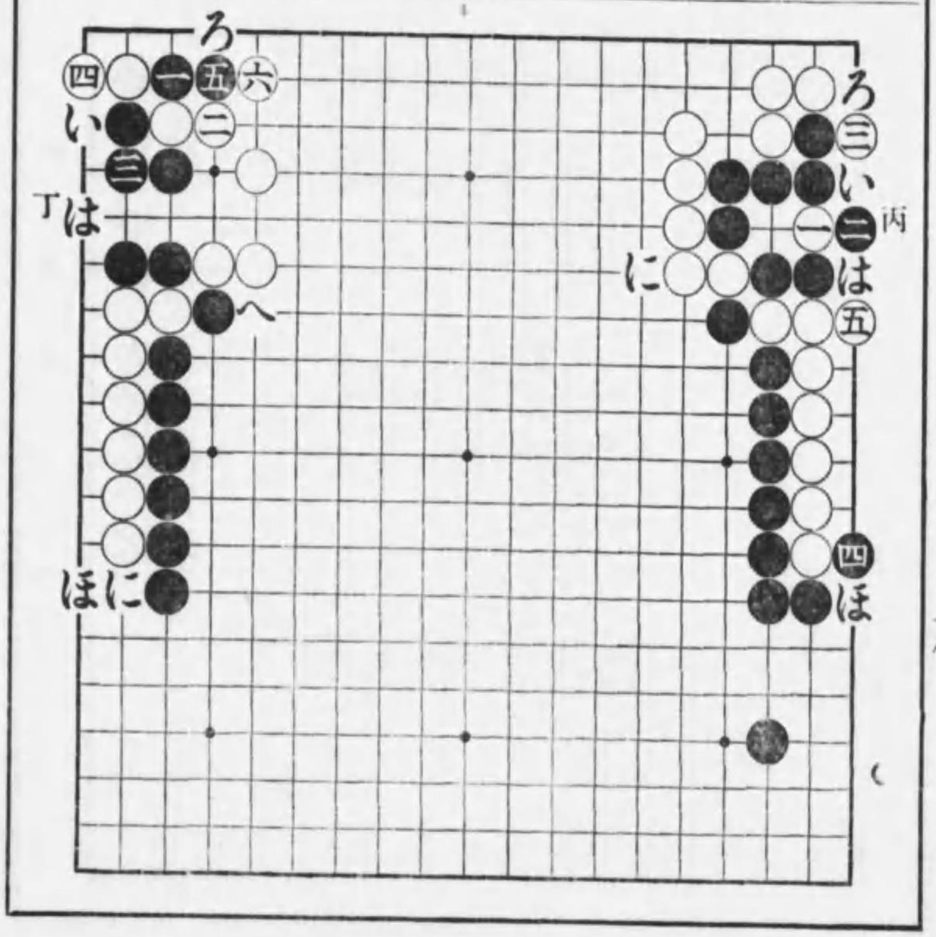
乙圖　白六は之をいに伸びるも、ろに截つて征にならぬ黑の有利な場合と假定して打つたのである、白八以下十六迄となつては、黑散散な次第であるが、假に白八の刎ねは利かぬ場合とすれば、白八の手を丙圖の樣に打てばよいのである。



第九圖　甲

丙圖　白一と中手を打つて、三、五と運べば此の攻合白劫勝となるのであるが、若し劫數が不利な場合であれば一と打つ手を直に三の所へ刎ね、黑い白ろ黑一白は黑五と成つて、白先手ゼキになるのである、甲圖にも述べた如く、にの伸びも利かぬものと假定し、大低の場合は利くべきほの刎ね迄封じても、尙ほ白に打つべき種々の手段があつて、而も結果が圖の如く惡く無いのに見ても、如何に甲圖白二三の一著が黑に徹へたかゞ解るのである。

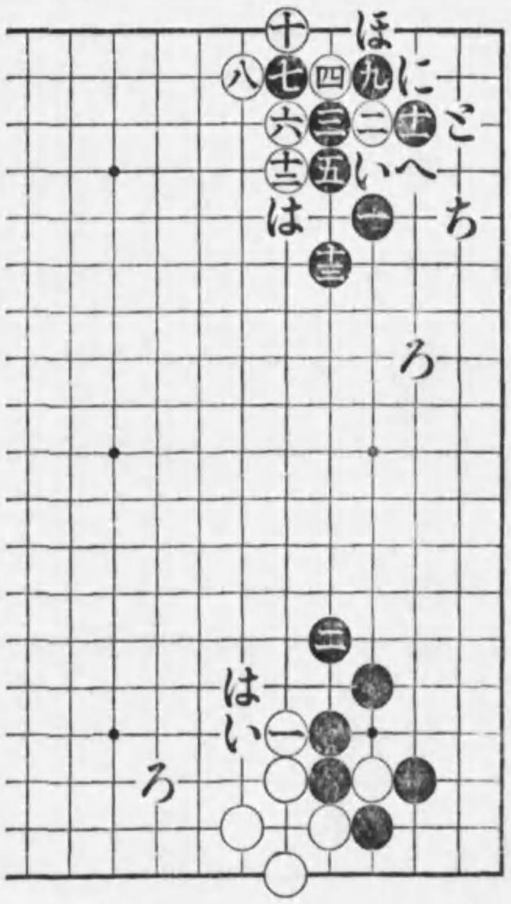
丁圖　黑一と截つて、三と結いだのは巧い手の樣であるが、白に四と下る妙手があつて是れ亦黑がいかぬ、例へば爰で黑がいに押さへたならば、白は最早ろに刎ねて活々の捌きを打つて充分であり、亦ろに刎ねる手を、はに置けば結局して黑にに曲り込む時、ほに刎ねを利せれば、此の攻合白一手勝となるのである、但しはに置く手段を敢行するとなれば、其の以前にへに曲りを利かせて置くがよい。



▲第十圖　甲

白四、初學者は兎もすると斯手を、いに突當るが之れは、五と押へらるれば、黑の三子に對して白は二子の無勢で眞面に戰ふ事になるから甚だ惡い、依つて四に刎ね二子の勢力で、黑三の一子に當つたのである、黑七と棄石を使つたのは、次に白二の一子を取つて振り替らうといふ手段である、白十二黑十三は共に要着である。

本型黑は第一位點の隅を占領し、白は第二位點の中側に據つたのだが、黑は隅にカナリな地域を占めて居るに反して、白は未だ地域を形づくつて居らぬ、からして一見すると白が不利の樣であるが、實はソーで無く寧ろ白の方が有利な位ひである。何故なれば白は、黑七の一子を四ッ目に打ち拔いて居る。四ッ目に打ち拔く事は同時に二着打つて、お負に敵から一目のコミを取つた譯に當るから、大變な所得である。隨つて白の構へは頗る堅固であるが、黑の備へには未だ二の白に一路の活力が殘つて居るので、之れを利用して黑地を侵す手段がある。假りに他日ろ邊に白が出來たとすると、はに伸びる利きも出來れば、亦にに截つて打つ手も生ずるのである。其時黑いなれば、ほに渡るべく、亦黑之れをほに下らばへに當て、黑い白と黑二白ちとなつて、ろの味方と連絡する事も出來る、黑には斯うした疵が殘つて居る上に後手になるから餘り威張れぬのである。



第十圖　甲　乙

▲第十圖　乙

白一、實戰の場合には必ずしも定石通り斯う押さずとも他に手段するもよい、さすれば黑にいと掛けられて辛い樣であるが、斯うなれば此の石は極めて輕い物になるから更に他に轉じて此石を棄てゝ擲つ意匠に出でて差支ぬのである。但し此の石を棄てゝ惡い場合であれば、ろに受けて居て宜いのである。尙ほ白一と押す

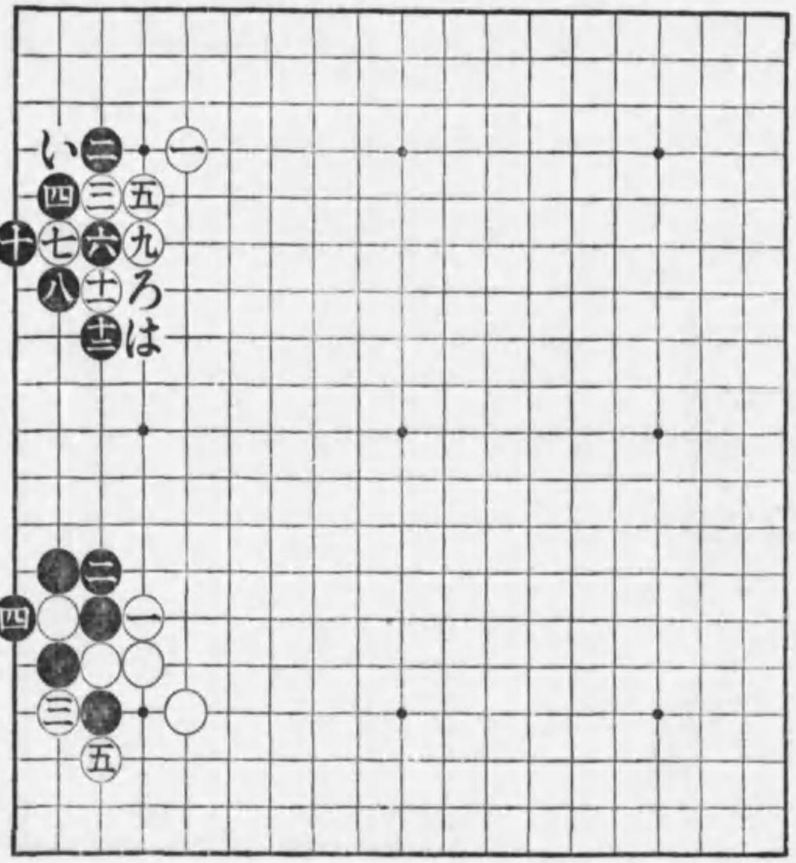
手にて、はに斜走した打碁も散見するが之れは所謂緩みであり。又甲圖に述べた黒の疵も無くなるから感心せぬ。黒二此手を打たづに置けば反對に爰に打れると、白左側の形勢が如何にも重厚になるから、二と應する事が肝要であるが、而も白一を他に打つ手段もあると同じく、黒二の手も實戰の際は、場合に依り他に轉じて打つも宜いのである。

▲第十一圖 甲

白九第十圖の如く、いに截る手で斯う九と上から當る手もある、さすれば黒は十と打ちて、次に十二に當て白十三と劫を取込む時不利ならぬ劫材あれば其れを立てゝ、六の處に劫を取込み、白をろに粘せてはに押すのである、斯うなつては白は形勢實質の二ッながら所得がないから不利なので、隨つて九と上から當てる手は通常不可ぬとされて居る。

▲第十一圖 參考圖

白に一と上から當てられると初心者は、二に粘ぎたがるが之れは、圖の如く一、三と二重に當てを利かされる事になるから、白に三、五と打たれて反つて黒が不利となるのである。

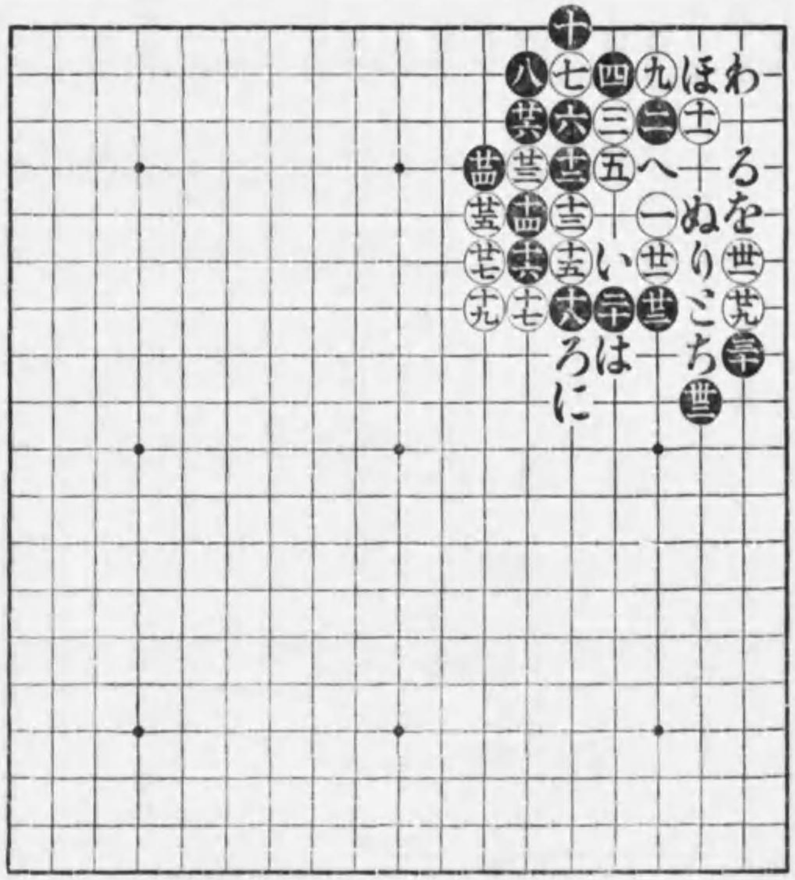


第十一圖 ㊀トル

第十一圖參考圖

▲第十二圖 甲

白十三、此手は前圖に掲げた如く、いに打つを普通と、するのであるが、圖の如く十三に刎ねて打つ型もある、そうして此定石を打つ方がよい場合もあるから本型も承知して居ねば不可ぬ。白十七は稍々無理であるが、一旦十三と打たる以上は強く斯う刎ねて打つより無い。『白十七、爰で十八へ引くは堅固ではあるが、十三と打つた手段が後手に終る斗りで無く、黒に些も響かぬから隨つて十三以下が悉く緩い手に成つて了ふ、そこで十七に刎ねたのである』。黒十八の截りは、白十七の無理を咎めた手である『初心者には此十八の截りが危なく感せられるかも知れぬが、白には追落しになる味があるから此石を提られるやうな事は毛頭無い。又此時白に二十に刎ねられて、黒ろ白はと打たるれば、下側に大模樣を作られ黒不利の樣に感せられるかも知れぬが、是れは其時十九に刎ねて打てば、十七の一子を提るか亦は自然に白地を侵略するかの二つ一つになるから、是れ又恐れる處は無い。



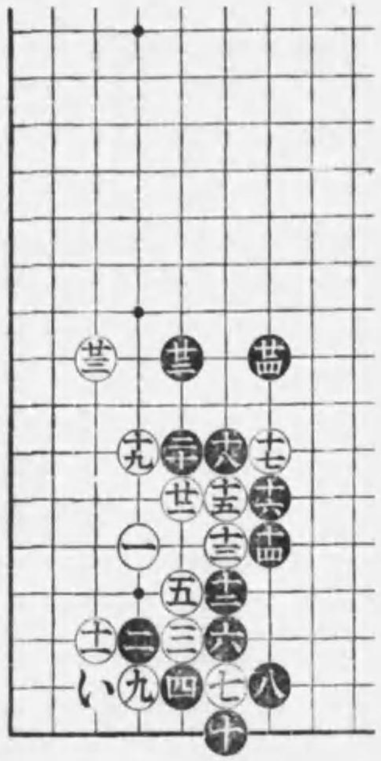
第十二圖 甲 ㊅ツグ

而して白が右側に地域を占めれば、黒又左側に厚壯な大模樣を作るから、勘定合から云つても、黒十八の時白が二十と打つて來る手は些も憂ふる處は無いのである、尙ほ白が二十に刎るは不可ぬ事がある、それは黒から前圖に述べたほに截られると、切れ々々の關係から爰で黒に活きられる味があるので、損を忍むでへに提るより外ない疵が殘つて居る。からして白十九の手で二十に刎ねるは、いよ／＼不可ぬ筋合なのである』。

白十九と打ち、黒に二十、二二と壓迫されたのは如何にも辛い樣であるが、黒亦白に二三と截られ次に二五以下、先手に締め附けられる苦痛を忍ばねばならぬから、此點は双方互角と見ねばならぬ。白二九は此際手筋であつて、若し是れを、とに刎ねたならば黒に、ちと押へられて後手になるのである、黒三二、是れ亦手筋である。是れをちに引くに較べて二二の味方が活動して來る。碁は總べて味方の石を些かたりとも働くやうに打つ可きものである。尙ほ斯う構へておけば、とに突張りを生じた場合、例のほに截り白への時、りに突き出し、白ぬ黒る白を黒わと打つて白地を潰す手段を始めとして、其他種々の虐め方があるのである。

尙ほ本隅の利害を申すに、白は隅に利を占めて居るとはいふものゝ、例のほに截らるゝ疵殘りの地であり、外部の勢力は大體に於いて黒優勢であるから、結局白は少なくもほの截れ味が殘つて居るだけ不利の形勢である。

乙圖　黒二十白十九にて圖の型を採つて來たならば、二十以下二四迄運び、而して矢張りいに截る前述の味を含むで打てば宜いのである、尙ほいに截る手筋は、本型の總てに通じて黒の生命である事を記憶されたいのである。



第十二圖　乙

▲第十三圖

白七、九或る場合には稀に斯う打つもあるが大體からいへば陷め氣味の手で圖の如く、黒に十四と急所を切斷されれば白無理形となるのである、黒十、白九に嚇かされて之を十二に押へれば白に十と截られ、黒い白ろとなつて既述の陷りとなるのである、卽ち七の當てと十の截りとの兩方を利かされた譯になるからである。

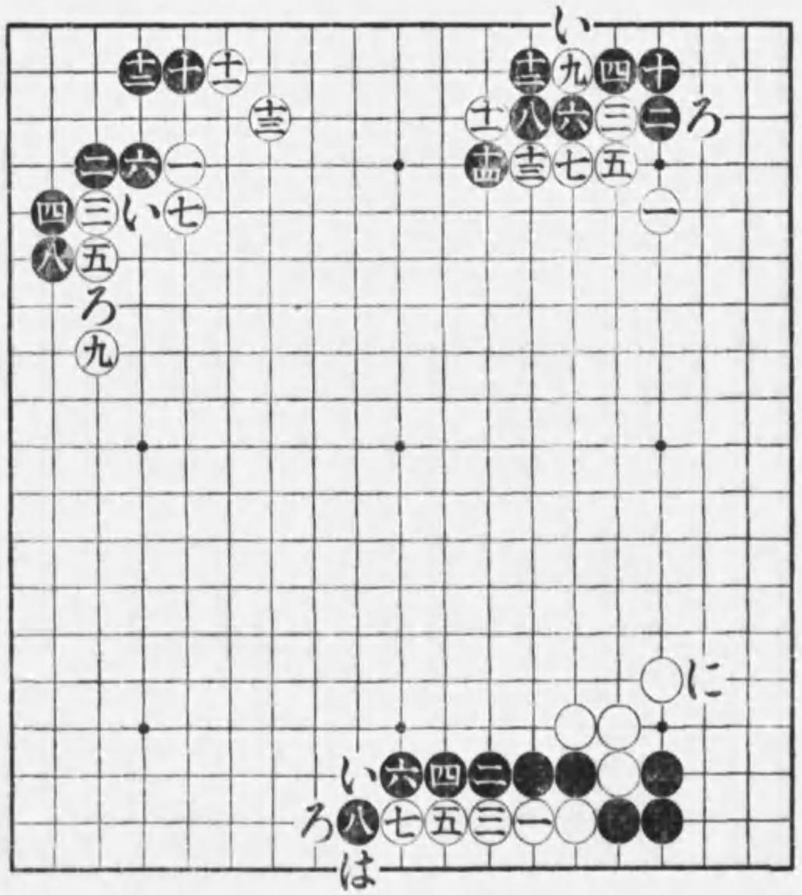
▲第十三圖　參考圖

白一は無理で黒八迄と成つて打ち樣がない茲で白いならばろに引かるゝ迄であり、亦ろに頂けなば、黒い白はとなる時にに頂け、隅を活られて白散々である。

▲第十四圖

白五を斯う横に伸びるもある、然らば黒は六に突張り以下十二迄と成つていの出截りの疵殘り居るだけ白不利なのである。

但し白九をろに伸びるも場合に依つてある。尙ほ黒十、十二白十一、十三の手筋は前圖第十二圖甲隅に述べたと同じ道理である。



第十四圖

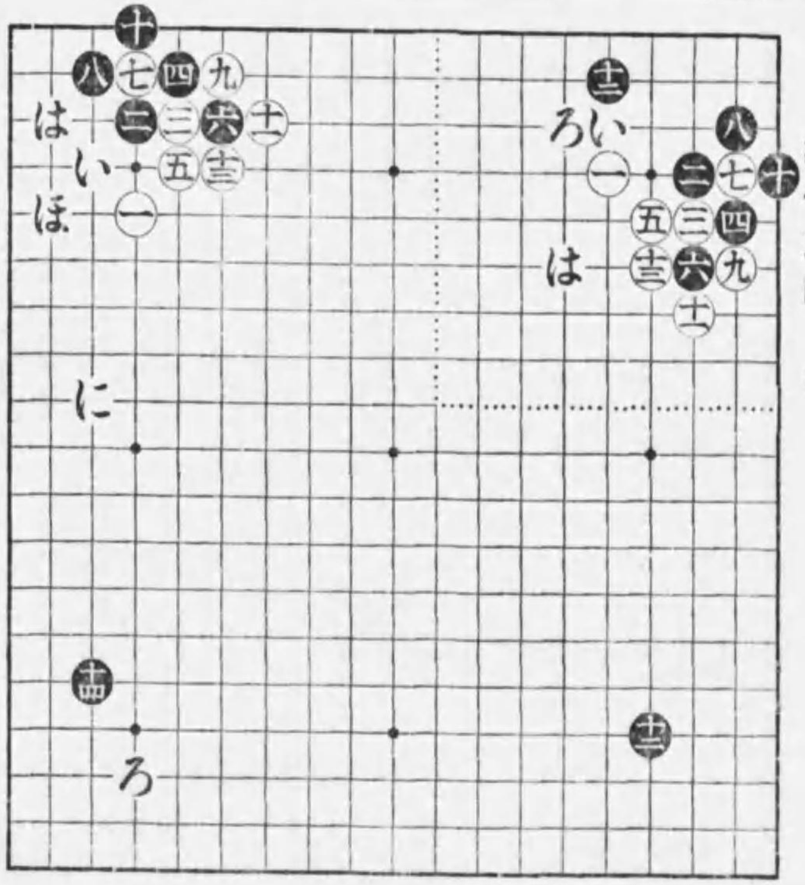
第十三圖

第十三圖參考圖

▲第十五圖　甲

白七、此手で前々に掲げた九の處へ截るを外截りといゝ、圖の如く截るを內截りといふ、外截りは隅に地域を占むるを目的とし、內截りは外勢を占めるを目的とする、併し本定石は、黑に完全の活を隅に讓つて十三と後手で打拔くのであるから普通は白稍不利とされて居る。尙ほ黑十二をいに頂けなばろに押へ、黑十二白十三と打つのである、但し此場合白十三の打拔にてはに備へるもある、而し之は妥の如くであつて實は虛形である。

乙圖、甲圖、黑十二は一隅の定石としてはよいのであるが、若し實戰の場合であつたならば、乙圖に於けるが如く、先づ十二と征當りを打つて白に十三と打拔かせ、更に轉して左下隅十四に據り、白いに尖むも尙ほ此隅を放擲してろに締り、白はにせばにに拓き機を見てほに打ち、活味を利して此隅を棄てゝ打つ方針を採れば、一層黑働きとなるのである。



第十五圖　甲

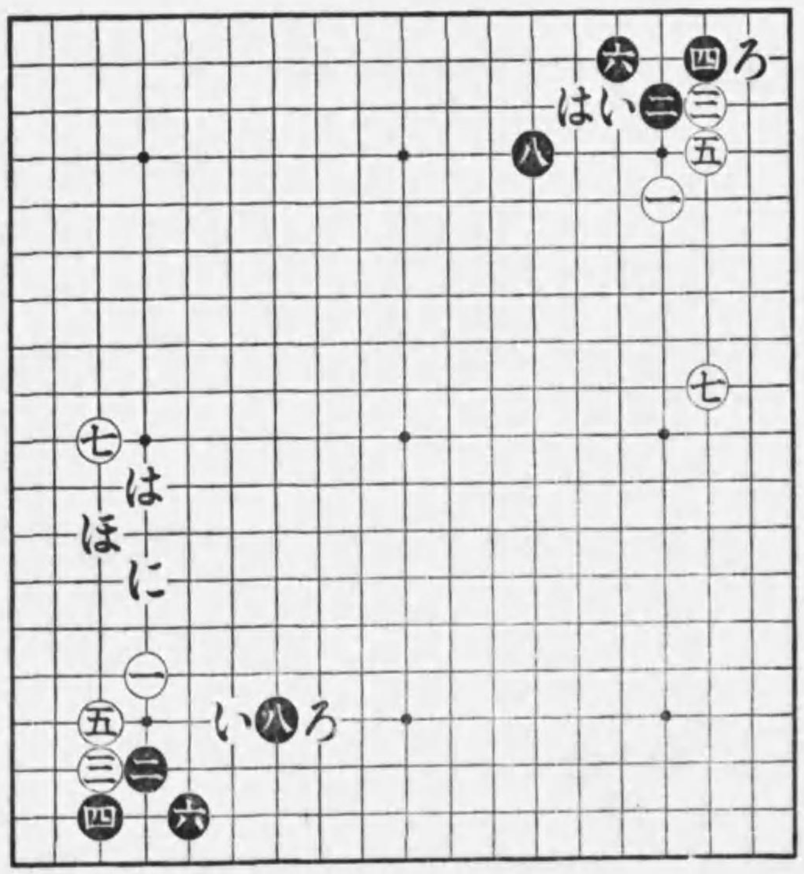
第十五圖　乙

▲第十六圖　甲

白三、斯手を前圖迄のいに打つたのを外頂けと云い、圖の如く打つたのを內頂けと云ふ、外頂けは外部に勢力を得るか、又は隅に地域を得やうとするが目的であり、內頂けは隅の事よりも中側に發展するを目的とするものである、黑四一體二の筋は死活、攻合、侵分の場合の外感心せぬ地點であるが、圖の如く二、四の二勢力で敵の一子を擊退し得る場所であれば大抵の場合斯う刎ねるのが宜いのである、「第十圖參照」黑六之れ亦二筋であり而も手としても緩い樣であるが、白が次に來やうとするろの先手押へを防ぎながら活形に構へ得るから良いのである白七まだ〳〵進むで拆けるのを殊更かう控へたのは一ッは打込まれる豫防もあるが、眞の目的は黑が爰で手拔すれば、はに打つて此黑を攻立てる手段を覘つた構へである。

黑八は發展に兼ねるに白よりする、はの攻擊を防いた確實な手で、一隅の定石としては申分ないのであるが、實戰に當つては必ずしも爰に備ふべきでない事は心得べきである。

乙圖　白七と甲圖より一路進むで拆いた目的は黑爰を手拔すればい又は八に打つて中央に形勢を占むるか、或はろに封鎖して大模樣を



第十六圖　甲

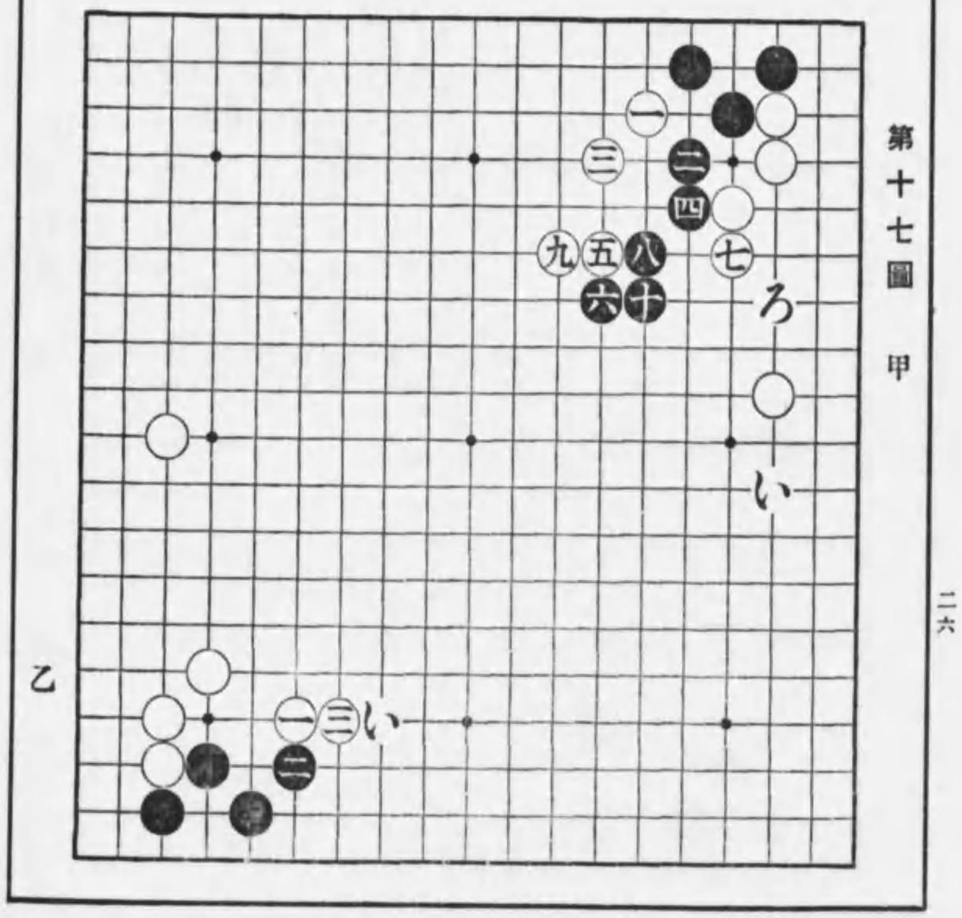
乙

張ると云ふ意匠である、黑八は白の策戰を拒ぐに兼ねて機會もあらば、は又はに或はほに打込まんとすとして構へた著である。

▲第十七圖　甲

本隅は前圖甲隅黑八を手拔した場合の定石である、黑六白が一、三、五と競り立てゝ來た場合敵の右側手薄きを觀て斯う頂けたのは良手で之に對して白は圖の如く七に引くの外なく、依つて黑八、十と打つて容易く中原に進展したのである、但し黑十の堅粘は他日いの邊に味方を生じた場合、ろの打込みを覘つた手である。

乙圖　本隅亦前圖乙隅黑手拔した場合の定石である、白一、三は此黑を攻めながら中側一體に大模樣を委づくる手段である、「但し一と打棄ての儘三を他に手拔する手段もある」、黑二斯くして味よく先手に活を保ち置き、更に他に轉ずる意匠である、尙ほ黑二は白一を直に三の處より來るも斯く應じてよく、亦白一の手をいの遠方より攻擊せば直に他に手拔して宜いのである。



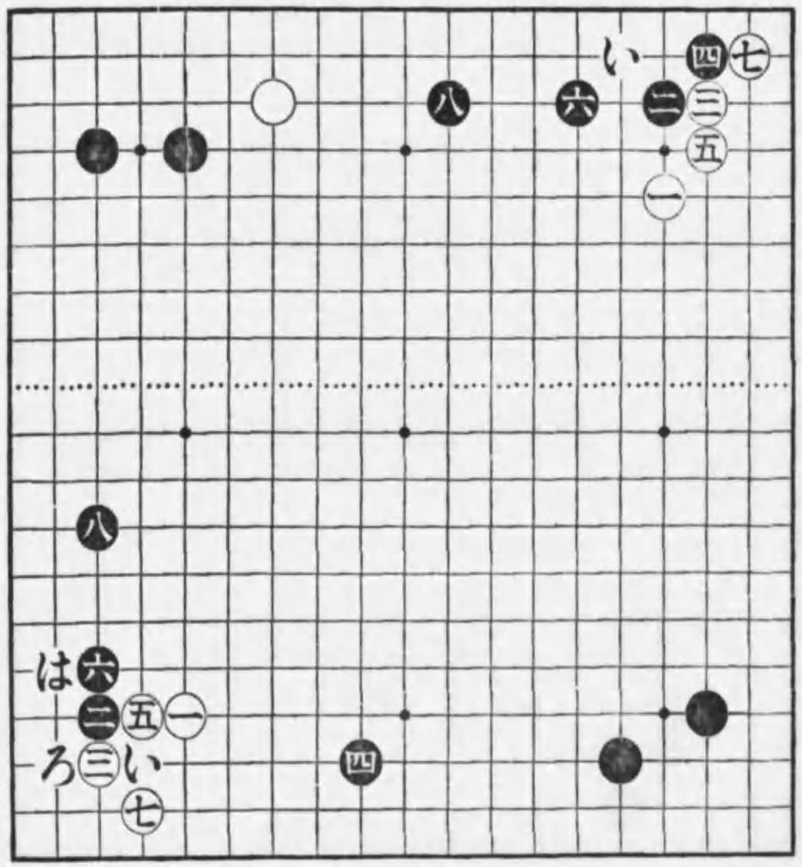
第十七圖　甲

▲第十七圖　續

黑六、斯く中側に一間拆きして白に七と半ば先手形に押へられ、此處に於ける双互の眼形の要點を占められたのは不利で、六は矢張りいに懸粘ぐ前頁の型に據るが宜いのであるが、中側に志ある場合、又は圖の如く白の石を攻むるに兼ねて、八と中側に發展し得る場合等には此型を採つても宜いのである。

▲第十八圖　甲

黑四、白が三と頂けて來た時斯う四と打ち、以下八迄となる型もある。之を手割からいふと最初白一の手を五の星に打ち、黑二白三黑六となりし時いに粘ぐべきを二筋の七に懸粘ぎ、黑八と二拆せし折り、更に爰に一と手數を費して、黑に四と白の拆かんとする方面に先鞭を附せられた譯で、白手割として大分喰つた姿である。併し之を他の一面から見ると、左側黑の三子は二、六の二著が白の堅壁に接觸して居る關係から、全體に於いて薄弱であり、又右側黑四の一著も白の堅きに接近して居て、黑は謂ば離れ〴〵となつているから、單に手割だけから觀て黑が有利であると主張する譯には不可ぬ。其處で如何なる場合に四と打つ型を採れば宜いかと申せば、黑四の手にてろに刎ね結局前圖の如く白に中側へ



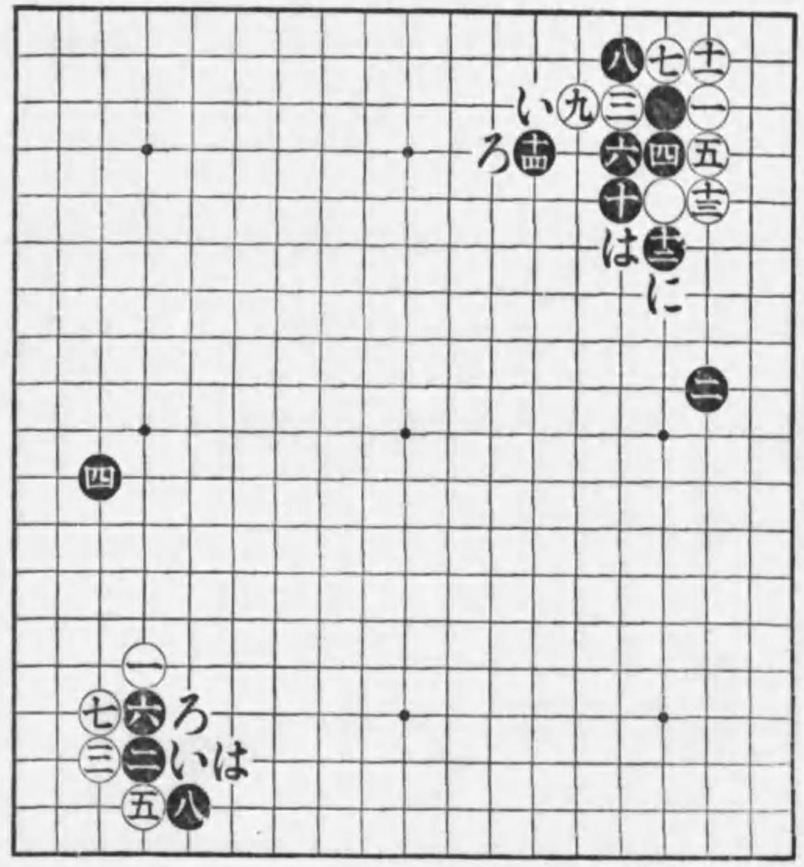
第十七圖の續

第十八圖　甲

發展させる事の不適當な場合とか。又は圖などの如く右下隅に味方の備へがあつて。四の要所に先鞭を附するの好都合である際に本型を採れば働きとなるのである。「但し本隅黑四の時、白五を他に手拔せば、ろに刻ね白い黑はと打つて宜いのである。

乙圖　黑二と打型の良著である事は甲圖に述べた處であるが、黑が二と打つた場合、白必ず甲圖の如く來るものと心得て居ると間違ひが起る、卽ち白は此際三と頂けて打つ嚴しい手段もあるのである、而し之は無理とされて居るので、黑は四以下十四迄の手順に依り、白いに張らばろに伸び、隨つて張らば隨つて伸びれば宜い。又白機を見てはに截りなば、にに引いて打つのである、本隅の型を實戰に用ふる場合は、白に三と頂る手段ある事を留意すべきである。

丙圖　黑四の時白五と下から刻るもある。然らば黑は六に突張つて八に押へ、白いに截らばろに伸びて、乙圖の姿に戻すべきである。但し黑六を若しいに引いたならば白八黑は白七となつて黑陷りである。尙ほ白五と刻ねた場合、更に手拔するも佳い。

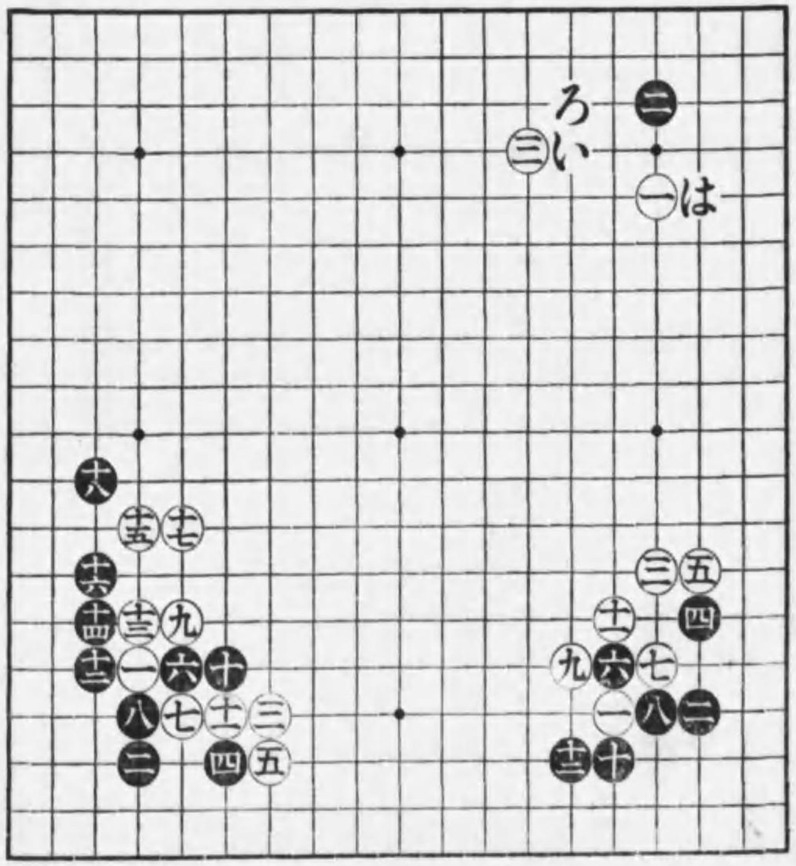


▲第十九圖　甲

白三、場合に依つては普通のいに浴せないで斯う緩るりと掛けて打もある。是に對して黑の打方は、ろに飛ぶ手と白三をいに浴せた際に用ふるはに頂ける型と、今一ッは爰を手拔する三通りの受方がある。

乙隅　黑四と飛ぶ手は直接二子の力で白に押へ込まれる手であるから、此型はよくないのである。ソコで黑は四と打つた關係上六以下十二迄となり、黑は隅にカナリの地域を得たものゝ、白三黑四と交換した損害と六の一子を四目に打拔かれた一大不利益とは隅の利を以ては償へない、普通の場合本型は黑不利なのである。

丙隅　白九は常用の良手である、黑十先づ打拔を凌ぎ以下十八迄と打つたのは良い手段である、本型は六、十の石に逃げが殘つて居るだけ、乙隅四ッ目に打拔かれたに比べて幾らか優つては居るが、何分黑には四、六、十と三着の所謂腐りが出て居るから、斯う成つても尙ほ幾分黑が惡いのである。



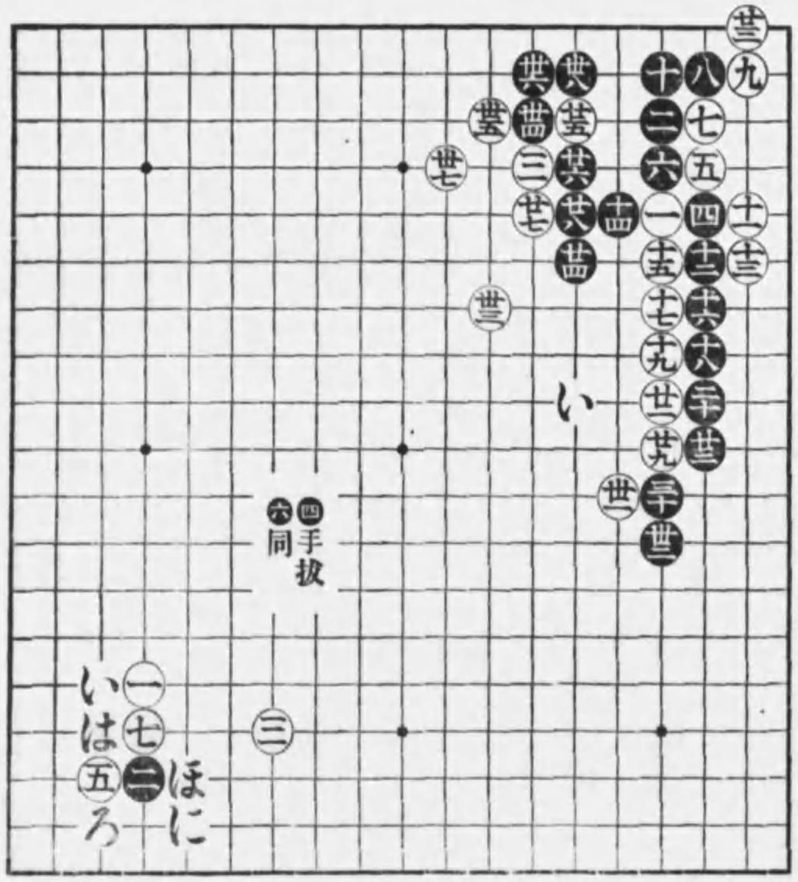
第十九圖

▲第二十圖　甲

黑四と頂け以下十三迄の運びを採つたのは既掲白三を二六に斜走掛けした場合述べたのと同じ理由である。黑十四は自家の左右を防ぐと共に、自然に根據點である第三線を占めつゝ上下の白に攻擊を加へた常用の佳著である。然るに初心者は白三を二六に斜走掛けした型と混同して、十六に伸びるは屢見受くる處であるが、之は白に十四と引かれて、二以下の黑出路無ければ極めて不利である。

黑二四は中原に進展しつゝ、兼ねて左右の白に攻めを氣構えた著である。續いて二六、二八は愚形の如くであるが、此場合では良いので、總べて斯うした際は形の如何に拘らず敵に當りつゝ連絡することが肝要である。

白二九の押しは黑に的確の根據と實質を與へるもので本來感心せぬ手である。斯くて黑三八迄の結果、白は中腹に勢威を得たのであるが、而も夫れは薄弱なものであるに引替へ、黑は右側に實質を占めて居るから、本型は從來の說の如く白不利たるを免かれぬのである。但し本型を實戰に用ふるとすれば、二九は之を**い**の飛びに換ふる事を工夫すべく、亦一旦二九、三一と運びたる上は、三三を三五に懸粘いで戰ふ意匠を案ずべきである。

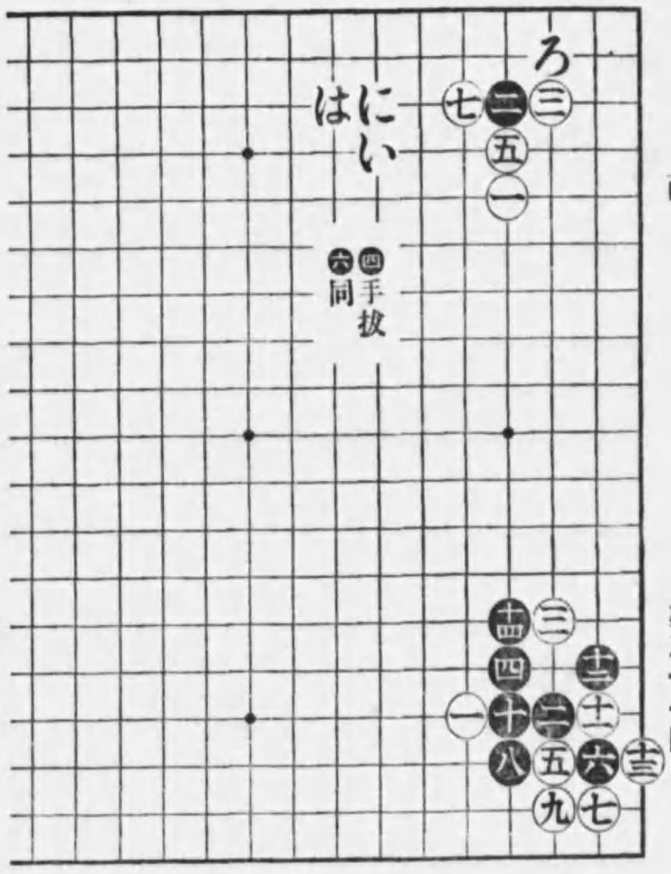


第二十圖　甲

乙

乙圖　白三の大斜走掛けに對しては**い**に頂ける甲隅の型を採つて宜いのであるが、更に間違のない方法は爰を手抜するにある、而して白五と頂けなば、**ろ**に刎ね白は黑**に**と打つて活を得る手段を保留して、モ一ッ手抜し、白更に七と突張つたらば此度は機を見て**ほ**に伸び、而して此二子を利用する手段を含むで、他の要所に就けば宜いのである。本隅の手段と利害は丙圖に述べよう。

丙圖　白三の時黑は之に應じないで手抜する型がある。「實戰に當つては手抜して他の要所に就く方寧ろ宜い場合が多い。」而して白五と突張りし時、黑は七の處に行びるもあれど更に手抜し、圖の如く白に七と提りキラせて尙ほ且つ手割上黑に不利がないのである。然るに乙隅では白七の一著が**い**にあるので、未だ二の黑は活動力が殘つて居る、そこで他日黑が七に行びれば、普通**ろ**に應じなければならぬ、由つて黑は**は**に打て之を利用するもあれば、場合の如何で烈しく**に**に頂けて打つもあるべく、其他樣々に之を利用する、手段が殘つて居る、されば前隅は本隅に比べて手殘りになつて居るだけ白が惡いので、隨つて前隅黑四の時之を手抜するは當を得た手段と云ふ可である。



第二十一圖

丙

▲第二十一圖

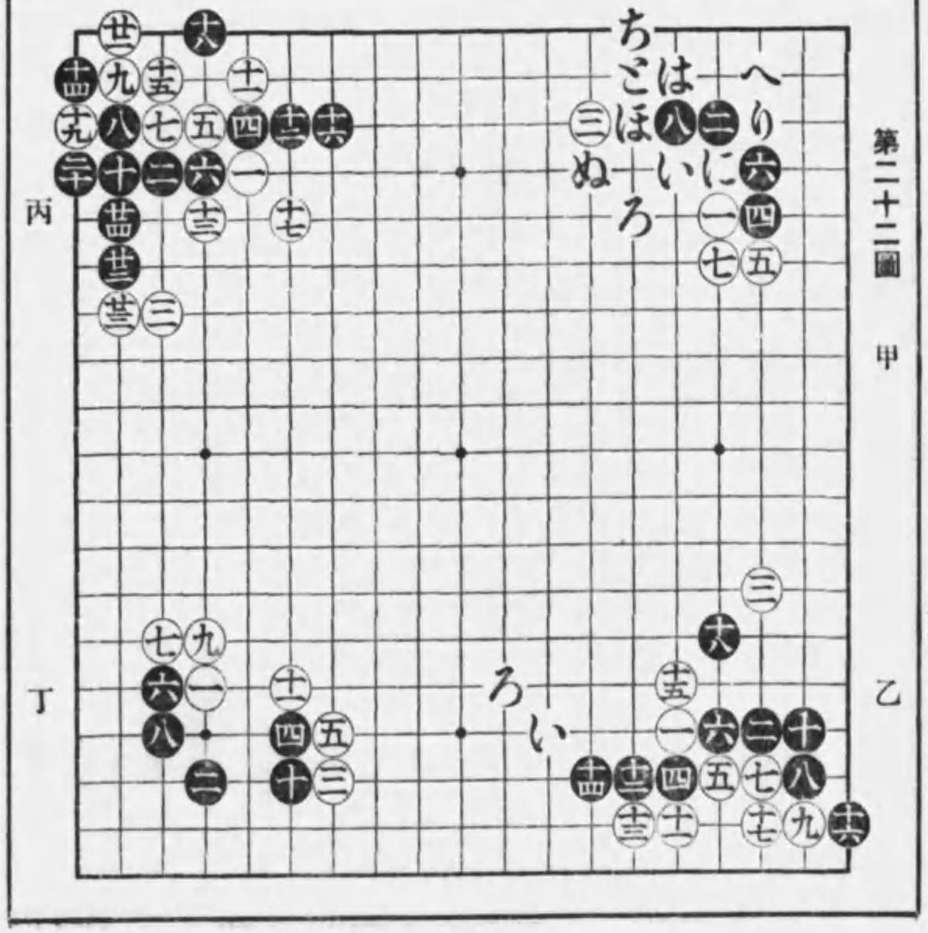
白三、五、七は無理手段で、黑に圖の如く運ばれては隅に少活を得て勢を外に失つたもので、白の不利なる事申す迄も無い、但し白七を八に引けば十二に懸粘ぐか、又は十四に押して宜いのである。「第二十五頁參照」

▲第二十二圖　甲

白三は普通無理手となつて居る、黒四、六に頂け引き、次に八と並んだのは好い手段であつて、斯く應戰されては白些かも得る處が無いのである、但し黒八は良著ではあるが實戰に當つては必ずしも茲に備ふべきでない、之を**い**に尖み否應なく白に**ろ**と掛けしめて手拔するもあり、又は全々打棄てゝ他點に就き、白八に頂けなば**は**に刎ね、白に黒**ほ**と打ち、白**い**に粘がば**へ**に掛け粘ぎ、白**と**黒**ち**と打つて更に他點に就いてよく、又黒**ほ**の時白**り**に截らば**い**に提り、白**へ**黒**ぬ**となつて是亦黒がよいのである、要するに黒は八と備ふるに非らざれば爰を手拔するのが利益なのである。

乙隅　白五始めに三と打つたのは此所で五と刎ね出そうといふ意匠なのであるが、併し之は無理であつて、黒十八迄の結果既揭五と刎ね出した何れの定石に比較するも白不利なのである。「理由は**い**、**ろ**に黒の利きある場所にあつて、三と一、十五の石が例の遮斷を弊けて居るからである。」但し黒十六の刎ねは之を保留して直に十八に出動するも良いのである。

丙隅　白十三は後ち黒の十六に對して十七と征を防がねばならぬ場合にあつては無理な手



第二十二圖　甲

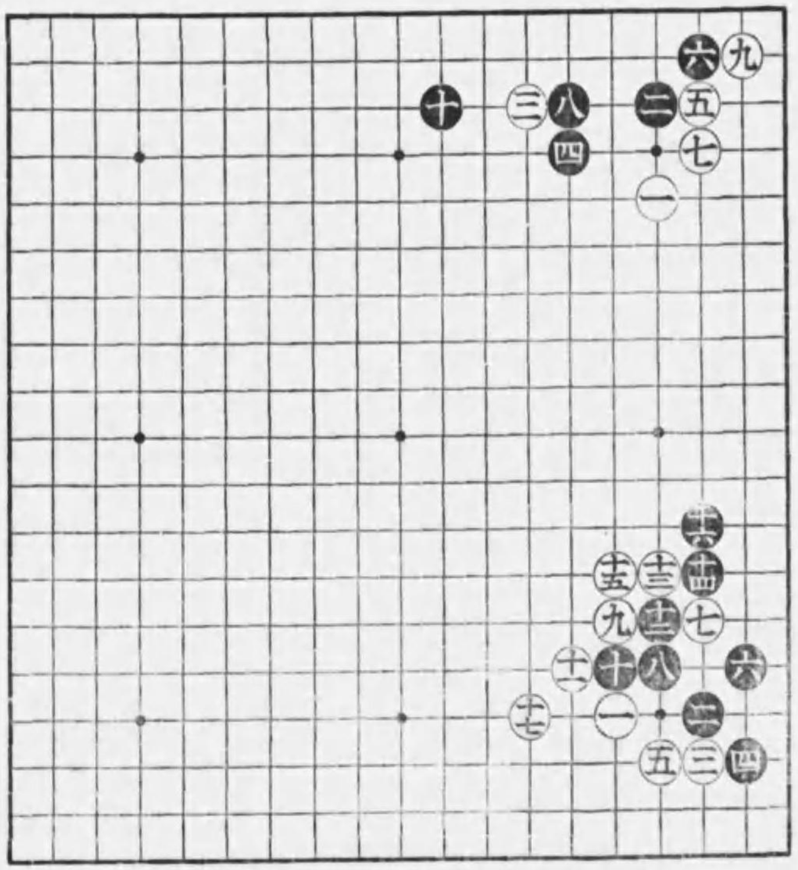
で黒に十四以下二四迄の單純な手順に據られて尙ほ圖の如く白敗戰に終るのである。

丁隅　黒四、丙隅に述べた征が白有利な場合で、而も邊りの形勢が白優勢である場合は、圖の如く四の一著を下し置て白よりする刎ね出しを防ぎ、而して六、八と頂け引き、次いで十と押へ込むで黒よいのである。何故なれば白三の時黒直に六、八と頂け引き、而して十と附けたりとせむに、其時白は四に刎ねて普通の高目定石に打つべきを、五と緩め黒に四と押された手割となるからである。

戊隅　黒四の時白若し五と頂けて來たならば六に刎ねて、八に押へ込み、白九黒十となつて宜いのである。

補遺　第二十三圖

白七、黒六の時直に七と打ち、次いで九と掛ける手は定石ではあるが無理であつて、黒より十以下十六と運ばるれば、白は何の代償も無く、七の一子を犧牲にしたものとなるから白不利なのである。



補遺　第二十三圖

高目定石は前圖を以て打切の豫定であつた處神戸の渡邊生君、東都のいろは生君から高目定石に就いて質問があつた。

質問第一圖　高目に向つて圖の如く二と懸るのは有る型ではあるが、之は場合定石と云ふのであつて、一隅の定石として此型を用ふるは黑不利なのである。然らばどう云ふ場合に此定石を用ふるかと申せば、白がい若しくはろなどに更に一著ある場合に用ふるので、さすればい若しくばろにある白が詰らぬ處に打つた譯になるから斯した場合は圖の如く二と懸るのが宜いのである。尙ほ黑十六は定石ではあるが、は、にの截り味を含まれて味が惡いばかりでなく、敵に劫材を與へる關係もあり旁た、黑十六の下りは之をはの粘ぎに換へる方がよい。十六の下りに比ぶれば幾分損失ではあるが、後の活動が十分に利くからである。廻つて白三をほに頂けたならば、黑換つて三に頂け、十五の渡りと四の割込みとの兩睨みに打ば白閉口するのである。

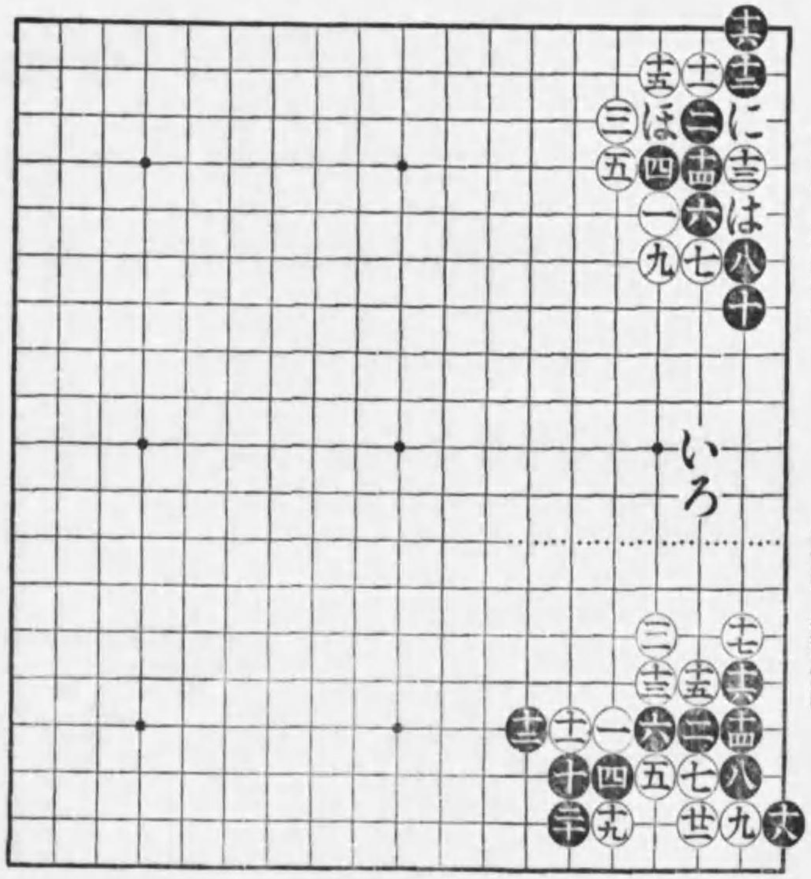
質問第二圖　白十一の押しは無理である、然るに圖の結果となつたのは、黑十二の刎ねが惡いからである、甲圖以下の如く打てばよいのである。

甲圖　此定石は第十四頁丙圖に掲げた如く、白十一を十二に截らばいに當てゝ後、ろに征に掛ける型である。然るに白が十一と押したのであるから、黑又白の打點である十二に粘げばよい道理で、二四迄の振り換りとなつて白不利である。「白甚だ味が惡いからである」。

乙圖　白十七、正著であるが之は黑に十八以下劫爭に出られて矢張り白が不味いのである。

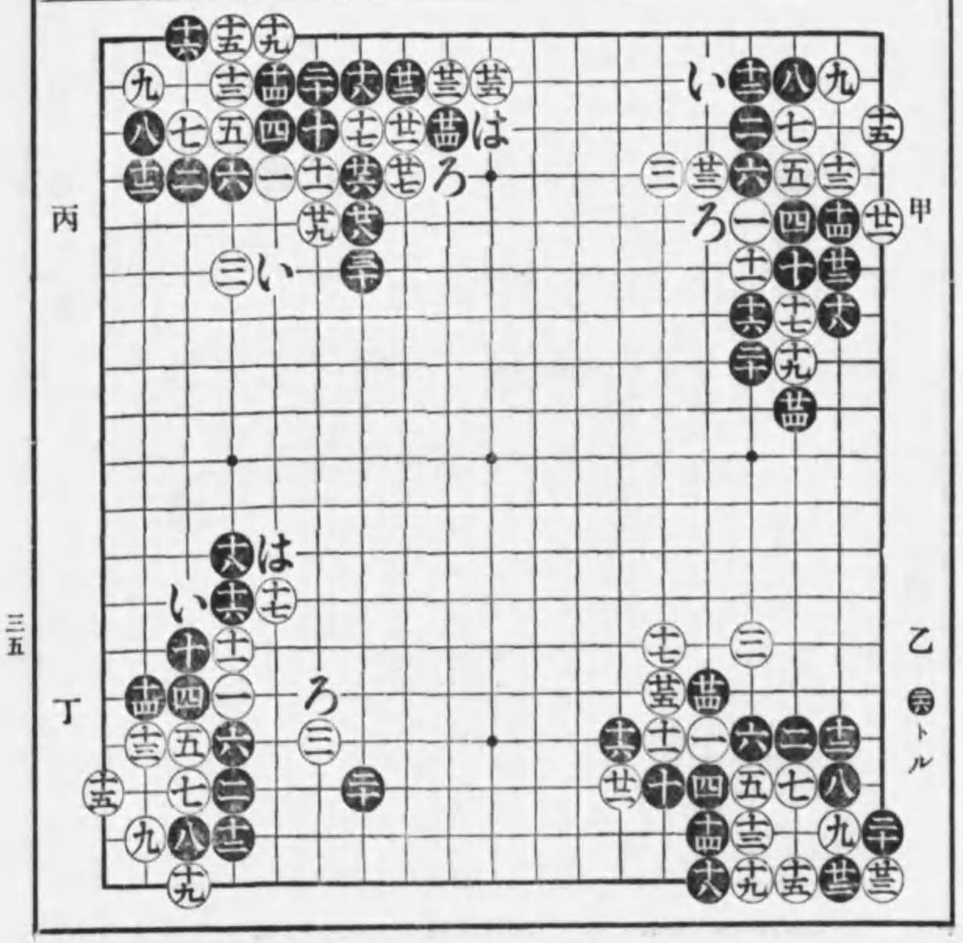
丙圖　白十五は無理であつて、黑三十迄となりいの頂けとろの征の兩睨みにて白潰れとなるのである。但し征の關係に依つては、黑三十を以て之をはに押して白を提る手段もある。

丁圖　白十七と刎ねていの截りを療したのでは最早種なしの姿で、黑二十迄となつて之又白が惡いのである。但し之が實戰に出來たならば、黑はろの頂けとはに折り曲る手筋を含むべきである。



質問　第一圖

質問　第二圖

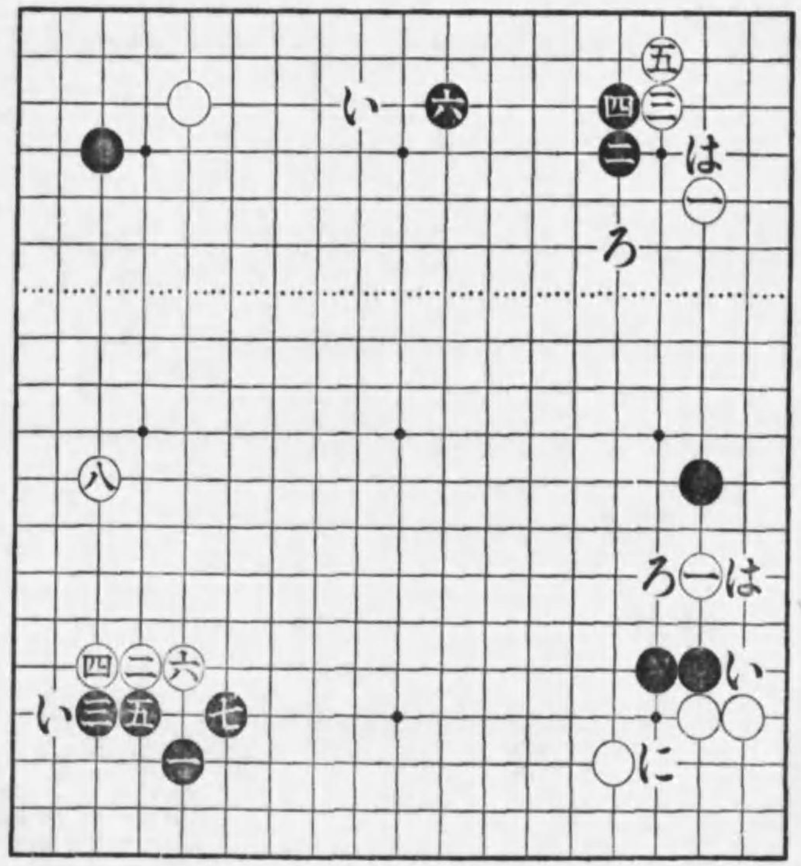


目外の部

▲第一圖

（斜目定石――モクメハヅシ）　白一の目外しは隅の根據（三の所）を敵に讓つて中側に發展すべく構へた手である、而も黑之を嫌つて二に懸れば白代つて隅に實利を占やうと云ふのである、（互先布石正法第三頁參照）黑二、隅の主點である三の懸りを措いて斯う二と懸るのは本來を云へば不利であるが、左側の發展を目的とする場合は圖の如く二と懸るのが宜いのである。黑六一隅の定石としては當然爰に拆くべきだが、若し左上隅に圖の如く黑白が位置して居る場合であつたならば、黑六は之を拆きと挾みとを兼ぬるいに拆き詰すべきである、尙ほ既にいに黑の一著がある場合、圖の如く二に懸り白五迄となれば、六の一著をろに飛び、而してはに頂け出して外部を封鎖する手段を覘ふ可である。尙ほ黑六は布石の場合如何に依つて此處を手拔するも宜いのである。

第一參考圖　第一圖に於ける黑六の定石は、或る機會に圖の如く白に一と打込まれる手筋が殘つて居る事を承知して居らねば不可ぬ、



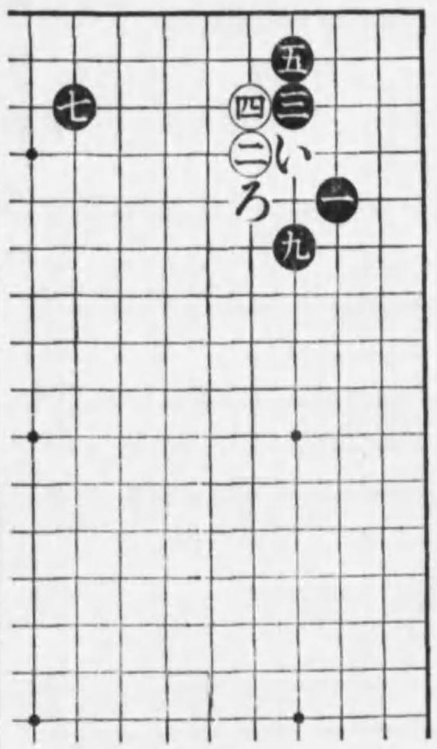
第二圖　　目外　第一圖　　第一參考圖

之に對する黑の應手として此處だけに就て云へば、い、ろ、はの三通りある。其内尤も嚴しいのはいに押へてにの頂け出しとろの頂け出しとの兩睨みに打つ手である。そこで若しいの押へ込みが不適當の場合であつたならば、ろに頂けて打つが宜く、更にろの頂けも面白く無い場合ははに附けて宜いのである。而も之が尙ほ面白くない場合であれば、全然隅の二子を放棄して宜いのである。

▲第二圖

黑五、此定石には爰で第一圖の如くいに下る手と、圖の如く五と押す手との二通りある、いに下る手は位置の惡い二の筋であり、直接白にも響かず又定まりも付かぬ謂ば手緩い定石である。之に反して五に押して七に尖む手は曾に嚴しい許りでなく形に定まりが付く上にいに比べて、中側の發展に一著の利がある。而も五、六の交換に依つて白を重からしめて居るから、黑が五の手をいに下つた時と事變りて、白は手拔きの自由が利かず、大抵の場合直に圖の如く八に一著を備へねばならぬ、五と赶す手は以上の利がある。依りて形ちの定まるを忌む白としては五の手をいに下る方手廣くて宜いのであるが利害の反する黑としては譜の如く五と赶すが宜いのである。名人秀榮晩年頃迄は、いに下る舊來の型が流行して居たが、一度著者（當時三段）が前述の理由から大抵の局面に、本圖五と赶す型を用ひて以來、今日ではいに下る型は餘り流行なくなつたのである。尙ほ五に赶す手といに下る手との利害の一例を參考圖に於て述べよう。

第二參考圖　實戰に當つて白六を手拔すれば黑は白の備ふべき七の點に攻擊してゆくのが普通の型である。そこで白が復た手拔したならば、黑は更に九に尖むで此白に迫る事亦た定型である。そこで假に黑一、三、七、九、白二、四となつて居る場合とせば、黑は此時五と下つて後手を引くか、又は白にろと受けさせる條件付でいに押して、次手を任意の點に下すかの兩樣であるが、而も後者の優つて居る事は論を俟たない處である然らば始め五と下る手はいに赶す方、多くの場合利勢であるべき道理である。



第二　參考圖

▲第三圖　甲

白三、前圖の如くいに應じないで斯う打つもある、而し之は黒に四と刎られたとしても直接の爭ひは、白は三の一勢子黒は二、四の二勢子であるから普通としては、一旦五に退却せねばならぬ不利があるのであり、更に黒には四の手でろに割込む嚴しい手段もあり旁た、白三と頂ける型は普通の場合に用ひるのは宜くない事となつて居る。黒八ははの截りと隅の固めとを兼ねた手であるが、之を以てにに懸粘ぐも場合に依つてあるべき構へである。

乙隅　黒八、斯う打つた碁もあるが之は矢張り甲隅に依るべきである。黒八の策戰は斯くして白にいと刎ねさせてろに掛粘うと云ふのである。斯くなればは點に駄目を殘して居るだけ、第四甲隅の良型に比べて黒一層働くからである。白九は黒八の意匠を裏切つた良著である。黒十、之を十一に當てれば白十、黒十二白にとなつて打つ手がない、そこで圖の如く十、十二と張つたのであるが、斯くては四の一著が犧牲の姿になるから、本隅は黒面白くないのである。

丙隅　白五と截り違ふ型は本來無理手となつて居る、黒六は味方の多い方に引く截違ひ定法に據つた手である。黒十六佳著である、「但し是を直に十八に刎ね打つて可なる場合あり、」本型は黒には姿に些の亂れなく、之に反して白は左側が重復の形崩れになつて居る上に、九の一著が痛みになつて居る、夫れだけ白無理の姿である。

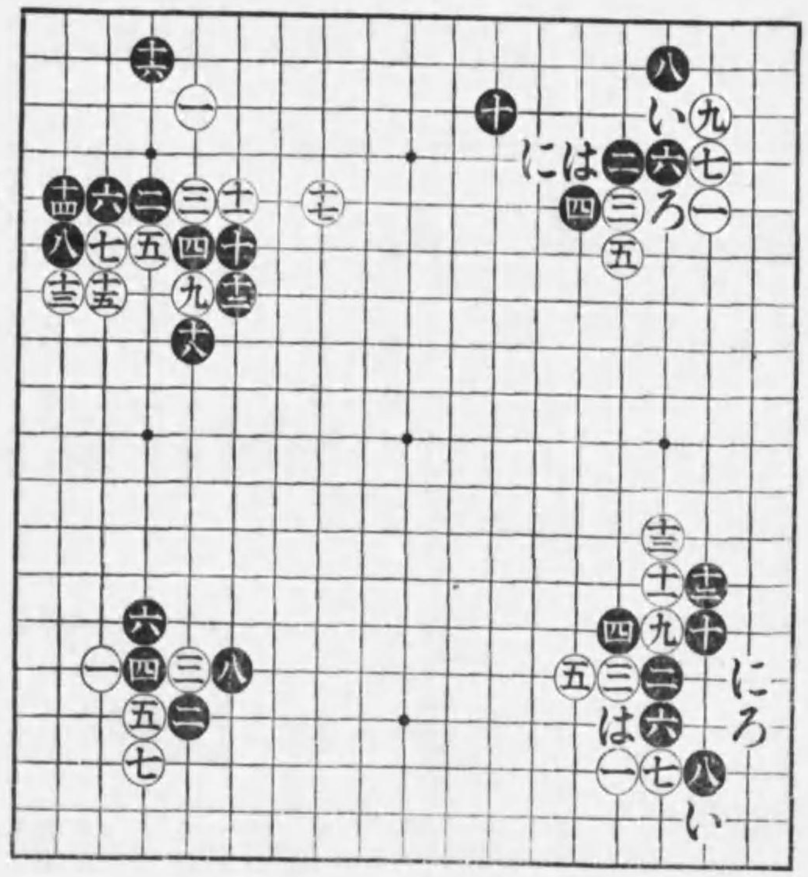
參考圖　黒四、白三の一著が征に懸る場合は嚴しく圖の如く四に刎込むを一層働きある手段とされて居る。依つて白三の頂けに對しては征の不利な場合は甲隅の如く打つべく征の有利な場合は圖の如く四に割込むで打つべきである。

▲第四圖　甲

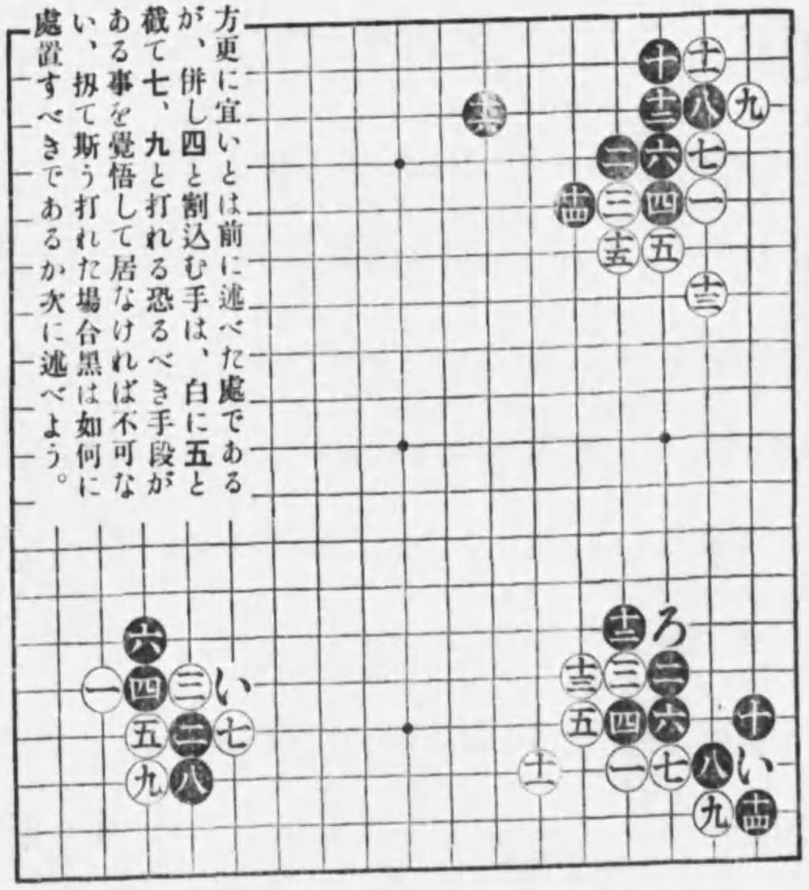
白五、征が不利な場合は五以下圖の如く運ぶが定石となつて居る、而も本隅は始に黒に四と割込まれて一、三の石を裂かれた事は白の痛手で、白は爲に生じた截手に備へて居る隙に、黒に充分の姿を得られた形勢である。

乙隅　白十一、甲圖の如くいの當を加へないで、後に生ずるろの截れ手を狙つて直に十一に掛粘ぐもある。然らば黒は一著十二に當て、次に圖の如く十四に押込んで居て之亦黒十分の姿なのである。

丙隅　黒四、斯手は征の不利な場合はいにすべく、征の有利な場合は圖の如く四に刎込む方更に宜いとは前に述べた處であるが、併し四と割込む手は、白に五と截て七、九と打れる恐るべき手段がある事を覺悟して居なければ不可ない、扨て斯う打れた場合黒は如何に處置すべきであるか次に述べよう。



第三圖　甲圖



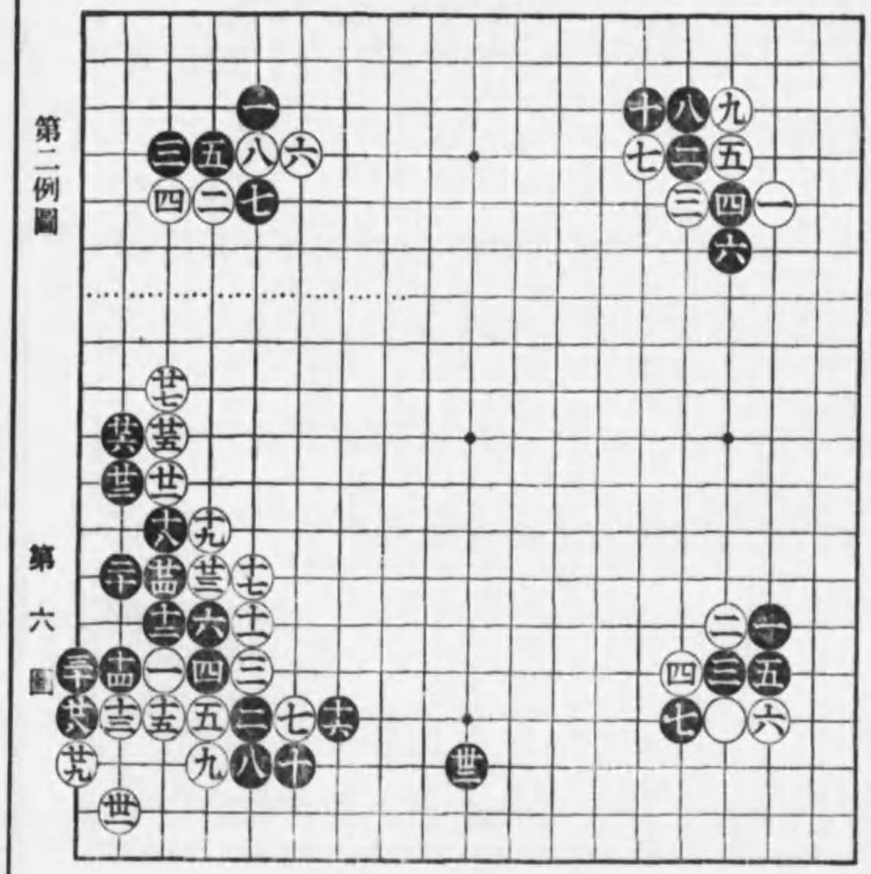
第四圖　甲

▲第五圖

白五黑四の割込みに對して白征に不利な場合、五と截り而して九と打つて戰ひを挑むのは本來無理手段であつて、定石には此時圖の如く十と曲つて、黑が宜いとなつて居る。理由は一、三が例の裂れ手になつて居るのと、結果に於ける白七黑十の交換が白無理筋になつて居るからである。尙ほ本型は之を頂定石の割込みを參照しても白の無理である事は明らかである、卽ち一例圖に於ける黑三の割込みに對して白四と上より押へ、次いで六と押へ込むは、黑に七と截られて白が惡いとなつて居る。本型は之と同一型であるから黑十迄となつて白が惡いと云ふのである。

尙ほ第二例圖の如く白は黑五に對して、場合如何で六と掛け、黑七白八と戰つて擲つ型もある位ひだから、本圖に於ける十迄となれば此末如何に變化するも、黑有利な譯であると云ふのである。

黑十は定石の理由の如く、斯う曲つて居て無論宜かるべき道理であるが、而も之は相當難かしくなる覺悟を要する而已ならず、一步誤れば場合の如何に係らず、却つて黑の大失敗に歸するやも計り難い事をも併せて覺悟せねば不可ぬのである、而も著者の研究に依れば黑十にて簡單明瞭に捌く方法がある、夫れは第十三圖甲圖參照。

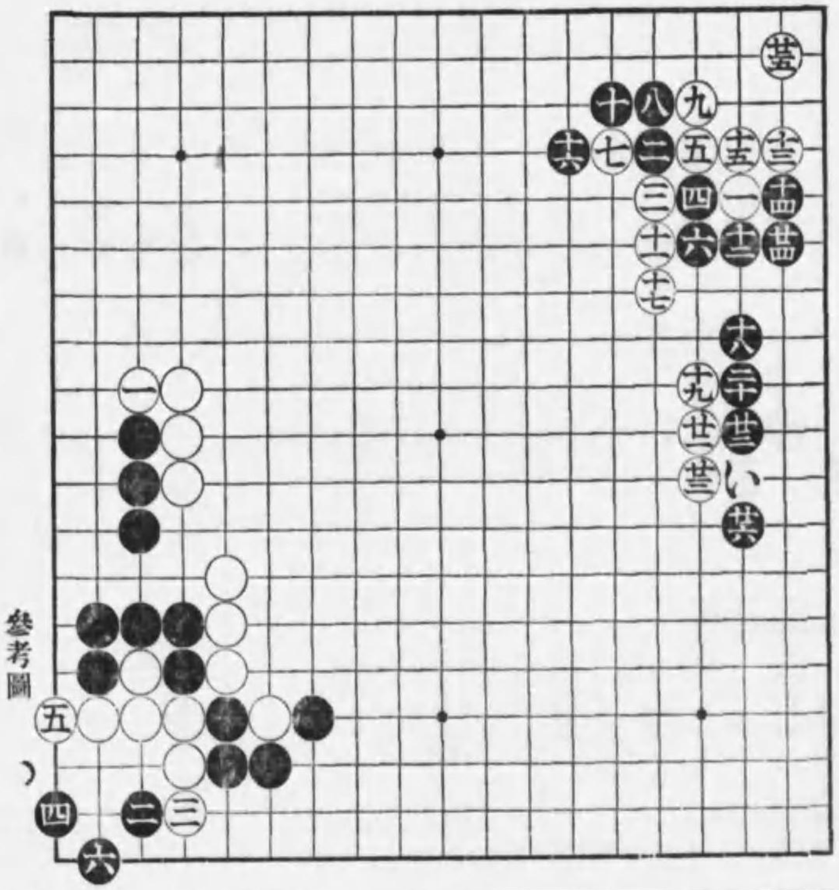


▲第六圖

さて黑十迄となつた時、白十一は他に十六と伸びて打つもある。黑十六は全く白七の活動を制した手である。白十七の伸びは正著なれど稍々手緩き觀あると十九の尖み頂けが黑に好便に二十に掛粘がしむる憾みがあるので、斯くては三二迄となつて黑有利である。白の中腹に收めたる勢力に比して黑は下側により以上の實質を占めて居るからである。

▲第七圖

黑二二以下好手順であつて、二六迄となつては、白は七の失手があるだけに形勢黑有利である。尙ほ白二五は之をいに押へ込みたいのであるが、斯くては參考圖の如くなつて白潰れとなるのである。溯つて白二三を難しくいに押へる手もある。其變化は次圖に揭げやう。

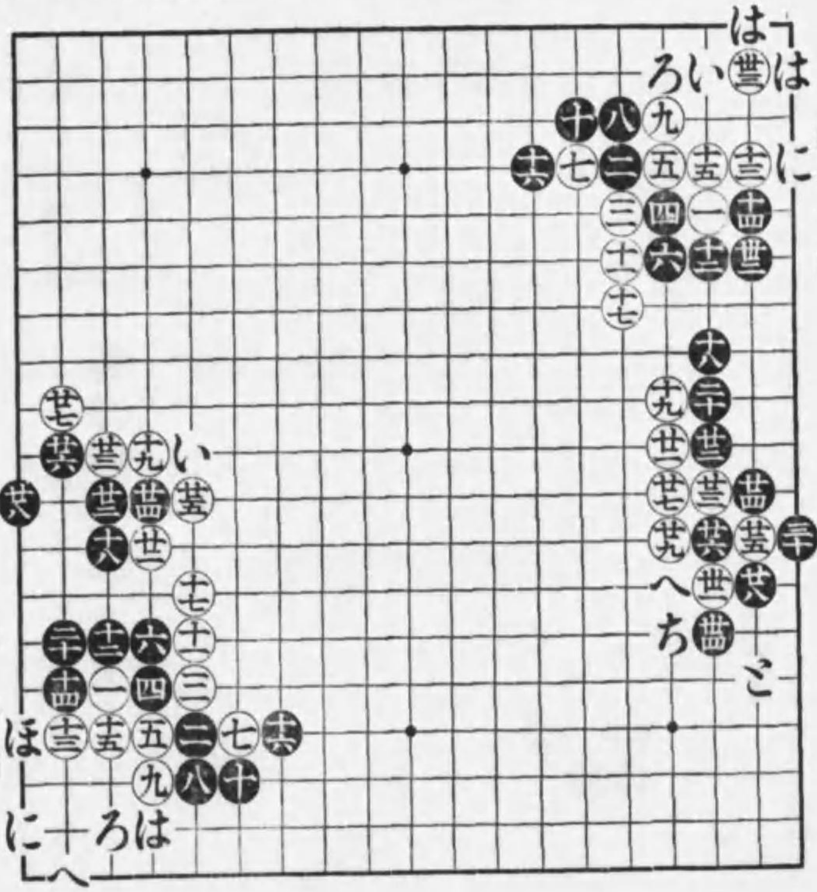


▲第八圖

白二三、二五は嚴しき筋合の手である、黑三十にて三二に粘ぎ白三一の時前圖參考圖に掲げたる如く、いに置き白ろ黑は白に黑ほと打ち、隅の白を生擒して振換るもあれど之は黑不利なり。黑三四の時白劫を提らばへに當て、白二六黑とと打つべく、又白茲にてへに粘がばちに押して打つべく、其孰れとなるも本型は黑有利である。卽ち白には七の一著惡化し居る事と白の得たる勢力を相殺する以上の實質を黑が占めて居るからである。

▲第九圖

白十九は一種の手筋である、黑二十本型は機宜の際二十の粘ぎを利かせ得るや否やかに依りて利害決定する姿である。因つて黑は白十九の幾分緩める際に乘じて、二十の要點に打著したのであつて、黑に斯く腰を据へられては白十九の策戰は半ば碎かれた姿である。白二一は失著で黑に二二以下二八と運ばれては、いの截り手と下隅ろに置きへ迄の符號順に依つて、生擒さるゝとの兩睨みとなつて、白防ぐに道が無いのである。



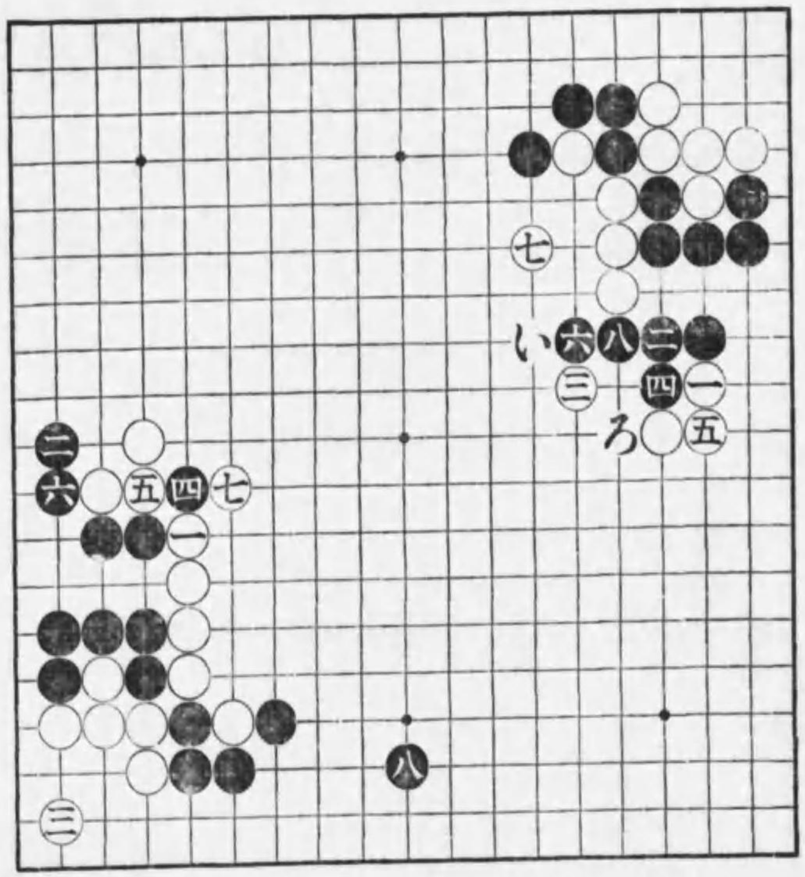
第八圖

第九圖

▲第十圖甲

白一の頂けは嚴しい手である。黑四爰に駄目を押すは苦しき著であるが、此際止むを得ないのである。黑八は筋違ひの如くなれど、茲に在つては良著である。驕つて白七をいに刎ねなばろに逆襲して之に應ずべきである。本型は黑四の一著愚手となり居りて、一見姿た面白からざるに似たれど白には己に當りとなり居る一著ある而已ならず、三の一著と三子連行し居る先端の一著とが例の縱斷の不利を被り居るに加へて、隅の白に前述の取手殘り居れば斯くなりては所謂餘り形で白頗る不味いのである。

乙隅　白一は嚴しき手段なれど、黑に二と輕妙に應ぜらるゝ手段ありて、策戰頓坐せる姿である。黑四と刎ね此一子を棄てゝ先手に此處を治め、征の味を保留して一轉八と下側に備へたのは輕妙なる捌きで、白頗る不利なる形勢である。『溯つて黑二の時白六に突出せば、五に當て込む事言ふ迄も無く、又白五の手を七に刎ねなば黑代つて五に粘ぐ事、之亦申迄も無き所である。』



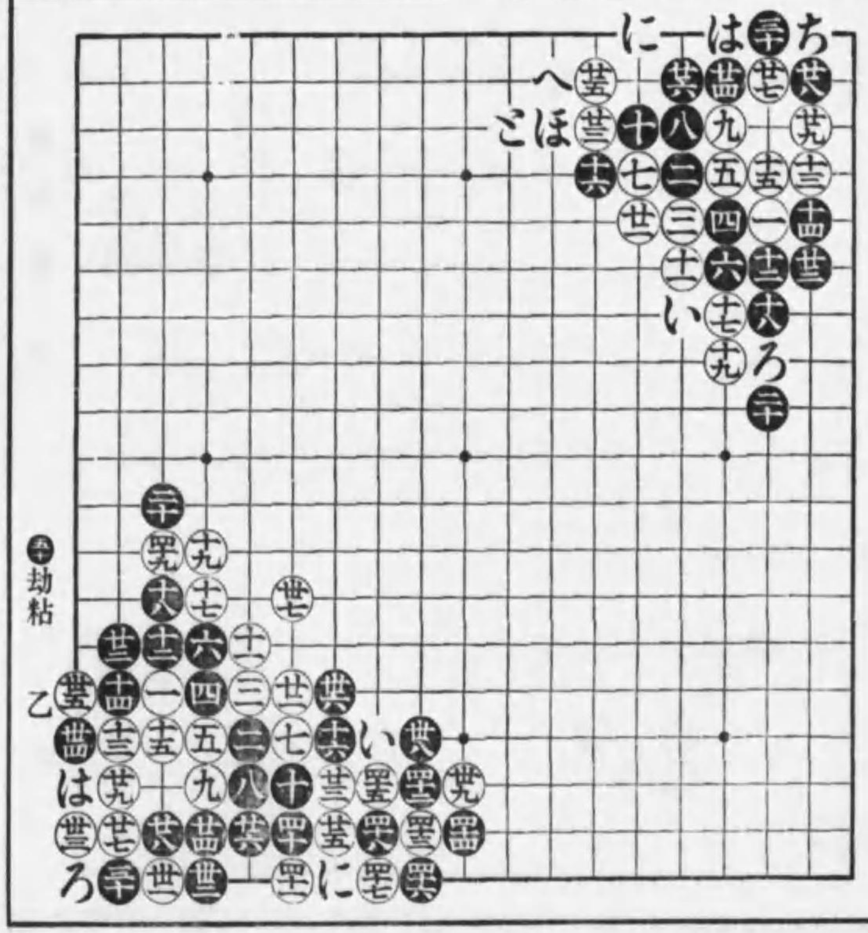
第十圖甲

乙

▲第十一圖　甲

白十七、嚴しい手であるが、いに截れ手を生じての仕事として、無理たるを免がれぬ手筋である。黒十八、理想としては之を二二に粘ぎ白いの時二十と運びたいのであるが、斯く打つは白に十八と約へ込まれて防ぎが無い、依つて幾分かの筋違ひを忍んで十八、二十と打つたのである。白二一と粘ぎ、二三の截手を威嚇して實はろの突出しを狙つたのに對して、黒二二と粘いで手強く凌いだのは佳著である。白二三の截りは無理であつて、黒に二四以下三十迄の手順に依られては、申す迄も無く本隅白敗戰の姿である。尙ほ白二五を以て二七に抑ふるも、黒は二六に粘ぎ其時白は、にの孰れに打つとするも、二五に綽ぬ白ほ黒へ白ととなる時、二八に頂け白二九ならばちに下つて宜いのである。

乙隅　白二七以下三五迄甲隅に比して更に無理を行くものである。其結果黒五十迄となりて白大失敗に終つたのである。何故なれば此隅白先著で立つたのが爰で後手になり、加ふるに地域勢力に於いて白さして優るものが無いからである。溯つて白三三にていに當なば三五に下り白ろに打込めばはに頂けるべく、又白はならばろに伸びて宜いのである。尙白



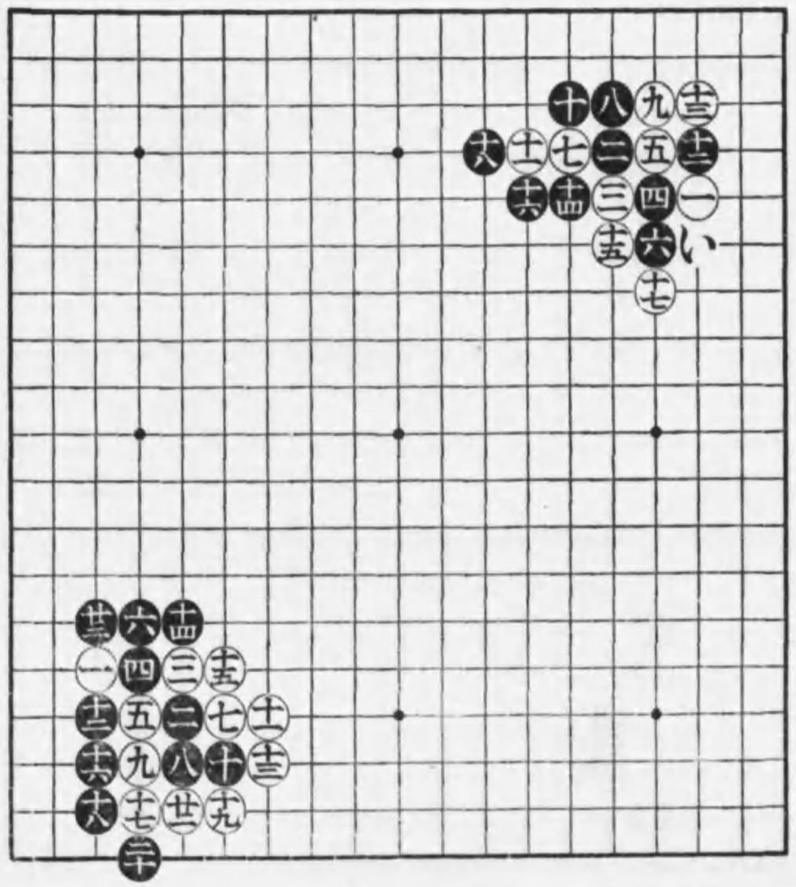
第十一圖　甲

三九の手を以て四三に飛ぶも黒は矢張り圖の如く四十に打ち、白四一黒四四と打つて宜いのである。其時白にに粘ぐも四五に打ち、白四八黒四二と應ずれば白は左右孰れよりも入れぬ手となるからである。

▲第十二圖　甲

白十一、之を十五に押すは前圖十四迄の手順に出たる後ち本圖十一の所に綽ねられ七の一著惡化するの結果白面白く白く無いソコデ十一に伸びを試みたのである。黒十二は妙著であつて十八迄の結果白不利の形勢である。理由は白は黒にいと伸出して死石を利用さるるを防ぐ爲に、茲で後手を忍んでいに打拔いて居なければならぬ、さすれば此隅先著であつた白は茲で後手となり、而も地域に勢力に其割合に黒に優つて居ないから、白として感心の出來ぬ振替りなのである。

乙隅　白十三は惡手であつて、黒に三子を棄てゝ十四以下二二迄の手順に據られると、白は三子を獲て尙ほ重復の姿となり、一子を擒して居る、黒の方遙かに優勢の姿となるのである。



第十二圖　甲

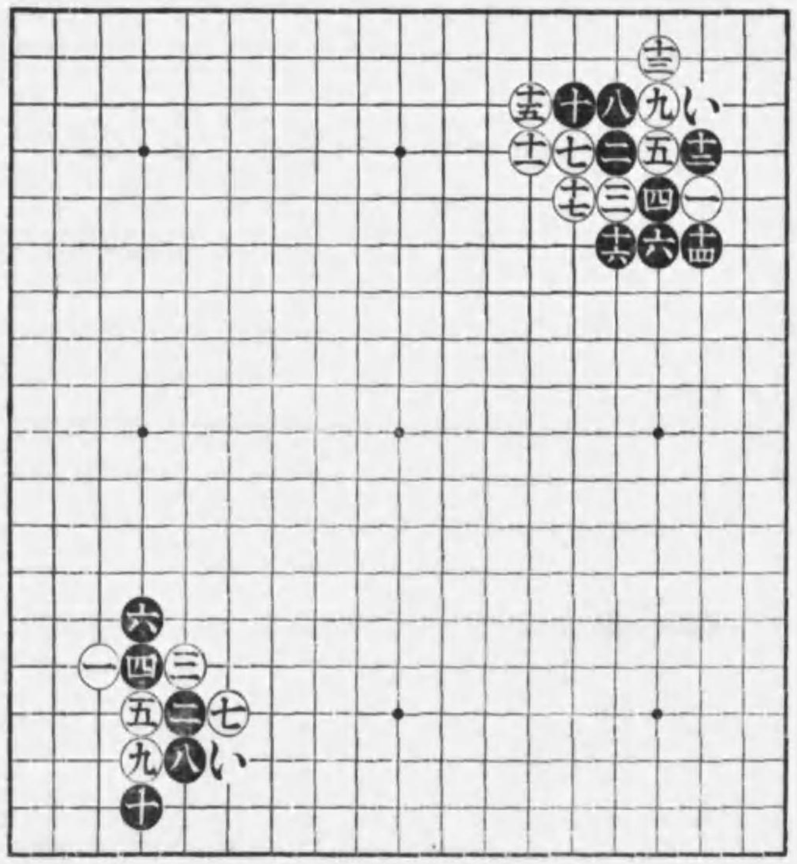
▲第十二圖　丙

白十三は矢張り前頁甲圖の如くいに應ずるよりないので、圖の如くなりては黒の三子は之を生擒したものゝ、重復した取り方である上に、此隅先著で立つた白が後手になるのだから、此振替りは白慘々な譯なのである。

▲第十三圖　甲

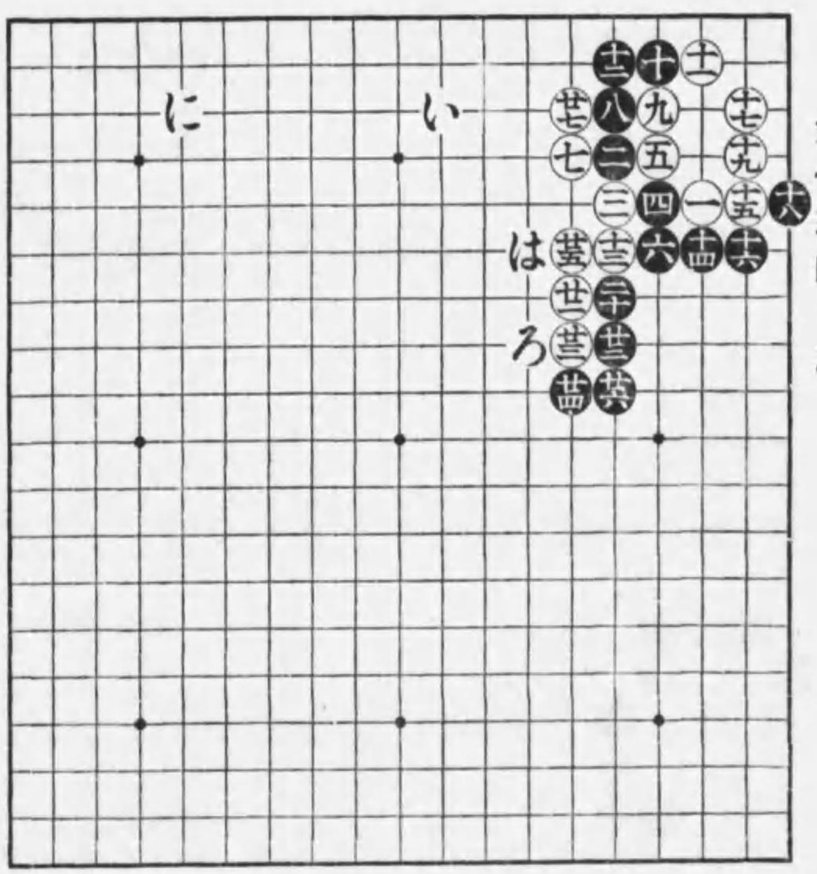
黒十、爰でいに曲る定石を打つには今迄述べたような非常に複雜な變化を心得て居ねばならぬ而已ならず、場合の如何で黒頗る危ふい、然るに著者の研究になつた圖の十と綽ねる新手は、何の混雜も無く、又形勢の如何にもさして影響を被むらずに簡單明瞭に爰を捌く事が出來るのである。以下の手順は乙圖に示そう。

乙圖　黒に十と綽ねられると、白は普通十一と約へて十三に押より無く、其時黒に十四と曲らるれば否や應なく十九迄となり。更に黒に二十と綽ねられ、二六と粘がれると白は之亦圖の如く應ずる外無い、黒十と綽ねた最初の目的は斯うして、二以下の四子を棄てゝ爰を捌かうと云ふ策戰に成つた手である。さて白二七迄となつて、一見すれば白は黒の四子を得て大いに利を得て居るかの如くに見へるが、之を手割から云ふと決してウソでないのである。假に黒二以下の四子を除き、而して白の九、十一、十九、二七の四子を除くとする、ソーなると黒十八白十七の交換になつて居る事は黒甚だ不利であるが、白二五の一著は丸遊びとなつて居るのだから、十八の失を相殺して餘りあるのであつて、ソウした姿として之を見るも、本隅は黒さして損失は無いのである。況んや黒二以下の四子と白九、十一、十九、二七の四著づゝの交換は黒に非常の利益がある。一例を擧げれば黒は二以下の生擒された石を利用してい邊に先手に一著を下し得る利もあれば、場合に依りては、ピンとろに綽ねてはに頂け手を狙ふ利手も打てるのであるから、本隅は斯くの如くなつて黒に利あればとて、決して不利は無い姿である。更に之が實戰に出來たものとして述べんに、始め先著を布いた一著と、白が爰で二七に後手を引いた際任意の要點に更に一著打るから、「此場合で言へば左上隅にの處」斯くなつて形勢黒に有利なる事は明らかな次第である。



第十二圖　丙

第十三圖　甲

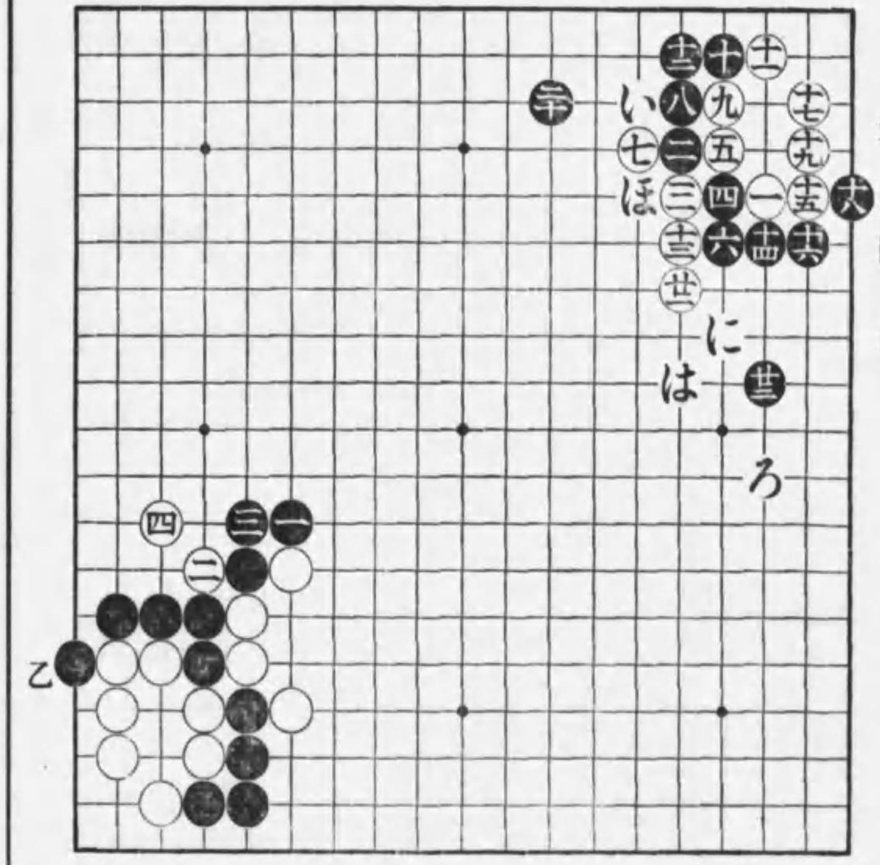


第十三圖　乙

▲質問圖　甲

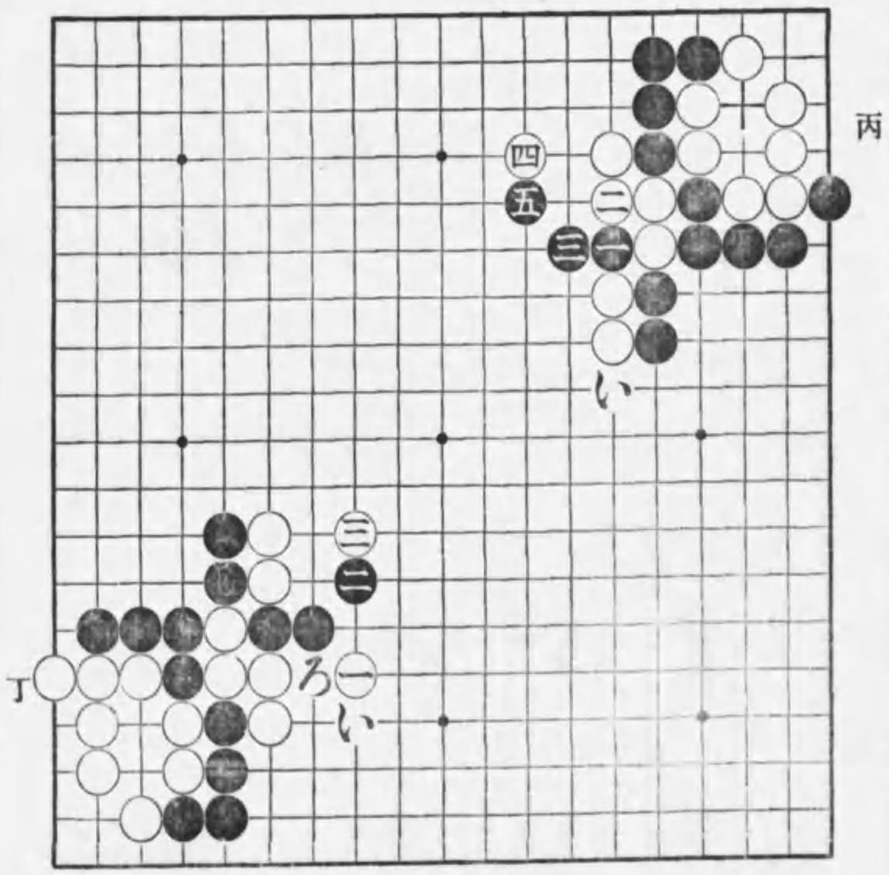
前圖第十三圖新型に就いて大分質問が來た、以下述べる處に依つて回答に代へる、黑二十は矢張り二一に刎ねなければ不可ぬ、大體黑十、十二と打つた手は之を棄てゝ右側に勢力を得やうと云ふ手段なのである。然るに今に及んで二十と之を援けるのであつては始めの趣向と矛盾する、卽ち之を援けて戰ふ意匠であれば、黑十にて定型通りいに曲つて打つべき道理である。然るに黑二十と矛盾の策戰に出でた結果は、白に二一と急所を伸びられ、黑は所謂石を割られた姿となつて感心せぬのである。例へば爰で白にろと迫らるゝとするも、はに飛ぶはにに覗かるゝ手筋があつて、既に受方に窮する始末となるのである。溯つて白十三をほに粘いだならば其時こそは二十に打つが宜い、斯くては七の一着が遊びの姿となるから白既に不利なのである。

乙隅　黑一の刎ねは一見姿の如くであるが、之は圖の如く二と內から截つて、四に尖まるれば問題が無いのである。



丙隅　黑一の截りは無理で、矢張りいに刎ねるより無いのである。成る程黑三の時白四に飛び黑五に尖み附ける手順となれば姿として黑の有利であるが、之は白に丁圖の如く受けらるゝ手があつて、黑不可ぬのである。

丁隅　白一は上部に接衝しつゝ兼ねて下側に備へた着で此際手筋である。白三は之をいに並ぶも宜いのであるが、ろに突出しの防ぎを兼ねてに頂けたのは働いた手筋であつて、斯くなつては黑剩りの姿で不味いのである。



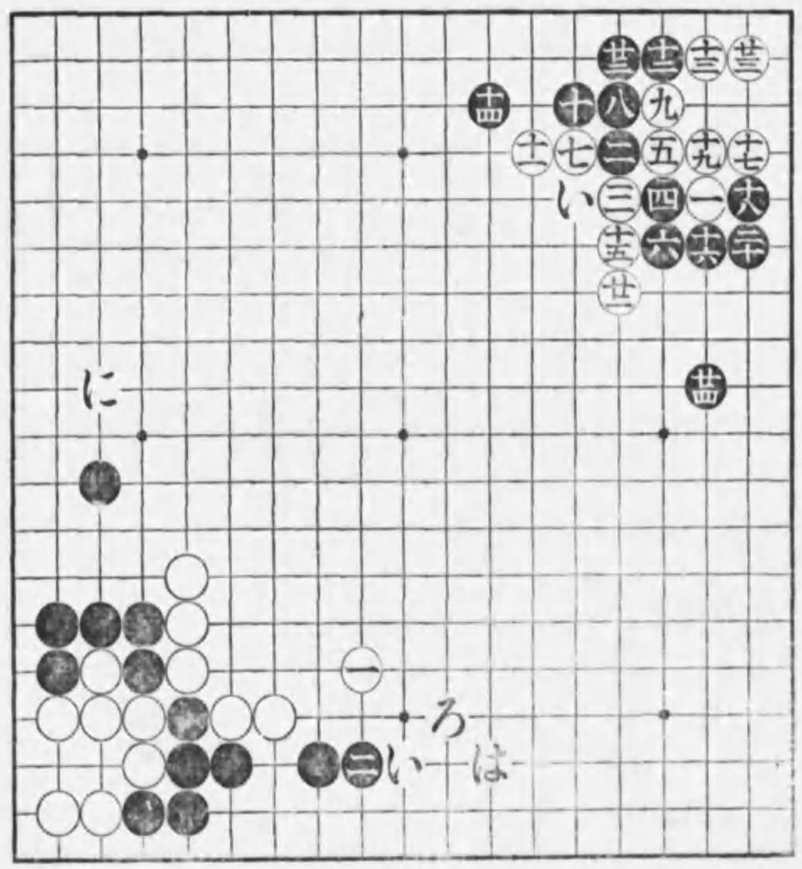
上圖は第四十五頁第十二圖、舊型說明中に於て、黑十二に截り棄て、次に十四以下十八迄の振替りとなつて、黑が宜いと揭げた圖であるが、大阪碁狂生君は白十七の手にて、下圖の如く一に刎ね、而して黑六の時七に打てば黑凌ぎが無いと、注意されて來た、白に斯ふ謂ふ妙手があつて見ると、上圖十二の截りは甚だ宜くないので第十四圖の如く打つ外無いのである。

▲第十四圖　甲

黑十二、既にいに截つて打つ手が無いとして見ると、十二に綽ねて十四に飛ぶより無い、其結果黑二四迄となつた形勢に就て見るに、前々頁質問甲圖と同じ姿で、異なる所は、十八に一著を利して居る代りに十、十一の交換に黑不利を受けて居る姿の相違に止まるのであるが、而も此黑十白十一と交換になつて居る事は、黑として甚だ感心しないので、斯くても黑香しくない姿である。之を要するに、十と曲る舊型は稍やもすれば此手が、愚集の筋違ひとなる意味があつて面白くない、之に依つて見ても黑十の一著は、著者の研究になる、十二の刎ねに換ふの可なる事を、痛切に感ずるものである。

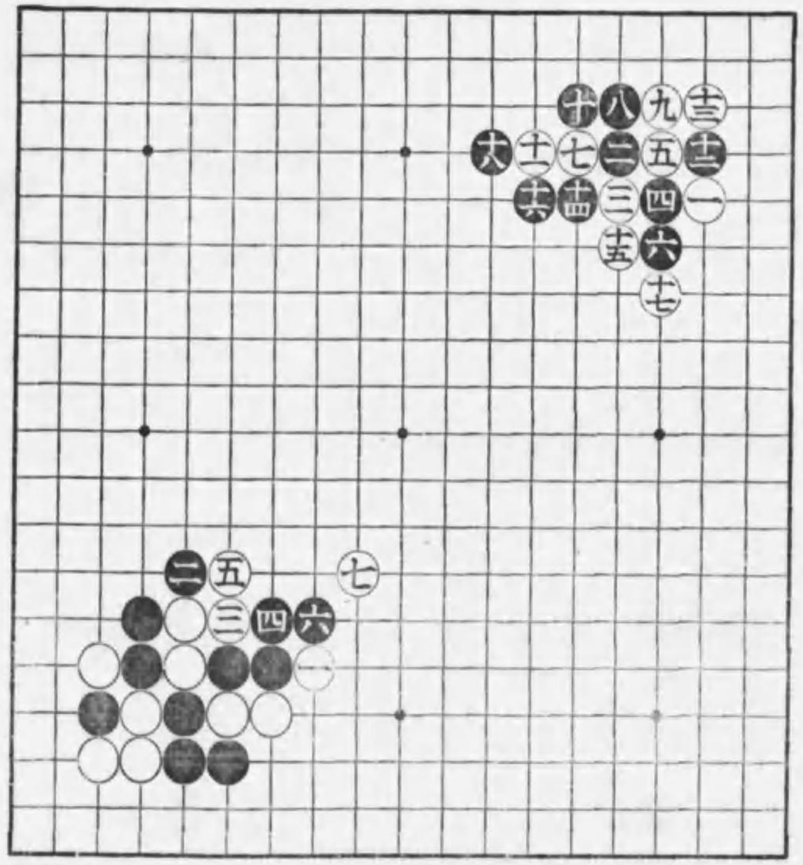
第四十八頁質問甲圖參照

乙圖　甲圖の姿が實戰に出來たとして、白はドウ打つかと云ふと、先づ一に斜走する手筋である、其時黑は圖の如く二と並ぶか、或はいに飛ぶより無い、黑若し二の手をいに飛んだならば白は直にろに掛けて打つべく、又黑圖の如く二に並んだならば、尙ろに掛けるか、或ははより迫るか、又は一轉してにと左側の黑に迫る等、機宜の手段に出づべきである。



第十四圖　甲

乙



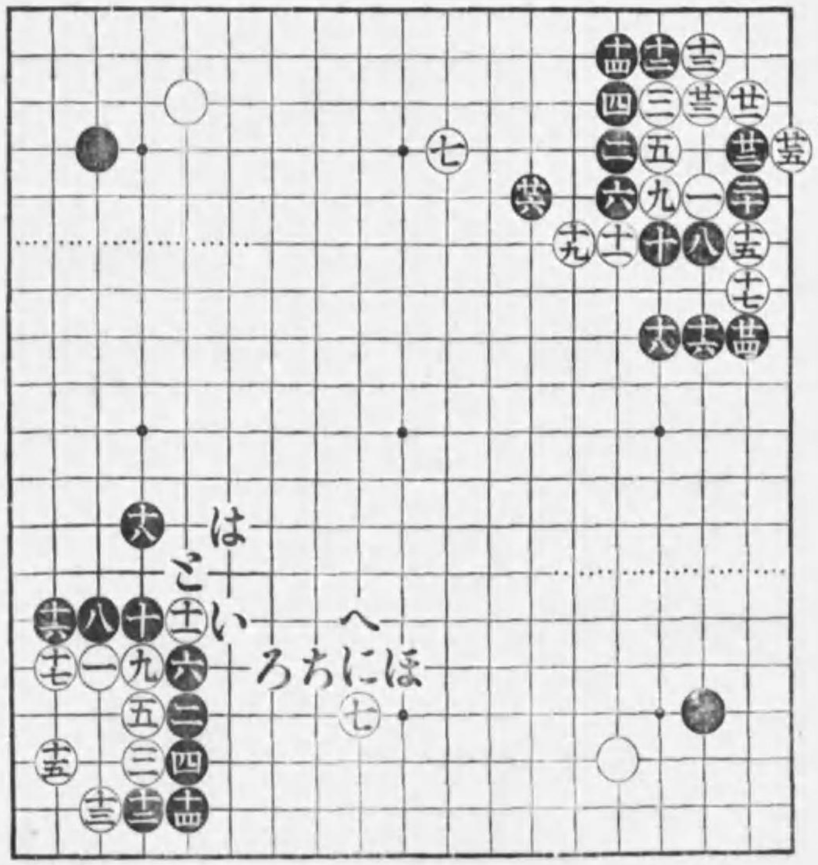
四十五頁第十二圖　再出

碁狂生君寄圖

▲第十五圖　甲

白七、左上隅が圖のやうな配置になつて居る場合は、黒四の時十二に下らないで五に添ふ型を採り、次に十に尖むべきを圖の如く七と挾んで打つ型もある。併し之は場合定石であつて、普通白が無理とされて居るのである。黒八、白が茲を手拔して七と來た場合は黒は直に其不備を衝いて八に頂けるが宜い、さすれば白は七と打つた趣意として、九と愚集み、十と截つて來るより無い、此九と愚集みの姿に出るより手段が無いと云ふ事は、卽ち白七の趣向が無理であることを證據立てる者である。黒十二、十四は敵に迫るの傍ら自家に勢力を加へた手である。白十五、定石の本には斯う刎ねてあるのもあるが、之は惡手であつて、二十以下二四迄の手順を經て、甲圖の如く二六に飛び出さるれば白不味いのである。卽ち白は隅に未だ味が殘つて居る上に、八以下の黒を頗る堅固ならしめたからである。

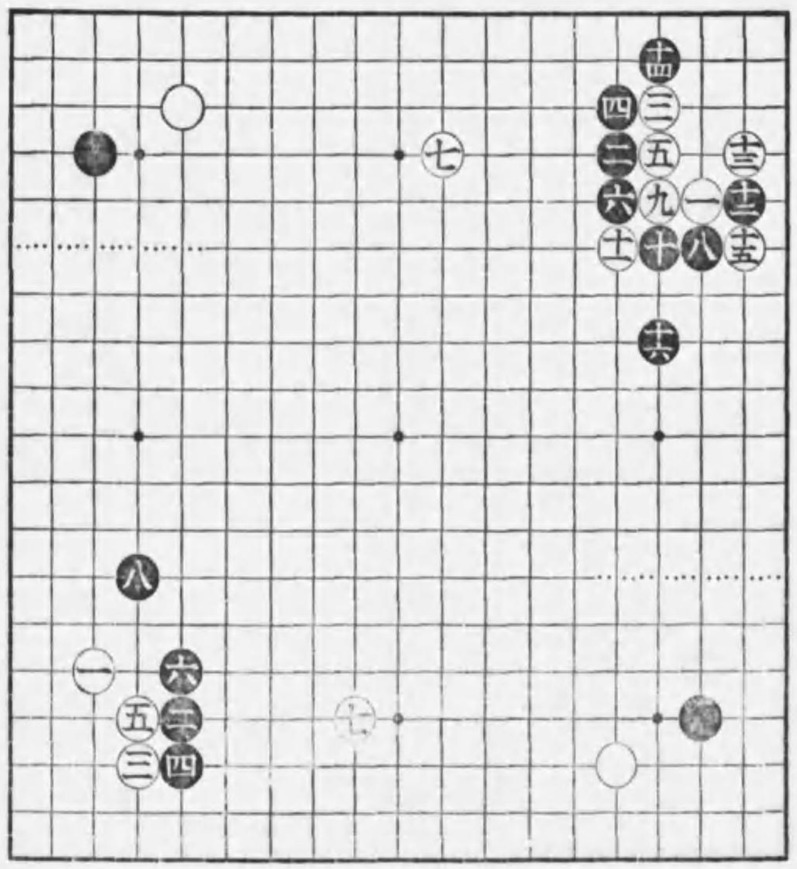
乙隅　白十五の懸粘ぎは此際佳著である、黒十六、白が斯う來た場合は一旦十六に下りを



利かせ、而して十八に飛ぶを通法とするのである。但し爰で白がにに伸びたならばろに飛び白はにせばにに頂け、白ほ黒へと伸びて打つべく、又白いをとに伸びなばちと肩を衝いて逸出するので、其孰れとなるも黒に不利無き戰ひである。

丙隅　黒十二、甲乙隅の型を採つて而白く無い場合か、又は他との關係上で圖の如く逆に十二に刎ね、而して十四、十六と打つもある。但し之は先づ十二に犧牲を出すものであるから、普通として黒の採るべき型でない事は申迄も無い事である。

丁隅　黒八、乙丙隅の孰れに據るも場合に不適當である際は、圖の如く八に斜走して戰ひを避けるが宜い、但し爰に至りて斯う戰ひを避けねばならぬ形勢であつたならば、始め二と懸る手を他の手段に替へる方が普通宜いとなつて居る事に留意されたい。



▲第十六圖　甲

本隅黑六の時白は尋常いに尖まないで、全玄を手抜きする型もある、夫れが尤も適當した場合を擧げると、右下隅が圖の樣になつて居る時なぞである、卽ち白の手抜きに乘じて無八に頂けなば九以下十三迄應接し、黑十四の時一轉して十五に掛け、黑ろ白はと運び、黑を低位に就かしむると同時に、上下の黑を重復させる含みにて打てば宜いのである。

乙隅　白十一、場合に依つてはいに懸粘がないで之を十一に綽ね、圖の如く振替つて打つもある、非常手段として心得べき事である。

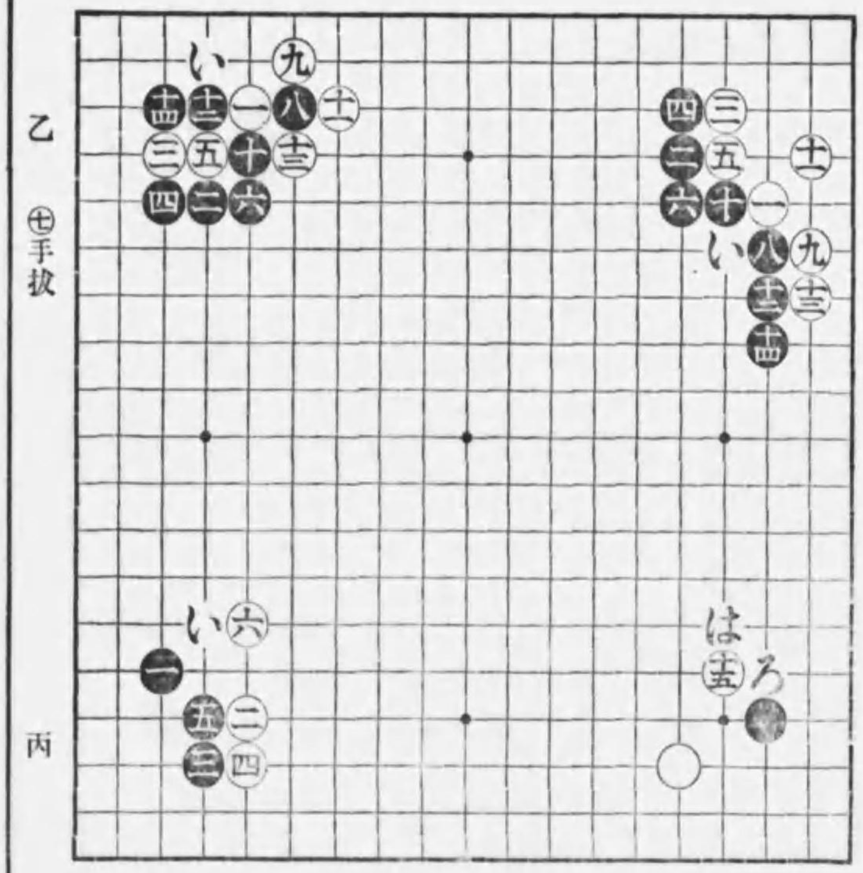
丙隅　白六は時として斯う飛ぶ型もある、又更に非常手段としては斯手を一路左りして、烈しくいに掛け戰ひを挑む手段もある、戰鬪に長じた士は實戰に試みて面白からう、但し場合を計らねばならぬ事は申迄も無い。

▲第十七圖　甲

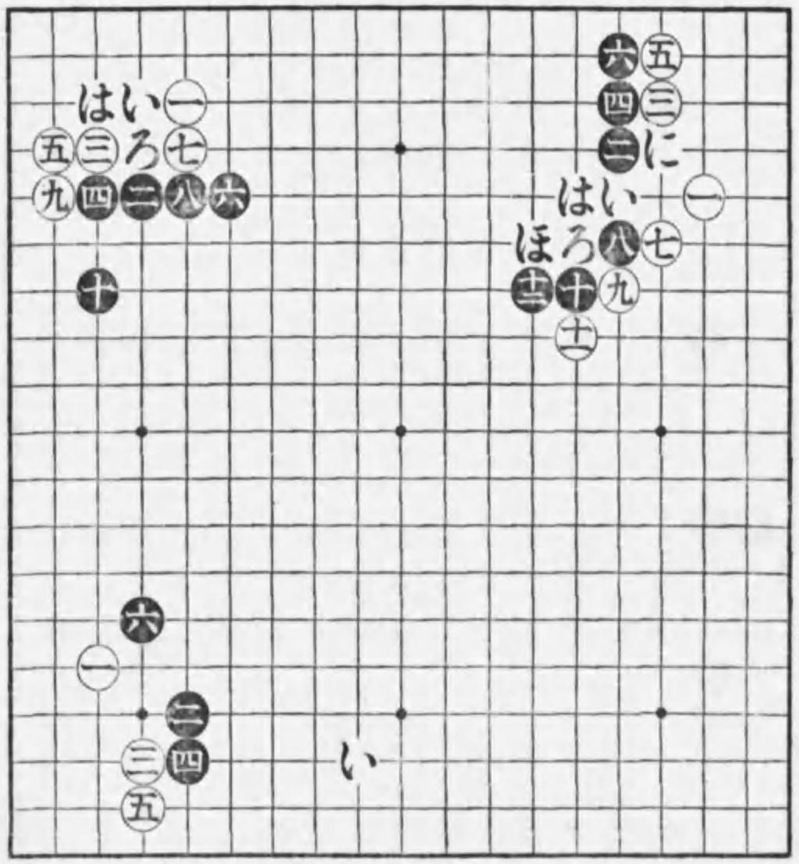
黑六、舊るい定石には宜く斯う約へ込んである、併し之は殊更に惡い二筋に打つのだから、此型は黑面白くない、併し中側を目的とする場合には、此型を採る事もあるのである、尙ほ爰で白十一をいに當てなばろに粘ぎ、白はならばにに伸びて宜く、又黑十二の時白いに綽ね込むも尙ろに粘いで宜く、又はは に約へ白ろ黑ほと打つも宜いのである。

乙隅　黑六、甲隅と同一目的の下に一歩進んだ中側經營手段として、圖の如く六に飛んで十迄に外勢を占める型がある、本型は場合上實戰に屢ば用ひられる型である、尙白七と並んだのは黑からいに頂け出され、白ろ黑七と打つて來られる手段を凌いだ著である、又白九と曲つたのは黑ろに突き出し、白いの時はに截り、九の處を先手に約へ込むか、又は此截り石を利用して白一の方面を封鎖さるゝを凌いだ手なのである。

丙隅　外勢を張る手段として甲乙隅の外に圖の如く掛けて打つもある、但し之はいに一著の備へが無い時は黑無理となつて居る、本型は要するに、白としての場合定石である。



第十六圖　㊐手抜　甲



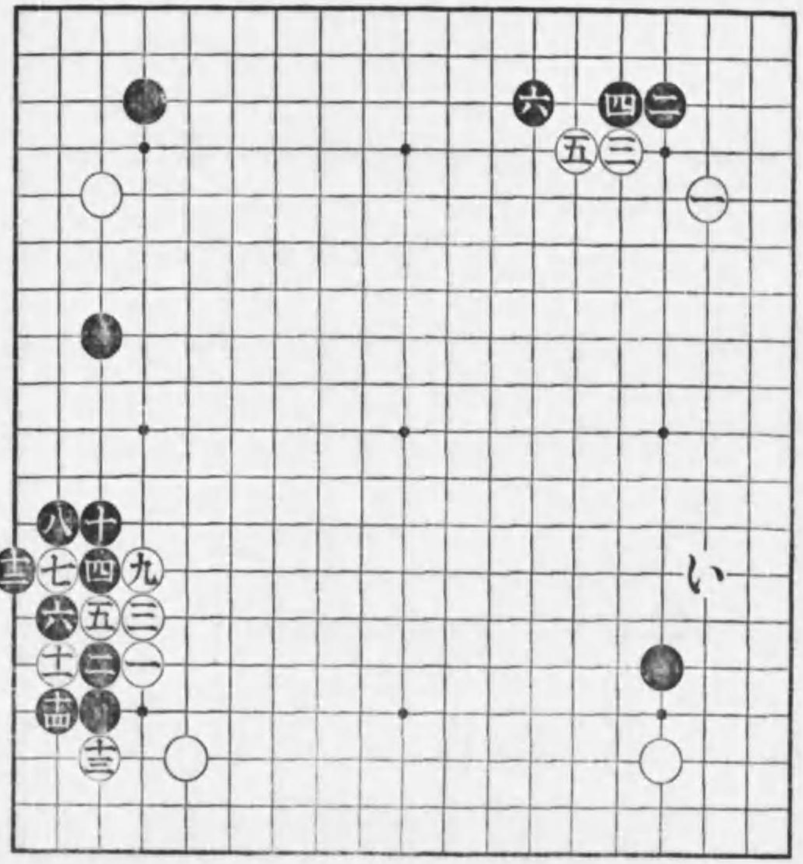
第十七圖　甲

▲第十八圖　甲

白三、五と掛伸びする型は、第一位點である隅と、第三位點である中腹とに著手を交換するものであるから、此掛けは何等か之を利用し得る場合でなくては用ひて不利である、卽ち下側が圖のやうな配置などであつたならば、此型に出で黑六の時いに詰打つて宜いのである。

乙隅　白一、左上側面が譜の配置になつて居る際は、黑を低位に就かしむべく、一に掛け、以下十四迄の交換を遂げ、而して實戰に此型が出來たならば、左上隅の白の一子は之を輕く棄てる含みで後を打てば宜いのである。

黑つて白五と突出して十三迄の著に出るのは黑を堅固にするもので、普通損とされて居る手であるが、爰では左上側黑の二間挾みを、重腹の惡手に化せしむる意味に於て圖の如く極り附けて宜いのである。之を要するに白一の掛けは甲圖の如く、下側に目的を有する場合か、或は乙圖の如く黑を所謂コラせる場合等に用ふる定型である。

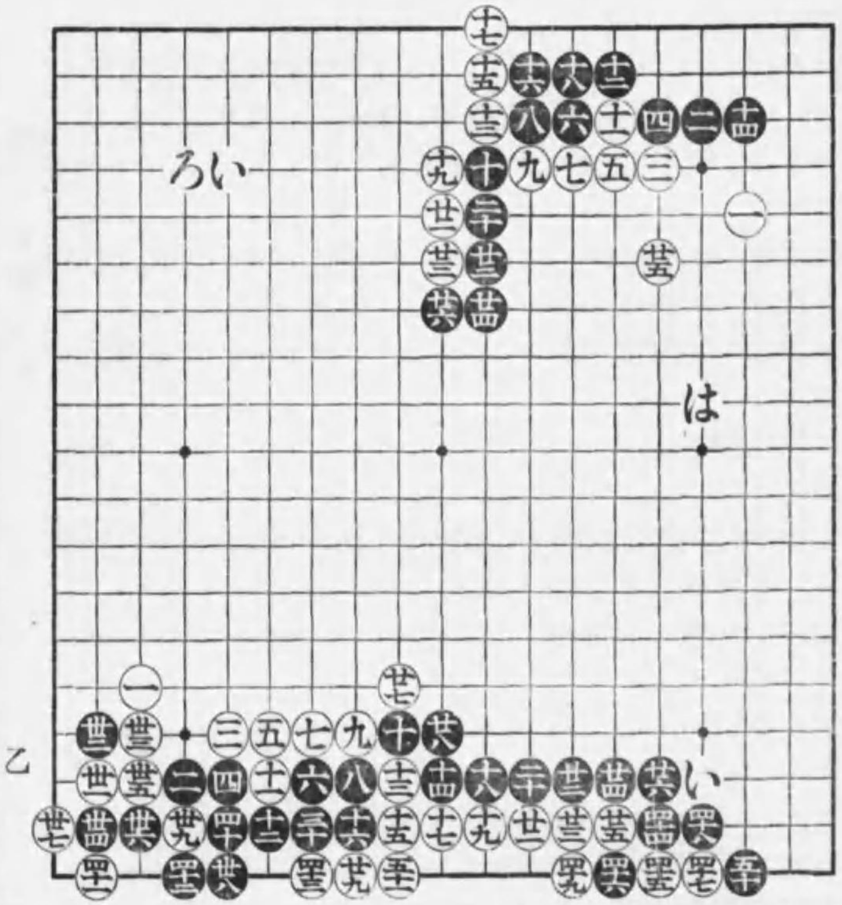


第十八圖　甲

▲第十九圖　甲

白七、本型は前圖の外に圖の如く七、九と驀然に押進んで打つ型もある。白十一と突出して十三に截る手段は有名なる幻庵因碩先生の案出になつた、而白い手段である。黑二六は一見緩い樣であるが、實は自家を固めて、兼ねて左右の白を窺つた良著である、さて爾後の運びを單に此配置上よりして言へば、黑二六の時白いを若しくばろに備へたならば、右方は等より迫り打つべく、又白右側に備へたならば黑代つて左上隅いに打べきである。溯つて黑十の刎か場合に適しない局勢であるか、又は戰ひを避ける意匠であつたならば、十を以ては之を十三に忍耐して、さしたる事は無いのである。

乙隅　黑十四は右下隅いを邊に一著の備へが無い場合は無理であつて、圖の如く白五一迄となつては、黑の大失敗たるや云ふ迄も無いのである、但し本圖白五一迄は幼庵因碩先生著圍碁妙傳に依つたものであるが、此手順中白二五、黑二六は共に誤つて居ると考へられる、斯手に就いては次圖に掲載する。



第十九圖　甲

▲第二十圖　甲

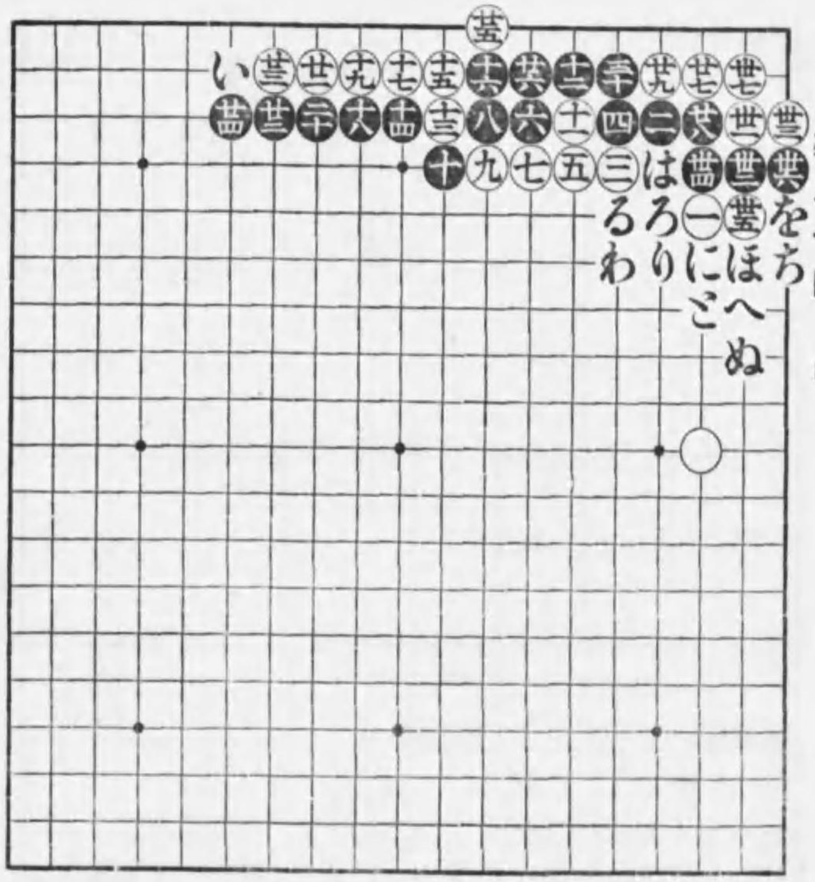
白二五、妙傳には之を前圖に掲げた如く、今一著いに沿つてある、單なる此處だけの形勢としては、二五をいに沿ふは當然の著であるが、元來白三、五、七、九と押進んで打つ型は、實戰の場合多く圖に於ける星下に、四間拆きの一著が有る時に用ひられて居る、處で圖の如く四間拆きの有る際は、いに沿ふ手で二五に刎ね、而して二七以下三七迄の急手段に出づるが宜い斯うなると黑はろに刎ね、以下を迄の符號順に依つて凌ぐより策は無い、爰で白は始めていに沿つて打てば、形勢大いに宜いのである。からして黑十四の一著は、白に四間拆きの一著ある際は、愈々無理手となるのである。蠟つて黑ろの時白若しりに綽ねなばはに粘ぎ、白わ黑へと打つて凌ぐのである。

乙圖　黑二、妙傳に之を五と伸びてあるのは謂はゞ參考迄に掲げたもので、斯くして前圖の如く、隅の黑を捉られては散々であるから、黑二にあつては圖の如く打つて隅を治まるより無い然らば以下二四迄の變化となつて、兎も角も打てるのである、場合に依り、中の黑は棄てる含みで、「斯くなりても黑の宜くない事は勿論であるが、」尙黑二一の時白若し二二に下らば二四に飛び、而して機を見て二一に粘ぎ、白い黑ろ白は黑にと劫爭する手段を睨むべきである。

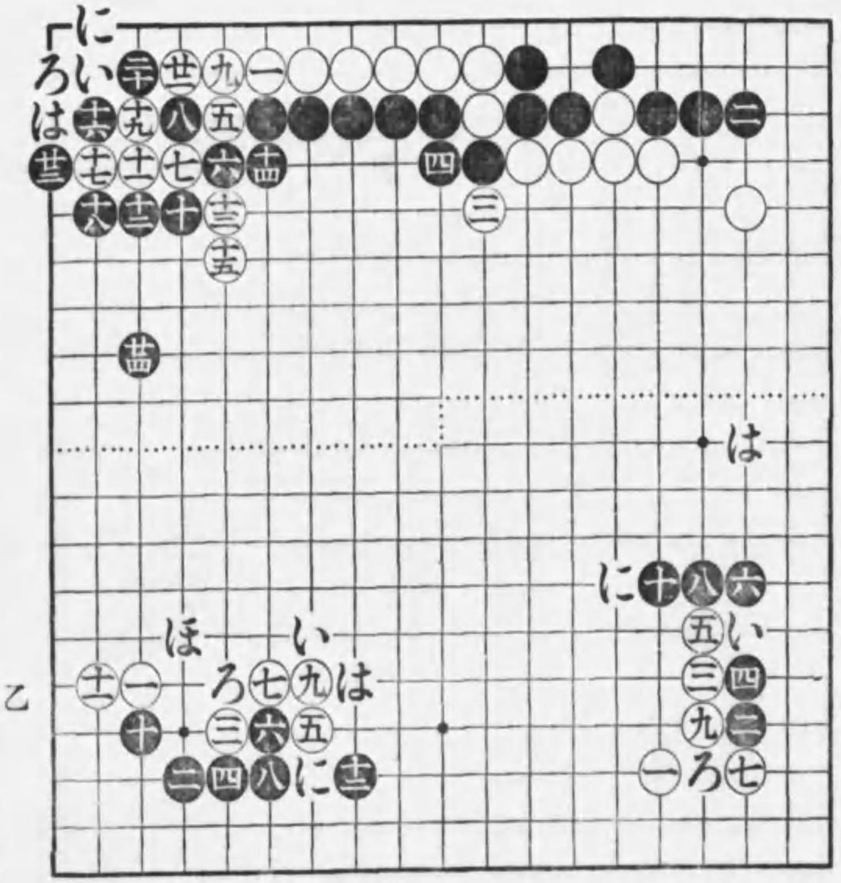
▲第二十一圖　甲

白七、隅を主とする場合、斯う頂けて打つ型もある。此時黑の應手として舊型ではいに粘ぎ、白ろ黑はとなつて居るが、此際は圖の如く二、四の二子は棄てる含みにて八に押し、次に十に伸びて外勢を占める手法を取るのが嚴しいのである。尙にに飛びたい處を十と重厚の一著に出たのは、自いの突出しに備へた著である。

乙圖　黑十、定石ではあるが場合に依つては單に十二に飛ぶべきである。尙白九は形勢に依つて之を十二に尖み込むのもある。又白九を若しいに懸粘いだならば、ろの截りを含んで直にはに覗き、白九黑十二と應ずるのである。更に白十一は場合に依つてにに押へ込むもある。尙白十一をほに尖んだならば黑は此隅を手拔すべきである。



第二十圖　甲



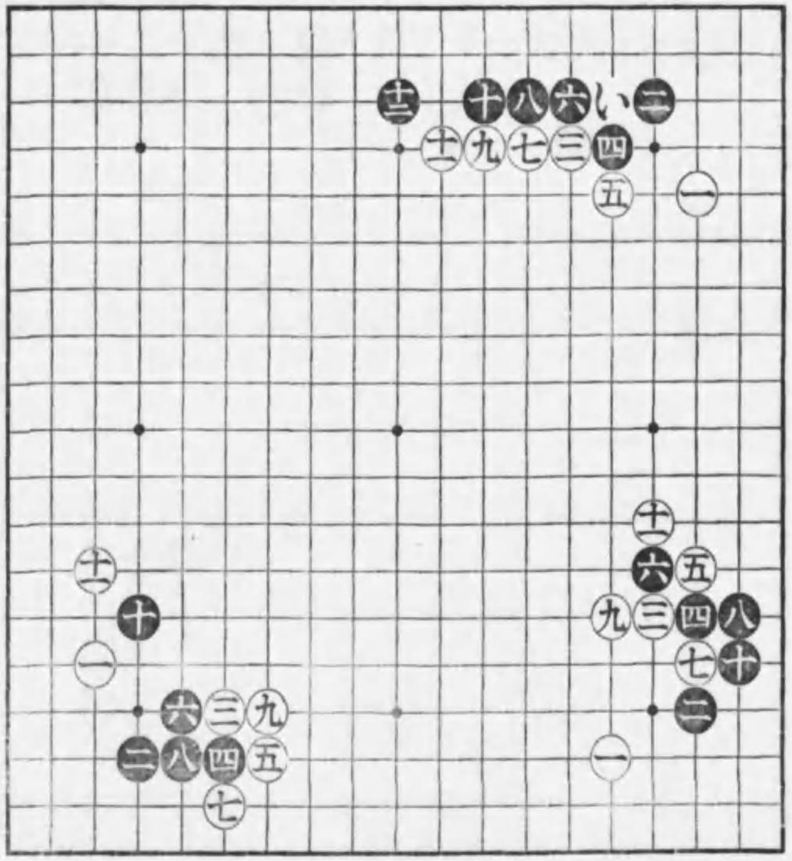
第二十一圖　甲

大斜の部

▲第一圖

白三と浴せた手は圍碁の定石中尤も難物視されて居る、大斜定石の發端の手である。由來大斜定石は讀者も知らるゝ如く、實際に千變萬化の手段ある定石であるから、本書には只其要點々々を掲ぐるに止めた、大斜定石の詳細に就ては、自著大斜定石法を參照されたいのであるが、而も本書には追つて未だ同著に掲載されて居ない、新發見の手段を本書に紹介する。

黑四と頂けた、手は俗に云ふ大斜ヨケの型であるが、黑十二迄の形勢は、謂はゞ白三にて四に掛けたと假定し、黑い白三と伸びた時、黑は二、いの二勢力を利用して直に八に進展すべきを、「第二十圖甲隅參照」六、八、十と白に一路遲れて進行し、十二に至つて漸やく進展したものと同樣の姿で、黑の全體悉く低位に就いて居るのに反して、白は中側に廣大な勢力を得て居るから、黑に不利である事は、云ふまでも無い、從つて本型黑四は或る特種の場合を除くの外、之を用ふるを見合すべきである。



甲　　乙

大斜第一圖

▲第一圖　甲

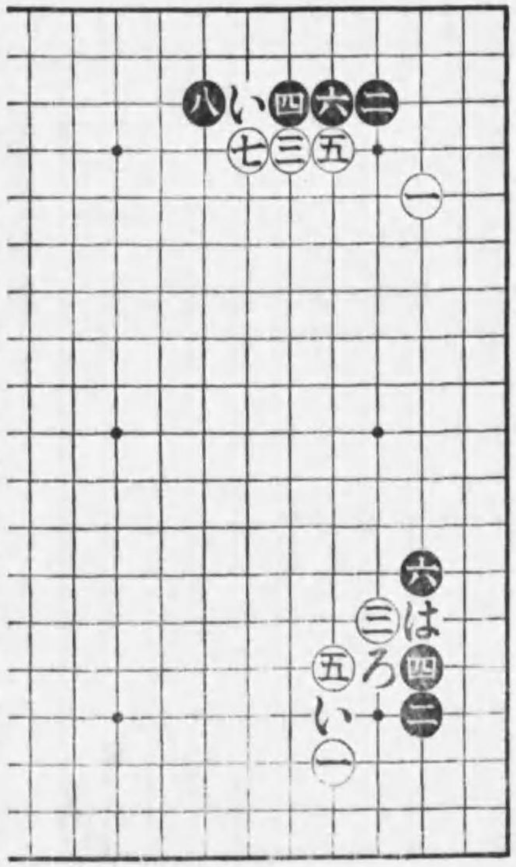
黑四、之亦場合に適した時に用ふる大斜ヨケの型であるが、白九迄に黑二以下の四著が重復するから之亦普通黑面白く無いのである。而し本型は第一圖に比べて實戰に之を見受ける事が多い。

乙隅　黑六、斯著は有名なる水谷縫治が村瀬秀甫と對局の際、始めて試みた新手であるが、而も黑として穩かならぬ而已ならず、傍らの場合を見計ふ事が餘程難かしい、而も圖の如く白に十一と、六の一子を征に提られる處にあつては此型を採る事は黑禁物である。

丙隅　黑四に對して白は圖の如く五と引いて七に伸びる型もある。斯くても最初白三を五に掛け、黑六白三となる時、いに進展すべきを、更に四と連行した譯となるから、之とても普通の場合とすれば、黑面白からぬのである。

▲第二圖　甲

黑四、先師秀榮曾て黑四に就て曰く、白三の大斜に對しては黑は大抵の場合いに頂ける大斜定石を採るべきで若し、いに頂けて打つの場合に適しない形勢であつたならば、それは黑が餘程惡い處である。但しろ若しくはに打つ事が、いに頂けるヨリ以上に形勢に適する場合もあると、當時二段の竹朝は之に就て先師に、秀和先生は白三に對して、多くの場合いに頂け無いで、圖の如く四に竝び、白五黑六と打つて居られる理由を尋ねた、先師曰く乃父が「秀和先生の事」四に竝んで打つた譯は白五、黑六白三黑四の手順となつたものとして其手割を見よ、白三に對して黑がはに應じないで、四に竝んだのは利かされて居るが、白五と黑六は中腹と隅との交換であるから之は黑利益である、からして圖の如くなつて手割上黑惡くない云ふ見地から、四に竝んで居たのであると。本圖の說明次圖に續く。



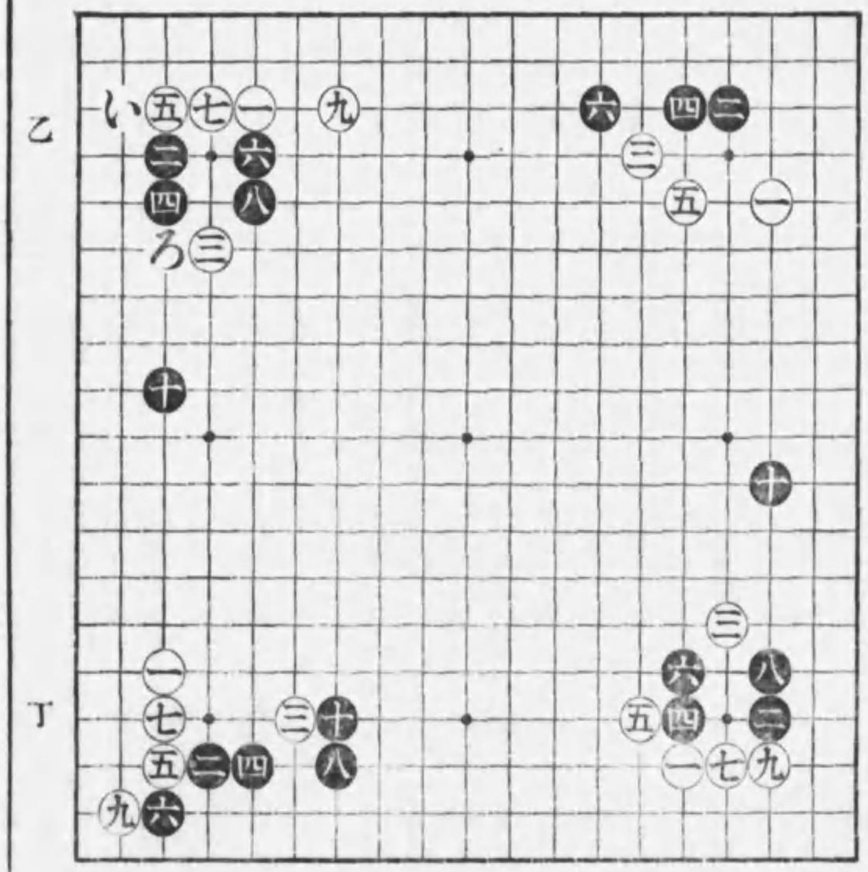
丙　　第二圖　甲

▲第二圖　甲

黑四、前頁に述べた如く手割上より云へば、白三に對して黑が斯う四と並んで結構である。併し斯著は消極的の手である。からして或は白に五の手で爰を手拔きされるかも知れぬがその曉きに、黑は別に之を咎める嚴しい手段が無い、隨つて黑四は緩著と云はざるを得ない事になるのである。而も黑四の並びは之を手割上よりしても不利ならしめる新手が有名なる幻庵因碩に依つて、秀和との名人爭ひの對局の際に發見されたのである、卽ち乙圖に於ける、白五の頂け手が夫れである。

乙圖　斯う白に五と頂けられると、黑はいに刎ねるか、或は六に頂けるより無い、而して圖の如く六に頂ければ黑十迄の振り替りとなるのである。處が丙圖に於ける型がある。斯型は五の一著が、黑の堅きに接して居る關係から三の一子の活動を失ふので丙圖は白不利とされて居る然るに本型乙圖に在つては、白九の一著が三の白に累を及ぼさない點に備へてある。由つて黑はろの押へ込み其他に備ふべく他日爰に著手を要する、からして本型は黑感心しないのである。

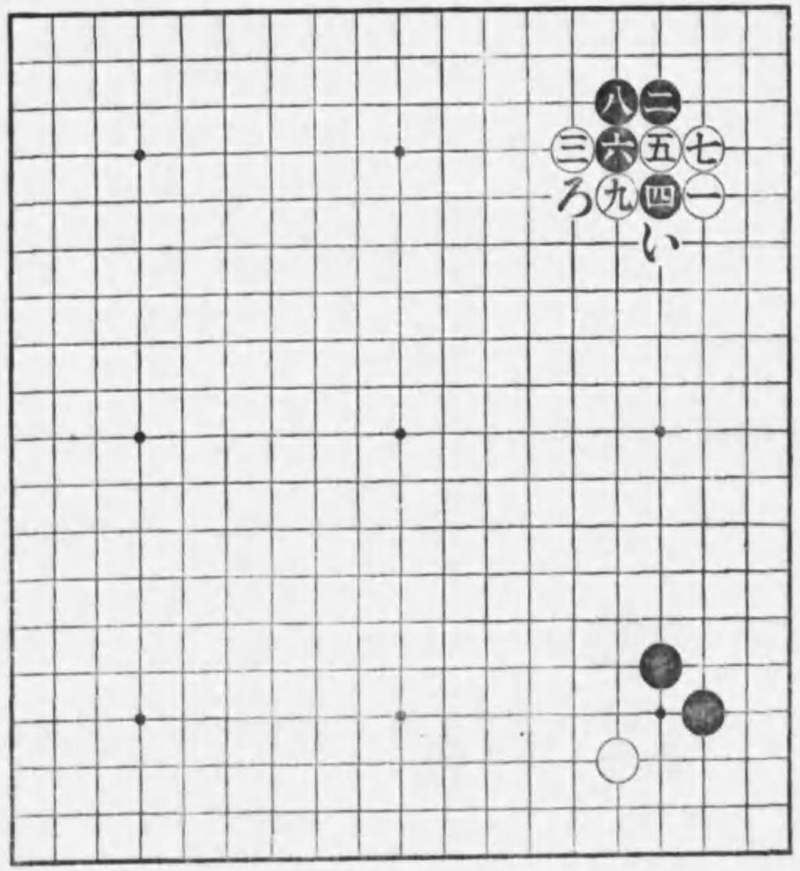
丁圖　黑六以下十迄は、幻庵因碩の五の、頂けに對して、秀和が應答した手であるが、之を手割上から概言すれば、白三と黑十の交換は結構だが、黑四、八、白一、五は純然たる隅と中側との交換であるから、斯くても黑尙は面白くない畢竟するに白三の大斜掛けに對して、大斜ヨケに出るは宜くないのである。



前圖再揭第二圖　甲

▲第三圖　甲

白三の大斜掛けに對しては、特種の場合を除くの外、既述の譯で大斜ヨケの型を採らないで、圖の四に頂けて打つ大斜定石に依るが宜いのである。さて白九の時黑はいに伸びて戰ふ手と、ろに截つて振替る手との、和戰兩樣の型がある、處で之を道理から云ふと、ろに截るは間違ひであつて、いに伸びるのが本來なのである、何故ならば、圖を白三、五、七、九黑二、四、六、八の姿と假定して、爰で白手をいに征とするか、一に當てるかと問へば、如何な初心者もいに打つと答へるであろう、然るに爰でろに截るは間違つた白一の手を、いにあるものと之を認めて打つ譯の著となるから、ろの截りを以ては當然之をいの伸びに換ふるを優るものとする、彼の秀策が圖に於ける場合にあつて常にいに伸びる型を採つたのも、恐らく此道理に基いたものと考へられるのである。

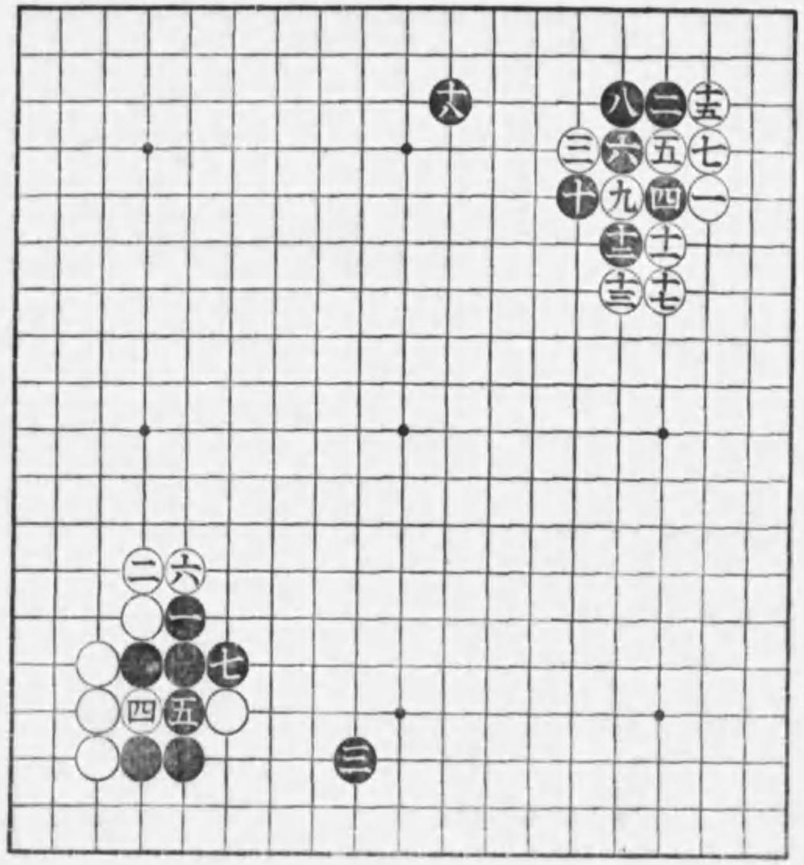


第三圖　甲

▲第四圖甲

黒十は前圖に述べた理由で、本來から云ふと、之を十一に伸びるべきである。併し敵が一勢力優勢な場所で、白兵戰を演ずる事はよし白に多少いかゞな理由があるとしても、原則として黒の採らぬ處である。依つて若し單なる場合であつたならば圖の如く十に截り、以下十八迄の振替りに出でる方穩かであり、且つ確實なのである。

參考圖は甲圖の振替りの手割を示したものである。黒一は直に三と打つて黒が宜いとなつて居る型であるから、黒一の押の惡いのと相殺して黒白互角の形勢と見る事が出來る。次に手順を逆にして、白六黒七の交換は白六の曲げが、立派な手であるに反し、黒七は愚集の一著であるから、此交換は黒甚だ惡い、併し白四と突出して黒に五と粘がしめた交換は、身攻の一著であるから、之は黒大に利を得て居る、更に換言すれば前者の交換を十の損失とすれば、後者の交換に於ては九以上の利を占めて而も形勢キマリが付くからして普通



第四圖甲　白提　黒粘

參考圖

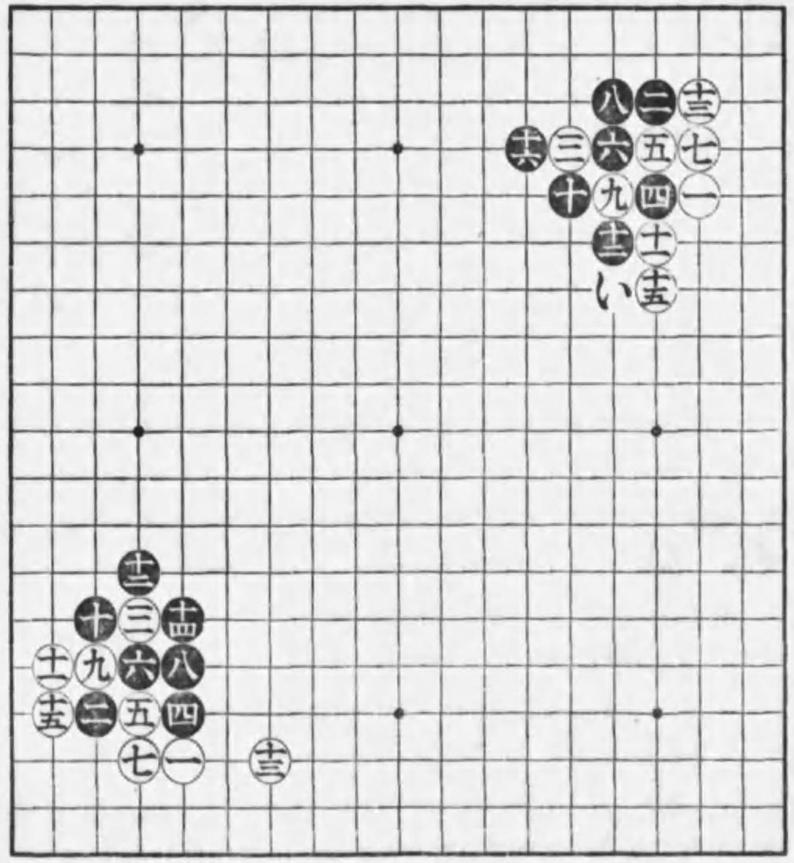
の場合であつたならば、甲圖の如く十に截る振替りに出でゝ、黒何等差支無いのである。

▲第四圖乙

白十五の伸びは場合手であつて、普通はいに刻ねる甲圖に依るべきである、黒十六初學者は稍もすると白十五に伸びた著を、いに刻ねたものと混同して、之を九に粘いで平氣で居られるが、之は間違つて居る、何故なれば白が直接いに刻ね、十二の黒に當つたならば、之に對して九に粘ぐが道理であるが、白が無關係に十五と伸びた上は、九の粘ぎは必要が無いから、圖の如く十六に白の一子を抱へ提るが道理となるのである。

▲第五圖甲

黒八の粘ぎは普通損とされて居るが外勢を必要とする場合は斯型に出でゝ、他に先鞭するが宜い、隅に失ふ所少なからぬものがあるが、併し後手の場所が先手になる事と、更に白三の一子を打拔いて居ると云ふ事が、エライのであるから、斯く振替りても黒さして不利でないのである。



第四圖乙　白提

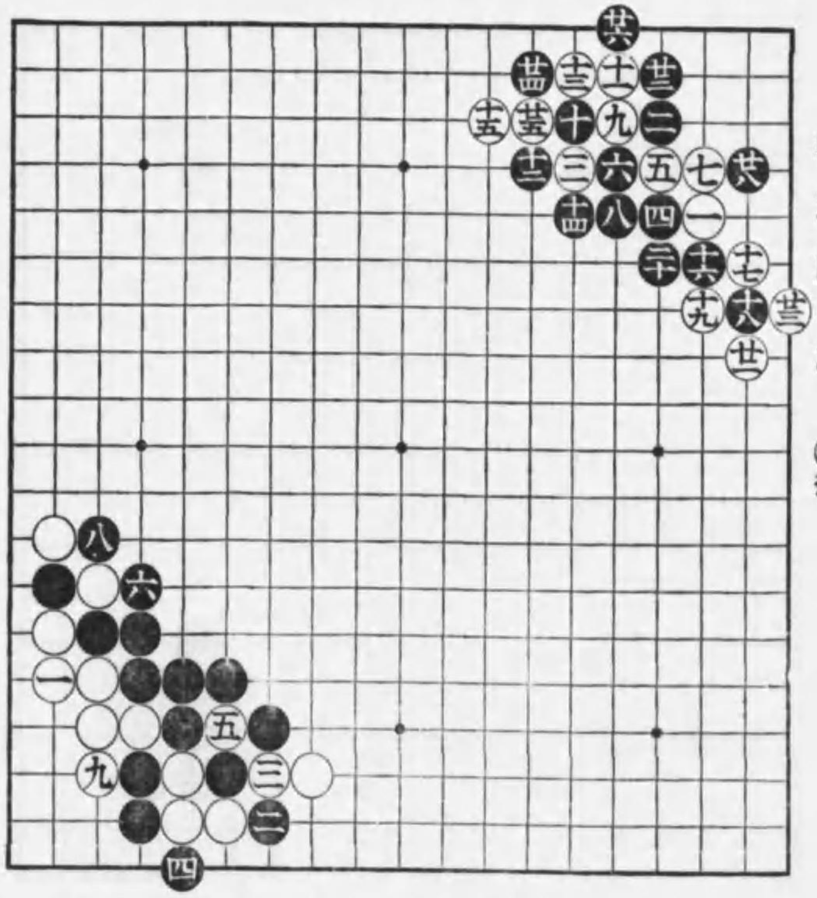
第五圖甲

▲第五圖　乙

白十三は之を十九に飛び、黑十四白二二となる前圖甲圖を普通とするのであるが、場合に依つては圖の如く十三に當て、次に十五に進展して打つもある。白が斯う來た場合黑は十六、十八に二段刎ねして圖の如く二二、二四に劫を狙ふを肝要とす。白二三は無理である。黑二八は佳著である、總べて劫立は成るべく損のゆかざるやう遣るべきで、圖の如くなつては黑大に宜い。

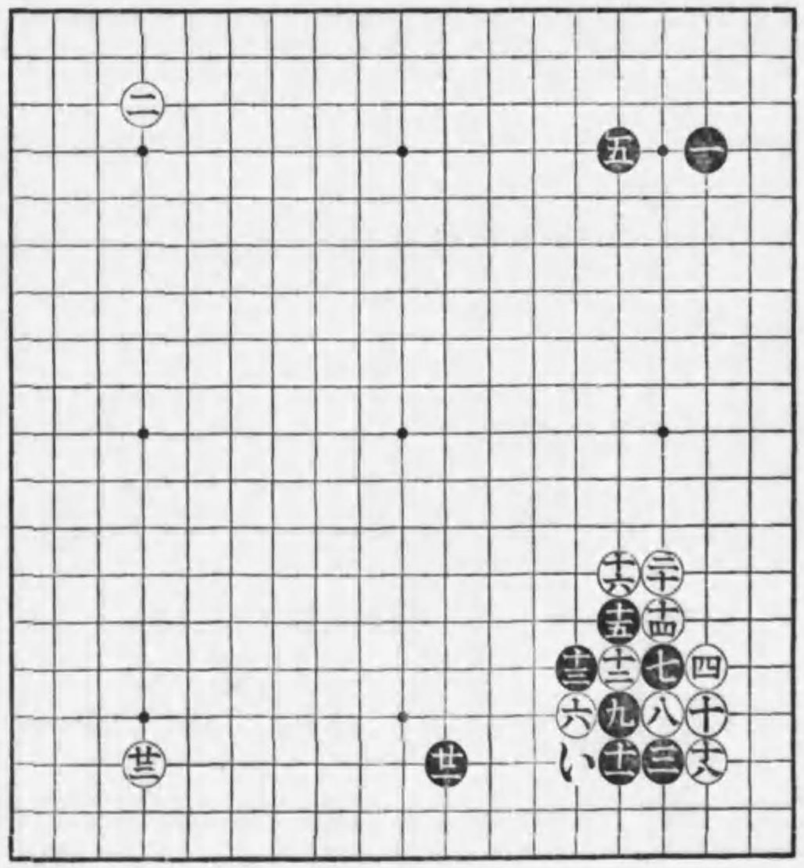
丙圖　白二一より變化

黑二、白一と圖の如く粘ぐも失張り二、四に劫を挑み、次に六、八に打拔き、白九の時他に轉ずれば宜いのである、尙ほ本型の利害に就て概言すれば、黑に四子の犧牲はあるが、此爲に白も三著を圍中に費して居るから、結局黑は一子より無駄が無い、之に反して白は黑六、八と打拔かれたのに依つて、二子の犧牲を出して居る、此譯からして普通本型は黑有利とされて居るのである。



▲第六圖　配石上に於ける大斜用法

本圖白二二迄の配置は、折節實戰に見掛ける處であるが、此形勢となつては黑勝を收めるに頗る困難な局勢であつて、實際黑が往々破ぶれて居るのである。而して黑が此不利に陷つた原因はと云ふと、十三と截つて戰ひを避けたのにある。元來此側面は黑既に一、五と締つて二著の優勢に居る。然るに此勢力範圍で十三と戰ひを避ける手法に出たのだから、黑の不味くなるのは當然の話である。依つて斯やうの際には、十三の截りを十四に伸び、白十八黑いと打つて爭はねば不可ぬ、要するに黑十三の時に在つては此側面黑優勢であれば、十四に伸びて戰ふが宜く、然らざる場合は圖の如く、十三に截つて打つを大斜掛けに對する要領とす。

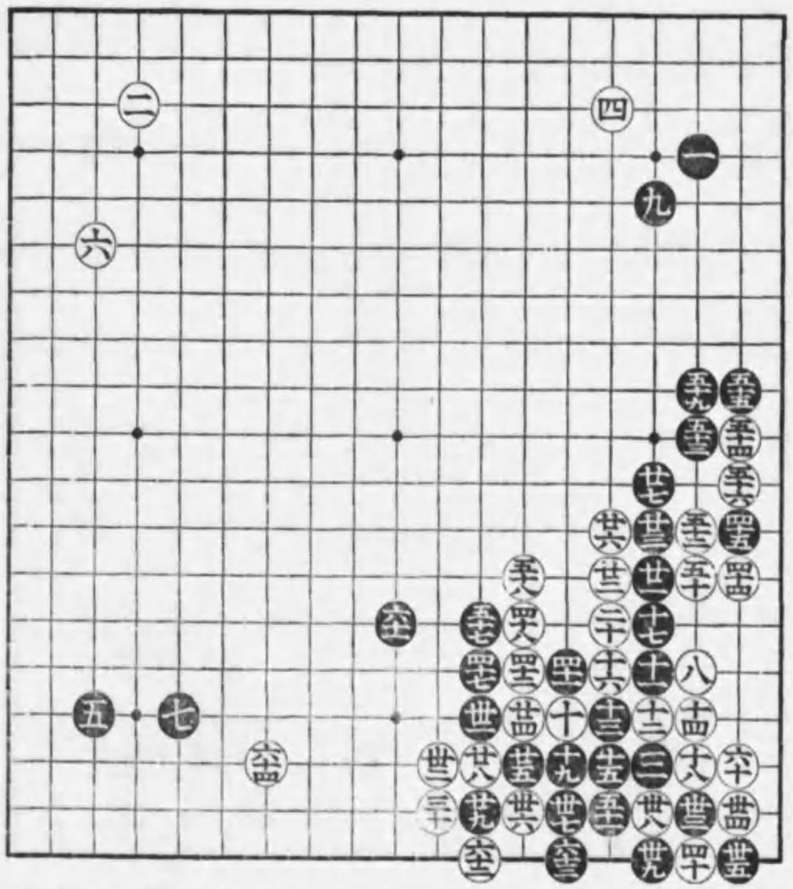


▲第七圖（黑失敗の圖）大斜定石の變遷

説明の都合上本圖以下二三圖に渡つて先づ大斜の變遷を掲げ依つて大躰上の大斜の要領を紹介し、而して改めて本型の仔細の要領を述べる。

本圖は秀策が十八歳で未だ五段當時の浪花下りの時、彼の有名なる幻庵因碩と、先で對局した初番に出來た圖である。

本圖右下隅白六四迄の利害に就て之を大摑みに云へば、白は三八の一著が犧牲になつた許りであるのに、黒は二九、四一の二著の犧牲を出して居る、而も中央六一以下の黒は其勢力五八以下の白に比して大に劣つて居る等本型黒の失敗は歴然たる處である、斯局に就て名人秀榮の評に曰く、此碁を秀策さんが三目勝つたのは幸運と云ふので、白六四迄の形勢となつては、黒惨々であると。竹朝曰く、白六十は當時の定石であるが、若し今日であつたならば、白は恐らく爰を手抜して直ちに六四に打つであらう。六十の截り取りは先手九目と、及び左側眼に關係する要所であるが、併も要するに局部の利害であり。六四に打つは大勢に一歩を先んずる著であるからである。

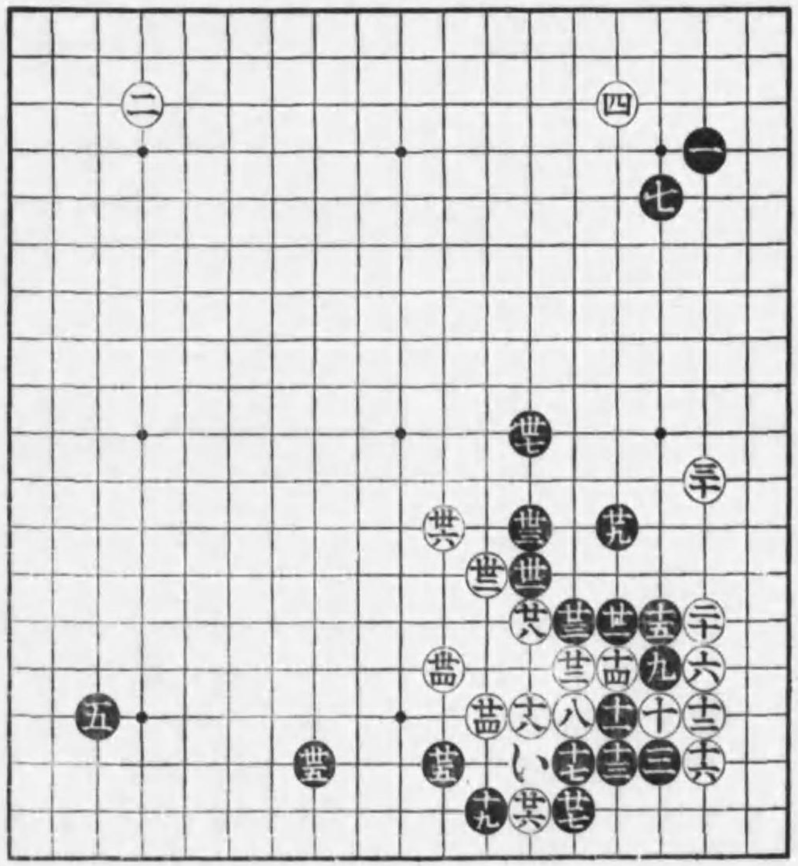


第七圖　▲劫提△同▲同

溯つて黒十七の伸びは右上隅と左下隅が優越である此場合斯く戰ひを開く型に出たのは當然の著である「前圖參照」然るに黒が圖の不成績に終つたのは二五の押が重かつたからなので、白が一著でも二十と五筋を押して二四に伸びた場合は黒は之に對して二九に斜走せねばならぬので、之が本型一ッの要領である。

▲第八圖

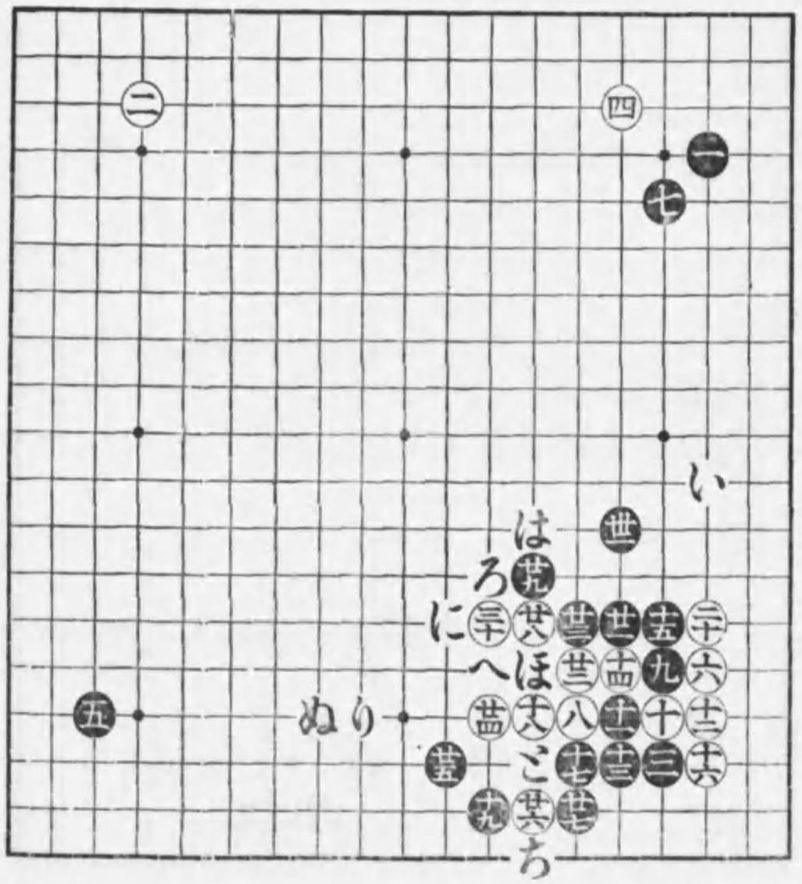
本圖は村瀨秀甫著方圓新法に掲げてある圖で、而して其當時定型として打碁に屢ば斯型が用ひられたものである。處が秀甫歿後、先代中川に依つて黒二九の著に就て、之を三一に刎ねるを是とする議論が稱へられ、次で之に對して秀榮の反駁説があつた一少波瀾の後、秀榮に依つて白に三六の手で恐るべき手段が發見されて、本型は根本より破壞され、今日では誰れも黒で此型を採る者が無くなつた、本型が黒に非常な弱點を生じて居た事は、原因する處黒十九の斜走が緩手であつたからで、白が單に十八と伸びた際は、二一に當てゝいに張らねば不可ぬ、之亦本型一ッの要領である。本圖の説明次頁に續く。



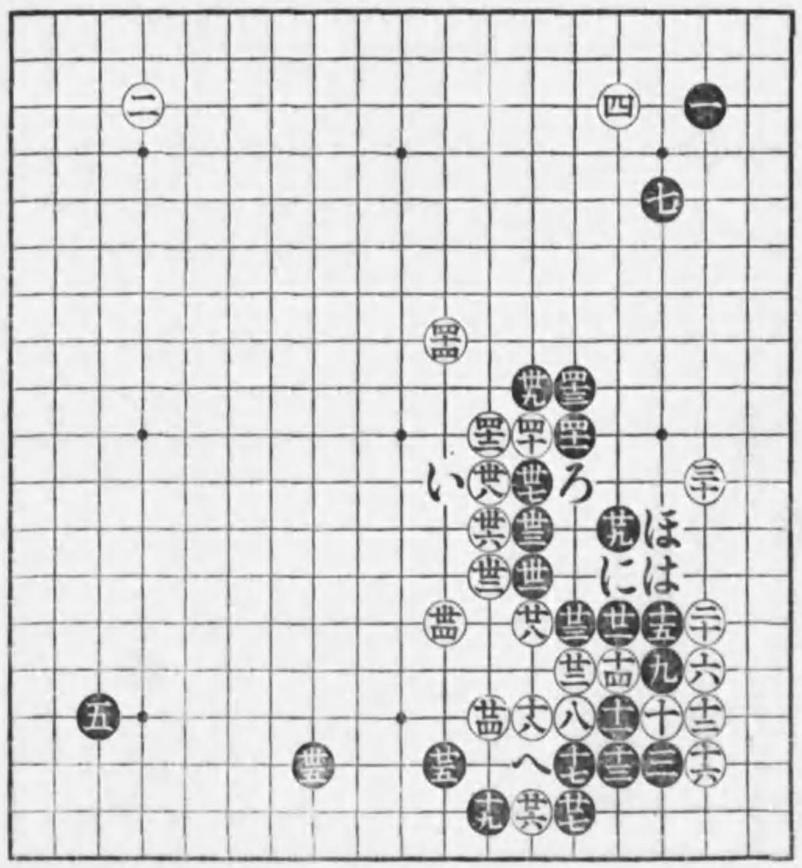
第八圖

▲第八圖甲

前圖續き――先代中川曰く、白二八の時黒三一に飛ぶ秀甫の型は緩るい、何故なれば黒三一の飛びあるがために、白**い**黒二九と刎ねた時、白に**ろ**と刎ねるを得せしめ、依りて黒**は**白**に**と頗る働いた姿を得せしめるのである。「白**ろ**の時黒三十に截るは、白**に**黒**ほ**白**へ**黒二八となつて、黒前に打ちたる三一の一著無駄手となるのである。」若し白二八の時黒三一に飛ぶ手を略して、直ちに二九に刎ねなば如何、然らば白は三十に引くの外無く、依つて三一に飛べば黒働きである。と、名人秀榮曰く、中川氏の說は之を上部に就て見れば尤もである、さりながら黒若し圖の如く、二九と刎ねて三一に飛んだならば、白は三十に加はつた新たなる勢力を利用して**と**に粘ぎ黒**ち**の時**り**、**ぬ**等から攻擊を加へられて、下邊の接仗、黒困難を覺えはせぬか、道がに秀甫は玆に觀る處があつて、三一の飛びを先きにして、二九の刎ねを後にしたものと考察されると

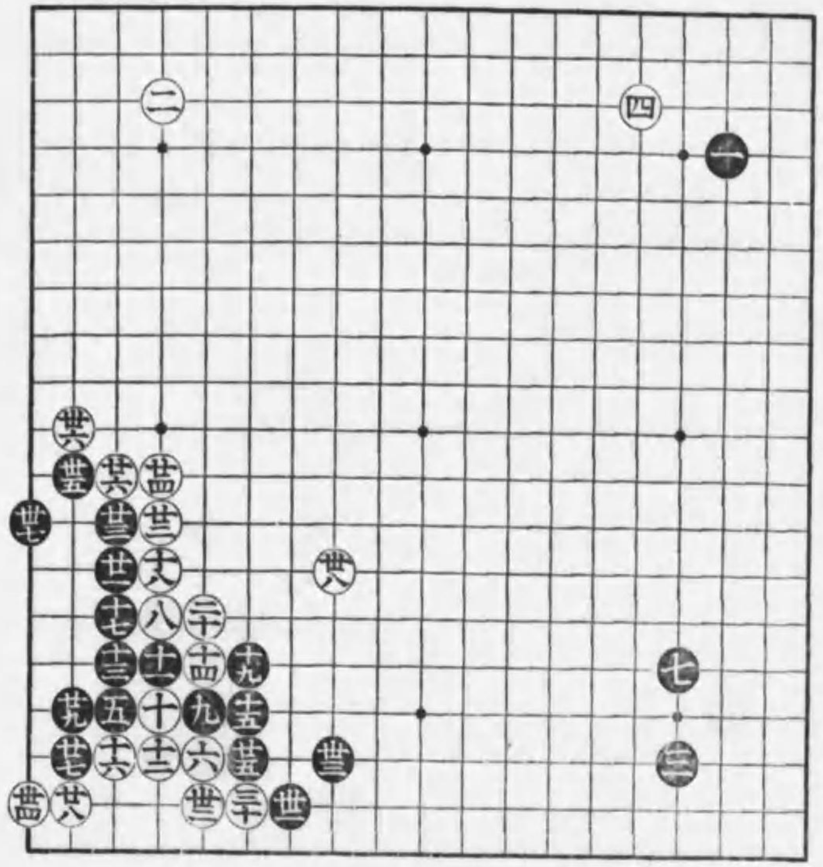


乙圖　白三六、秀甫著方圓新法には第六十九頁の如く、之を**い**に斜走し、黒四十と應酬してあつて其講評に、此隅ノ形双方互角ナリとある、然るに秀榮に依つて爰に恐るべき手が發見された、それは圖の如く三六、三八と驀然に押附け、而して更に四十以下四四迄黒を壓迫して、左側全躰に大勢力を占むる手段である。而も譜に於ける黒右側の行働は悉く駄目に等しきものであるに反して、白は前述左側に非常な勢力を得て居る、されば若し實戰で此形勢が成つたならば、黒殆ど勝算なき局勢である。然らば飜つて黒三七を四十に飛べばドウかと云ふに、之は白に三七と割込まれ、黒**ろ**白三八黒四一となる時、**は**に當附けられ、黒**に**白**ほ**と添つて打たれて、之は黒散々の姿勢崩れとなるのである。本圖が斯く黒の悲境に陷つたのは、之を要するに黒十九の一著が緩かつたからなので、卽ち前圖に述べた如く、白十八と單に伸びた場合は黒十九を以て、一著先づ二一に當てゝ白の姿勢を崩し、而して**へ**に張つて打つを本型の要領とする。



▲第九圖前圖續き

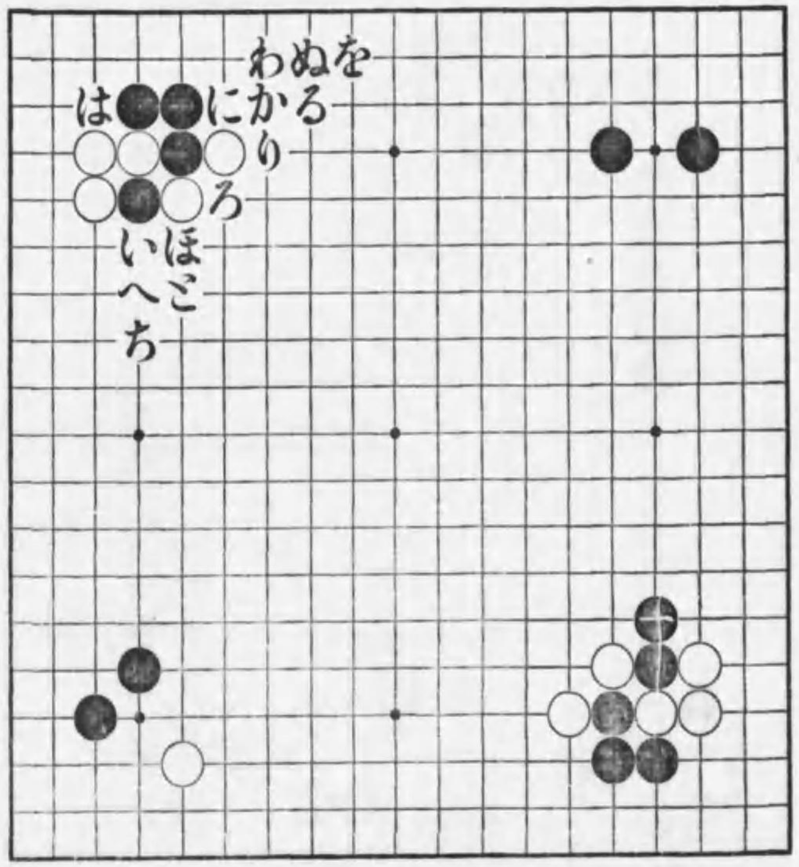
本圖は秀市、秀榮の打碁に出た型で、左下隅の戰績は互角の勢ひと見做されて居る、扨て白十八と單に伸びた場合は黑十九に一著白の姿勢を崩し、而して二一に張るを本型の要領とする事は前圖に述べた處であるが白二二以下には双方手段がある、之が詳細と本圖二二以下の著意、並びに本型の得失に就ては他日述ぶる區分の要領に其説明を譲るとして、爰には單に本型の代表的定型として本圖を掲げるに止めた。



第九圖

▲第十圖

黑一と伸びて戰ふ型は既述の如く黑一と伸びる方面、卽ち上隅面に圖の如く味方の勢力があつたならば、大抵の場合黑一と伸びて戰ふべきが本型第一歩の要領であり、又第十一圖の場合はいに伸びて戰ふも宜く、或はろに截つて交緩するも不可なく、要するに場合次第に遣つて宜いのであること本型第二の要領である。但し爰に注意せねばならぬ事は征當りの關係である卽ち黑いに伸び、白は黑に白ほ黑へ白と黑ち白り黑ぬ白るとなる時をに伸び、此時白わに刎ねなばかに截つて、外部の白を征にし得るや否やを見る事が必要で、若し此征が甘くゆかぬ場合は、第十圖に於ても、本圖に於ても黑一子を伸びて戰ふは不利であるものと記憶されたい、是が本型第三の要領である。



第十圖　第十一圖

▲第十一圖

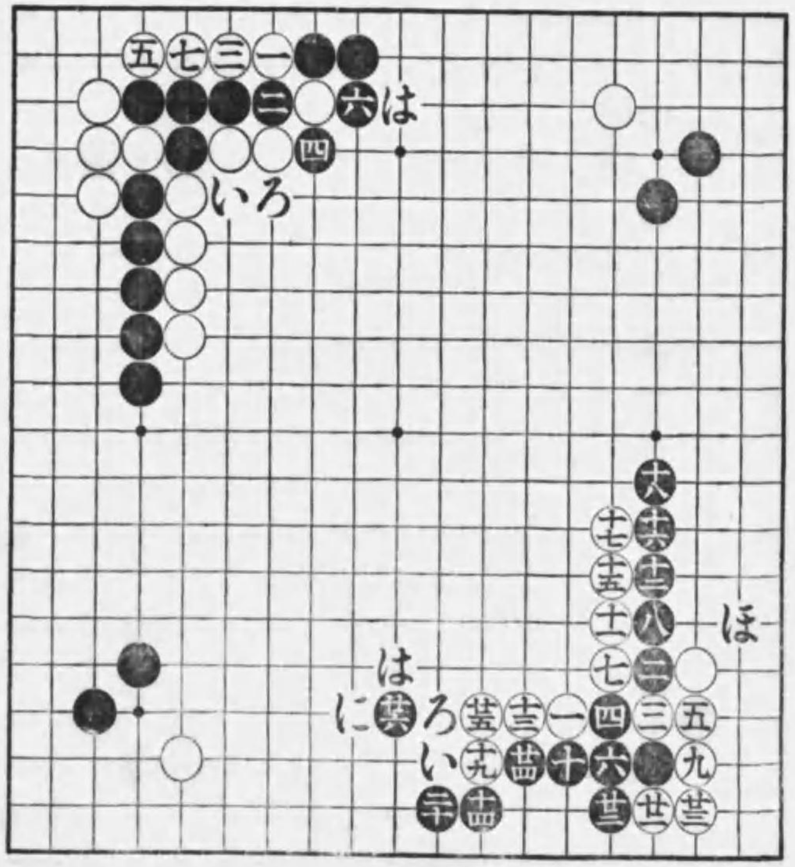
白十一、一躰押手は夫れがよし四の筋であつても、依て敵に地域を構成せしむる場所では有利な方法で無い。況んや圖の如く五の筋を押のであつては更に感心しないのである。唯爰では此十一に得た勢力を利用して下邊の黑に臨まうと云ふ意に出た著である。

黑十四、白が一著でも圖の如く上部十一に押を打つた後十三に伸びたなら、白の鋭鋒を避けて斯く十四に斜走する事、既述大斜要領の一である。『十四の手は本來を云ふと不利なる二の筋に就くものである上に、白に響かぬ緩い手であるから實は二四に押たいのであるが、惜ひ事には爰で二四に押は白の勢力點に向つて直接戰ひを挑む手重い著となるので、結果は既掲の圖面となつて黑が不味いのである。』

白十五、十七は前述の五筋を押進む不利な著であるが、爰では依て中腹に勢力を收める意匠に出たものである。

白十九と尖み頂ける手は、黑に譜の如く二十に伸打れる場所ではよし二一、二三の劔粘ぎが打てるにしても感心しない型である。

黑二四は之を**い**に曲げ、白**ろ**黑二六白**は**黑**に**と打つもある。



第十一圖

參考圖甲 ㊅粘

尙ほ本型の利害を申すに、白は下側に於てこそ黑を二筋に就かしむる等の壓迫は加え得たものゝ、上部に在つては不利なる五筋を押た結果、黑は上隅の味方と相俟つて、右側全躰の釣合が甘くいつて居るから、圖は黑有利な分れである、尙ほ黑は隅に**ほ**と一著先手を利かせる利益がある事を承知されたい。

▲參考圖 甲

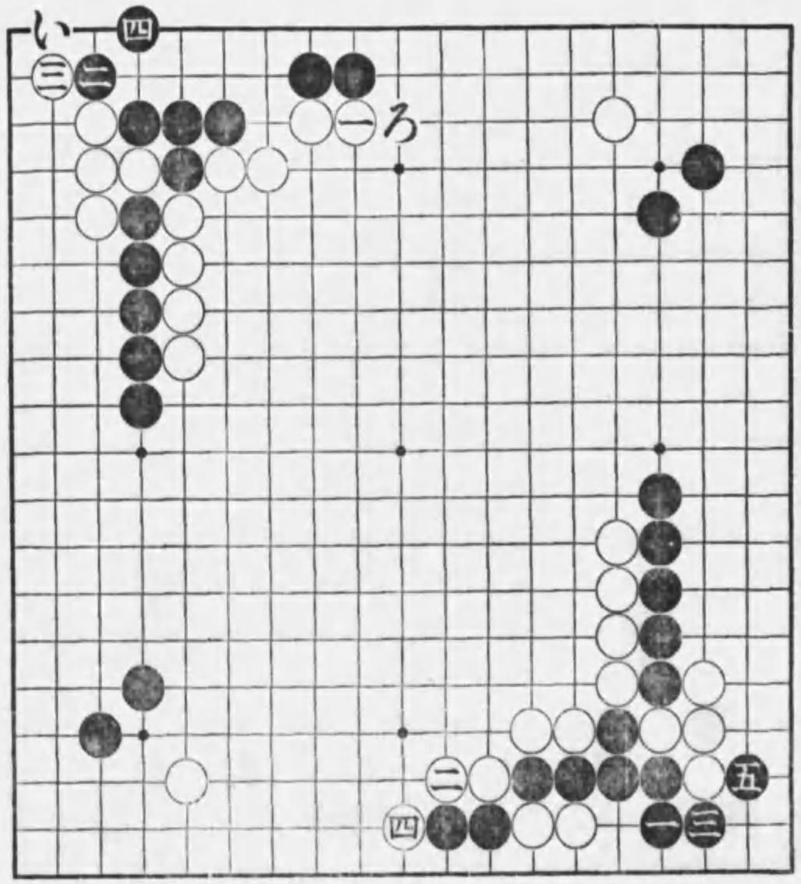
十一圖白二一の手で、斯う一と劔出して來たならば二、四と截り、以下八迄となつて黑宜いのである。『尙ほ白五を六に伸たならば**い**に截り、白**ろ**黑**は**と打てば宜い、初學者の爲に一言す。』

▲參考圖 乙

黑四、參考圖甲白三の時黑四を以ては圖の如く、一に折曲るもある、さすれば黑五迄となつて、外側に失ふ所は隅に之を償ひ得て餘りあるから、本圖に據る方黑一層働きとする。但し場合に依る。

▲參考圖 丙

又白が圖の如く一に押し來たならば二に劔ねて四に懸粘ぎ、此時白**い**ならば**ろ**に劔ねて宜い。



參考圖丙

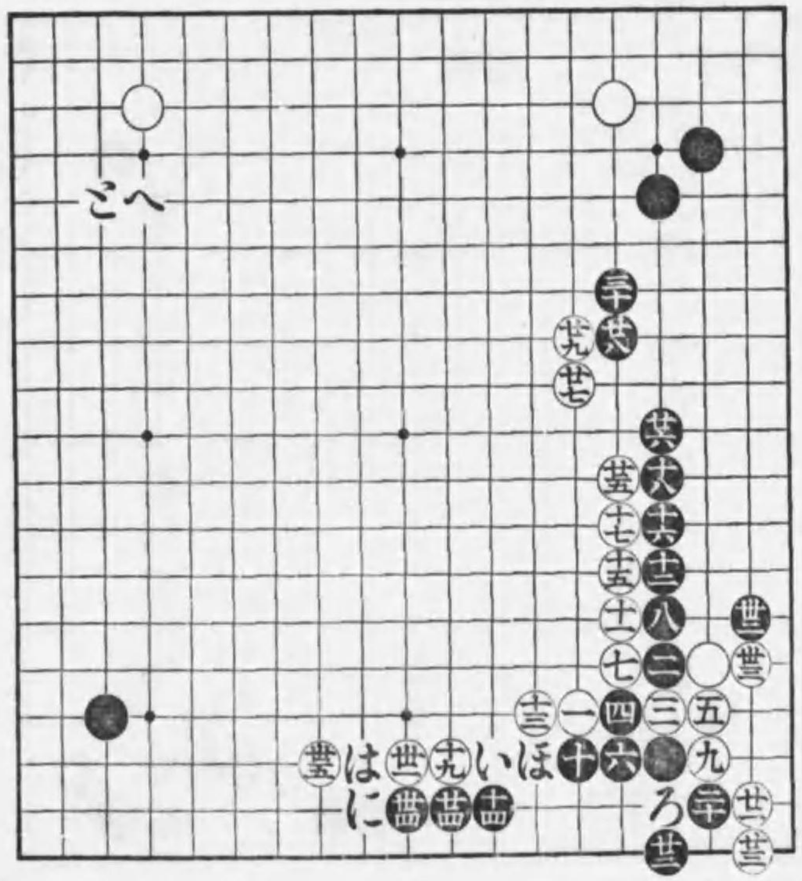
參考圖乙

▲第十二圖

白十九の掛けは著者が發見した手段である、其出所を申せば、斯著をいに尖頂ける前掲十一圖の型は、隅に刎粘を利する換りに黑を易々と中側に進展せしめて了ふ、ツマリ部分に利を得て之を大勢に失ふものである、されば十九の際に當つては、何としても下側の黑を壓倒し、依て中腹中央面に亘り大勢力を占むる手段がなくては白勘定に合はない、ソコデ十九の發見となつたのである。

黑二二はろに粘ぐと利害孰れはあるが、圖の如く打つ方、白二三に下らねばならぬと云ふ手の極りがつく利益がある。『白二三に下らねば黑三四の行びを省略し得』

白二五以下二九迄運び、而して更に轉じて三一、三五と下側に就いたのは順序の運びであるソコデ本型の利害を申すに白十一以下二五迄五筋を押した事は白の不利免がれぬ所であるが併し茲まで押して更に二七、二九と徹底的に上部から押し倒して了へば、却つて右上隅に尖み備へ在る黑の二子を重複に化せしめて居る委であり、更に下側に在つては黑に十四以下三著不利な二の筋に就かしめて居るから、本型は前圖と異つて優に實戰に使用し得る形勢である。溯つて白十九を若し三一の



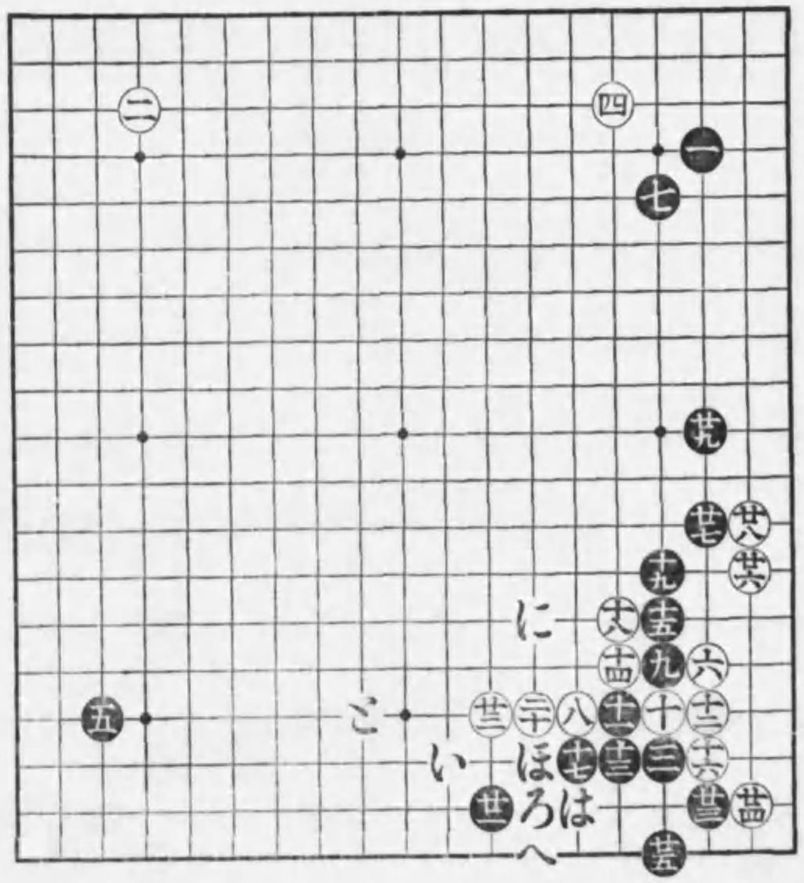
第十二圖

所に打つたならば、黑は二十、二二の刎粘を了したる後三四に頂け、白はの時左上隅に懸り、而して他日白にに押へなば、普通は二四に粘いで應ずべく、若し急を要したならばほに押し沿ひて先手を取る工夫に出づべきである。

尙ほ本圖白三五迄の形勢が實戰に生じたならば黑は爰で左上隅へ或はとに懸るを本局勢に於ける最好處とす。更に黑の爲に一言する事は、本局勢で、白若し强ひて中央に地域を作す策戰に出たならば、欲するが儘に之を與へ、而して外方から徐々に地域を狹ばめる方針に據るを肝要とする。

▲第十三圖

白二二、之亦著者發見になる手段である、ソコデ斯著の趣意を申せば、此時黑本定石第八圖の型を應用していに尖めば、直ちにろに頂出し、黑はの時、爰中心點にに構へ、黑右側に備ふる時ほに粘いでへと交換し、而してと等より下側の黑を襲擊せんず意匠に出たものである。――續く――



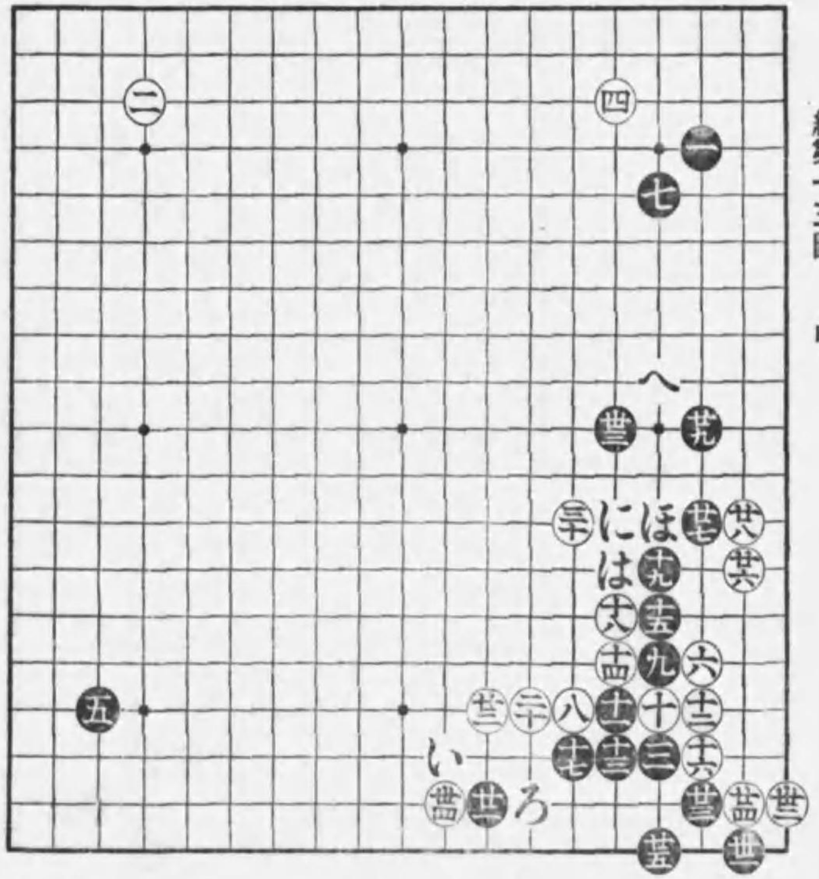
第十三圖

▲第十三圖前圖說明續き

白二二は面白い意匠で、本型中黒に取つて尤も嫌やな手段である、さて黒は之に對してドウ應戰するかと云ふに、圖の如く二三、二五に刎粘ぎ、活を得るの傍ら隅の白に迫つて打つが宜い、若し之をいなどに尖めばろに頂け出されて、前圖に述べた如く、白の術中に陷るのである。

黒二七は強くはに折曲げる手と、圖の如く尖んで二九に飛び去る穩かな手段との二種ある、所で黒二七は二八に頂ける利き手ある處を斯う尖むのであるから、本來より云へば筋違ひの趣きであるが、此形勢にあつては姑らく讓つて斯著に出で、次に二九に飛ぶ意匠を採つて別に支障が無い、先著を布いた局面として。

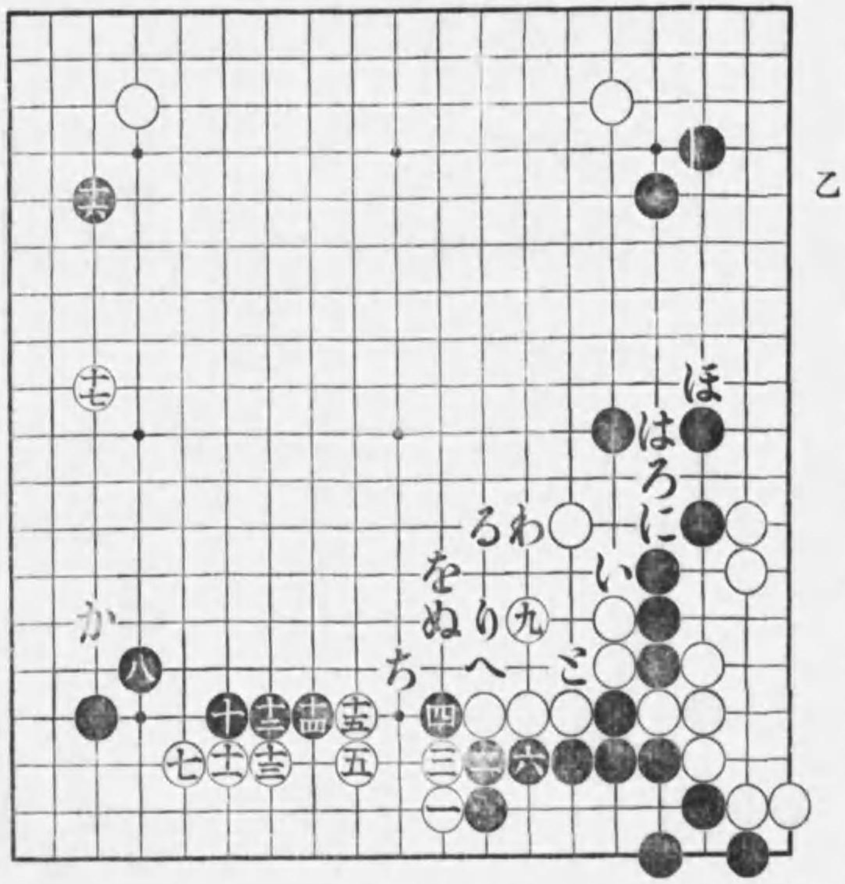
黒三三、爰で又遣り方に二種ある、一ッはにに尖み頂ける手、一ッは圖の三三に飛ぶ著である而して黒三三の著意は、白にに並び黒ほの時白へに肩側を衝く襲擊に備ふると同時に、此處一體の姿勢を統べた良著で。大斜定石法にも掲げてある。併し退いて考へると斯著にも難はある、卽ち稍や緩に失する嫌らひがある從つて此時白に下側三四に頂けられると、大分難かしいものになるのである。以下



續第十三圖　甲

の變化次圖に掲ぐ。

乙圖　さて白に一と頂けられると黒は二と、突張つて四と截る外無い、そこで白は五となるのであるが、爰が實に黒の對かしい處である、黒の本意としては何とか爰を先手に凌いで七に締りたいのである、而してそれが方法として、手筋上六の一著は九に置きたいのであるが、之は白にいと沿つて應ぜられるとろに覗いてはに突出し次ににに突張つてほに截り付けられる手段が生じて來て、味くゆかぬ。又黒八は爰に在つても尙ほ九に置く筋を狙ふべきであるが、今に於て爰に打つはへに曲られ、黒と白ち黒り白ぬ黒る白を黒わとなる時、左下隅かに詰られて黒面白くない、何故なれば黒中腹に白の三子を屠つたのは宜いが、之は既に六の一著を費した後の話である事と、爰の提り工合が重復して居る上に未だ種々の味が殘つて居るからである。黒八の尖みは隅を固めると同時に、白の疵を狙つた著で、斯う構へられると白も九に一著を補ふより無い。——續く——



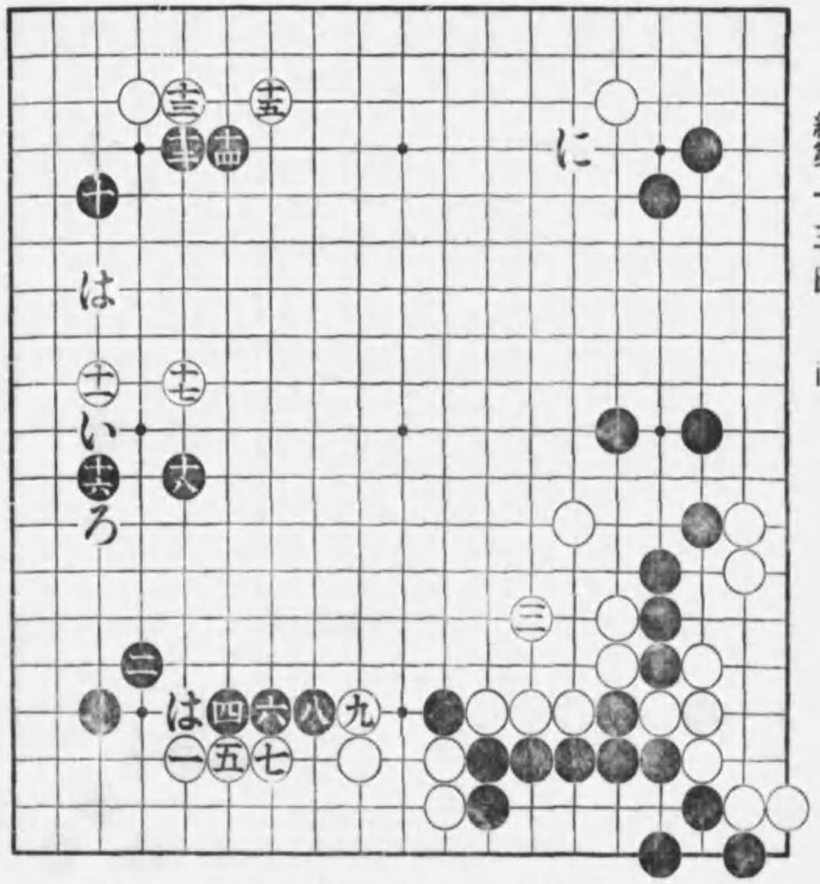
乙

▲續第十三圖　丙　白三迄の說明前頁參照

黑四以下八迄、敵を低からしめて先手に白の模樣を消し、一轉して十と左上隅に懸つたのは好手順である。次に白十一に對し十二、十四と掛伸びの定型に出でゝ此隅に勢力を加へ、而して十六、十八に白を攻めて左上隅に失ふ處を爰に償ふ型によつたのは此際機宜を得た措置で、此形勢となつて黑尙ほ先著の勢ひを失はぬ局勢である溯つて白十一をいに割打ちしたならばろに詰め、白はならば十二、十四に掛伸びを打ち次に一轉して右上隅にに掛け、白を低からしめて右側に大模樣をなす作戰に出でゝ宜いのである。尙ほ最初白一を高くほに懸つて來たならば普通に隨つて一に頂ける定石に出て宜い。

▲第十四圖　甲

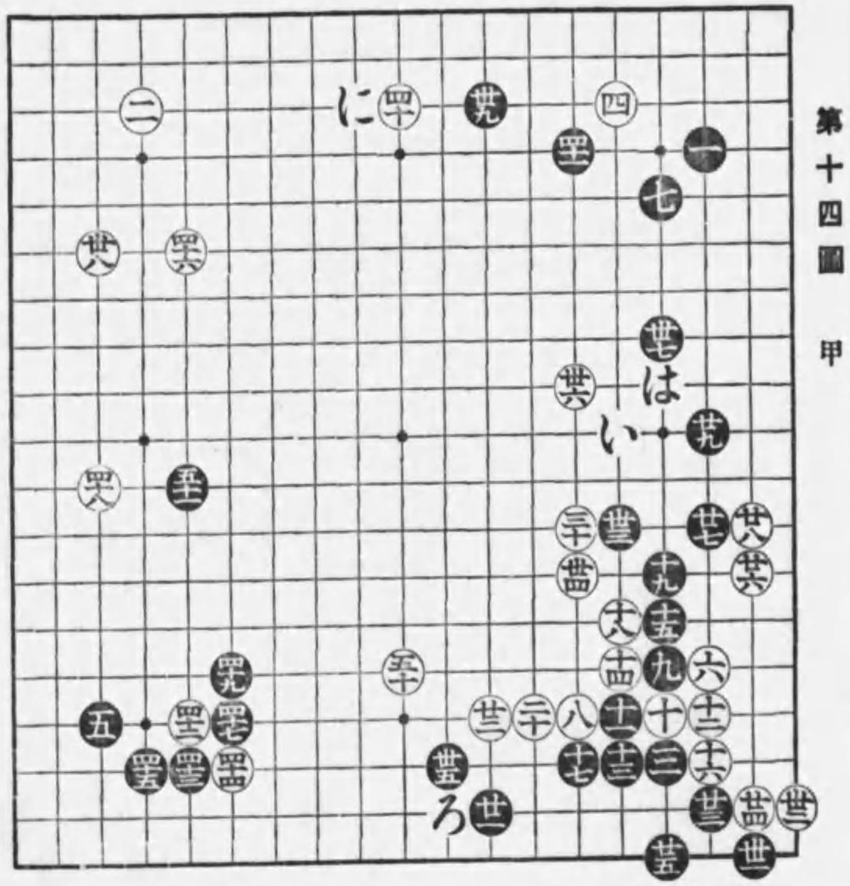
黑三三、之を前圖いに備ふるは只良著と云ふまでゝ敵に響かぬ、而も爲に白にろと封鎖さるゝ手痛い攻擊を受ける、元來黑いの飛びは、既述の如く白に三三と並んで先づ形を崩



續第十三圖　丙

され、而してはに襲擊さるゝに備へた著である。而も圖の如く黑三三白三四と交換し得るものとすれば、白はの攻擊はいに飛ぶを得て些の痛苦が無くなる。されば黑三三を以てはいに飛ぶよりも、圖の著に出でゝ三五の急所に先鞭する方、黑三七までとなつて多少右側の形容を抑損するまでも、前圖に比して働いて居る勘定である。黑三九は白の尤も手薄き四の一子を攻擊し、白尋常四一に尖み應せば、ににに二拆して白の模樣を消す意匠に出たものである。

白四二、四四と打ち棄ての手法に出たのは依て運びに一著の利を得る策戰に出たものである、黑四九の伸切は所謂本手で後顧の患を斷つて爾後の行動を自在ならしむるを目的とした著である黑五一は白の大摸樣を消すべく、白の尤も薄弱である四八の一子に鉾を向けたもので、此局勢黑は徐々に外方より白の大模樣を消す策戰に出づるを肝要とする。



第十四圖　甲

▲第十四圖　乙　白三八迄前頁參照

黑三九、前頁では之を上側いに挾み迫つたのであるが、若し穩かなるを云へば、圖の如く三九に締り、次に四一に形勢を張るに兼ねて、爰白模樣を消す意匠に出で、而して四三に白の大模樣を外面から消削する策戰に出づるを可とす。『黑四三の一著は、敵の大模樣を消す場合、毎に用ひらるゝ手法である。』但し白四二を以て四三に飛び構ふれば、黑換つて四二に據るべきである。

▲第十五圖

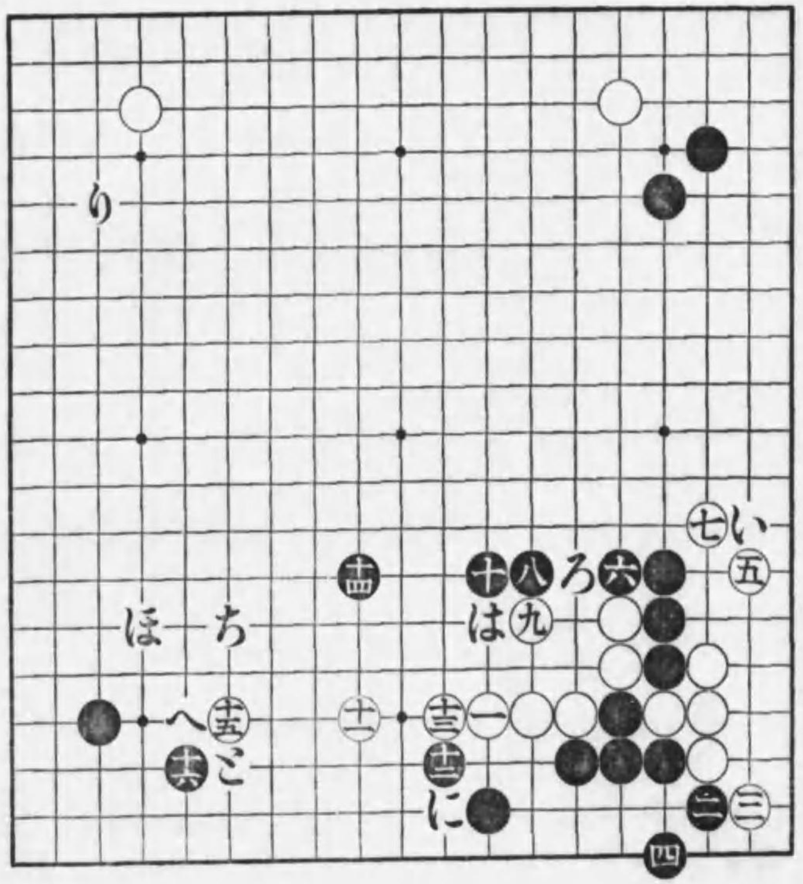
黑六、之を七の處に尖むは前々圖に述べた如く穩當な手段ではあるが、いに頂ける利き手ある處を、七と尖むのであるから、尠くも幾分の筋違ひたるを免がれぬ。依て之は白の手薄き中石を擊つべく、圖の六に折曲るを本來とす。

黑八、十は一見緩きが如くで實は手厚い著である。黑八を若し普通の筋合九に覗いたならば、白にろと刎ねられて剩り形となるのであり、又十を以てはに刎ねたならば、白にろと割込まれて之亦後が面白くないのである。

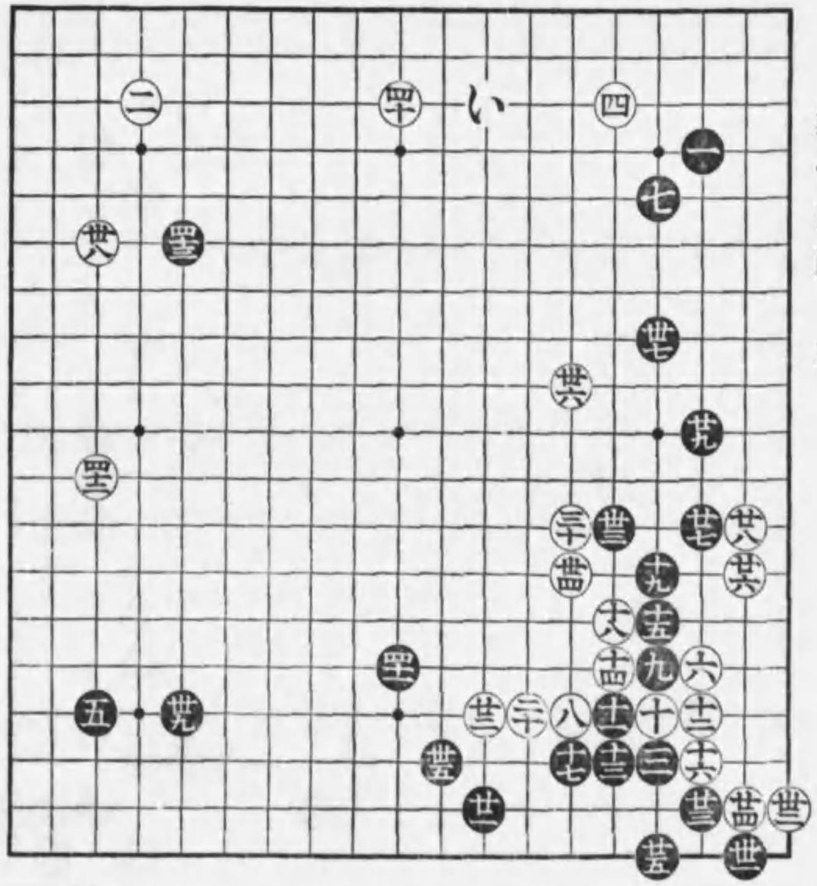
黑十二はにに先手に頂け塞がれるを凌いだ著であつて、次の十四は中央に形勢を占めつつ白に攻擊を加へた著である。

黑十六は普通に從つてほに構へるを穩かとするのであるが、爰にては十六に根據を占めて、白に迫る意匠を採つたのである。但し此時白へならばとに伸びて戰ふべく、又白とならばへに押し、白ちの時一轉して左上隅りに懸り打つべきである。要するに黑十六の一著は、りに先鞭するを目的とした著である。飜つて黑十六を穩かにほに應じたるものとして局勢を案ずれば、黑は下側の攻と中腹の厚味を宜く利用すると否とに依て、勝敗決せらるる形勢であり。又圖の十六に依れば、普通局面同樣の競り合に依て、勝敗定まる局勢である。

尙ほ本型白一の新手に對しては、既述の如く二、四に懸粘ぐを肝要とし、又白五に對しては圖の如く、六に折曲る本圖を尤も可とするのである。



第十五圖

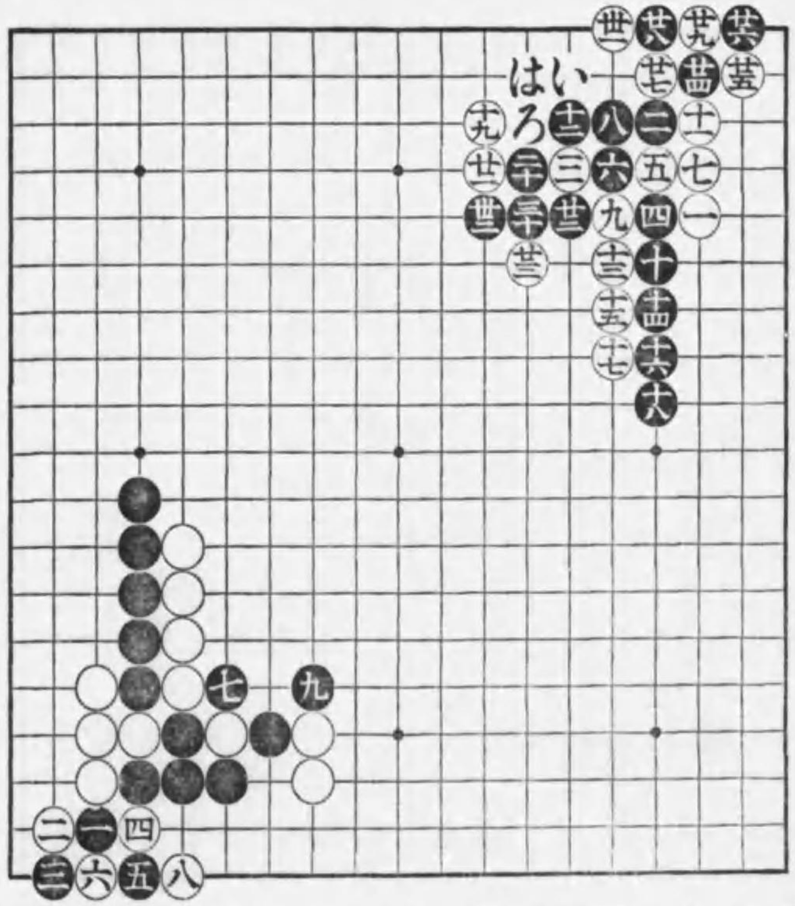


第十四圖　乙

▲第十六圖　甲

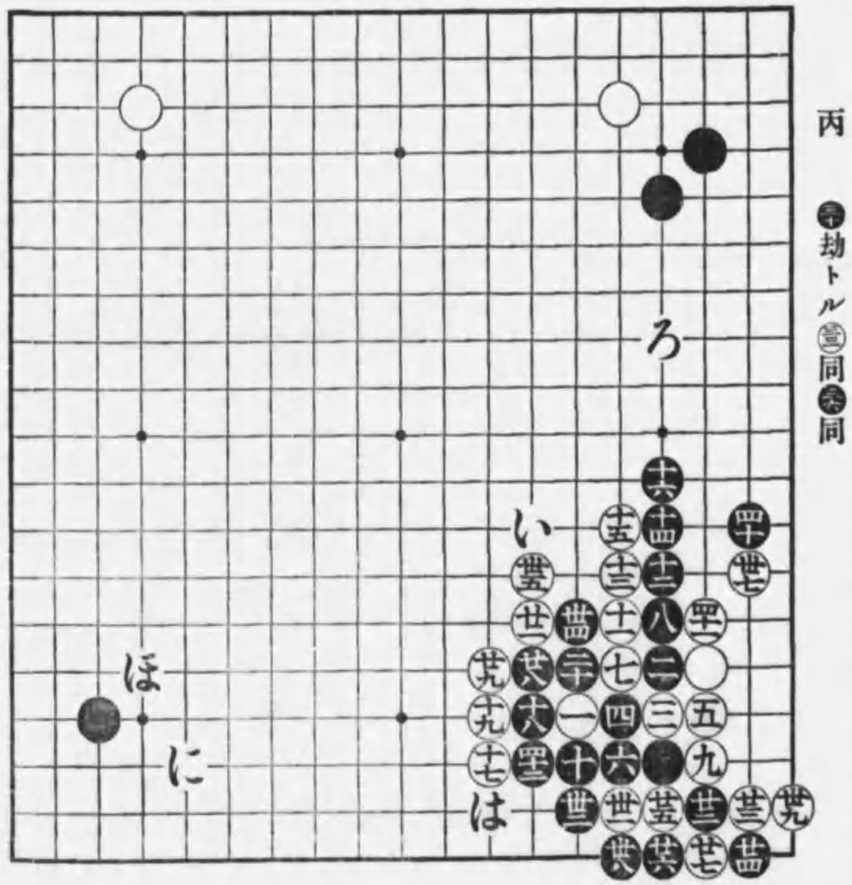
白十三以下十七迄四本押附け、而して十九に迫る型もある。併し之は無理で黒隅の劫を利用して、二十以下三二迄の手順に出て圍みを破れば、黒宜いとなつて居る。但し黒三十の時白若しいに頂けたならばろに粘いで眼を作るを肝要の著とする、卽ち白は黒三二と打ち、隅の劫を睨めば宜いのである。

乙隅　黒七と提るに先んじて一、三と直ちに劫に據る手段は秀哉氏の發見になる手順であるが、之は甲圖の型に比すれば紛れなきだけ此型の方が宜い。



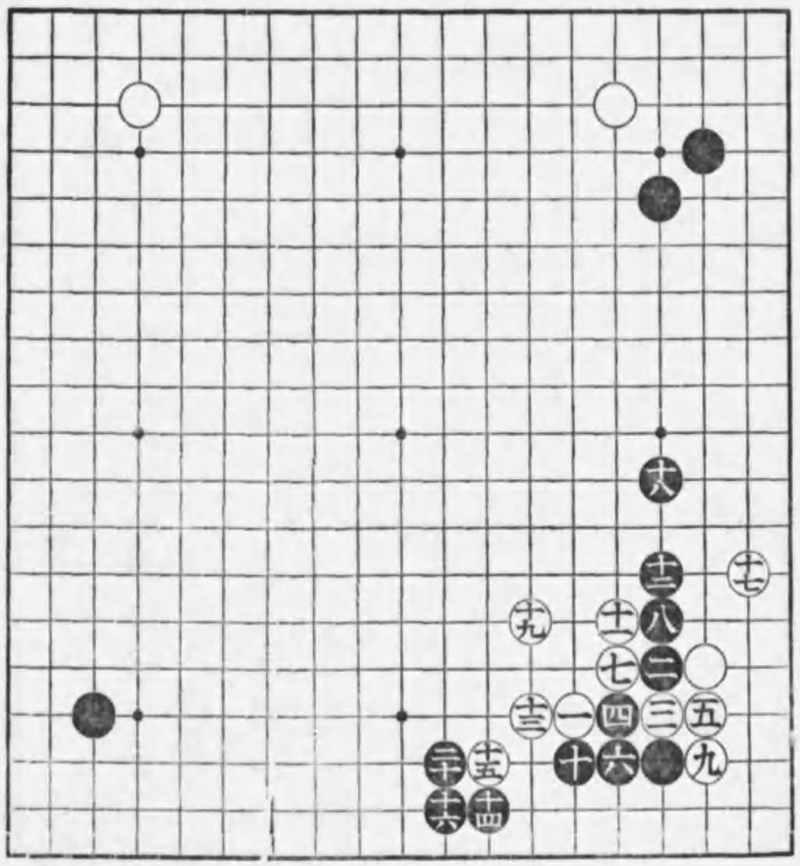
第十六圖　甲

丙隅　黒二十と打拔き、白二一と掛けて後ち二三、二四に劫を打つと、黒二八に劫立した時白二九と塞ぎ止める手段がある。さすれば此結果黒四二迄の經過となり、爰で白いに補ひ、黒ろと備ふる位のものになる、秀哉氏は之を以て白有利なりと云はれて居るが、之は一寸賛成が出來かねる、何故かと云へば何分白は始め七以下十五迄、五筋押すべからずと云ふ法度を破つた不利がある。而も下側に於て實質上の損害――持込み――を被むり、且つはの劫込みまで利いて居て此處甚だ味が惡い上に、右側は黒既に地域を作して居るのであるから、理論上より云ふも、此形勢となつて、黒の不利である所以は毫も之を認める事は出來ぬ、さりながら紛れを避ける點より云へば、前述の如く乙の型に據るが宜いのである。尙ほ本圖黒四二の時白いに黒ろと構へたる際、白左下隅にに懸つたならば、黒一應ほに尖み居るを要著とす。



▲第十七圖　甲

『黒不利の圖』本型は故高崎泰策氏の著書に掲げてある圖であるが、而も本型は既掲第十一圖に比べて黒不利の感がある。之は畢竟黒十八の一著に基因する。一體著手は關係あつて始てソコに必要を生じて來るので、關係上未だ其の必要の迫らないに先きだつて夫れに備ふるは、所謂調子外れと云ふ手になるのである要するにソコに關係が出來て始てソコに備ふる必要も生じ、意義も生じて來る。之を調子に合ふ著手とも云ひ、正著本手とも云ふのである、尚に著手なるものは斯う云ふ次第の許に打點さるべきものである。然るに黒十八の飛びは漫然たる著である、而して白に何の障りもなく悠然と二六に備へを全うせしめた、斯くては黒律に合て居ないだけの不利を免がれぬ譯である。然らば黒十八をドウ打てば宜いのであるか。

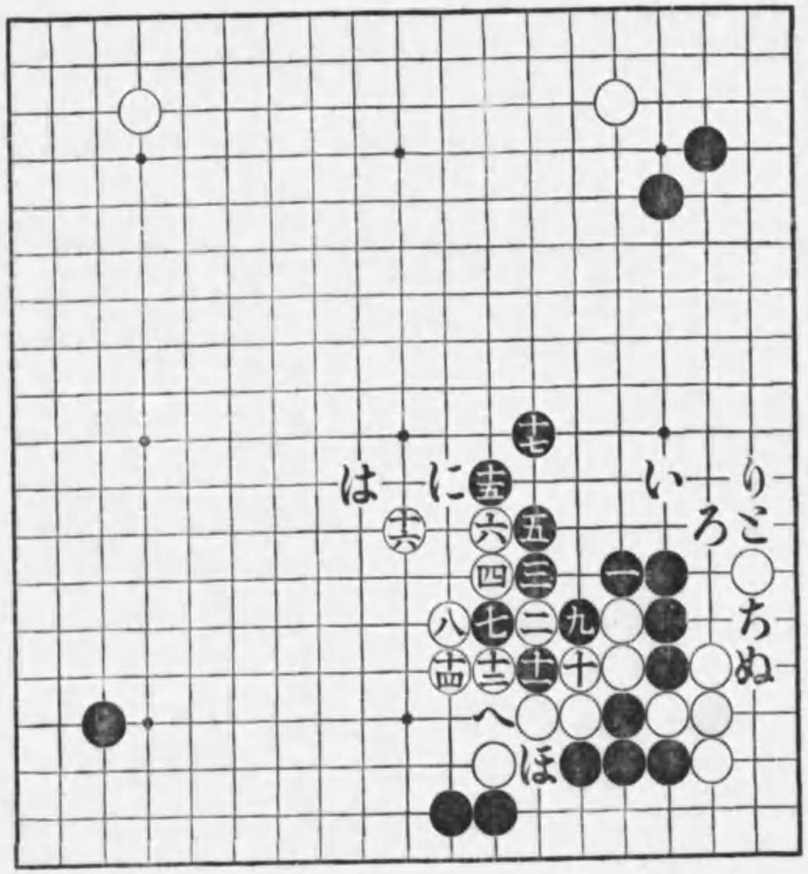


第十七圖　甲

乙圖　黒一、之をいに飛ぶは前述の如く、白に些の響く處が無い、謂はゞ守備一點點張りの著であるから、其良否は姑らく措いて緩著たるは免がれない、依て此形勢に在つては第十五圖黒六の著意を採つて、圖の如く嚴しく一に折曲げて白に當るべきである。然るも白は尚ほ二に飛ぶよりない、ソコデ更に三、五と頂伸びて追擊し、以下十七迄の變化に出でゝ此形勢黒有利である。

尚ほ此時白ろに尖んだならば、はに掛けて更に此白に迫るべきであり、又ろにせずにに綽ねたならば、一著ほに當て、白にへと粘がせて、とに頂塞ぎを打つべきである。但し黒との時白若しろに綽ね出さばちに頂け、白り黒ぬと打つて宜いのである。

溯つて白六の押を八に懸粘ぐもある、之が說明は次圖に讓づる。

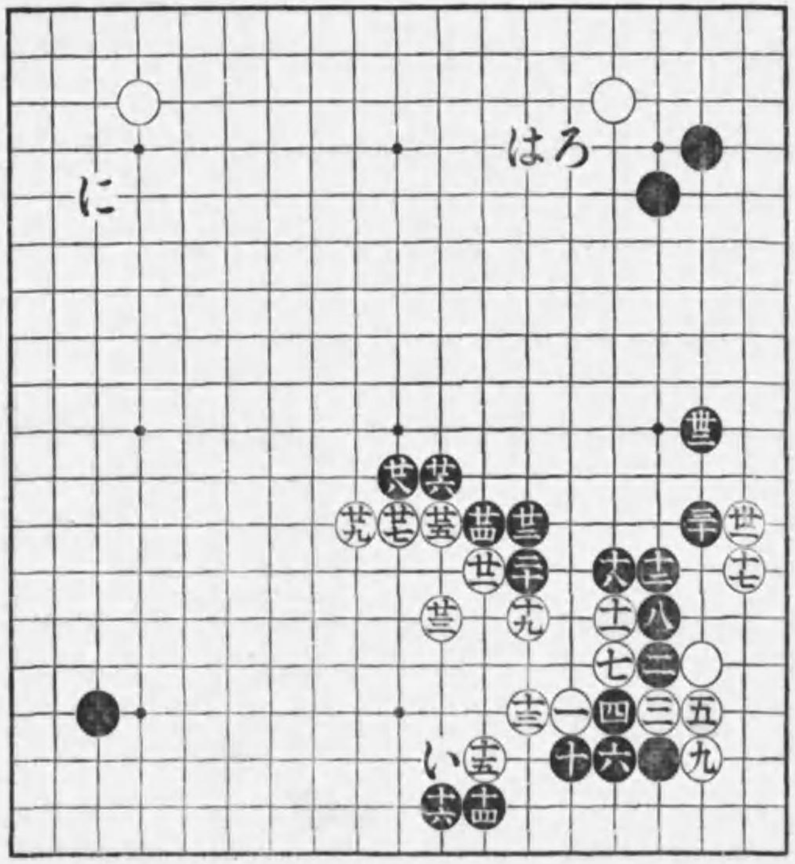


乙　黒ツグ

▲第十八圖　前圖續

前圖で言ひ洩らしたが、黒**十八**は本型肝要の一著である、夫れは一著二手の働きをするからである。卽ち斯著あるに依て、白**十九**にするも第十七圖甲に於ける如く、下邊に黒**い**の一著を要せないからである。

扨て黒**二二**の時白前圖の如く、**二四**に押さないで、圖に於ける**二三**に懸粘ぐもある。併し之は稍々重復の姿勢である上に、進展に遲くるゝもので、之に對して黒は**二四**以下**二八**まで壓迫を加へ、一轉して右側三十、三二に備へて爰に大模樣を張れば宜い。斯くなれば白は右上隅**ろ**に掛けられては堪まらぬから、先づ**は**に備へる位のものであらう、依て黒は左上隅**に**に懸つて此形勢黒有利である。本型は之を要するに、白**十七**に對して嚴しく**十八**に折曲るを生命とする。



第十八圖

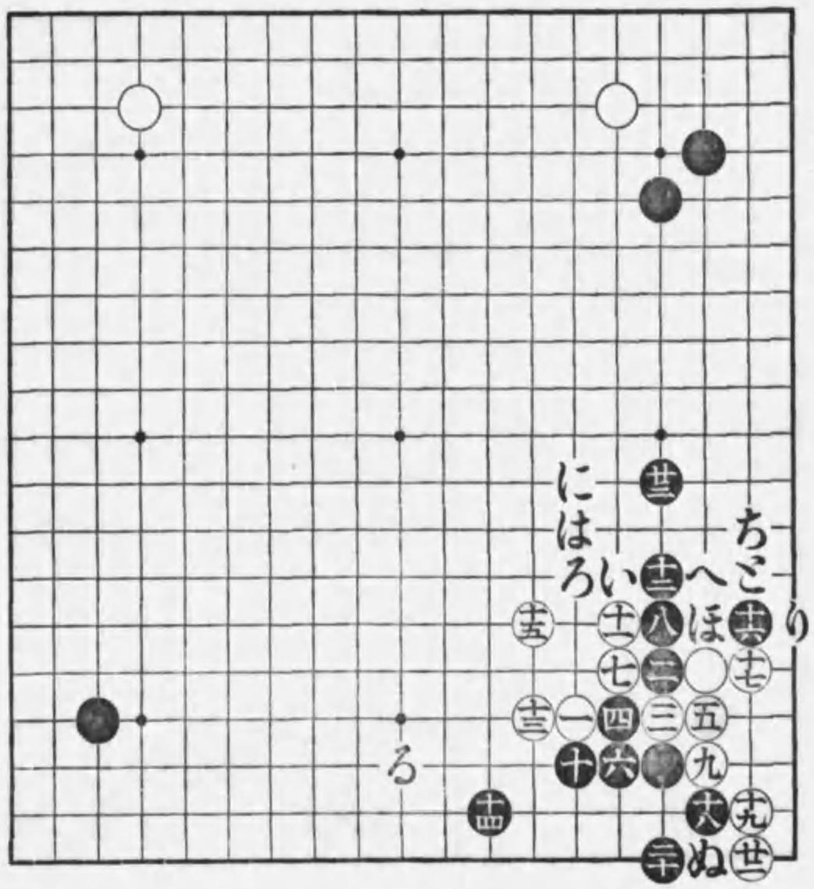
▲第十九圖

白**十五**は正著で、自家の姿勢を整へると同時に、黒より**い**に曲頂けられる急所を凌ぎ、一面下側の黒に攻を構へた著である。

黒**十六**、白**十五**は佳著ではあるが、現在には何等黒に響いて居ない、依て黒は其隙に乘じて先づ**十六**に利かせ、更に**十八**、**二十**に先手の刎粘ぎを利かせて後、**二二**に備へを固めたので、斯くなつては此隅黒些の失ふ所がないのである。

尙ほ黒**二二**を以ては、一見**い**に曲り、白**ろ**の時、**は**に刎ねる方可なるが如くであるが、之は白に**に**と頂けらるゝ恐るべき手段があるのである。

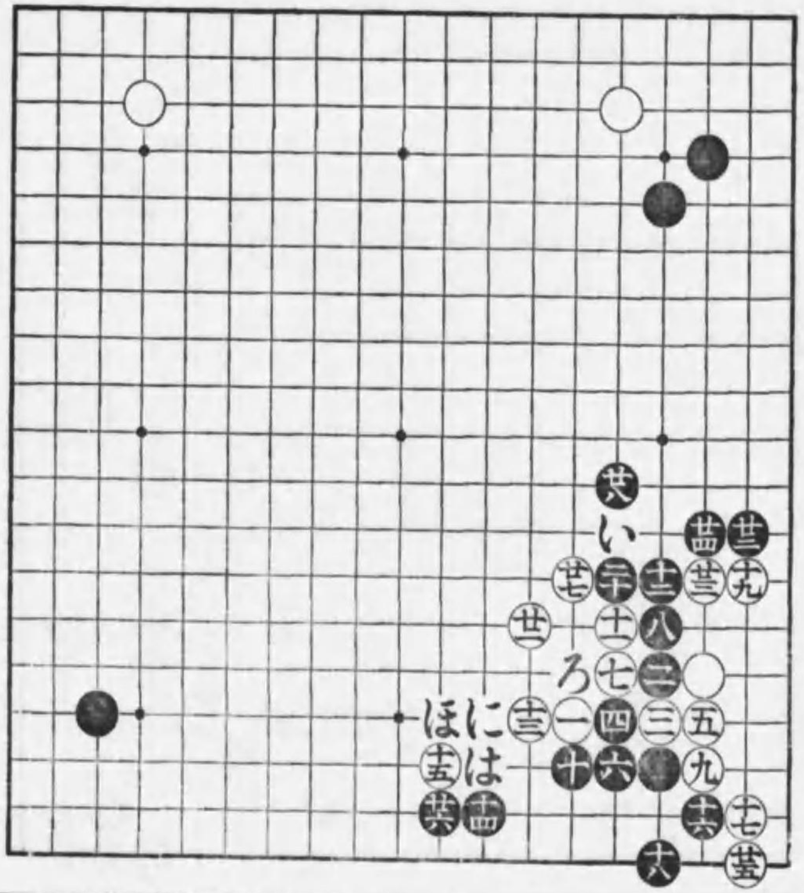
溯つて白**二一**を**ほ**にせば、黒**へ**白**と**黒**ち**白**り**となる時、矢張り**二二**に備ふべく、又黒**二二**の時白若し**ぬ**に當てなば**る**に進展し、**十八**、**二十**の二子を棄てゝ打つを肝要とす。



第十九圖

▲參考圖　一

白十五は元來筋違ひの手である、卽ち爰で十五と掛けるには、ドウしても二十と押し、更にいまで押して後でなければ、組織に於ても、姿に於ても、物にならない、併しソウ押して仕舞つては、十五に斜走する手の働きは定まつて仕舞ふ、ソコデ單に十五に掛けて應答のドサクサ紛れに、或は二十に押し、若しくば十九に斜走する等、時の模樣に依て遣らうと云ふのである、併し前にも述べた如く、白十五は虛手であるから、黑にドウ打たれても不可ぬのである。而して尤も簡單明瞭、紛れの無い應答としては、爰で黑十六、十八と刎結ぎ、白十九の時二十に折曲げるが宜い、此折曲げは白の急所を衝く肝要の一著である。黑に斯う曲げ附けられては、白二一に備へざるを得ない、ソコデ二二、二四に頂け塞ぎ、而して二六に伸び此時白二七なれば黑二八に飛び備へて、黑十分の形勢である。尙ほ白二一を二四に尖んで來たならば、黑二一白ろ黑は白に黑ほと打つて宜いのである。



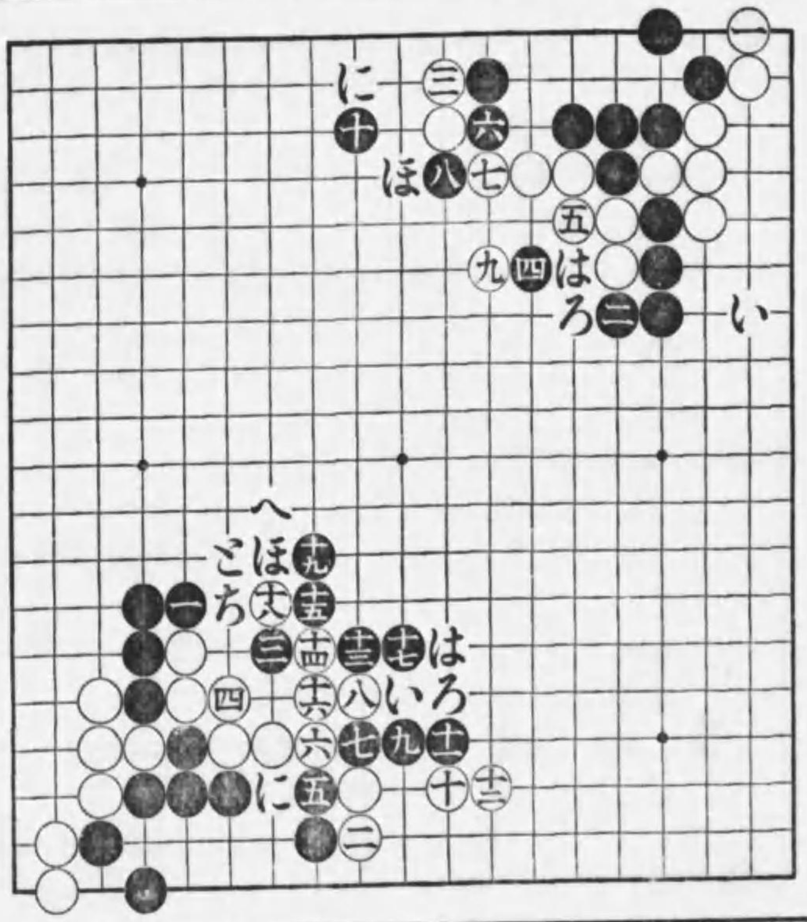
參考圖　一

▲參考圖　二　前圖白十九の手より變化

黑二、白一をいに斜走しないで、圖の一に下つても、黑は夫れに係はらないで、尙ほ前述の要所二に拆曲れば宜い。黑四、白三の押へ込みは無理である。卽ち四以下十迄の手順に出づれば、白閉口するのである。翌つて白五をろに刎ねたならばはに截り、白五黑七と鼻附けすれば宜く、又黑十の時白にに頂けたならば、黑ほに引いて宜いのである。

參考圖　三

黑七の時白若し八に刎ねて、十に飛んだならば、一ッ十一に押して十三と頂けの一著に出れば、此白逃げ路が無いのである。尙ほ初學者の爲に一言せんに、此時白十四以下十八までに働くも、圖に於ける黑十九までとなつて白に凌ぎが無い、假に此時白いに突出し、黑ろ白はなれば黑にに手を詰るとするも、既に提れて居るのであり、又白いをほに出れば一著へに押へ、白と黑ちとなつて宜いのである。



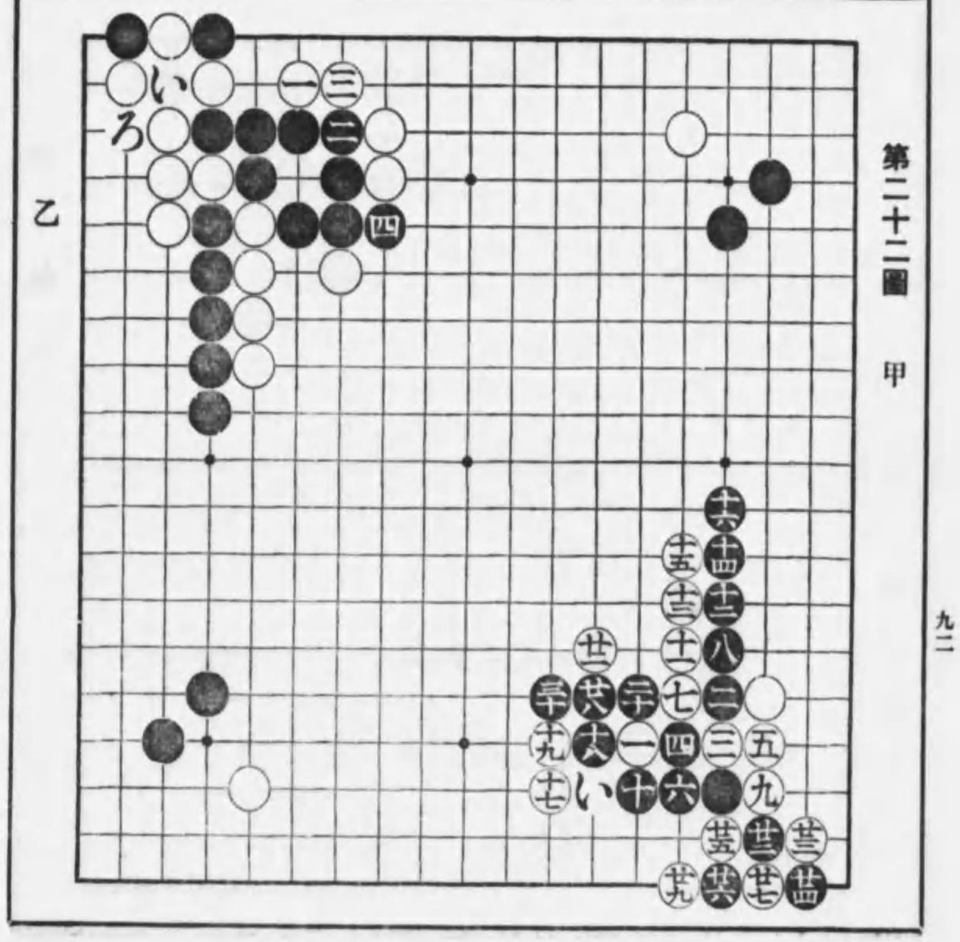
參考圖　二

參考圖　三

▲第二十圖　甲

黑十の時白十一以下十五迄押付け此勢力を利用して十七に迫り打つ型もある、併し之は五筋押すべからずとある所を、圖の如く三本も押し付けて、實質上の不利を先きにするものであり、而して如何に此勢力を利用するものとは云へ、黑に十八と頭を刎ねさせるとあつては、到底白の無理たるを免がれない型である而して之に對する黑の應答としては、二十と一旦一子を打拔き。次で二二以下二六に劫を以て當り、次で二八、三十と縱斷して外方に擡頭すれば宜いのである。卽ち白は、七以下二一迄の五石手重きものとなる而己ならず、十七、十九の二著も黑の堅きに接觸した惡手となつて居るからである、尙ほ白は二九と打拔く手で、乙圖の如く一に頂けるもある、併し之は働きに似たる惡手である。卽ち之が咎めとしては、黑二と愚集みて眼を持つを要著とする、斯くて黑四に突破して、隅いに提つてろに截る劫を睨めば、白は早晩隅に、一著を費さねばならぬ事となつて、甲圖よりも更に拙い形勢となるのである。

溯つて甲圖黑二十の著を二八に伸びる型もあるが、之は白にいと截られて、先づ愚形を呈するものであり、且つ變化累はしき上に、

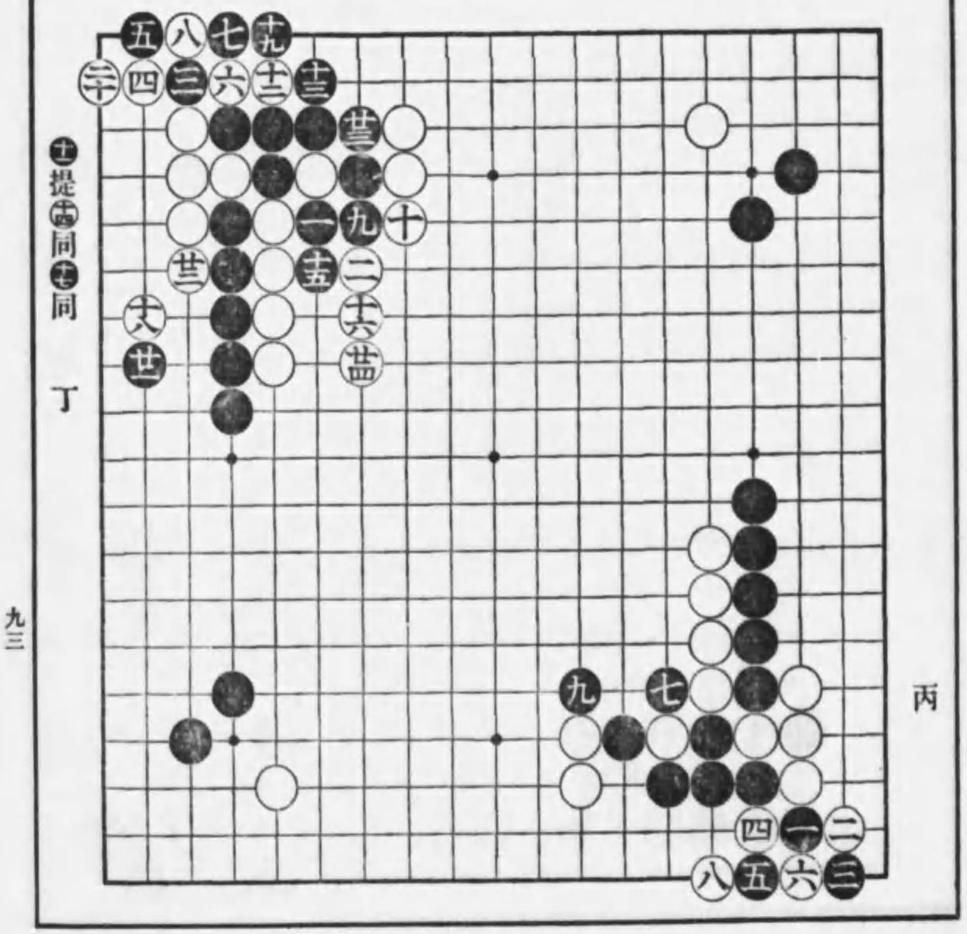


第二十二圖　甲

圖に比して些の利する所がないから、斯型は全々省く事にした。

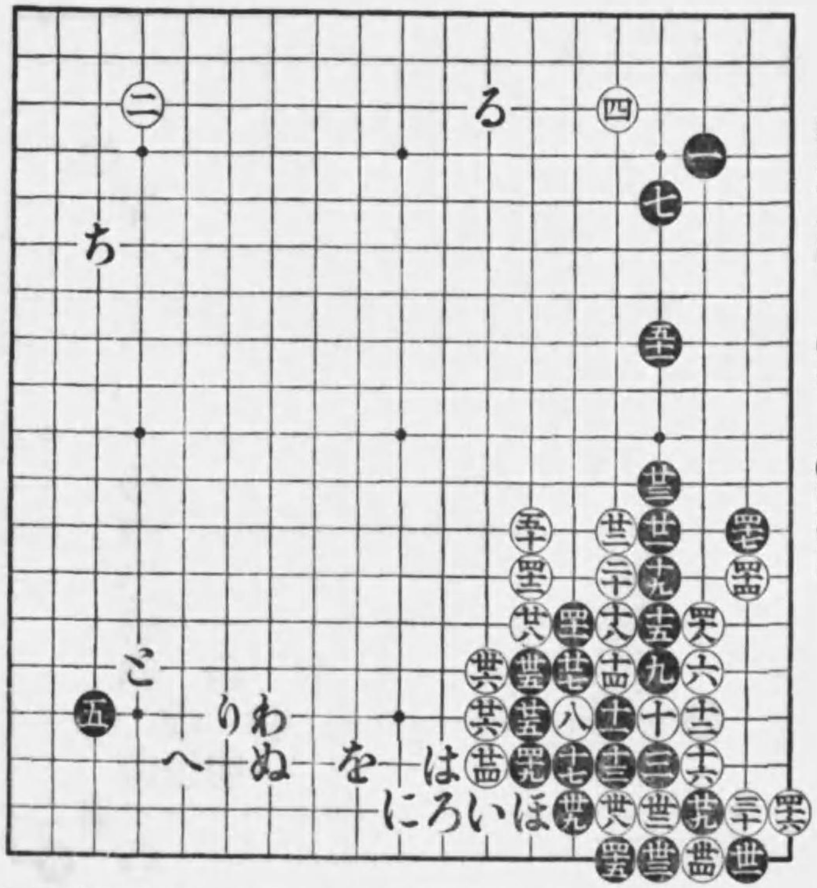
本型に就て秀哉氏は、既に廢刊になつた某雜誌に、例の一、三、五の配置の下に新說を述べて曰く、黑二十と一子を打拔く型は甚だ惡い、之は丙圖の如く一以下五と先づ劫を打て、而して七に打拔き、次で九に刎ねるべきである。從來の定石通り一子の打拔きを先きにすれば、丁圖に於ける黑九の時、白十に押へる新手を打てば白二四迄となつて、黑が大に惡い、卽ち丙圖の如く、一、三、五と直ちに劫にゆく新手に依て從來の大斜定石は根本から破壞された、と云つて自著大斜定石法に痛罵を浴せられた事がある、併し乍ら、丙圖一、三、五と直ちに劫に打つ手に據つて、從來の大斜定石が、根本から破壞されたと云ふ秀哉氏の說は、ドコから割出されたものやら、我等の如き感じの鈍いものには、更に其意を解する事が能きなゐ而して秀哉氏主張の丁圖の振替りとなつて、ドウ云ふ理論上で、黑が非常に不利と見なされたのであるか之亦我等の解し難き處である。

次頁に於て丁圖の得失を述べる事にする。



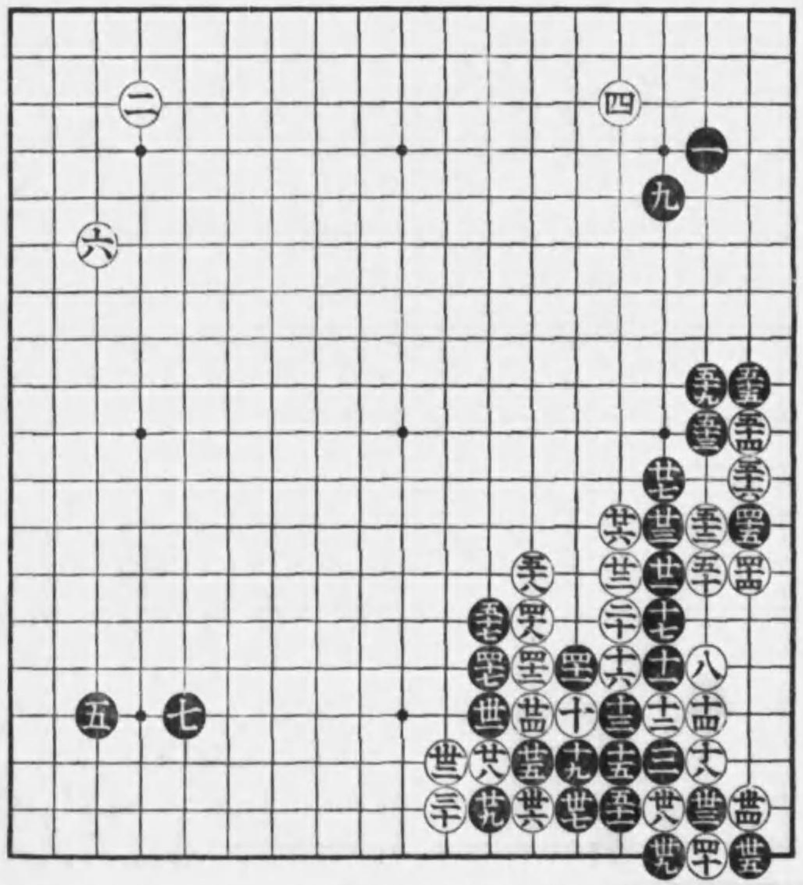
▲第二十一圖　續き

本圖右下隅の戰ひは前頁に述べた如く、秀哉氏が黑甚だ惡しゝと宣傳した型である。成程黑は下側に於て白から狹隘の地に壓迫封鎖されて居る事は、黑決して宜ろしくない、併し此一事を以て黑甚だ惡しゝと斷定するは早計と云はねばならぬ、卽ち白は圖の外勢を得るまでに、尠からざる不利を先きにして居る。其一ッとしては黑に四九へ粘がしめる必要から、四六と下つて黑に四七の頂けを利せしめて居るのであり、又之を全體から、云へば、黑は白三子の提り石の交換に於て、三九、四五の二著が無條件で打てゝ居て、他日黑いに劔ね、白ろならばはの截り若しくばにに頂けて所謂花見劫に仕掛ける手が殘つて居る。要するに三九、四五と只で打てゝ居る事は、殆どほに下りの一著を利して居るに近い効果と見なすべきである。而して一著餘分に打ち得ると云ふ事は、可なりの損害も之を償ふて餘りあるものである。更に本配置となつて黑の强味とする所はその全體が極り付いて居る事と、五一著迄手數が進行して居る事である。卽ち本圖黑五一の時白左下隅へに懸れば、とに尖み應じ白左上隅ちの時一著りに掛け、白にぬと應じさせて、位ゐを低め、一轉して右



第二十一圖　㊀劫トル㊁同㊂同

上隅るに迫り打つものとして、局勢を通觀せよ、黑は現在に自家の勢力裡に、白四を攻擊し居る事と、下側にはいの劔ねを見てをに打込むもあれば、或はわに押付けて白を重複せしめ、白二四以下五十迄に外勢を得た勢力を、半ば以上効果なからしむる事も出來るのであつて、本配置となつて黑何等悲觀すべきものが無いのである。尙ほ之を參考圖に就て云はんに、本圖は既に揭げた處の秀策が、幻庵因碩と對局した時に生じた、黑の失敗圖である。今簡單に其得失を述ぶれば、黑は先づ四一の犧牲を出し、二九、三十の交換に不利を受け四と九の交換亦大に黑利かされて居る上に、三一、四七、五七の三石迄が、危ぶない事になつて居る。卽ち本圖は孰れの点に於ても黑不利となつ居る。而も此局面にて當時の秀策の技倆で尙ほ三目の勝を得て居る、勿論幸運の勝と云はれてはゐるものゝ、其原因とする所のものは、手數が進行した關係上、斯くなるも尙ほ、先著の威力が幾分殘つてゐたものに相違ない、是に依て之を觀れば、第二十一圖の形勢となつて、黑に些の憂ふべきものがない事が一層明らかに解せらるゝのである。

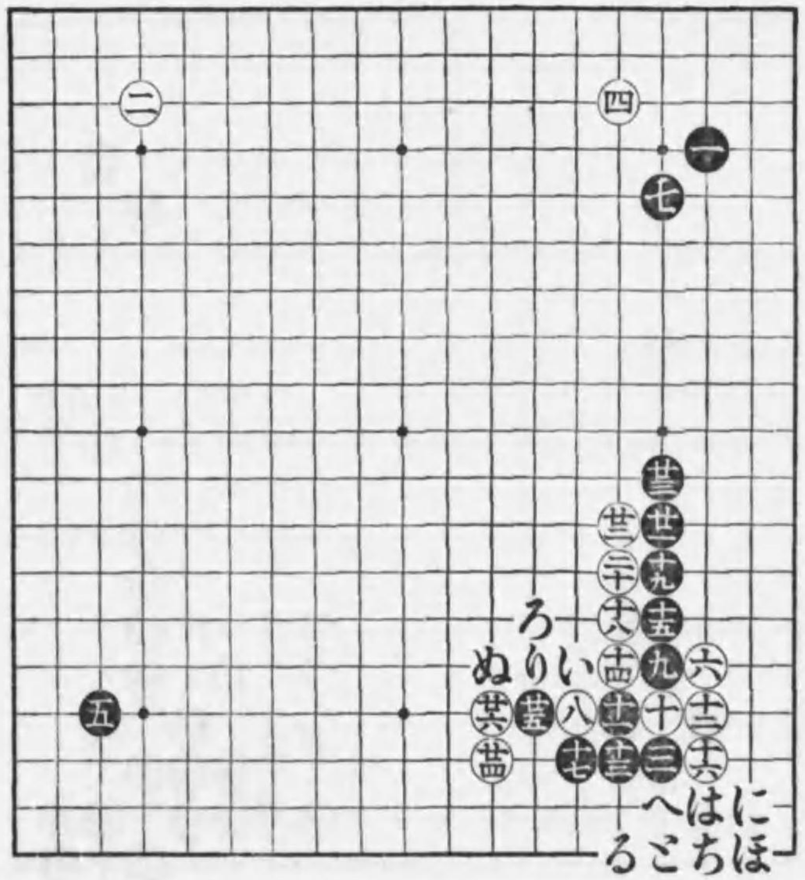


參考圖再揭　㊀劫トル㊁同㊂同

▲第二十二圖――前圖續き

本型利害の解決本型に就ては前圖に於て既に詳らかに其得失を述べたつもりである、處で之が解決としては斯う斷定すべきである。卽ち白二六の時黑**い**に打拔く從來の型は、白に**ろ**と塞がれ、以下**り**までの符號順となる時、白に**ぬ**と封鎖さるる紛れ手があつて、且つ幾分黑の利益を減損する形跡がある、されば白二六の時黑は直ちに**は**に刎ね、白に黑**ほ**白へ黑**と**白**ち**となる時、始めて**い**に打拔き、白**る**黑**ぬ**と打つを確實とする。

尙ほ本型に就ては第十六圖に述べた概略を以て結末とする豫定であつたが、其後本圖に就て種々の質問と、詳細なる說明を要求せらるゝ方が多數に上つたので、其希望に應ずべく、更に前々圖以來、詳細に涉つて其得失を論じたのである。讀者幸ひに圖の重複せるを諒せられよ。



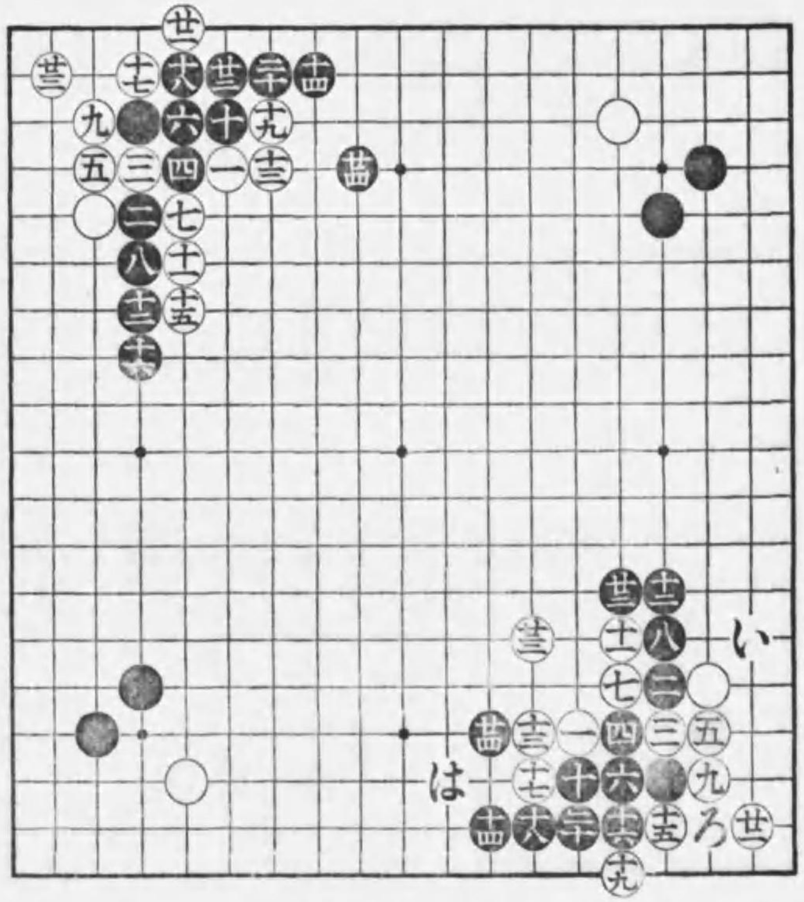
第二十二圖

▲參考圖　甲

白十五、黑十四の時白は時に十五に刎ね、以下二一までに運ぶ型もあるが、之は何分十七とダメ詰りの俗手を出して居る事とて白が宜くない、處で黑は之に對して一著二二に折曲り、白二三ならば二四に頂ける兩著を以て肝要とする、而して白十五以下二一までは、黑に**い**の先手利きを打たせまいとする趣意であるが而も僅かに此一著の利き手を凌ぐために、十七とダメに突き出すは感心しない、されば白十七を以ては、寧ろ**ろ**に粘ぐべく、然らば黑は**は**に應じて宜いのである。

乙圖　白十五、爰を黑に折曲げさせるは、如何にも嚴しい、依て白は一著爰に押して後、十七以下二三迄に運んだのである。

白十五と一著押したことは、甲に比べて大に黑の勢ひを緩ふするものがあるが、而も白十九にダメ詰りの一著を出して居る事は、圖の黑二四までとなつて、尙ほ白幾分の不利たるを免がれぬのである。



參考圖　甲

▲第二十三圖　甲

白十三はハメ手である、こうした連絡の無いチキレ〳〵に遺つて來る手は、多くオドカシ手であり、虚手であるが、白の睨む處は、自分の強い方へ十分敵を誘つて置いて、ソコデ遺つけやうと云ふ策戰であるから、黑は其裏に出れば宜いのである。卽ち敵の姿勢を打ち碎くべく先づ十四、十六、十八と逆擊し、ソコデ飜然馬首を廻らして圖の二十に引き上るを肝要とする。爰でハメ損なつて手疵を負ふた白の治療法に二通ある。一ッはい一ッはろに抱へる手であるが、併しいに押へると黑にはと押されて惡いから、白は當然ろに捉るべく、ソコデ黑は十八の犧牲を利用してにに刎ね、白い黑ほ白へと應じさせて後、はに押す手順に出づれば白散々である。逆つて黑二十を勢ひに乘じてとに押へたならば、白ち黑り白十五黑十九白ぬ黑十五白ろとなつて、ハマリとなるのである。

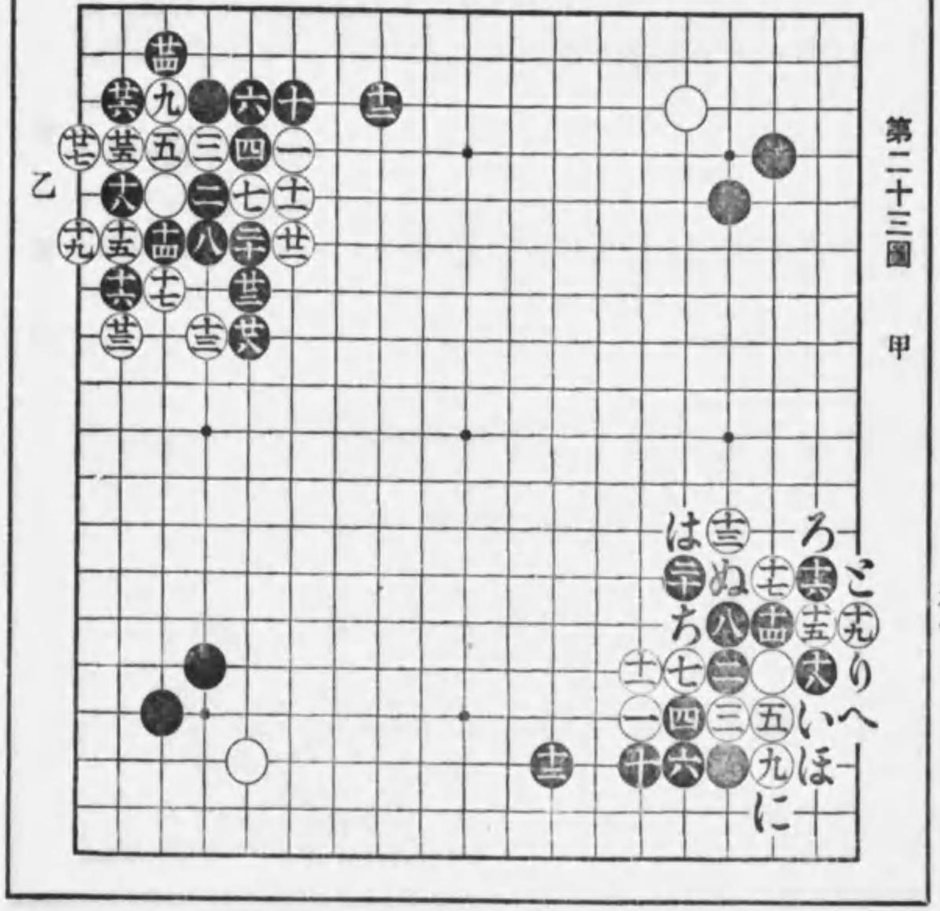
乙圖　甲圖に於ける黑二十の尖みは、古來からの定石で勿論惡い筈はないが、之を圖の如く二十と白に當つて次に二二に曲り、白二三の時二四、二六の手順を了して後、二八と斯く打つもある。

丙圖　白十三は甲圖十三と異曲同巧の著であるが、甲に比して連絡が取れて居るだけ優つて居て、甲に較ぶれば、黑は十四とダメに當て白に十九と粘がせて居る利益を與へて居る、併しながら、之とても十八に截りを入れられた創痍は免がれないので、黑に二四と形ちを崩され、次で二六までの結果となつて、尙ほ白が不利の別れとなつて居るのである。

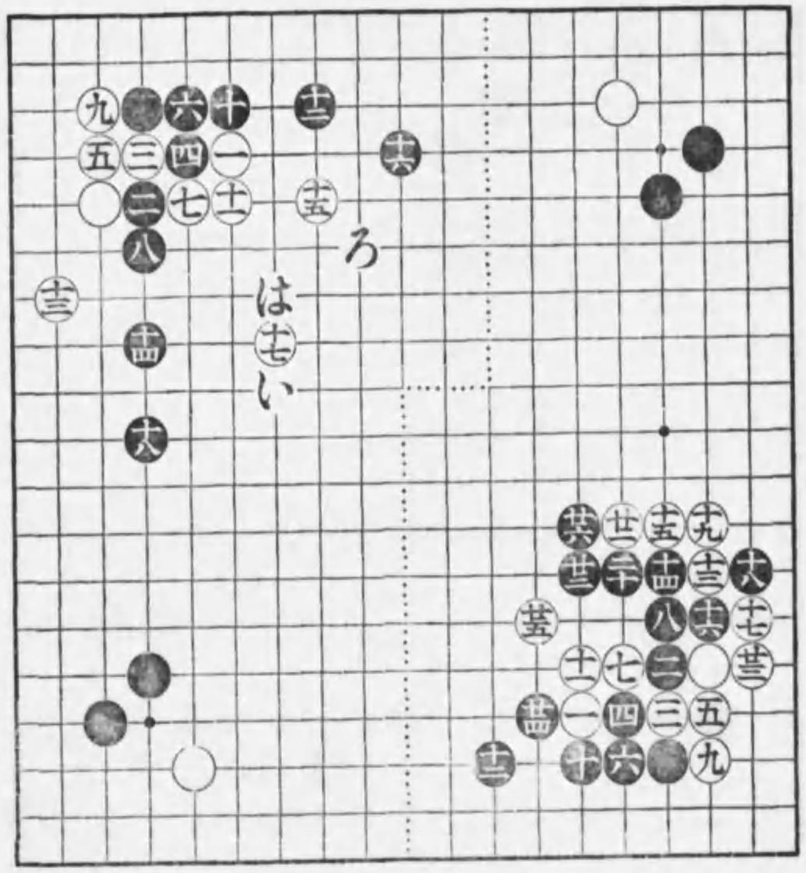
▲第二十四圖

白十三以下黑十八まで、普通定石で互角の形勢とされてる居るが、若し之を嚴密に云へば、白一と黑十とが交換の姿になつて居ると云ふ、白に取つて淺からぬ不利があるだけ本型黑が有利と見なすべきである。

飜つて白十七は更に進展していに打つもある、併し一利一害は免れぬ處で、左側に利く意味に於ては、いを是とするが、其代り白いなれば他日黑に右側より、ろと侵された場合、はと應じなければならぬ缺点を生ずるのである。



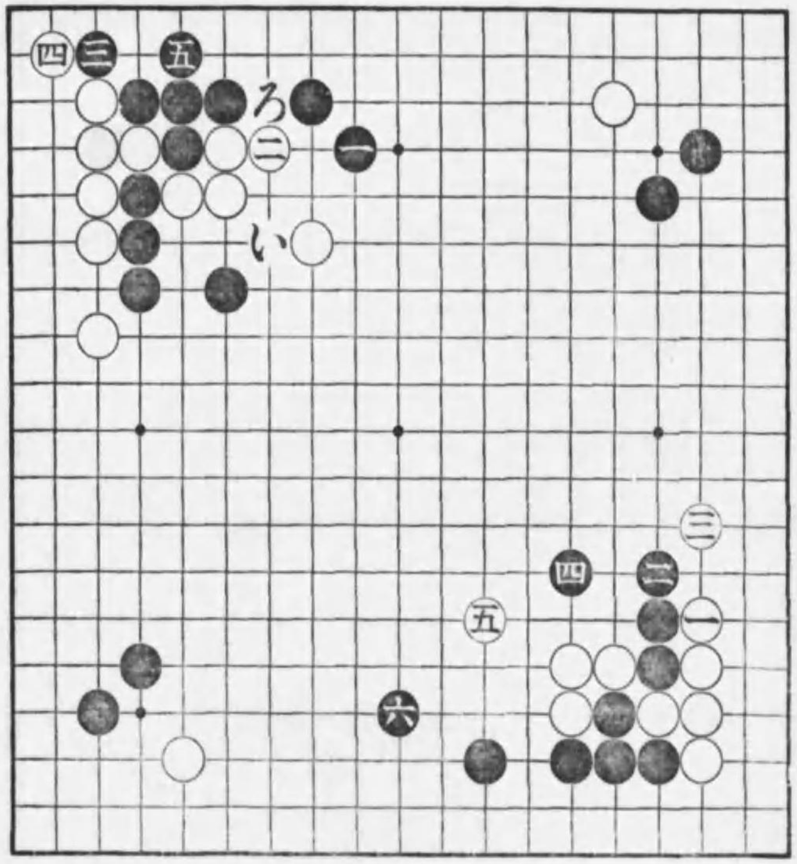
第二十三圖　甲



第二十四圖

▲第二十五圖　甲

圖の場合白一と張つて三に進展する型もある。併し碁は前後左右、或は二ヶ所以上に影響を及ぼす處を、發展さすとか、伸びさせるとか云ふ事は、多くの場合不可ぬのである、而して白が一と押し、黒に二と伸びられた其一著は、隅と中腹の兩方の白に相當る自然の倍用子となる譯であるから、白一、三の趣向は餘り感心しないのである。而して黒は、白三に對して從來の定石は、四に飛んで白を攻め、白五と之に應じて居る迄に止まつて居るが、此際黒は如何に措置すべきかと云ふに、普通を云へば矢張り六と斜走に搆へるが宜く、若し皮肉にとの注文ならば、乙圖の如く一と尖んで、いの尖頂けを狙つて白の委を崩す著に出づるも面白い、そこで白が二といの頂けを防いだならば、三に刎ね次に五と打つてろの突出しを凌ぎ兼ねて隅に利を得る應答に出づるのである。

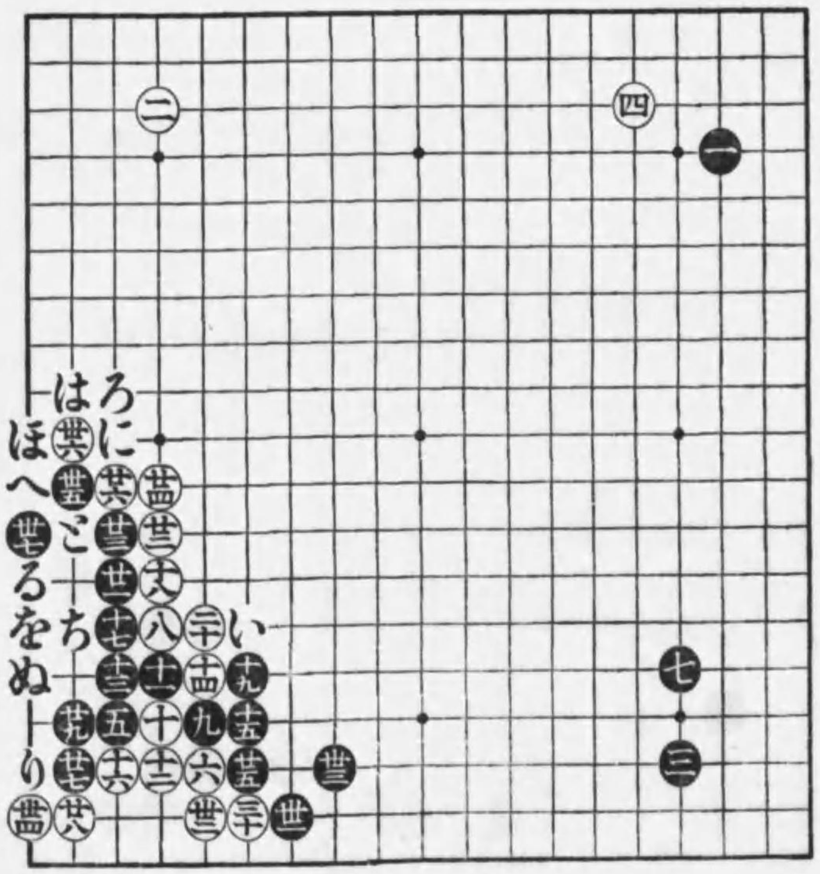


第二十五圖　甲

▲第二十六圖第九圖再掲（第七十二頁參照）

白二二を以てはいに約へ伸びる型もあり、黒三三は三四に刎ねて打つもある。さて圖の黒三七迄の利害を申に、黒は地域に於て隅に約二目損の委であり、外勢にあつては黒十五、十九、二五、三一、三三の五著、白は二十、十八、二二、二四、二六、三六と六著の勢力を得て居て、黒外勢に一著損の勘定となつて居るが、併し白にはろの覗き、はの頂け、にの截り等に疵が殘つて居る而已ならず、十九、二十の交換に、重複を被つた委になつて居るのに反し黒の外部の五石は悉く生動し活躍して居て、加ふるに、右下隅締りの味方と相俟つて頗る好勢を呈して居る。されば此隅の事は圖の形勢となつて尠くも黒に不利はないのである。

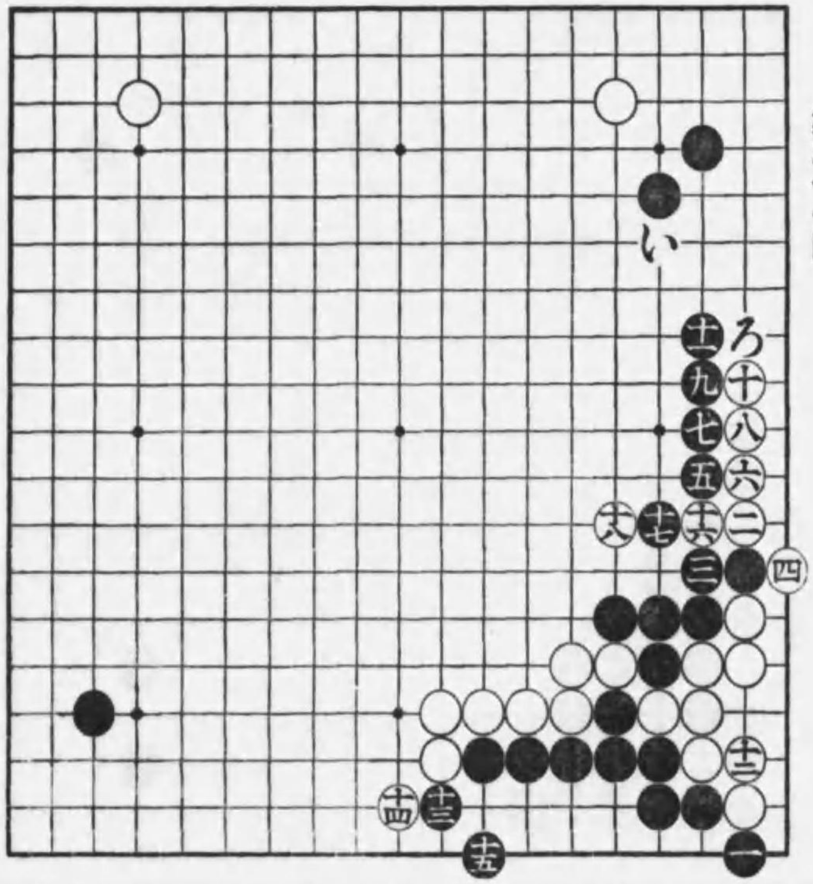
尙ほ本型に就て一言すべきは、白ほの下りである。之が先手に利ければ、本型白有利となるのであるが、惜しいかな、斯く打つも黒にろの覗きを利かされた後に手抜きされて、中に手が無い、卽ち白へ黒と白ち黒り白ぬ黒るとなつてセキに止まり、又最初白へをぬに置けば黒をに頂けて活るのである。尙ほ本譜は秀甫、秀榮の打碁に出來た圖である。



第二十六圖（第九圖再掲）

▲第二十七圖

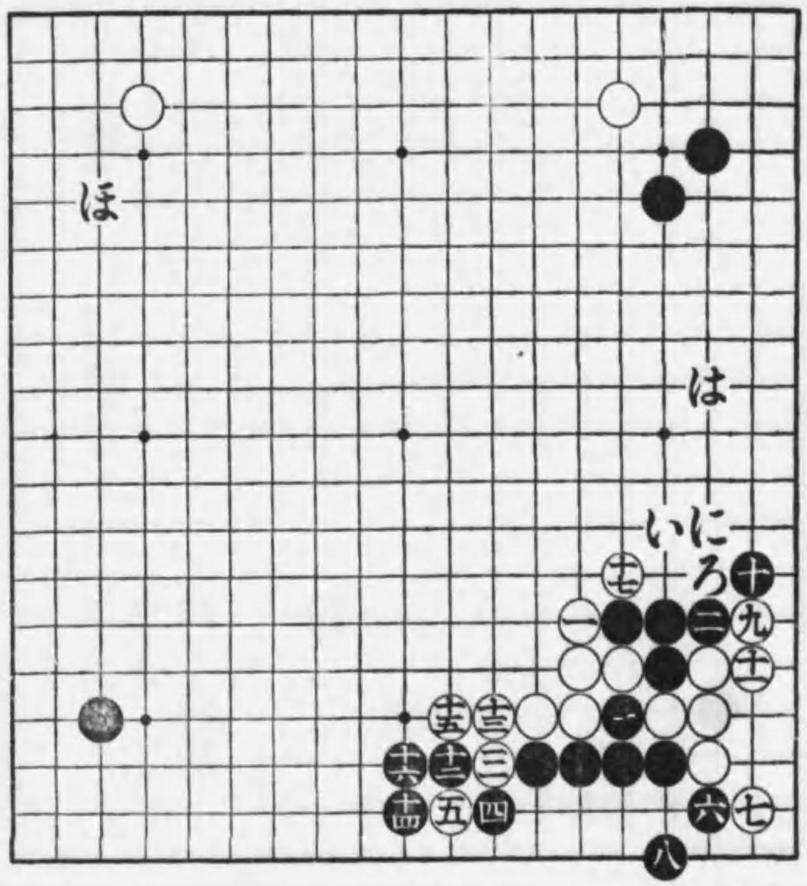
本隅は前頁第二十六圖の姉妹定石である。黑一は前圖の如く十六に備へないで、圖の如く隅を刎掛けて白を攻めに行くもある、併し之は場合定石であつて、此形勢では黑面白くない。卽ち外部の不備に乘じて、白に二と挾み附けられると、黑三以下白十八までの結果となるのである。斯うなると黑は元來自家の勢力範圍に屬する處へ張り出でられて實を食はれた上に、全體の姿勢が、右上隅の尖みと重複し、而も且つ白に十八と頂けられて、形ち崩れ迄も招く事になるからである。但し右上隅の尖みが今一路下方いに在つたと假定すれば、之は黑十一を以て嚴しくろに押へ得るのであるから、若し左樣の形勢であつた場合には、圖の如く一と刎ねて黑萬々歲である。



第二十七圖

▲第二十八圖

第二十六圖の黑「二一」迄となつた時、白は圖の十三に伸びないで一と上へ押し曲げる型もある、之は嚴しい一著で、左右の黑に十分徹たへて居る、されど之に對して黑亦二と敵を擊ち我を凌ぐの嚴しき著に出づれば、以下十七迄の振替りとなつて、白感心しないのである。何故なれば第一黑にはいの飛び若しくばろに粘いで、此石を引出す手が殘つて居る。併し之は一歩讓つて黑はほに白にと交換するものと見て、黑左上隅はに懸つたとして、全局の形勢を見れば、此隅の利害が尤も早く了解されるのである。看よ白は外勢に於ては、右下隅上部に相當の勢力を得たまでゝあり、又下側面に在つては黑五子を擒にはしてゐるものの、白亦五著の無駄手を費した姿である上に、白は配置が本隅面に而已偏重し、且つ重複の姿となづて居る、之に反して黑は下側に左下隅に、或は右上隅に悉く實質と勢力を占めて居るのであるから、圖の別れとなつては黑十分の局勢である。



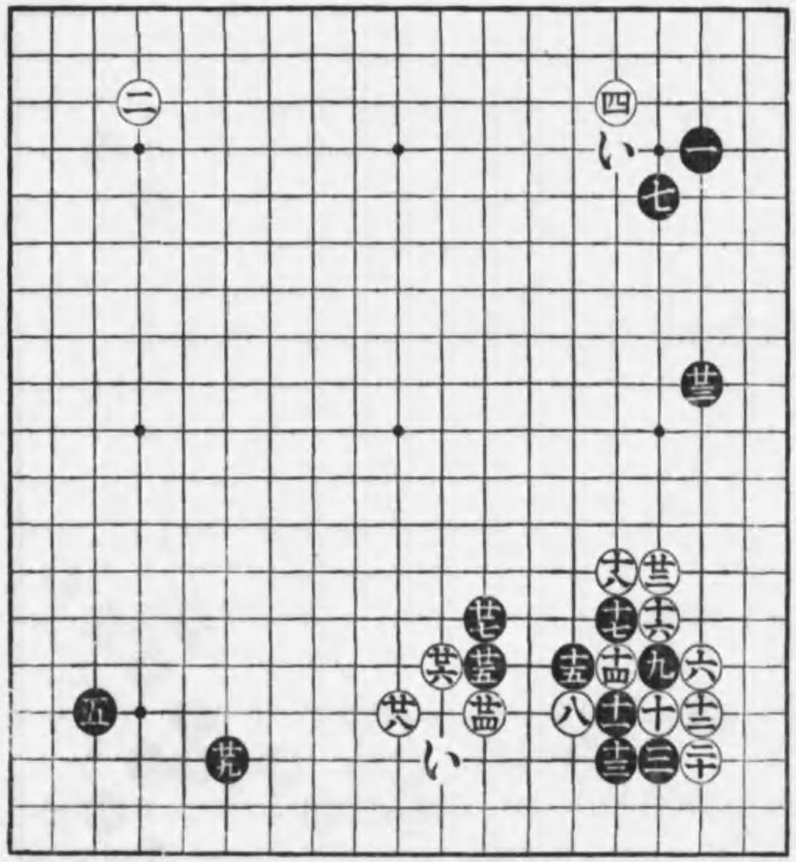
第二十八圖

▲第二十九圖　甲

從來掲げ來つた本大斜定石も、既に大に進行して、圖に於ける黒十五を以て十六に伸びる至難の型迄も、前圖迄に大略を盡したつもりで。最早殘す處は、黒が反對に大斜に掛けた場合の定石と、更に黒十六の伸びに對して無理ではあるが、最近に發見された、別種の型と及び普通大斜定石の完結とも見るべき本圖の型を剩す而已である。依て一先づ進行を止めて、普通大斜定石の一段落として、本型を以て結び、而して更に前述せる、他の大斜定石を述べる事とした。

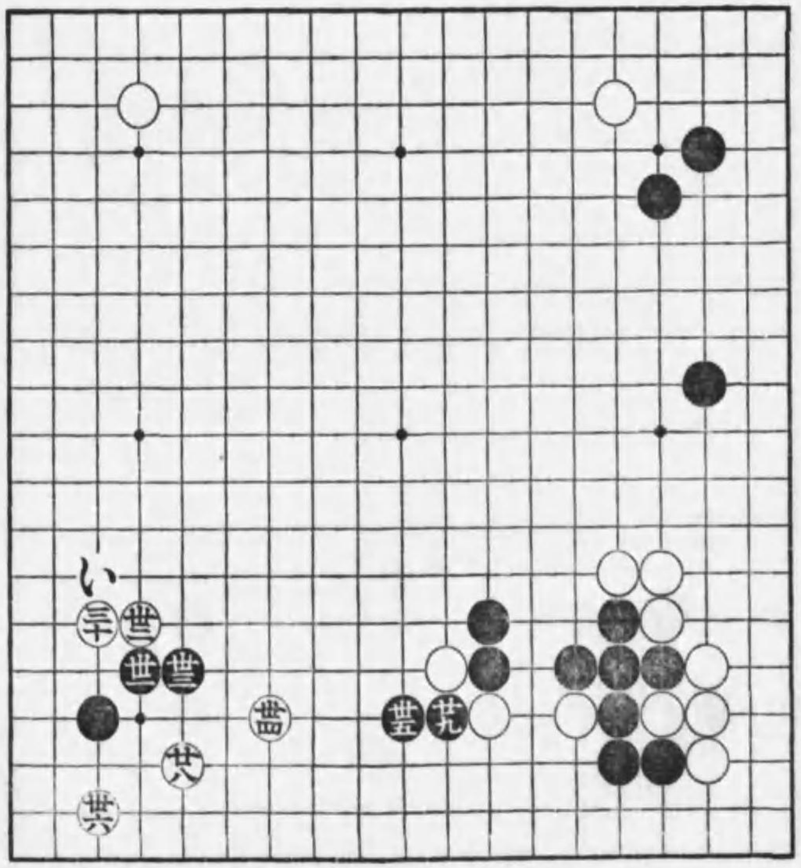
黒十五、右上隅白四の一子が無くて、黒七がいの若しくば四に締つている際は、既に述べた如く黒十五を以ては當然十六に伸びねばならぬのであるが、圖の形勢に在つては、平易に譜の如く十五に截り、以下二一迄の型を採つて、黒平穩無事の配置を得る事は、之亦既に詳述した處である。

黒二三に就て、明治の巨匠村瀬秀甫は曰く、黒二三は普通いに打つを定石とすれとも、此



第二十九圖　甲　黒トル白ツグ

場合にては圖の如く、黒二三と打つを働きとす、即ち白二四に迫るも二五、二七に頂伸びし、白二八に備ふる時、黒二九に締れば、黒は二三、二九の兩好處を占めれば利なりと述べて居る、併し此說は間も無く、秀榮の說に依て破れ、黒二三を以ては矢張り普通に、いに備へるが宜いとなつたのである。秀甫の所論が何に據つて破れたかと云ふに、それは乙圖の如く、白二八と中側を手拔きして隅に懸り、以下三六までに隅を競り立てる手段が、秀榮に依て發見されたからである。斯うなると、此處の形勢黒は中側の姿が、幾分重複に陷て居るのみならず、隅に攻を啖つて居るから、黒餘り感心せぬ譯となるのである。況や白に在つては他に三十を以ていより迫り、黒三一白三四と競り立てる意匠もある。之を要するに、前圖黒二三と打つ事は、黒として働きに過ぎると云ふ、結論に到着するのである。

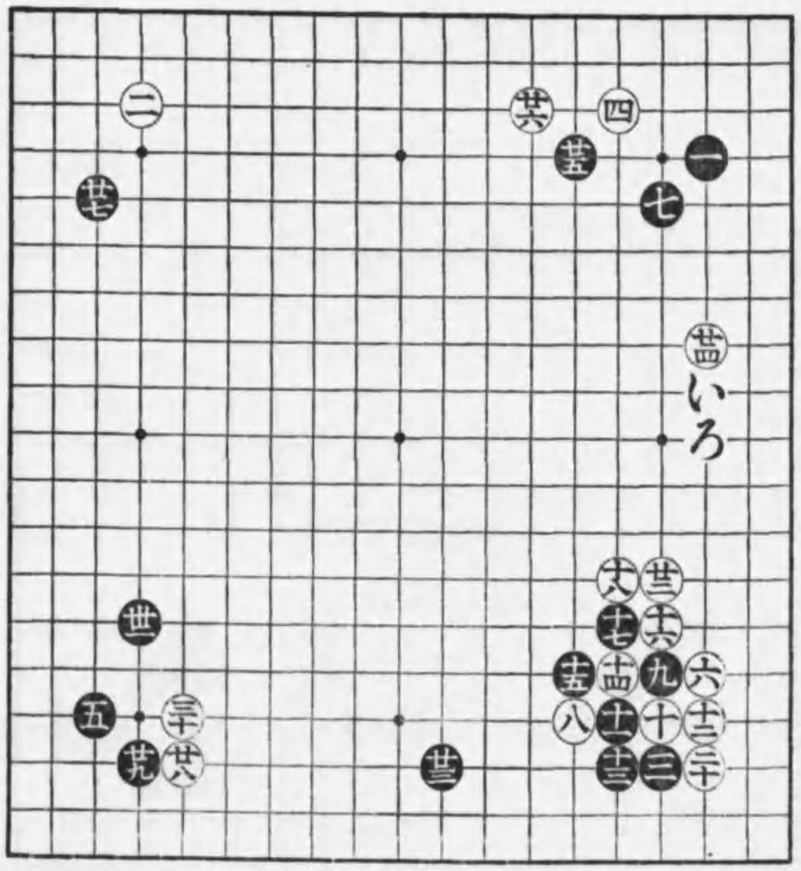


乙

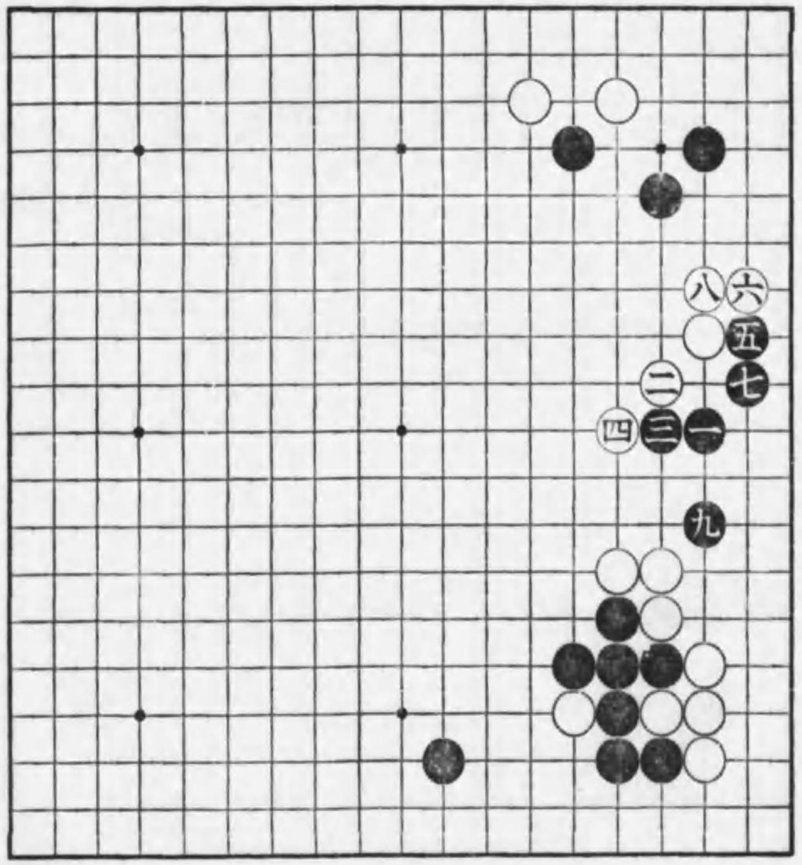
▲第三十圖　甲――前圖續き

黒二三は前圖に述べた理由で、之を右側いに詰拆かないで、普通定石に準じたのであるが、黒が斯う打つた上は、白は無論二四に打つ外はない、ソコデ黒は一著二五に掛け、此處に勢ひを加へると同時に、白を低位に就かせ、而して自家の勢力範圍を擴張する策に出でゝ、左上隅二七に懸り、此時白二八ならば二九に尖頂けて、三一に斜走するを通型とする。

扨て本文に立戻つて申に、黒に二三と尋常に搆へられると、白として大に心苦しい譯合が生ずる。それは此際白を以ては誰しも二四の處に打つのであるが、併し本手としては、白としても一路控へていに打つべきである。ナゼなれば圖の二四に拆いたのでは、黒から機を見て參考圖の如く、ヅカンと一へ打込むと云ふエライ手がある、卽ち白二に尖み止るも、三以下九までとなつて、黒は卽座に活て仕舞ふ、斯くの如く一朝黒から一に打込まれる機會を得られると、白は一ベンに爰を裸にされて仕舞ふのであるが、去りとて白を以ていに控へる事は、到底堪へ難い所であるから、何としても圖の如く二四に詰てゆかねばならぬ、爰が白の尤も苦しい處なのである。斯う論じ詰て來て最初に立歸つて、黒十五に截るのと、十六に伸びるとの得失を云はんに、此配置に於ては、此處一隅だけとすれば、無論秀策の慣用手段である、十六に伸て打べきだが而も之を圖の如く十五に截つて振替る事に依て、穩健確實の配置を收むる事が出來、而して例の嚴しいろの打込まで睨むを得るとあつては、黒として大勢上、容易に變化の歸着を測る事の出來ない、難しい型を採らんよりは、先著の効果が完全に依持されてゆく、本譜十五の截りを以て、尤も安全であると斷言すべきである。



第三十圖　甲　㊱トル㊷粘



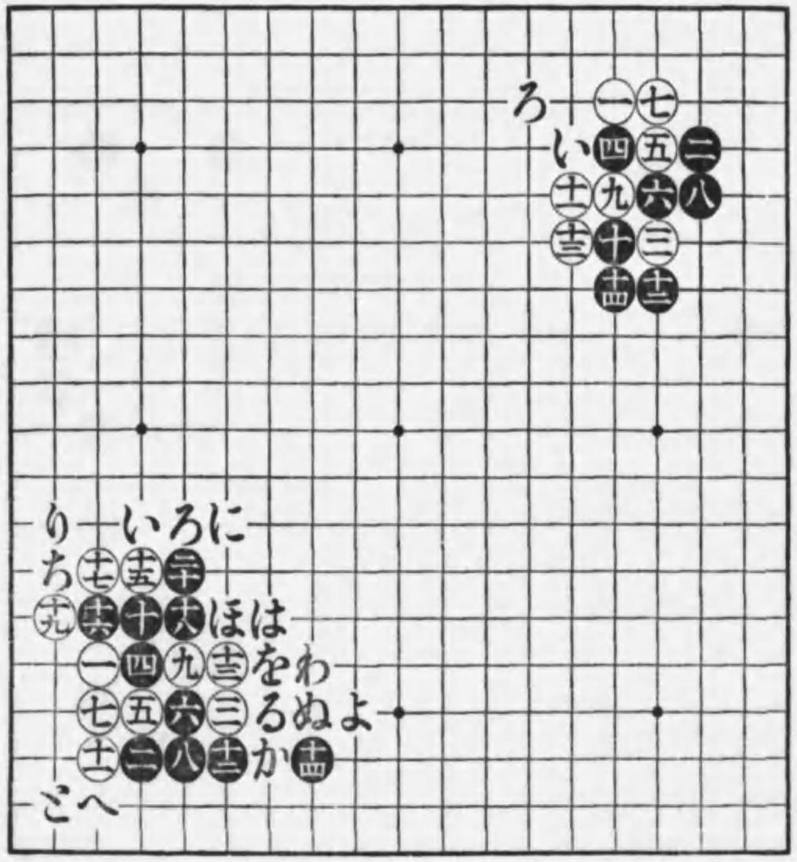
參考圖

▲第三十一圖

白十一、黒十の時**い**に打抜く普通に據らないで圖の如く十一に伸び、而して黒十四迄の振換りに出づる型もある。併し之は場合定石で普通から云へば白不利である。何故かと云へば白三の一子は黒に十二と外方から完全に取切られて居るに反し、黒四の一子は内側から提つてある關係上、黒に**ろ**其他から未だ此一子を利用される疵が存して居る。卽ち之が白の不利とする所である。

▲參考圖

白十五は之を**い**よりする既揭のハメ手定石を、一層露骨に遣つたもので、白の山とする所は、白十七の時黒に調子に乘じて十九に伸びさせ、而して十八に約へ込まうとするにあるばかりである。然るに黒に圖の如く十八に伸びて二十に曲り、白十五を**い**に打つて來たに對すると同樣に應答さるゝと、黒二十迄となつて白打つ手がないのである。卽ち爰で白**ろ**に刎ねたならば**は**に掛け、白**に**黒**ほ**となつて白が惡い、それは白には啻に**い**に截られる痛手があるばかりでなく、隅から**へ**と截ねらるゝと見ても、白は普通の**と**に押へる事は、**ち**に截られる關係上不能で、**り**に忍ばねばならぬ苦痛さへ殘つて居る、而も外方では三子



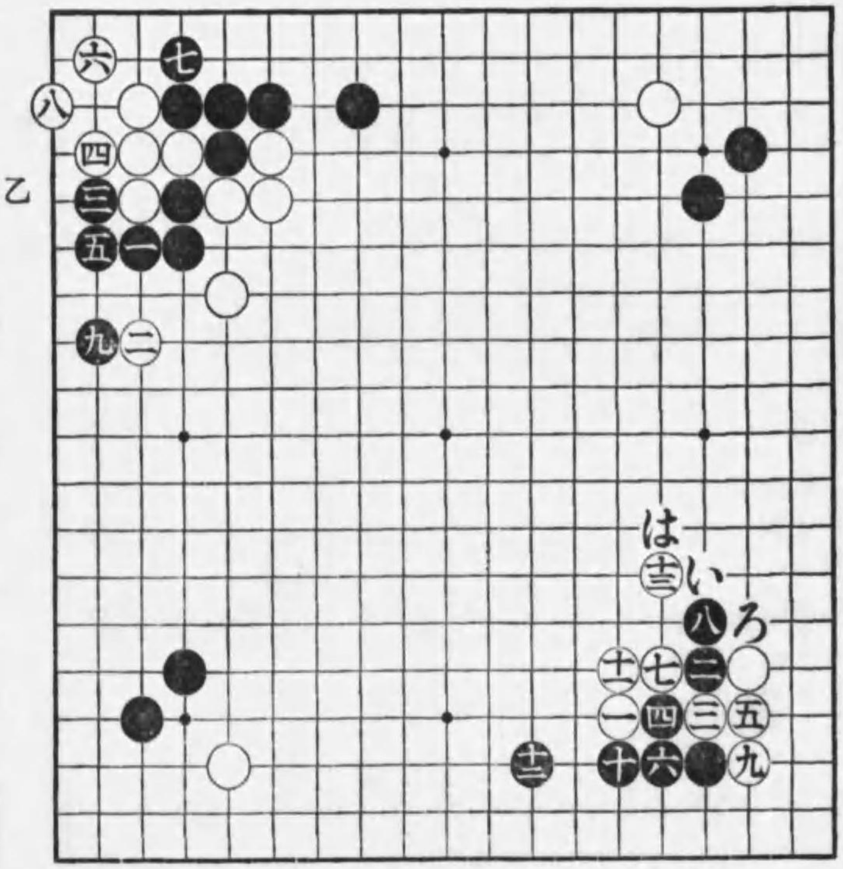
第三十一圖

の犧牲を拂つて居るのであるから、斯くなる事の白に不利である事は明かである。尙ほ黒**二十白ろ**黒**は**となる時白若し**ぬ**に頂けなば**る**に割込み、白**を**黒**わ**白**か**黒**よ**と打つて劫にするのである。之は黒稍や危險の如くに感せられるが、此劫に勝つ事は非常に大きいから、大抵の劫立ては些の虞るゝ處なしである。（第二十三圖參照）

▲第三十二圖　甲

白十三は往年發見された手である、無理ではあるが、併し黒に取つて甚だ煩しい、現に爰で黒**い**に押すべきや、**ろ**に押す可やすら既に惑ひなき能はずで、而も變化無數とある難物である。

乙圖　甲圖白十三の時、黒**い**に押すは白に**は**と伸びられて面白くない、之は本圖の如く嚴しく一に約へる手でなくては黒が不可ぬ、さて黒一に約へれば、白は必然二に來る、爰が黒の又難かしい處であるが、三以下九までの手順を可とする。扨て之からが大變である。

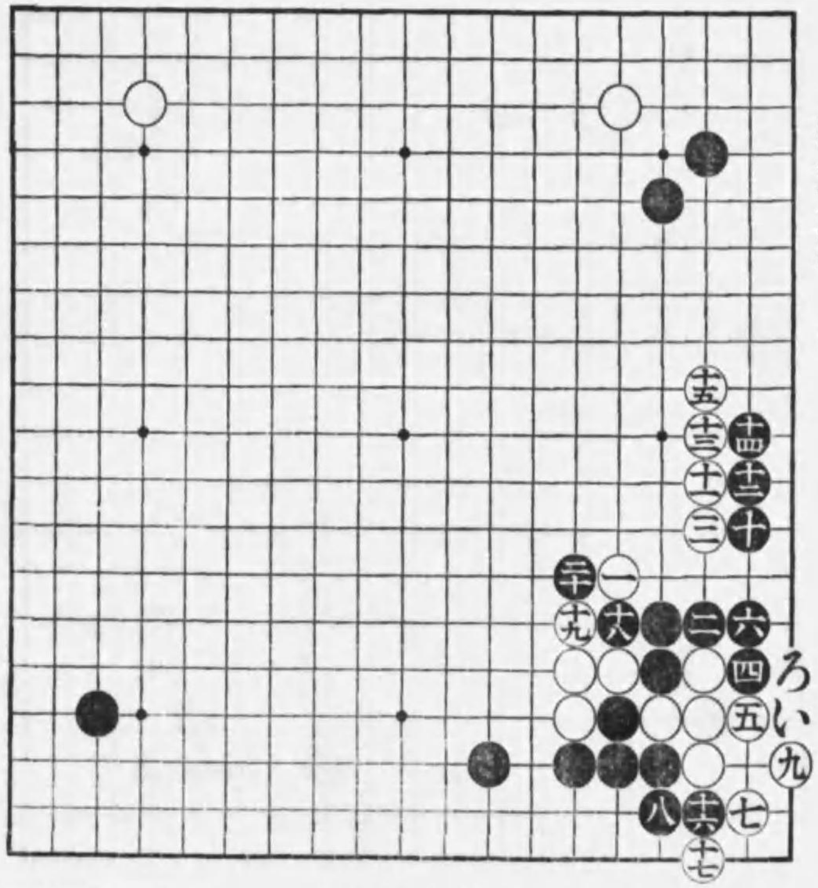


第三十二圖　甲

▲第三十三圖　甲

本圖を説明するに當つて是非一言を要する者がある、夫れは、黑四、六と刎粘ぐのと之を單に六に下るとの利害である、而して本來を云ふと、黑四は單に六に下りたいのである、何故ならば斯くして白四黑十と運べば、隅の白は黑十六に刎粘ぎ、而して**い**に置いて生擒する手が殘る關係から、大に白の活動を阻止する事が出來る、然るに一度圖の如く刎粘いで了つては、此隅白は確實な活であるから、外部に於ける白の行動は自在になる、黑の四、六と刎粘ぎを欲しない所以は實に爰にあるのである、さりながら圖の如く四、六と刎粘げば、尤も忌むべき二の筋を這ふ事が一著だけ免がれ得る、而して本隅の戰ひは、黑二の筋を一本尠く這つて事足れば、黑の有利に歸するのである。依て白に活を與ふる苦痛を忍んで四、六に刎粘ぎ、而して八の先手下りを利かせて後ち、十に頂けるの手順に出たのである。

白十一の伸びは緩みである。之は黑四を單に六に下つて十に頂けて來たのであれば、二の筋を一ッつ餘分に這はせ得る關係から、十一と伸びて宜いのであるが、黑四、六と刎粘いだ圖にあつては黑の注文を行く者で不可ぬ。

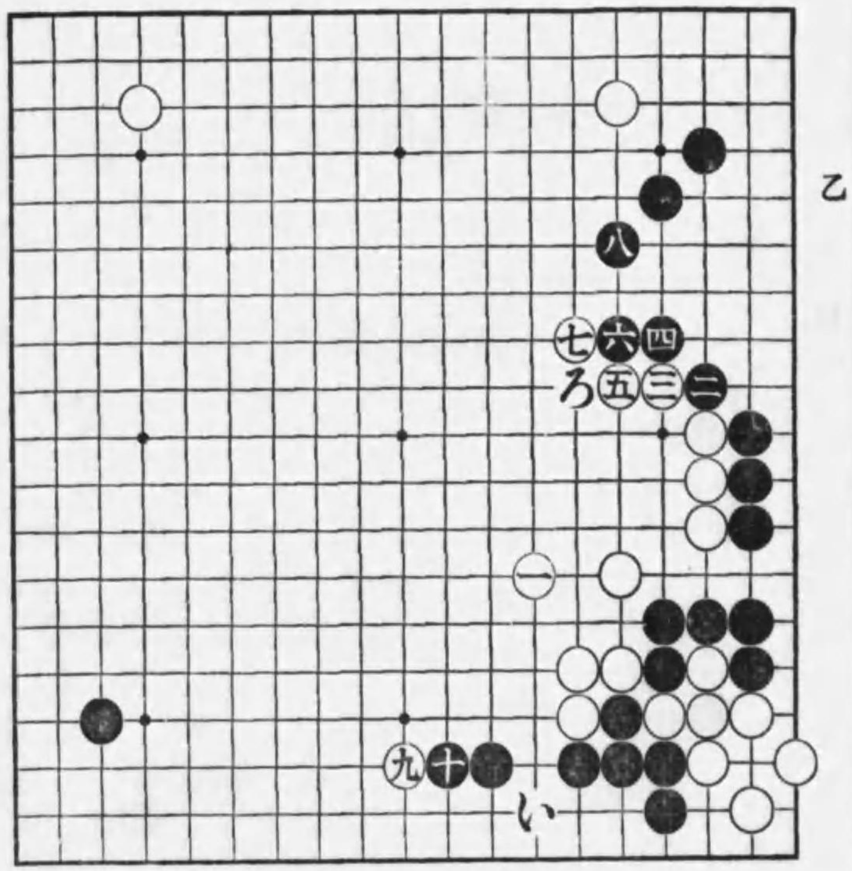


第三十三圖　甲

續いて白十五は無理である。

黑十六は直ちに十八、二十に出截りを打つ方下石が駄目詰らぬだけ一層宜いのであるが、圖の如く十六、十七と早く交換し、**ろ**の下りに依て何時でも眼を得る用意を調へて後ち、十八、二十に出截る方が間違なき措置で、黑二十迄となつては如何に見るも、白剩り形である。

乙圖　白一を二に伸びるは、前圖の如く黑が抑もの四、六の刎粘ぎよりして、十四迄に準備に準備を重ねた、十八、二十の出截りを遂行せしむるものだから堪まらない、依て白は本圖の如く一と退却する外ない、然らば黑は二以下八までの手順に出で、爰で白が九と迫つて來たならば、十に突張つて、**い**の置きを拒げば宜いのである。白一は只本手と云ふだけで、實は止むを得ざる退嬰手段に出でたものである。されば圖の如く、黑に二以下八と盛り上つて地域を占領され、且つ右上隅の一子危ふきを致し、更に**ろ**に截らるゝ痛手が殘つて居るとあつては、之亦白の不利たるや明白である。



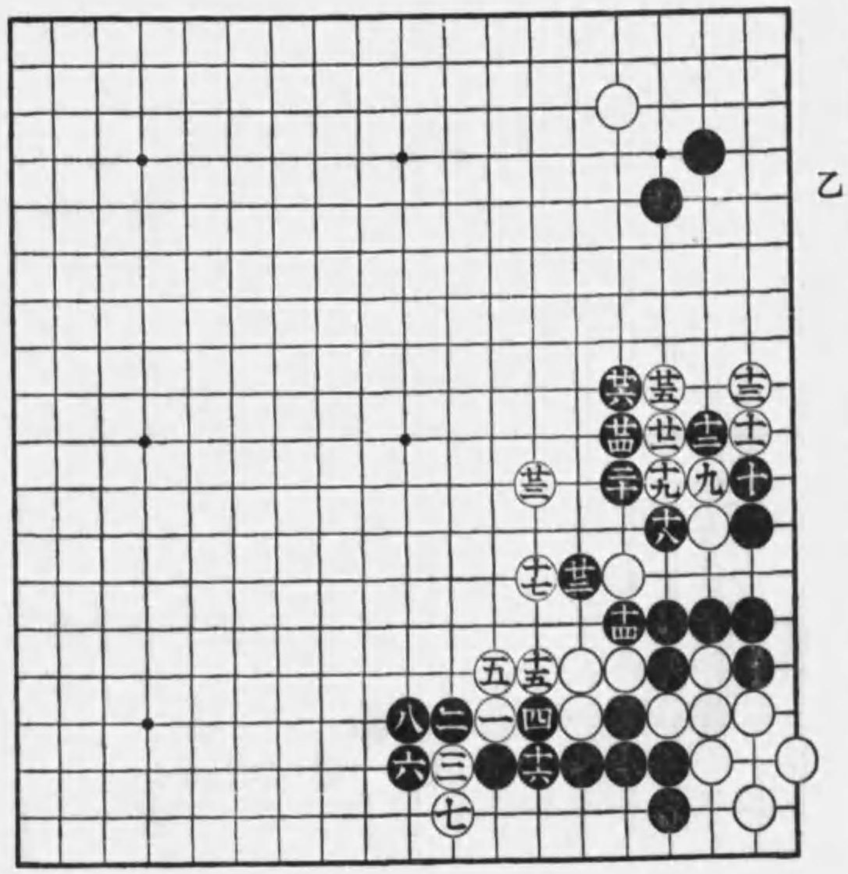
乙

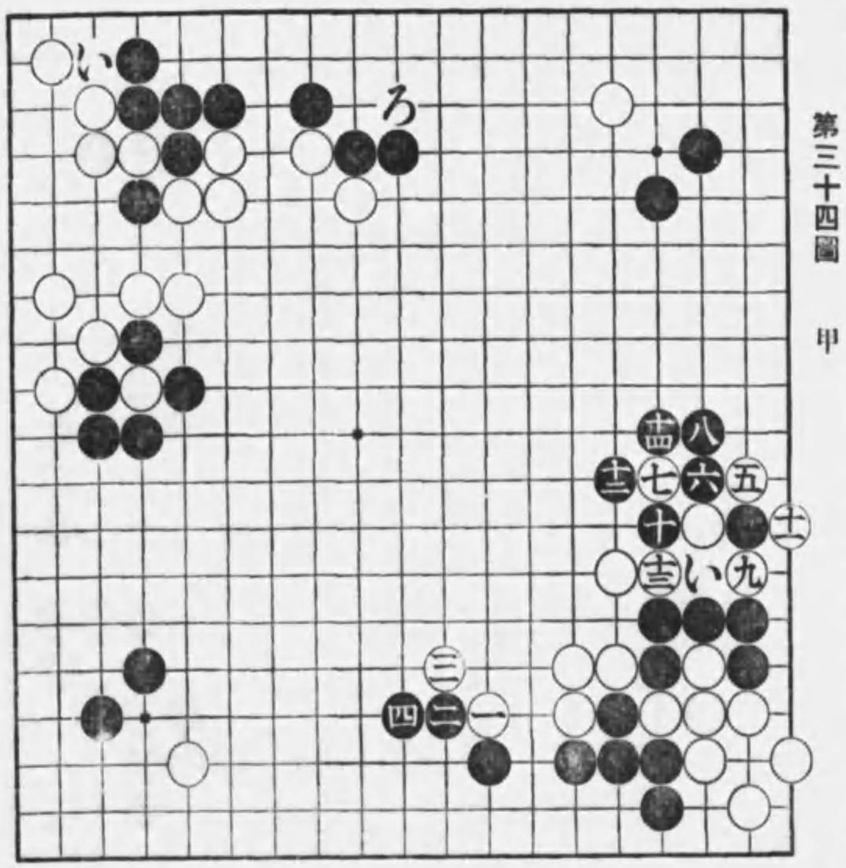
▲第三十四圖　甲

既に述べた如く、白一の手で六の處に引くのはよくない、白としては何とか爰で手段を施さねばならぬ、依て一と頂けを試みたのであるが、實は今頂けるのは時機でない、只此型が根本であるから、順序として之を掲げたに過ぎぬ。

黑六、白が一、三と資本を投じたに見て、圖の如く六以下十四迄に圍中の黑を棄てゝ、外勢を得る方針を採つたのは、良く變に善處したものである。そこで本隅の利害を云はんに、白は目前いに粘ぎを要する、處で生擒された黑の五子と白の無駄石五子とを取り去ると、略々參考圖の姿になつて黑は一著を持込んだ損失に過ぎぬが、飜つて白の損失を見ると、黑に隅をいと先手で刎粘ぎを利かされた譯になつて居るのが一ッの損失であり、更に甲圖に於ける、白一、三黑二、四の交換が無いとすれば、白はろから此黑を攻めて、大に打擊を與ふる事が出來るのを、此交換の爲に、攻擊不可能に加へて、黑實質を占めつゝ右方に向つて、模樣を形ちづくつて居る、況んや白一、三は自家の勢力の强い處に徒らに勢力を加へた姿で、此交換たるや、白多大の損害たる事は云ふ迄もない。更に左邊の形勢を見ると、白は其一子を穴に投じて、黑に打拔かれて居る、要するに黑の損害は、一著の持込みに止まるに反し、白は以上述べた第一、第二、第三の損害がある、されば圖の如く黑を生擒した甲圖にあつても、結局白の方が損であると云ふ結論になるのである。

乙圖　前圖の如く白一、三の勢力を扶殖した丈けでは未だ不十分で、其結果も亦甚だ面白くない、依て圖にあつては三と截り違ひ、更に七と資本を卸し、ウンと爰を堅くしてをいて、一著九に緩め、次に十一に押へて戰ふ手段を採つたのであるが、而も之は尙ほ白無理たるを免がれぬ姿で、卽ち黑一著十二と截り、轉じて十四に突出し、而して十八以下二六迄の運びに出づれば、白は空しく下側に多大の資本を投じた結果を得るに過ぎぬ。尙ほ白二一をいに截らば、黑換つて二一に當て、白ろ黑は白十八黑にと活に就き、此時白二四に截らば黑は二五に曲るを要著とする。更に隅は黑ほの當込みに依て、へに下りの利く味を利用すべきである。



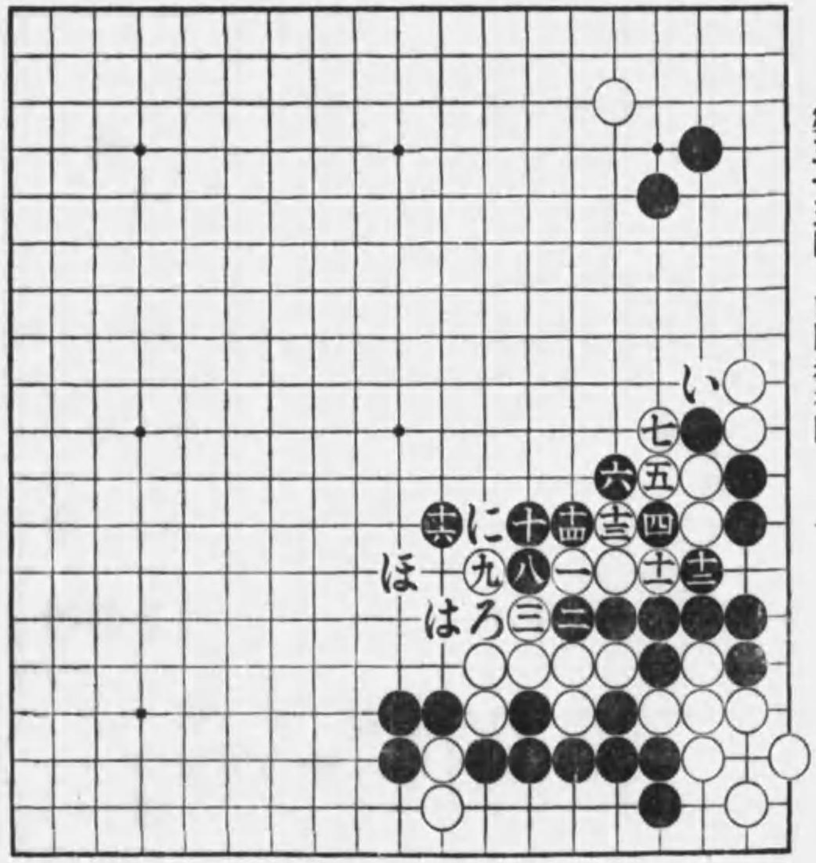


第三十四圖　甲

▲第三十五圖前圖參考圖

白一、之を前圖乙圖の如く八に飛ばないで、斯う重く一に伸びて來たならば、黒二と突き出して白の應手を問ひ、次に四に頂出して六に刎ね、以下十六までの手順に依て、白の中石を壓迫し、而して徐ろにいに伸びれば、之は白潰れとなるのである。

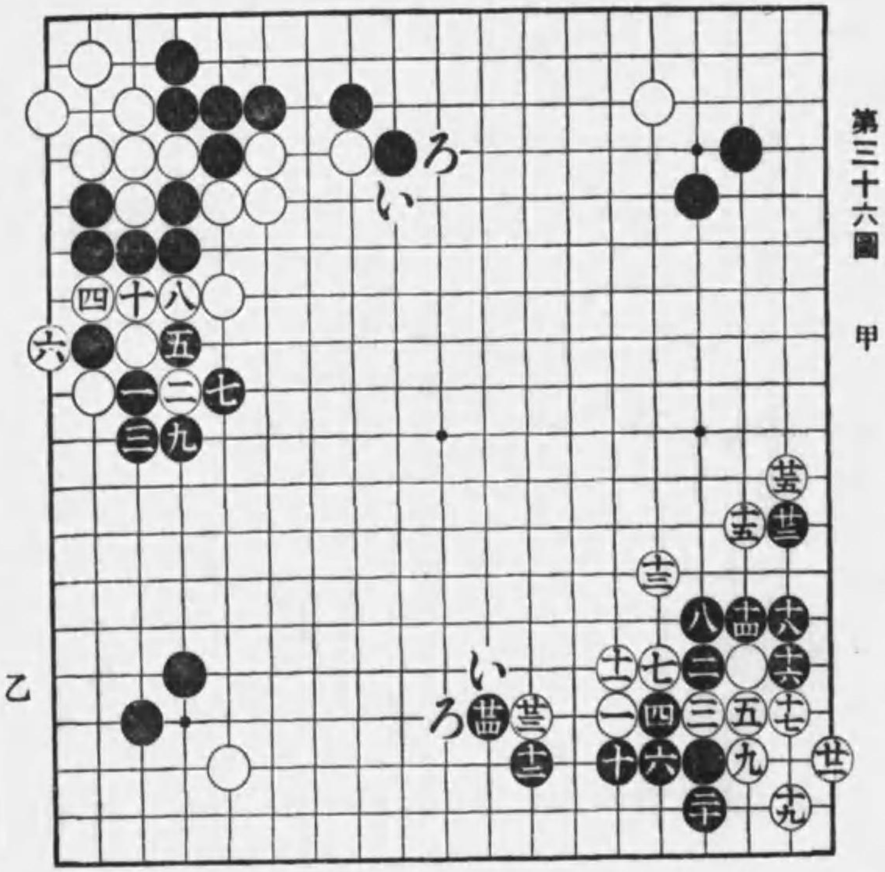
又白三の手を八に緩めれば黒代つて三に突き出し、白ろ黒九白はとなる時、にに伸びて右方四、六の頂け刎ねと、此處ほの掛けとの兩睨みに出づれば、之亦同じく白潰れとなるのである。



第三十五圖　前圖參考圖

▲第三十六圖　甲

白二五、前圖にあつては之をいに刎ね、黒ろと交換する小利を敢へてして勢力を扶植し、依て二五に押へたのであるが、本圖に在つては單に二三、二四の交換に止めて、二五と押へたのである、かうなると黒は、前圖とは一寸勝手が違ふ、何故なれば、黒若し之に應ずるに前圖通り即ち乙圖の如く一に截つて、白十までに振替ればい、ろの交換の無いことは、實質其他に白の有利黒の不利で、此の形勢双互の利害を相殺して、黒餘り香ばしくない、然らば甲圖に於ける如く、白二三と單に一手の損著に止めて、二五に押へて來たならば黒は果して如何に之に應ずべきであるか、本型は是れから次第に難かしくなるのである。



第三十六圖　甲

◉第一局打棋講評

七段　野澤竹朝述

先　中押勝　工藤禮武
　　水野翠山

△白二二、此場合にては緊縮していに縮るを可とす黒の堅きに向つて進むを控ふるなり。

▲黒二七はろに尖むを嚴しとす。

△白二八緩し、當然はに拆くべき處なり。

▲黒二九面白からず、三三に詰めざるべからず。

△白三二は黒の鐵壁に向つて子を遣るもの、上側五九に打込んで火蓋を切るべし。

▲黒三五は此際手緩し、百二四に刎るを嚴しとす。

▲黒三七は筋違ひにして惡し、五四に打つて白に迫るべし。

△白三八は直に四十に打つべし。

▲黒三九惡し、矢張り六八に打つべし。

▲黒四一は箍緩にて惡し、五八に掛け止めざるべからず斯樣の際に於ける定手なり。

▲黒四五は例へ何となるとも四六に刎ね、白に黒ほと結いで戰はざるべからず、碁に於て導火を切りたる著を擒にせられたる局面は總べて絶望と知るべし

▲黒四七、此局面として手緩し、直接四八に頂けて手段すべし。

▲黒四九は味を失ふもの、單に五一に伸び白尙五二ならばへに押し、白とに刎ねなば五十に頂け、白四九黒百二六と截り違つて手段すべし。

▲黒五五惡し、五九に打つべし。

△白五六惡し其目的ならば一著五九に突出す可きなり。

△白六十、些事ながらほに提るを可とす。

▲黒六一惡し、六二に提るべきや勿論とす。

▲黒六三は八三に懸粘ぐを働きとす。

▲黒六五はちに突出し、白りに引くも「百二五の置手を狙ひて」ぬに約ふるもるに押へ込み、而して七十に飛んで凌ぐべし。

▲黒六七にても尙前述ちに突出す手順を採り、而して七十に沿ひて凌ぐべし。

△白七二緩し、百十四に截つて九九に刎ね、次に百十に頂け、黒百十七白はと打つべし。

▲黒七九重し、八十に伸びきるべし。

△白八六以下九四迄は自家の敗局たる場合に行ふ方針にして惡し、右上隅百十四に截つて九八、百八と突出して黒に百十六と受けさせ置き、而して中央八七に黒を壓迫すれば勝敗決す。但し黒百十六を百九に受けなば百十六、百十八と打つてをに尖み渡る手を含んで、矢張り八七に打つべし。

△白九六、九八手順惡し、先づ百十四に截るを肝要とす。從つて黒九九惡し、百十四に粘ぐべし。

△白百十は百十六に截つて、百十二に當てるを可とす、

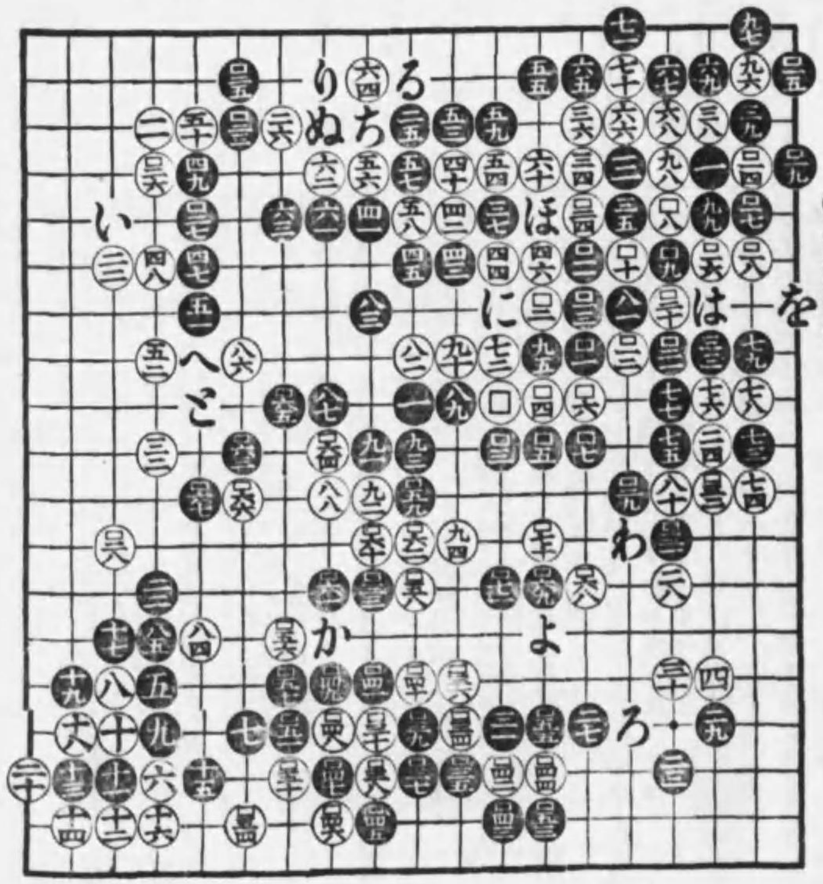
△白百十八打たざるを可とす、劫材を失へばなり。

△白百三十打過ぎなり、わに刎ね居るを本手とす。

△白百三八重くして惡し、かに打つべし。△白百四六惡し、百五五に突出すべし。

△白百五八危ふし、百六六に連絡して、大勝の局面なり。

△白百七十敗著なり、よに刎ねなば此石を凌ぎ得べく、局勢尙白に有利なりしに、一著大事を誤りてさしもの善局面に、勝敗の轉倒を觀たるは白に取りて遺憾なりし。



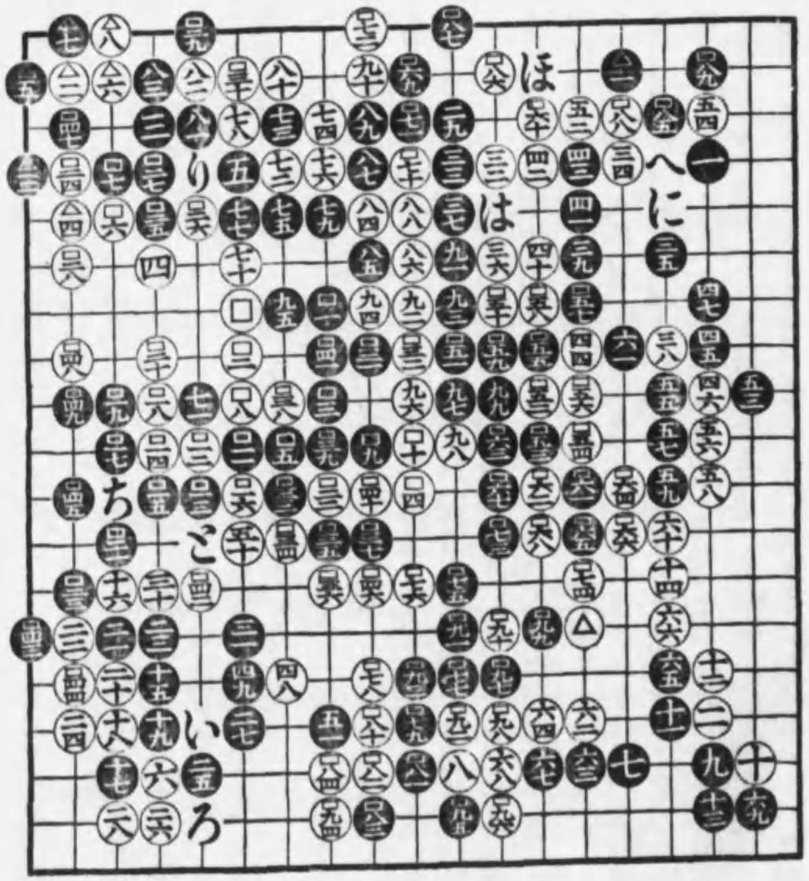
◉第二局打棋講評

中押勝　城田精元
互先　先番　水野翠山

▲黒十五は、次にいに掛倒して白八の一著を重復せしむる含みにて、低く二十に懸るを可とす。
△白二二は舊型なり、二三に截るべし。
▲黒二七緩し、三十に押し、白百二一黒ろ白二八となる時下側百八二詰拆くべし。
▲黒二九、爰にても尙一著三十に押すべし。
△白三十可なり。
△白三二惡し、直に三四に懸り、黒三五の時三七に冠せる等の意匠を採るべし。
△白四十如何、はに結ぐを穩かとす。
▲黒四一は百五七に伸び居るを正しとす。
△白四二惡し、嚴しく四三に應じ、黒四二に割込めばにに頂けて戰ふべし。
△白四四は緩みなり、等しく爰を打つとすれば百五七なれど、四四を以ては五二に押へ、黒百八八白二百一黒百八五白ほと打つべし。
▲黒四五、四七非なり、五二に下切るべし。
△白四八、五十は五三に下るべし、要點なり。

▲黒五一緩し、直に五三に就くべし。
△白五二亦然り、
▲黒五五惡し、百八五に刎出し、白へに截らば百八九に刎ね、次に百八八に截つて戰ふべし。
△白六二はへに突張るべく。▲黒六七、六九は前述百八五に刎出すべし、至大の要點なり。
▲黒七一は敵の勢圏内に於て無成算の子を遣るもの右中腹二百に打つて、左右の白に薄るべし。
△白七二は百三八に冠せ、先づ自家の勢圏裡に於て戰ひを開くべし。
▲黒八一惡し、百二五に頂けざるべからず。八三に於ても尙然り。
△白九四惡し、百三二に伸びれば大勢決す。
▲黒九九緩し、百五一に粘いで先手を取るべし。
△白百はへに突張つて大石を救はざるべからず。
△自百四緩し、百五一に割込んで先手を取り、然して百三八に尖頂けて凌ぐべし。
▲黒百五は百六に備ふべく、又爰を打つとすれば百九に覗いて後、百十一に尖むべきものとす。
△白百六は一歩進んで百七にすべし。
▲黒百十一は直に百十三に飛び、白百十二黒百十五と伸びて打つべし。
△白百十六無理なり、百十七に應ずべし。
▲黒百十七惡し、とに曲り白百四二ならばちに伸びて打つべし。
△白百二六は單に百二八に懸粘ぐべし。
▲黒百二七敗著なり、りに粘いで劫を爭ざるべからず。之を失しては黒に百三三、百三五の見損じなきものとするも、大勢最早挽回に道無し。

〔總評〕　本譜は黒二七、二九に失して配石に利を失ひたるが、白三二以下四四迄宜しきを得ず。黒形勢を復せしが、爰に於て黒亦五一以下六九迄當を得ず。加ふるに漫然たる七一の一著に出で、一旦白七二に方針を誤りたるに依りて、局勢を恢復の模樣を呈せしが此時に當りて八一八三に大事を誤り、白九四の失に依りて棋壽を得たるも、而も形勢黒に手薄く、結局黒百二七に失して敗れたるものなるが、本局黒の敗因は五五以下六七邊迄に於て、百八五の刎出しを閑却したる事と、八一に百二五の肝要を逸したるに依るものにて、爰に大勢の定りたるを觀る。



二百八手終

◉第三局打棋講評

静　佐藤芝山（二段）
角　吉村石流（初段）

▲白八は九に締るべし、白十は一路控へて百三十に拆くを是とせん、黒十一に尖むも爰を手抜するを得ればなり、黒十三早急なりいに挾み白十四の時三七に拆くを通法とす、白二十緩し、直に二二に割打すべし、黒二一は漫然の著なり、ろに備へて十三の意を徹すべし。

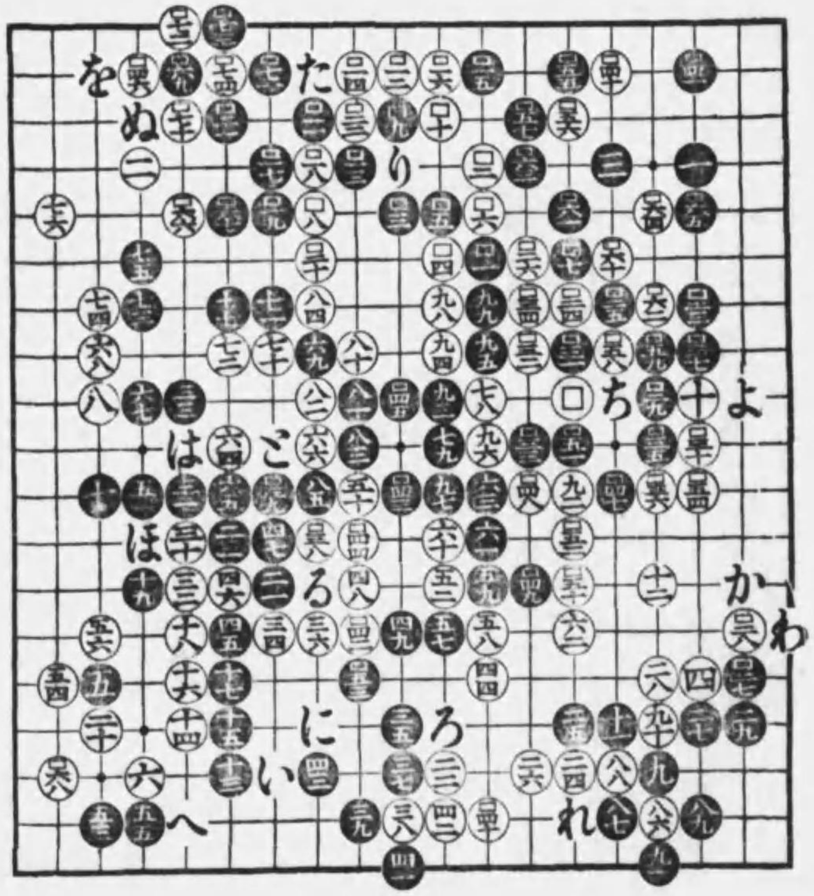
▲黒二三の尖み如何なり、二六に詰めて先づ二二の白を攻撃すべきを思ふ、續いて二九は歩を堅きに向くるもの、八八に愚集まずんば白に響かず、白三十は無理なり、此頂けを狙ふものとすれば先づはに斜走すべきなり、黒三一惡し當然三二に突抜く所ならずや、續いて三三は浮泛の著なり、五三に置きて應手を問ふべし、白三六惡し一旦は三七に應ずべきなり、續いて三八以下四二迄面白からず直に四四に斜走すべし、黒四三爰を打つとすればににすべし。

▲白四八は六五に截るべく、黒四九はほに固むべきなり、白五十は尙ほ六五に截るべし、黒五三は五四に下り次にへに尖むで先手に左右の味方を固むるを是とす、黒五七、五九趨向無理なり左上隅七五に打つべし、黒六一惡し尙ほ七五に打つべきなり。白六二緩し六三に刎ねなば黒窮せん。

▲黒六五緩しとに頂けるを委とす、次に六七如何六八に頂けて打つべし、白六八重し七四に飛ぶべし、黒六九は七八に飛ぶを尋常とす、白七十は八十に頂けて打べし、黒七一、七三面白し、黒七九はちに冠せ中の三子は棄てゝ打つ意匠に出づべし、白八二輕卒なり百四五に打つべし、白九二面白からず九三に打ち、一轉して右上隅百五七に懸るべきなり。

▲白百二無理なり、りに打つ位の外無けん。黒百三如何百四に曲るべし、黒百十一は百十二に下るを是とす、次に百十三惡し當然百十四に押へざるべからず、續いて百十五も亦惡し百十七に尖むべきなり。白百十六お附合なり直に百十八に當込むべし、黒百二一働きに乏し爰の味を利用しぬに頂けて手段すべし、黒百二七の曲り損なり、黒百三一、百三三不利なり打たざるを是とす、黒百四三は自らを手詰めるものにて惡しるに當込みて攻むべし、白百四六は百四九に打つて締め附け、而して百四六に圍ふを手順とす。

▲白百四八又惡し尙百四九に打つべし、黒百七一敗著なり、之を百七四に粘き置けば次にをに頂ける手あれば白爰に一著を補なはざるを得ず、然れば黒わに刎ね白かの時、よに刎ね粘ぎ上側たと下側れとを見合の含みにて寄せ進みなば微細ながら黒の勝局に終るべかりしに、黒圖の如く輕々七一に懸粘ぎ、白に百七二と刎ねられるに及むで百七三に劫を爭ひたるも、黒劫種なき碁とて是れよりして遂に白に勝を讓るに至りしは黒の爲に憾むべき勝敗なりし。



◉第四局打棋講評

先　五目勝　工藤永武
　　水野翠山

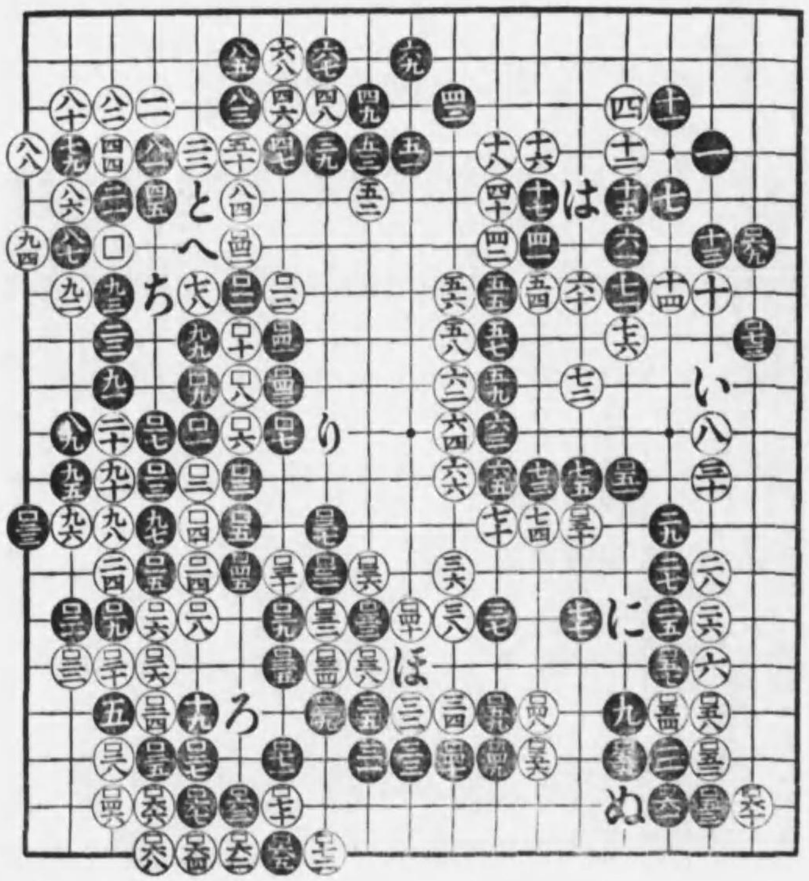
▲黒九の尖みは、いの五間拆きに對して打つが普通にて、白八が圖の四間拆きの際は左下隅十九に締るを普通とす。△白十惡し、左下隅十九若しくはろに懸るべきなり。▲黒十一如何、先づ右下隅二五に掛け、白二六ならば二九に飛ぶべく、又白二八に應じなば其時左上隅二一に懸るべきなり。此の掛けと白二八と交換し得れば、右側全體白悉く低位に就く事となりて、配石の利己に黒に在りしなり。

▲黒十三、截れ手無き所を防ぐの法ある事なし、直に十五に赶すべきなり。△白十六甚だ緩し、何とてはには綽ねざりしにや、目前黒應手に窮するにあらずや。續いて白十八亦緩し、四十に綽ね黒はならば其時十八に粘ぐべきなり。▲黒十九如何、一著二五に掛け、次いで左上隅二一に懸るべきなり。△白二十面白からず、此側面に就くとすれば百に締るにあれど、此形勢にありては右下隅にに斜走して、二五の掛を防ぐを急務とす。▲白二六此際手重し、下側三一に打ち、黒百四七ならば其時二六に應ずべく、又黒二六にせば百四九に拆くべきなり。▲黒二七は二九に飛ぶを手筋とす。△白三六は敵に響かず、百四十に飛び、黒百三八ならば七七に覗き、黒ほに突出せば三七に飛んで輕く捌く意を含むべきなり。

▲溯つて黒三一は三三に構ふを普通とす。▲黒三七は無意味の一著、其得る處は徒らに白を強固ならしめし而已。▲黒四三は白の堅きに馳せるもの、左りして八三に迫るべし。△白四四如何、へに飛び隅に迫るの傍ら、四九の置手を狙ふ意匠に出づるを手廣き策戰とせん。▲黒四九危險なり。五十に突當り、白八三黒と白五三黒八一と打つて振換るべきなり。△白五十緩し、五三に截つて戰はざる可らず。△白五四、岐路に走る左側百四二に飛ぶべし。▲黒五五は無謀の一著因りて一時形勢を失ひたり。左上隅八一に突込み、白八二黒八三白八五黒八四と打つて此處を封鎖すべし。▲黒五九は六十に綽ねるを手筋とす。▲黒六七、六九は尙ほ八一に突込むを可とす。▲黒七三は七五に打つべし。▲黒七七は百五十に曲るを本手とす。△白七八は矢張百四二に飛んで黒の應手を問ふべし。▲黒七九以下八三迄時機にあらず九九に頂け打つを穩かとす。△白八四委にあらず、へに竝らばば黒應手に窮せしなり。▲黒八五は果斷の一著、敵の膽を寒からしむるに足る。▲黒八九は九九に頂けて打つべし。

△白九十甚だ緩し、九五に約へざるべからず。△白九二着眼拙なり。ちに竝らんで黒の眼を奪ふべし。△白百無理なり。百一に飛ぶの外無し。△白百五、危ふし、百十一に綽ね居れば充分の形勢なり。▲黒百七は委にて似て惡し。百八に綽ねて百十七に突張り、白百十四黒百四三白りとなる時、百十一に綽ねて無事を計るべきもの、圖の如く百二六迄となりては、黒本來は敗局なり。△白百二八、着眼少にして之を敗因となす、百三二に備へ居れば白の勝算確實なり。續いて白百三十、百三二又甚だ惡し、百四六に下つて前著の著意を續ぐべきなり。然らば勝は尙ほ白にありたり。▲黒百四七惡し、百四九に飛べば無事の勝なり。△白百五四惡し、百六十に約へ込まざるべからず。▲黒百五五はぬに懸粘ぐべし。△白百五六の持込みを敗著とす、尙百六十に約込ざる可からず、白之を失しては黒以下屢ば、誤りありしも、遂に及ばざりし。

（百七十三手以下略）



◉第五局打棋講評

中押勝　城田精元
先　水野翠山

▲黒十五は形勢の攻守點たる十六の大場に據るべきなり。

▲白二二惡し、同じく打込むとすれば此際いを是とすべきも此形勢にありては、八四に構へる等普通の打點ならん。

▲黒二三緩し、二四に抑へ込まざるべからず。

▲黒二七、自家の堅固なる方面より兵を進むるものろに掛け塞ぎて外勢を占むべきなり。黒之を失して歩調面白からざるものとなりたり。

▲黒二九益々十五の味方を薄弱ならしむ、はに走りを試み、白若しにに應しなば五四に頂け、白四三黒ほと刎ね、爰に接衝するの傍ら二二以下の白を狙ふべきなり。

▲黒三七歩調鈍し、六五に飛ぶを普通とす。

▲白四四は今一著四九に煽りたき所なり。

▲白四八は手戻りを招くものなれば如何、單に五二に引くを是とす。

▲黒五一の粘ぎ緩し、五二に截るべし。

▲白五二は五五に覗くを手筋とす。

▲黒五三黒佳著なり。

▲黒五七の出は惡し、何等かの間違ひならん。

▲黒五九は打たざるを是とす、六十に截つて打つ手段もあればなり。

▲黒六一の押し佳なり。

▲白六四如何、一應六七に綽ね置くべきなり。之を失して黒六五、六七に形を崩されたり。

▲黒六五、は一旦へに綽ねるべきなり。

▲白七十は惡し、七三に約へ込まざるべからず。

▲黒七一は單に七三に伸びるを是とす。

▲白七二惡し、とに下るべきなり、▲黒七五緩し、當然とに綽ね打たざるべからず。

▲黒七七以下八一迄、双方緩し、黒は右側九一に打込むべく、白は同じく右隅八四に備ふべきなり。

▲白八二、黒八三緩し共に前評の點に據る可なり。

▲白八六はちに約へ込むべし。白八八重し、尋常九八に打つべし。白九二無理なり、九三に塞ぐべし。

▲黒九七惡し、九八に曲つて百五に尖むべし。

▲白九八惡し、百に頂け出せば黒窮せん。

▲黒九九、本來を云へば敗著なり、りに綽るべきや論なきなり。

▲白百十二打過ぎなり、此局勢にては百十九に挾み頂け居りて十分なり。

▲黒百十七、兎も角も手筋なり。

▲黒百二三は兎に角ぬに綽ね、白百二八、黒るとに打つべきなり。

▲白百二四惡し、先づ百三二に刎ね黒百三三、白百二六黒百二七白百二八と打つべきなり、白百二六、百二八は百三二よりするを手順とす。

▲黒百三一はるに綽ねて百五六に頂けるべきなり。

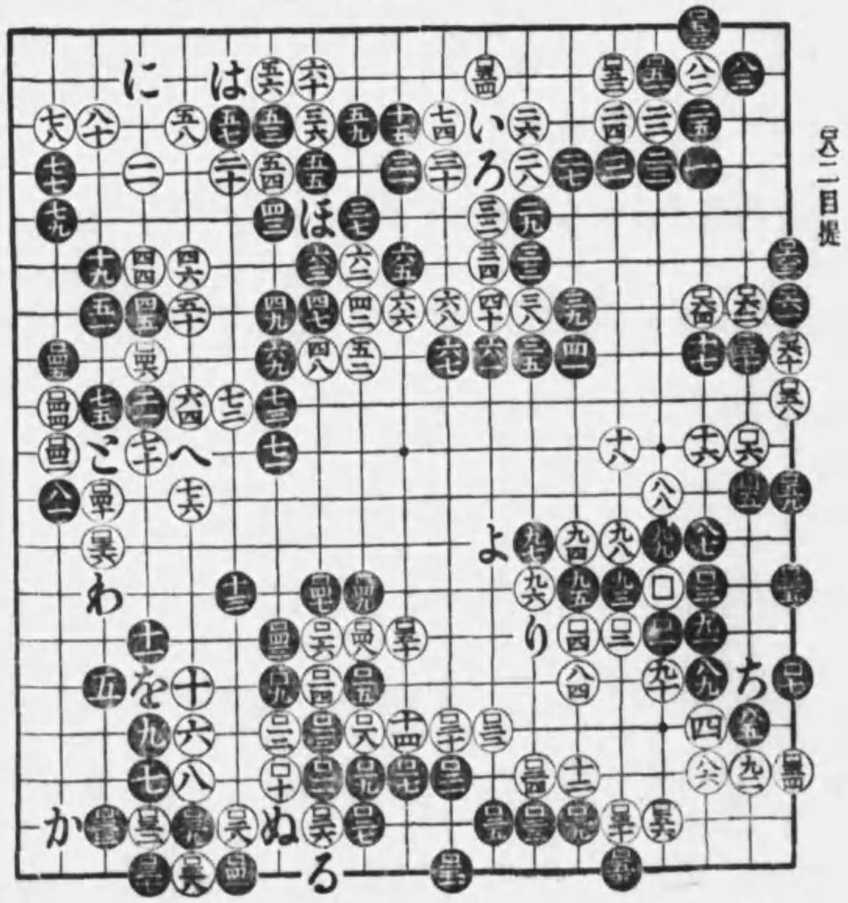
▲白百三六はをに突込み、黒わ白かと侵分るを可とす。溯つて白百の打抜きはよの當に換へるを佳とす。

▲白百三八の劫は要なき爭ひなりし

▲白百四十の劫立惡し、百四二よりすべし。

▲黒百四三、之にて敗定まれり、百四四に約へ打たば未だ爭ふに足るものありたり。

〔總評〕本局は黒二七に誤まりしより四三迄は形勢頗る危ふきものありしに、以下五三、六一に佳著を下し次いで白六四、七二の失に乘じ、一度七五に誤りしも八五の頂け効を奏して形勢を輓回せしに、九九に至りて俄然敗勢に陷りしは惜しむべし。



黒二一目提

◉第六局打棋講評

四目勝　先　森　清　泉（三段）
上　郎　新　二（初段）

▲白十二はいの二間挾みを普通とす。白十六より二二迄の趣向無理なり。十六を以て二三に伸び黒上部を固めなば百二九に張るべく、亦黒百二八に尖込なばろに突出し、黒は白五十と截つて戰ふべし。尙ほ白二二にあつてはろに刎込み黒三五白は黒二二白二九と打て振替るべきなり。圖の如く黒に二三と押へ込ませての戰は白無理形なり。

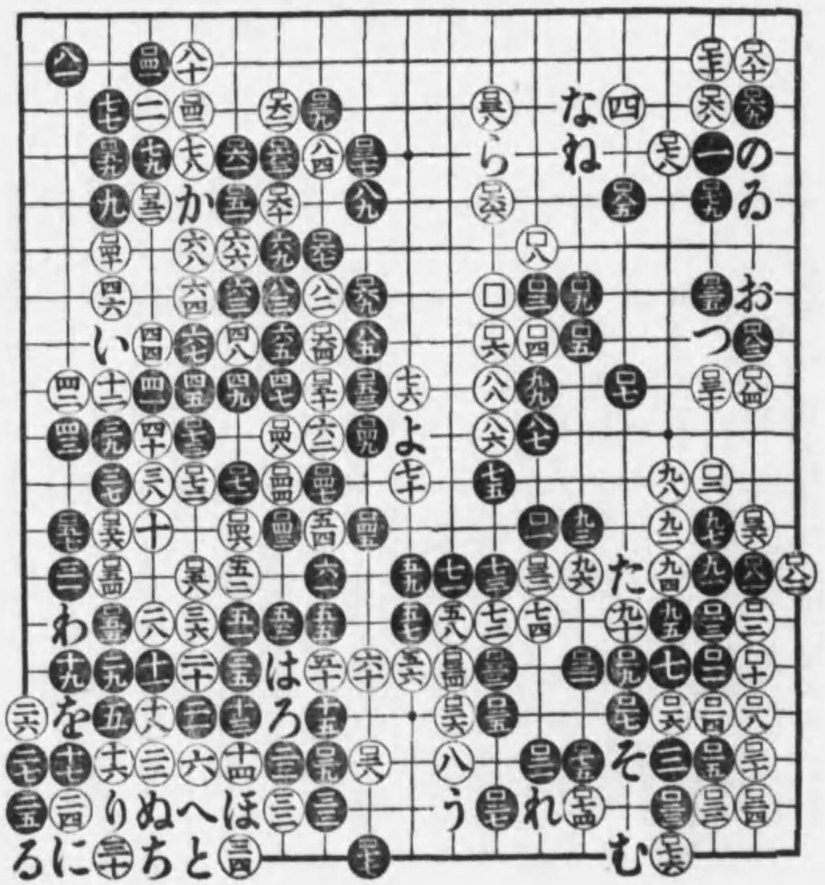
▲白二六は直に二八に刎ねて三十に掛粘ぐべし。黒二七は陷められ氣味の手にて、にに劫を打つ手を制せられたり。之を三六に刎ね白三五黒ろと粘ぎなば二九、二七の兩樣に先手粘ぎ利き居る事とて白手に窮せしなり。黒三一はほに刎ね以下白へ黒三二白三一黒と白ち黒り白ぬ黒に白る黒をと運びなば、此戰黒の勝利に歸したりしなり。但し白三一に打つ手を百五五の押へに換へなばわに出で、白三一黒百五七に頂けて打つべし。

▲黒三五の當ては白の疵を療して自ら弊を招くもの單に三七に打つべし。白三八、四十は嚴しき手段なれども稍や無理に涉る感あり。百二八に覗き先づ下側より手を附けて打つべき場合と見受らる。

▲白四四の當て大いに惡しく因りて形勢を失ひたり。單に四六に飛ぶべきなり。此時黒四五に伸びなば百五二に頂けるべく、七八に掛けなば七九に出截りを打つべく、かに飛びなば四五に當て六四に掛けて打つべきなれば、此處黒稍や打つ手に困難を感せしならん。白五十は手筋なれども此際無理なり、六一に進展すべし。黒五一如何、五三に尖み白百四三ならば六十に刎ねて打つべし、白五六は却つて中腹の味方を危ふするもの。左上隅七八に備へて遙に中腹に聲援すべきなり。黒六三惡し、是を六五に曲りなば白は上中下側事急となりて凌ぐを得ざりしなり。

▲黒七三はよに頂くるを手筋とす、白七八此際佳なり、黒八三稍緩し、八五に飛ぶを筋合とす、白八六、八八の頂引緩くして爲に棋勢を誤る、九十に飛むで攻勢を採るべし、黒八九緩し、たに封鎖の一擊を加ふべし、然らば一擧して大勢を收め得たる而已ならず、下方百七七に尖みの利きも含まれ居る事とて此白を窘しむるもの亦些少にあらざりしなり。白九二緩し、九七に頂て烈しく戰ふべし。黒九五白九六面白からず、俱に九七に打つべきなり。黒百三佳なり、黒百十一惡しくして俄然形勢を損じたり。百十四に受け居れば事なかりしなり。白百二二勝機を逸す、之を百七四に點じ、黒れなれば百二三に頂けて打べく、又黒そに應せば其時百二二に刎て打たむに、黒活を得るに窮すべく、その孰れとなるも白有望の局となる可りしに之を失して黒に容易く活を得させては形勢最早白に非なり。續いて白百三十緩し、つに一歩を進むべし。黒百四一の當ては贅手なり。

▲黒百四三は先づねに打ち、白なに應じなば一轉して百四六に頂けて此所の眼形を奪ひ、更に上側に轉じてらに頂け打たば勝敗立所に決せしなり。黒百六七の當込は寄り路なり、何等かの間違なるべし。黒百七一は百八一に突出し、次に百八三に尖みを而して百七八に行ぶべし、黒百七七に押へて百七八努力を缺く、ゐに覗き、黒の尖みは三目以上の損なり。むに押付たる後ちうに張るべし。白の時おに頂て盤りなば、又面白き機會も生じたりとなれば、微細の局面しならむに、之を失して黒に百八五迄の手順を運ばせては、最早白に望なく遂に四目の敗に終りしなり。



◉第七局打棋講評

二子　上野新二（初段）
　　古西良三

▲黒十、爰にて退却したるにては、八と打ちたる甲斐なし、十一に飛むで逼るべきなり。黒十四此所は左右に拆きある處なれば急ぐべきにあらず、いに尖むなど良點なりとす。次に十六惡し、いに尖むべし。黒二六緣離れなり、二七に下りて二二、二四の著意を繼がざるべからず。

▲白三一、不利なる二の筋より刎ねたる事甚だ其意を得ず、當然三二に刎ね抑ふべきもの。圖の如くなりては白二七の刎ね更に威力なし。白三七は矢張り三八に下るべきなり。白三九如何ろに提るべし、緩きが如く少なるが如けれど實は肝要の點にして實質も亦大なり。

▲白四九以下五五迄の手段如何、五一に尖み。黒五四白五八と運ぶを堂々たる攻め方なりとす。白五九の覗きは却つて黒を安塔せしむるもの、之をはに換へ且つ攻め且つ姿を整ふべきなり。

▲白六三は之を六八に押すもあるべし、黒若しにに突き出し、白ほの時六三に截らば左側はに轉じて振換るのなり。白六五は兎に角手筋なれど、次の六七は無理なり、七二に應せざるべからず。

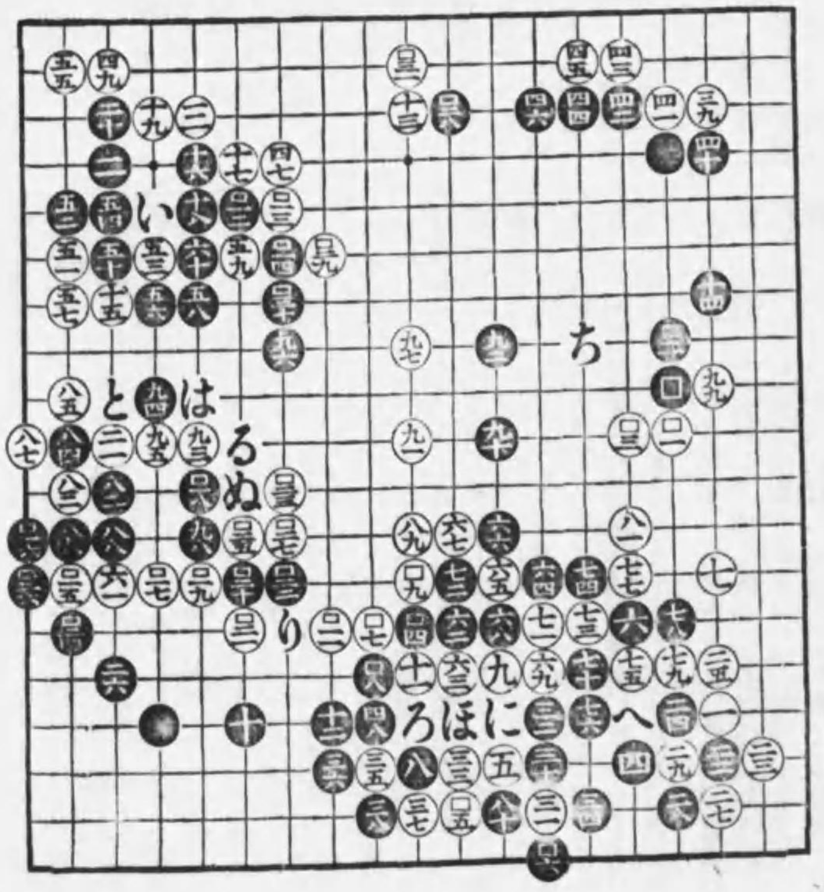
▲黒七十は如何にも味惡しき手なり。確實に七五に備へ置き、白百四に曲るも強く百九に刎ね打たば白頗る窮せしなり。黒七六の粘ぎは重くして大いに惡しく、俄然形勢を失ひたり。七九に突出し白七八黒へ白七七黒七五と粘ぎて確實に優勢なり。

▲黒八二如何、八九に補ふべし。白八三は黒の手に附くものにて惡し、九五に伸びて左上側の黒を睨むべし、黒八四着眼を誤まる、とに附け白八五にせば九五に打ち而して前述八九に備ふべし、大勢未だ黒に可なり。黒九四の覗き惡し、單に九六に打つべし。

▲白九九緩し、百二に衝き右邊一體の黒を競り立つる策戰に出づべきなり。譜の如く打つにては前著九七の飛び無意味となるにあらずや。黒百四、百八意のある處を知るに苦しむ、はに補ひ置くなど至當ならん。黒百十二、百十四は尙ほはに補ふを是とす、

下方の凌ぎをも兼ねればなり。

▲白百十五危ふし、ちに打つて黒を競り立つる位にて有望の局面なり。黒百二四大いに惡し、りに突出し白百二五に截らばぬに當て、白百二七黒るとなりてよく、又白百二五にてるに引かばぬに當て込み、上側の黒の死活を以て勝敗を決すべし、續いて黒百二六之又惡し、ぬに當てゝ爭ふべし、譜に於ける白に百二五、百二七と打たしめては黒最早勝算なし。之を要するに黒百二四は敗著にてありし。



◉第八局打棋講評

角聲　工藤禮武
城田精之

▲黒十三は一路控へて百二一に拆くべし、白十四、愛に手を附くるとならば、いに斜走して迫るを可とす。「定型なり、」白十六、十八急なり四六に割打し、黒七一に詰めなば五四に打ち、黒五十白ろ黒五二白は黒にとなる時ほの頂けを含むで百六一に拆き打つべし。白二十無理なり、二七に下るか若しくば二六に尖む定型を採るべきなり。

▲黒二一は直に二五に頂けを試み、白百九七ならばへの刎ね三一の突込み等の眛を含むで二四に出動すべく、又白とに突出せば三一に突込むでへに截り、次に二三に粘いで四二に截り、而して二一に刎ねて打つべきなり。白二二は百九一に引くべし。黒二五は一旦二六に刎ねるを可とす。白二八は百九七に刎ね、四十に先輸するを旨とすべし。黒二九悪し直に三一に打つべし。白三八緩し四十に打つべし。黒三九冗手なり、ちに掛けて白を低位に就かしめ、而して四三に形勢を張るべし。黒之を失して四十に先輸され、却つて白に形勢を占められたり。黒四一無理なり。

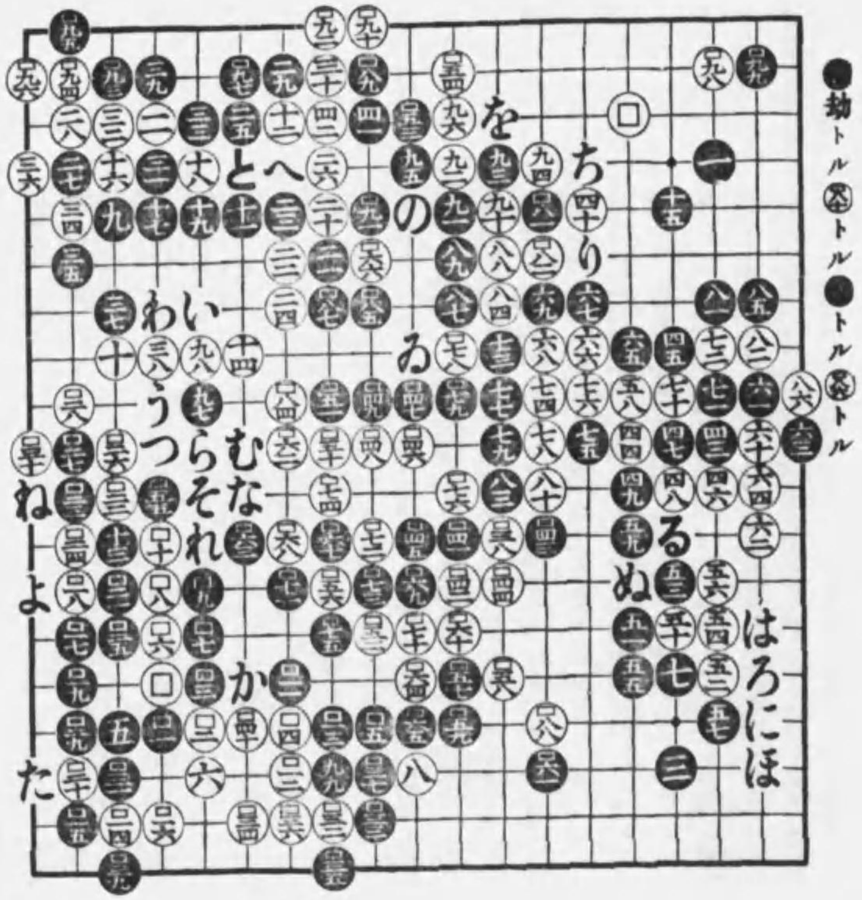
▲白四二緩し、隅の劫を期して百九七に截らば多大の利なり黒四五緩しりに頂けて打つべし。白四六無理なり六六に冠せなば形勢可なり。黒五一は五九にすべく白五二はぬに刎ねざるべからず。白五六黒五七は共に五九に打つべし。白五八悪し五九に刎ねざるべからず。黒六九無理なり七十に粘ぎ、六九の出とるに眼を缺くとの兩睨みに打つべし。黒八三如何九十に侵し白をにせば百六六に引いて打つべし。白九八敵に響かずわに曲るべし。

▲黒百七はかに引くべきぬの石を裂かれる手は總べて悪しと知るべし。白百十六緩し百三一に突張り、黒百三十ならば百十九に覗いて後、百三二に刎ねて勝敗決せん、黒百二七悪しよに刎ねるの外なし、譜の如きは隅に累を及ぼせばなり黒百三九悪し爰に一著を加へたりとて、たに下られなば矢張り隅に活なければなり白百四二打過ぎなり、たに下り置きて大勝なり。白百四六、百四八は尚ほたに打つべく。黒百四九は百五五に截るべく、白百五十は百六三に飛ぶべし。

▲黒百五一、謂はれなし尚ほ百五五に截り、白れに出なば百六三に刎ね、白そ黒つ白ね黒な白ら黒む白うと運びたる後百六七に備ふべし。白百五二はなに備ふべし。白百五六緩し、百七二に頂くるを厳しとす。白百六十は百七六に截るべし。白百六六は百七六に截りをきて充分なり。白百六八は百七二に割込むべし。白百八四悪しぬに伸ぶべし。

▲白百八八悪し、のに截り黒劫を提らば百九七に截り、而してぬの先手伸びを含みて左上隅と中央との兩劫に打てば白勝なり。黒百八九白百九十共に悪し、黒は百九一に截るべく白は先づ百九七に截り、次にのに切斷すべきなり。白之をしも誤りて全勝の局面を逸したり。

〔總評〕　本局は白大體に於いて優勢に居り、就中百より百二八邊に在つては白必勝の局面なりしが、以下白著々事を失し、遂に反對の結果を觀るに至りしは、黒全く僥倖と云ふべきなり。



◉第九局打棋講評

先番中押勝　北條礫川
五先　西田英二

▲白十八は普通無理とされ居る型なり、二三若しくばいに備ふるを通型とす。

▲黒二三緩し、二四と二段に約へ白二三黒ろ白二六黒は白に黒ほ白へ黒と白劫提り、黒劫い白粘ぎ黒二五と振替るを定法とす、然れば白は黒にちと打るゝ手を防ぐ爲に此隅に一著を要すれば、黒先手となりて此戰ひ黒有利なり、翻つて白にに粘ぐ手をりに提るも矢張りほに約へ、次にとに綽ねぬに劫立して同じく黒有利なり。

▲白二六、二八は不利なる二筋を這ふものなれば惡し、へに當て込み居るべきなり。

▲黒三三より三七迄如何、上側面百に構ふるが若しくば左上隅百三二等に締るべきなり。

▲白三八、此場合にては三九に綽ね、右側二子を棄てゝ振替るべきなり。

白四十は百三二に懸るべし。白四二、堅きを衝くものにて無理なり、尙ほ百三二若しくは百二に懸るべきなり。

▲黒四七緩し、四九に押すべし、白四八惡し百十八に衝き、黒るに粘がば八五に飛ぶべし。

▲白五十は八五に備ふべし。白六十如何、八五に打つて四二以下の味方を救うべきなり。

▲黒七五如何、をを頂けて打つを妥とす、黒八三此際手緩し、九三に掛けて上邊の攻防に備ふべし。

▲黒九一緩し、此隅に應ずるとなればわに曲げ附け居るべし。白九二緩し百四に打つて黒を競るべし。

▲黒九五は九六に眼を保つを可とす、黒九九は兎に魚百に約へ込まざる可らず。白百は此際かに尖むで打つべし、黒百一、百三兎も角も手筋なり。

▲白百八は百一に粘ぐべし、黒百十一の粘ぎ緩し、百三二に截りて百七二に粘ぐべし。

▲白百十四惡し、百六八に刎ねざるべからず、黒に百十五と引かしめては形勢白不利なり。

▲白百二二無理なり、百五四に飛ぶを妥とす、黒百三五は百三七に打つを手筋とす。白百三六如何、百三七に打つべきなり。

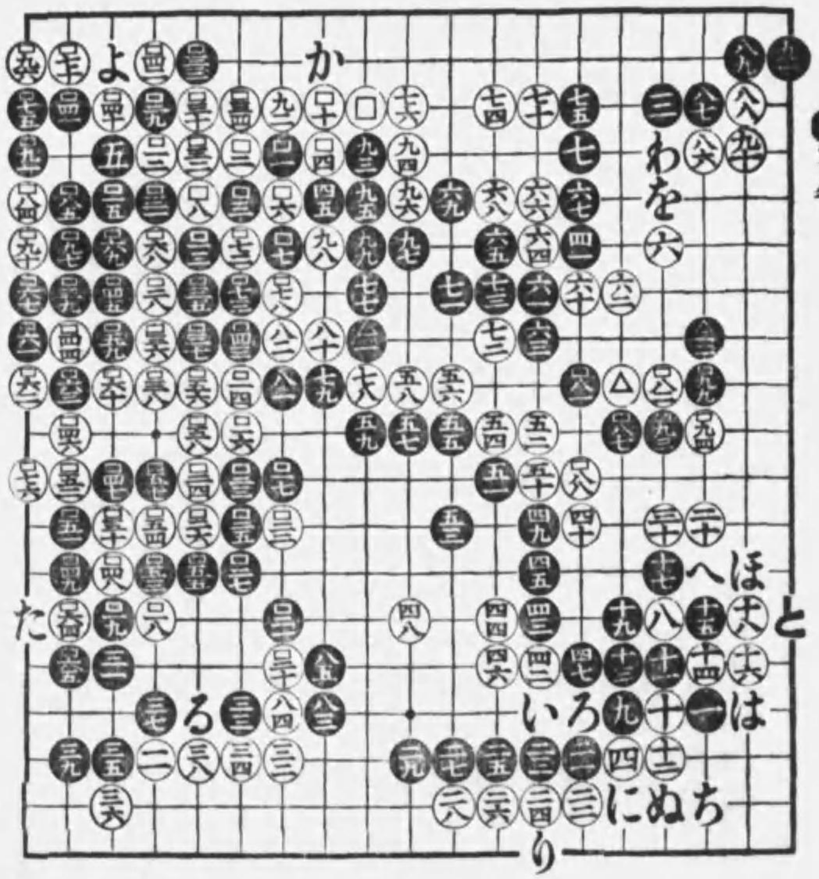
▲黒百三九打過ぎなり、よに掛け粘いで隅を保つべし、黒百四三手重し、百四四に並ぶを手筋とす。

▲白百四六は百五十に備ふべし、黒百四七惡し、百五一に打つべし。

▲白百四八手順を誤る、直に百五十に頂け、黒百五一にせば百五二に截るべきなり、黒百六九は百八五に懸粘いで活る外無し。圖の如く打ちては此黒死形殘ればなり。

▲黒百八一筋違ひなり。二百に斜走すべし。白百八二は百六三に劫を粘ぎ、而して百八五に頂けて此黒を屠ふる手段を睨めば白勝局なりし。

▲白百八四之を敗著とす、たに劫立てすれば尙ほ白の優勢たるを失わざりしなり。然るに白亦百八五に頂けて黒の眼を奪ふ手を心つかずして、幸便に黒に活を得せしめ、爰に勝敗の決を觀る事となりたり。



◉第十局打棋講評

先々先　阪井宏
先番中押勝　篠田勇夫

▲黒五、此場合十二の星目外しに打つを普通とす。

▲白六は右上隅三一に懸り、黒六に締らばいに拆くべく、又黒六の締りを七に換へなばろに飛び、黒はと交換を經て九に打込む意匠に據るなど、此際適宜の配置なるべし、圖の如く六に懸るは黒七と拆き詰めする眼に見えたる好着點を與ふればなり。

▲黒九は元來難かしき手なり、而も白二八迄となりたる時九六に掛粘いで好適なる場合に用ふる定石なれば此場合九に頂けるは穩かならず。

二五に劫ね白八九黒にと打つ普通の型を採り居りて、黒は七の拆き詰めと相俟つて整然たる形容を得るに非ずや。

▲白三十面白からず、四九に伸び黒ほの時九四に截つて手段を施すべきなり。此際絶好の機會ならずや。

▲黒三一は四九に劫ね、九四の截りに備ふるを本來とす。白三二、爰に於いても尙ほ四九に伸びて前述の手段に據るべきなり。

▲黒四三はへに劫ねるを普通とす。黒五五は敢に調子を與ふもの、單に五七に伸びるを穩かとす。

▲白六二如何、七六に突込み、黒七七白六五黒と白ち黒り白ぬと運ふなど普通ならん。

▲白六六緩し、六九に陣形を張るべし、黒に六七と據らしめて、策を施す場面を失ひたり。

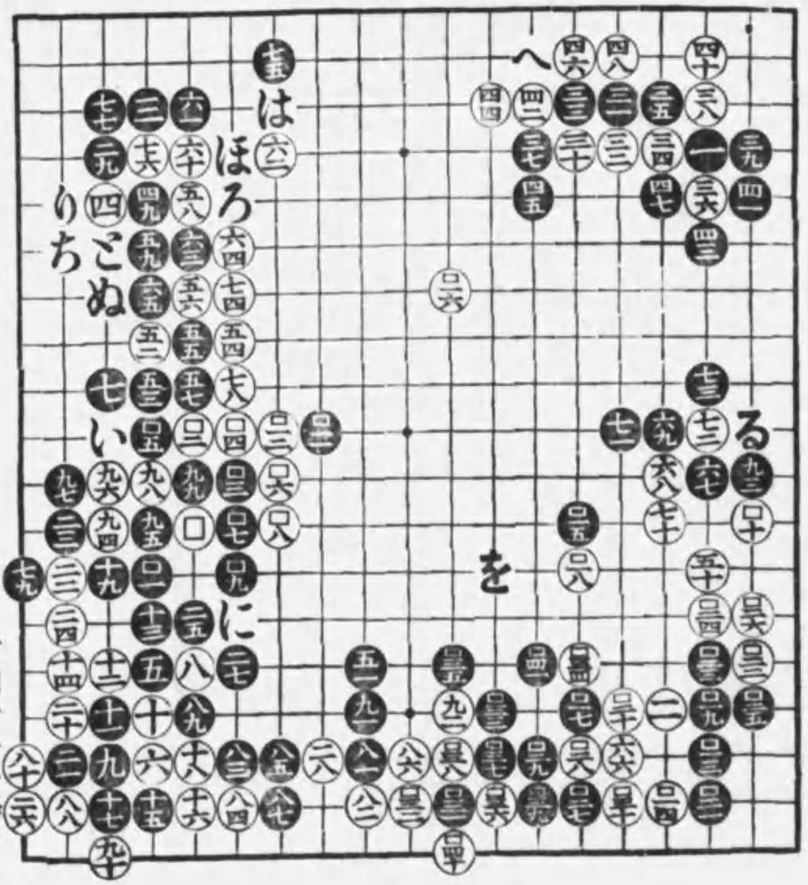
▲黒七一は七二に粘ぐべし。白七四は一旦るに伸ぶべし。黒七九惡し、直に八一に頂けて打つべし。

▲白百十、之を敗著とす、をに圍ひなば未だ爭ふに足るものありしに、之を失して黒に百十五と模樣を消さるゝに至りては、形勢最早回復の餘地無きを觀る。

〔總評〕　本局は黒九と求めて難を構へしより、白面白き局勢となるべかりしに、白は黒の缺陷たる九四の截り手を狙わず、黒をして四九に備へを完ふせしめて先づ大勢の一歩を誤まり、而して六六に形勢の攻防を誤まり、黒をして六七の要點に據らしめて

更に非運を加へ、最後に百十に失して遂に中押の敗を招くに至りたり。

之を要するに本局の勝敗は白、黒の缺陷たる九圖の截り手を狙わざりし事白の敗因にして、而も由つて譜に於ける甚だ索然たる勝敗を以て終りしなり。



野澤竹朝全集目次

毎冊凡百三四十頁
分賣定價各金壹圓貳拾錢

既成第一　科學的新解　實戰秘訣　**互先布石正法**
此の布石は其儘直ぐ實戰に使へる布石の正法にして初學者の爲めに新解されたるもの

既成第二　科學的新解　互先定石　**一間夾正法**
夾定石中の雄、一間夾正法の特質、目的及び利害得失を懇切に詳解○附錄著者實戰

既成第三　科學的新解　實戰應用　**置碁布石正法**
九子、七子、五子、三子の各布石を實戰上より獲來れる活布石にして初學者の爲め科學的新解

既成第四　科學的新解　互先定石　**高目、目外、大斜正法**
高目、目外、大斜各正法の特質、目的及び利害得失を懇切に科學的新解

近刊第五　科學的新解　**死活正法**
死活の正法を科學的に新解されたるもの○附錄實戰詳解

續刊第六　最新碁戰　**評の評**
著者が全力を傾注し碁界を驚倒せしめしものにて斯界に定評ある評の評

現代名人大家が全力を傾注せる模範棋書

七段　廣瀬平治郎著　版五　○原理應用　**圍碁定石講義**　全二冊箱入　定價貳圓卅錢　送料十八錢
著者多年の研究に成れる一間二間三間夾の定石圖解と斯界に定評ある實戰鬼手錄

七段　野澤竹朝著　版五　●創定　**大斜定石法**　全三冊箱入　定價貳圓六十錢　送料十八錢
附古今名家大斜實戰
秀策師大斜秘傳を基礎とし各著子の特質目的効用を明快に說明せる斯界唯一名著

七段　瀨越憲作著　版二十　○新撰　**圍碁はめ手**　和製美本　定價壹圓五十錢　送料金八錢
定石以外の奇計手段にて對局ぜんとせば先づ本書に依りて其秘策を味ふべし

七段　鈴木爲次郎著　版昭和　●新撰　**圍碁全集**　普及版合本一冊　定價貳圓貳拾錢　送料拾八錢
定石布石諸物使分打碁等圖碁全般を網羅講解せる圍碁百科全書

中川准名人　七段　岩佐銈共著　版十　○置碁互先　**定石新法**　全　箱入美本　定價壹圓六十錢　送料十八錢
主要目次（置碁）大斜、頂挾、（互先）高目、高懸、懸、目外、小目挾、等

七段　野澤竹朝著　版三十　●　**打碁と要領**　全二冊箱入　定價貳圓二十錢　送料十八錢
圍碁一般の通則を圖解せし碁界の渴望せる創作にして加ふる打碁甘局も細解

七段　鈴木爲次郎著　版五　○　**圍碁先手必勝法**　全二冊箱入　定價金四圓　送料廿七錢
先手必勝は名人なり、至難の先手必勝は本書に依りて創めて解決

七段　瀨越憲作著　版六　●　**圍碁實力養成法**　和裝美本全一冊　定價金九拾錢　送料金四錢
最近初學者の爲め實力養成上缺く可らざる接戰の秘訣を親切丁寧に講解

八段　林元美著　七段　雁金準一校　版四　○死活遠成　**碁經衆妙**　美本　定價壹圓參拾錢　送料六錢
生死點劫攻合盤道落夾續碁征等解答を明快に示し研究至便なる死活遠成法

中川准名人　六段　加藤信共編　●　**秀甫全集**　全三冊帙入　定價金拾圓　送料卅六錢
秀和、秀榮、秀賢、松和、中川岩崎、雄蔵、小澤、正平、小林泰策、服部、鵜岡、等三百局

發行所　東京日本橋區吳服橋　振替東京一三七五番　大阪屋號　東京神田區南神保町九　振替東京二七七二三番　（模範碁書發行所）　斯文館

現代名人大家が全力を傾注せる模範棋書

七段 鈴木爲次郎著 版八 ○ 獨創圍碁 **一週間速進法** 碁の全然知らぬ人でも必ず一週間内に圍碁が打てる法 並製盤石共一圓 送料金十錢

七段 野澤竹朝著 版八 ● **圍碁獨習速成法** 初學者又は之から碁を覺えやうとする方へ 美本金九十錢 送料金四錢

七段 鈴木爲次郎著 版十 ○ 極意實典（第五卷） 置碁 互先 **定石** 隅の定石にして置碁互先の定石一般獨習早わかり 美本金一圓廿錢 送料金六錢

七段 鈴木爲次郎著 三十 ● 圍碁 **中の定石** 中央の置石を保つのみなら寸隅の地をも活かす法 美本金七十錢 送料金四錢

七段 鈴木爲次郎著 版七 ○ 極意實典（第一卷） **布石** 自九目 至四目 九目より四目に至る布石の獨習早わかり 美本金一圓廿錢 送料金六錢

七段 鈴木爲次郎著 版七 ● 極意實典（第二卷） **布石** 自三目 至互先 三目、二目、互先の布石獨習早わかり 美本金一圓廿錢 送料金六錢

七段 鈴木爲次郎著 版五 ○ 極意實典（第六卷） **打碁** 自九子 至先子 九子局より先子局の著者實戰を經解 美本金一圓 送料金四錢

名人 本因坊秀哉著 版五 ● **舊幕府御秘藏碁戰** 斯道の渴望せる御秘藏書を初學者の爲に懇切に經解 美本金一圓 送料金六錢

七段 瀨越憲作著 版十 ○ **圍碁襲撃戰法** 敵陣を襲撃して之を突破する戰法を創定 美本金一圓 送料金四錢

七段 廣瀨平治郎著 ● **圍碁實戰講義** 現代名士及現代花形碁客の實戰に著者獨特の講解 箱入一圓六十錢 送料十八錢

七段 瀨越憲作著 版四 ○ 新進碁客 **爭覇戰** 現代新進碁客の血戰記に著者精密に細解 美本金九十錢 送料四錢

四段 高橋清致著 版十 ● **圍碁勝敗此の一手** 圍碁勝敗の魂たる極秘の一手と其變化詳解 美本金九十錢 送料六錢

七段 鈴木爲次郎著 版五 ○ 極意實典（第三卷） **侵分。詰物** 侵分と詰物を初學者の爲めに平易に圖解せるもの 美本金一圓廿錢 送料金六錢

七段 鈴木爲次郎著 版五 ● 圍碁布陣 **戰術秘鍵** 諸名士との對戰上に於ける著者の戰術秘鍵を公開 美本金一圓廿錢 送料金六錢

七段 鈴木爲次郎著 新式圍碁 昭和改訂四版 **死活研究** 圖解圍碁死活早見法にして下卷には隅の九目、中の八目、中、隅の六目の三つについて徹底的解決 和裝二冊箱入 價二圓四十錢 送料 十八錢

東京 斯文館發行

現代名人大家が全力を傾注せる模範棋書

本因坊秀哉 同秀榮 巖崎健造 中川龜三郎講評 版六 ○ 現今名家 **碁戰** 本因坊方圓社派龍虎の對抗大棋戰にして現今の名家が心血を注ぎし棋譜 一、二各一百局 定價各金二圓 送料各金十八錢

名人 本因坊秀哉講評 ● 報知敗退 **爭覇名碁戰** 二年有半に一度も五人抜なき熱戰附録には芳哉師の死活の妙手五十局 箱入 美本 定價金參圓 送料十八錢

七段 雁金準一著 版十三 ○ 置碁秘傳 **草薙の卷** 置碁定石の奥義口傳を親切叮嚀に講解せるもの實戰虎の卷の姉妹篇 美本 定價一圓四十錢 送料十八錢

七段 雁金準一著 版九 ● 新式圍碁秘傳改訂 圍碁口傳 **實戰虎の卷** 互先定理の奥義口傳を開放せるもの攻守の軍略攻防の定理ヨセ等講解 箱入 美本 定價一圓八十錢 送料十八錢

名人 本因坊秀哉著 版一廿 ○ 圍碁口傳 **手ぬきの卷** 奇策縱橫の裏を搔く手ぬきの口傳斯道革命の妙手戰盡して餘蘊なし 美本 定價一圓八十錢 送料六錢

八段 中川龜三郎著 版十八 ● 圍碁互先 **布石攻合法** 布石の方法から攻防の手段及其變化更にヨセの手順黑白の大勢迄六十餘局 全二冊箱入 定價金二圓廿錢 送料十八錢

八段 中川龜三郎著 版七 ○ 圍碁互先 **布陣挑戰法** 布石攻合法の續篇八十餘局布石より進んで挑戰法及びヨセの手順迄詳解 全二冊箱入 定價金二圓廿錢 送料十八錢

八段 中川龜三郎著 版六 ● 二子三子 **新式布石講話** 互先に亞いで廣地にして變化の多い二子局四十七局三子局三十二局 全二冊箱入 定價一圓八十錢 送料十八錢

七段 雁金準一著 版五十 ○ 布石攻合 **置碁必勝法** 置碁の本源四、五子局を陣立の方法攻防の手段及其變化ヨセの手順迄詳解 全二冊箱入 定價一圓八十錢 送料十八錢

六段 小岸壯二著 版五 ● 自六子 至九子 **上手の泣手** 附實戰解剖篇 名人大家にも必勝容易なるやう六子局より九子局に至る各陣容法より接戰法詳解 和製美本 定價一圓四十錢 送料六錢

七段 雁金準一著 圍碁口傳 **ポケット虎之卷圖解** 互先定石の圖解行住座臥、一見明白（顏美本金一圓） 送料金四錢

東京 **斯文館發行**

本因坊秀哉 中川廣 瀨雁金 鈴木岩 佐瀨越 野澤（美裝せる）圍碁 高部加藤 小岸小野田 宮阪井上 喜多棋伯講述（圍碁百花園）**虎の卷** 合本 和裝美本全十一卷三千五百頁 美裝帙入定價金參拾五圓送八十錢

四段増位九皐新著 直ぐ解し易い **婦人と圍碁** 頗美本全一冊 金壹圓拾錢 送料六錢

七段 野澤竹朝驚讃 四段増位九皐創作
科學的原理創定 **圍碁超スピード上達法** 和裝美本 定價金貳圓 全二冊箱入 送料金十八錢
（忽ち七版）
置碁には從來の定石を全廢し、布石も戰爭も一定不變の原理により頭腦を徒費せず簡單に處置し得て百戰百勝、一讀幾十倍の上達を期待し得らるゝげに圍碁研究の維新革命と云ふべく、之により對局時間を短縮され更に大衆化せん、今や一讀三歎の快報頻なり

七段 野澤竹朝驚讃 四段増位九皐創作
（新刊）科學的原理創定 **互先碁の合理化** 和裝美本 定價金貳圓 全二冊箱入 送料金十八錢
互先碁を簡明に合理化せしめ、其說やすべて前人未踏の創作に出で其理や一定不變の純道を極む、定石の疑問、布石の混雜は豁然として開け、初學者も一讀高段の着眼を習得せしむ

犬養毅氏題字 野澤七段拾ケ年研究の結晶
（第四卷發行）**野澤竹朝全集** 和裝頗美本 各卷定價壹圓貳拾錢 各卷分賣 送料各金四錢
野澤棋傑は定石、布石、死活、打碁の科學的新解及び評の評等の先覺者にして、何れも碁界無比の好評を博せしは普く好碁家の認識する處なり、本書は最近拾ケ年の研究に成れる其の各正法を初學者の爲に各著子の特質目的及利害得失を簡明懇切に說明せるもの、恰も名工の鑿々竹を割くが如し、眞に古今獨歩の棋法也

野澤竹朝全集 第一卷 ◎科學的新解 實戰秘訣 **互先布石正法** 此の布石は其儘直ぐ實戰に使へる布石の正法にして初學者の爲めに新解されたもの
野澤竹朝全集 第二卷 ◎科學的新解 互先定石 **一間夾正法** 夾定石中の難、一間夾正法の特質、目的及利害得失を懇切に詳解 ○附錄著者實戰
野澤竹朝全集 第三卷 ◎科學的新解 實戰應用 **置碁布石正法** 九子七子五子三子の各布石を實戰上より獲來れる活布石にして初學者の爲科學的新解
野澤竹朝全集 第四卷發行 ◎科學的新解 互先定石 **高目目外大斜正法** 高目、目外、大斜各正法の特質目的及び利害得失を懇切に科學的新解

鈴木七段 曰く本全集は著者が多年研究の結晶と云ふべきもの解說が簡明懇切で一般好碁家を益する處鮮少では無と信ずる

（東京）**斯文館**（發行）

昭和八年一月八日印刷
昭和八年一月十四日發行

高目・目外・大斜
定價金壹圓貳拾錢

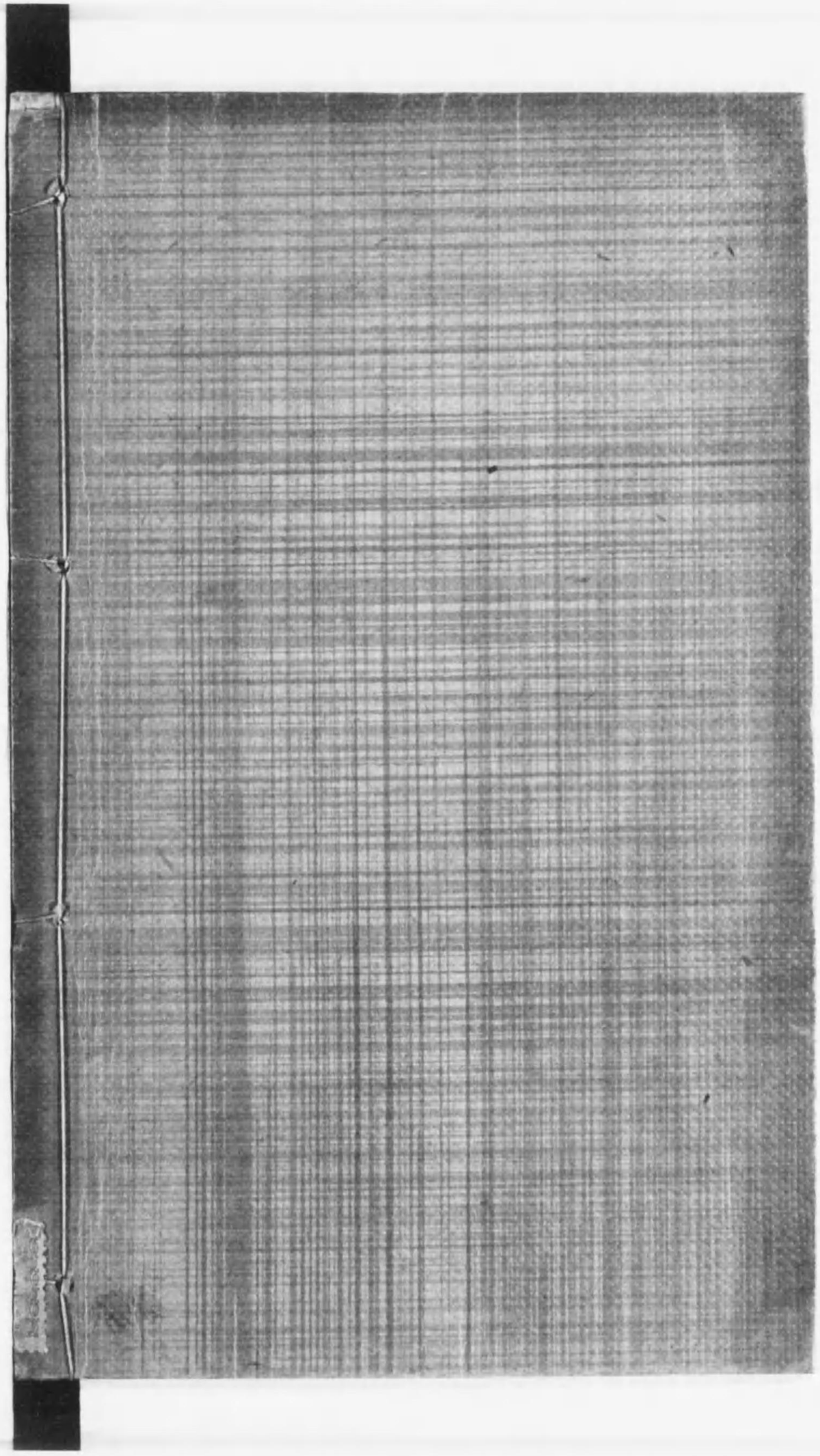
著作權所有
不許漢譯

著者 野澤竹朝
相續者 野澤鶴一郎

發行者 武居勝治
東京市大森區新井宿三丁目千三百七十四番地

印刷者 高橋赤次郎
東京市京橋區濱町三丁目八番地一

發行所 東京市神田區南神保町九番地 振替東京二七七二三番 模範棋書發行所 斯文館

發賣所 東京市日本橋區吳服橋二ノ一 振替東京一三七五番 大阪屋號

終